

辺境領主は銀髪ロリエ
ルフを p r p r したい

名もなき r l k n

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界の貴族に転生した主人公が辺境領主になって銀髪ロリエルフ奴隷ちゃんを買って好き勝手したりしなかったりするお話

可哀想な子は可愛いと思う方向け

目次

気がついたら転生していた。超スピード とか（以下略）	1
辺境領主に俺はなる！	12
汚物は消毒だ！	28
辞めたくくなりますよ領主うゝ	45
性欲を持って余す	65
そうだ、奴隷商行こう	82
光と闇がそなわり最強に見える	94
雨ノ音	102
俺の寿命がストレスでマツハ	115
閑話 腕の中で	136
U M A	140

美味しい料理は下準備が大事	154
何事も準備が7割	163
銀髪ロリエルフをペロペロする！	177
閑話 これが私のご主人様	200
戦闘メイドは漢のロマン	211
陽射しの中のアマネ	227
黄金の鉄の塊	251
友情トレーニング発生！	269
ギルドにおけるテンプレ展開	279
初めてのお使い	297
お前ハイスラでボコるわ・・・	311
銀髪ロリエルフにペロペロされる！	

なんで動いてるか分からないけど動いて
るからヨシッ！

気がついたら転生していた。超スピードとか（以下略）

気がついたら転生していた。

そう、転生である、はずだ。クリストファー・エディルナとして五年間生きてきた訳だが、今日目が覚めて唐突に自覚するに至った。

今までは曖昧な意識の中フィルターを何重にも通して霧の中をもがくような感覚だったように思う。それが唐突に晴れた。

前世の自分から自己認識の連続性を保っており、当然今世の記憶も保持しているので憑依ではなく転生だろう。あるいは憑依先の記憶を有したままのパターンも考えられるがそれはひとまず置いておく。

さて、問題はなぜどうして転生するに至ったのかだ。夢の中で謎の人物にあった覚えもないので神様転生ではない。むしろ神様ぶちのめしてたのであんまり好かれる要素もないだろうし。

最後の記憶は天照様の荒魂を鎮めたはいいけど全身傷だらけの致命傷のオンパレード、俺の人生オワタって思いながら意識がフェードアウトしていく所までだ。ぼっちり覚えてる。

それがどういふ分けかひと眠りして目が覚めたら転生してて草、というのが今の状況。ワケガワカラナイヨ……

まあ超自然的でエキサイティングなミラクルパワーが奇跡を起こしたのだろう。日頃の行いの賜物だな。

さて、転生してからの記憶はあるとはいえものすごく曖昧なものだ。ここは一つ改めて現状を確認するために動くでしょう。

寝起きの頭でつらつらと考え事をまとめると、俺はベッドからはい出して行動を開始した。

三日後、現状を把握し俺は頭を抱えていた。

まずこの世界は前世とは違う異世界であるようだ。獣人やエルフ、モンスターなんかもいるらしくテンションが上がった。生まれた家は貴族のようでヘルゲン辺境伯家と

呼ばれるらしい。

貴族の位はよく知らないが辺境伯って結構高位だった気がするし、人生勝ち組キタコレ、と喜んだのもつかの間。俺氏庄巻の4男である。

しかもただの4男ではない、妾の子で4男である。完全にみそつかすだ。

さ、ら、に！さらにですよ、パツパと本妻とその息子ABCは本邸と呼ばれるでつかいお屋敷に住んでるが、俺は敷地の隅つこのほうに申し訳なさそうに立ってる別邸に妾であるマツマと一緒に暮らしていた。過去形である。マツマ去年病気で亡くなってるのよね……びえん。

そのうえパツパは俺の事完全に興味ないらしくマツマが亡くなってから一度も会った覚えがない。ついでに本妻の方は妾であるマツマの事が嫌いで色々いびっていたらしく当然俺の事もノーセンキュー。

そんな両親だからその子供たちも俺の事を下僕扱いで事あるごとにいじめてくる。今度あつたら泣かしたるからなてめえ。

思わず頭を抱えてしまう四面楚歌な状態ではあるが貴族としての体面を気にしてか一応放り出されたりはしていない。まあそれも時間の問題なような気がするし、少なくともこの国で成人の基準となる15歳にはなれば蹴りだされる事は確実である。

敵だらけな現状であるが一応少ないが味方もいる。マツマ付きのメイドをしていたマンサさん、気の良いおぼさんである。今では俺付きのメイドとして身の回りの世話をしてくれている。大変ありがたい存在なのだが欲を言えばメイドは綺麗なお姉さんがよかったです。

もつといえぱロリロリな美少女にかいがいしくお世話してもらいたかったです。コッコちゃんみたいなの……失礼欲望が漏れた。

そしてもう一人、片眼鏡が似合うイケメン老執事のウォルターさんだ。ウォルターではない、ウォルターだ。

本来は家令として本邸を差配していたそうだが、現当主であるパッパにもう年だから後任に譲れと言われ執事として別邸を見る事となったらしい。まあ体の良い厄介払いですな、とは本人の言である。

たしかに見た目は老齢だがその体幹の良さと動きの切れ、話をしてわかる知識の深さと冴えは年齢を感じさせないものである。俺が得た知識の殆どはウォルターから聞いたものであり、話の流れも理路整然としてわかりやすい。

世代交代が必要なのはわかるが、これだけの人物をこっちに追いやるのか考えられない事だ。ありがたい事だが。

嫌われ者同士仲良くいたしましょうとウインクとともに言ってくるおちやめさもあ

る。心強い味方だ、と言いたい所だが正直得体のしれない所も多く、ウォルダーは俺が変な行動を起こさないようにするための監視役なのではないかと疑っている。

家の事を把握したあとは外の事である。これはウォルダーに聞いたり本邸の書庫に忍び込んで知識を集めた。

まず一番重要なのはこの世界には神様がいない事だ。いや、信仰はされているし居るのかもしれないが少なくとも地上に顕現してたりはしないらしい。

異世界である事を確信した一番の理由がここだ。前の世界でははるか昔から人と神は共に生きる存在だった。

時に和魂として人々に恵みを与え、時に荒魂として試練を与える。俺は荒魂となった神を鎮める役割を持つ一族だったわけだが、今は関係ないのでおいておく。

重要なのは酔っぱらって酌をしると迫ってきたり暇だから戦えと襲い掛かってきたりちよつとむらむらしてきたから相手してと夜這いしてきたりするフリーダム厄介者共の相手をしなくてよくなった事だ。ここが楽園か。

次にこちらの世界にも魔法が存在するようだ。まあこれだけ世界にマナが満ちていて魔物もいるのだからあって当然ではあるのだが。前世とは違う体系の魔法があるよ

うで、今後詳しく調べるのが楽しみである。

そして前世で俺が生まれた時にはすでに絶滅して久しかった魔物という存在。前世と今世の魔物が同一の存在かはわからないが、こちらも折を見て調査をしてみたい。

ちなみに前世で魔物が絶滅した理由だが、本家の書物を調べてみたところ「美味しかったからつい狩りすぎたらいなくなっちゃた（てへぺろ）次があったら気を付けます」と書いてあった。昔は動植物の品種改良などされておらず、美味しいものが少なかったらしい。

美味しかったなら仕方ないね、おちやめなご先祖様だったようだ。

種族についてもおおよその事が分かった。大別して人間族、獣人族、エルフ族、ドワーフ族、魔人族あたりが代表的なようだ。それぞれの種族中にもまた土族が分かれていたり、少数しか確認されていない種族もいたりするらしい。

ハッピーとか人魚とかも居るんだろうか。夢がひろがりんぐ。いつか猫耳メイドさんを雇ってもふもふしてやるからなお前見てろよ見てろよ。

種族としては分かれているが、それぞれ交配も可能らしく全部統合して人族とも呼ばれる。基本的にハーフはほぼ生まれる事はなく、両親のどちらかの特徴を受け継いで生まれるらしい。

しかし片親が人間族の場合ハーフが生まれる確率が多少高くなり、ハーフは雑種

(ミックス)と呼ばれ蔑まれる傾向にあるようだ。

そういえば天照様はエルフとドワーフの種族を超えたカップルが特に好きだと言っていた。

なんでも「最初は種族的なしがらみからいがみ合う二人だけど幾多の戦場を超えてはぐぐまれる友情そして気が付くと芽生える愛に戸惑いながらも二人は手を取り合って周囲の反対を押し切りながら一緒に暮らすのよ萌え」と。

まあ天照様の読んでいた本の二人は両方男だったからハーフの子供が生まれる心配はないだろうが。

この神は人が瞑想していると寄ってきた傍らで「今度の合同誌のカップリングなんだけどやっぱスサ×ツクよりも、ツク×スサがいいと思うのよね。一見ありきたりな誘い受けと見せかけてノンケのスサを食べちゃう展開とかいいと思うんだけどどう思う?」等と修行の手伝いをしてくれるのだ。ひたすら無心になり無視していると「ちよつとー無視しないでよー。これだから真性のロリコンは困るのよね。今度あなたを題材にした本書いてやるからね、×カグつちで燃え上がる灼熱プレイ……案外いいネタかも」などのたまう。本気のぐーぱんで黙らせた俺は悪くない。閑話休題

さて、人種の中で一番弱いのが人間族である。そして数が一番多いのも人間族だ。

これは種族の特徴として繁殖力が高いためであるそして人が増えれば群れになり、群

れが大きくなれば国が出来る。国が出来れば当然支配階級ができるわけだが、この支配階級たる王侯貴族になったのが当時の魔力持ちだ。

他の種族はおおよそ大なり小なり魔力を持つが、人間種には魔力持ちが少なかった。むしろ大多数が魔力無しだったのだ。そして魔力なしの人間は魔物にとつては良い餌でしかない。

だが人間種もただ食われるばかりではなく少数ながらも生まれる魔力持ちがどうか抵抗していた。そして魔力持ち同士が子を作ると高確率で魔力持ちの子供が生まれる事がわかると少しずつその数を増やしていく。

当然魔力持ちは最前線での戦いを強いられるためその数を減らすことになるが、そこで生き残った高い魔力持ち達が子をなし、その保有魔力量を上げていきやがて魔物をおしのけて人族の領土を広げられるようになっていった。

魔力持ちが戦線を維持し、魔力無しが食べ物を作りそれを支えるという構図が出来たのだ。やがてある程度の領土を獲得し国が出来たとき、だれが支配者階級になるかなど明らかだろう。

そういつた歴史背景があり、貴族は全員魔力持ちの魔法使いであり、有事の際には国を守るために戦う者であるという共通認識がある。

王国法でも貴族家の当主は必ず魔法使いでなければならぬという決まりが定めら

れており、仮に嫡男であつても魔力が無ければ家を継ぐ事はできない。

とはいえ木つ端貴族でもなければ基本的に高魔力者同士の子供のため、大貴族の嫡男が魔力無しで問題になるという事は歴史的に見ても稀なようだが。

貴族は全員魔法使いであるが、魔法使いが全員貴族、という訳では当然ない。あまり裕福でない貴族家の次男三男などが家を出ることもあれば、片親が魔力持ちであればたまには魔力持ちの子供が生まれる。

稀にはあるが、魔力無し同士からも生まれる事がある。そういった者たちはだいたいの騎士を目指す事になる。

国に属するか貴族に属するか等の違いはあるが、有事の際の先兵として駆り出されるのだ。逆に言えば何か起きなければそれほど危険も大きくなく、魔力持ちとして優遇された扱いを受けるので人気が高いそう。

知識が多少集まった所で今後の身の振り方を考えなければならぬ。

まず第一にこのまま家に残る、というのは難しいだろう。俺の持つ知識や力を振るえば割とどうにか出来る自信はあるが、あえて今の家族に歩み寄ろうという気も起きない。

だからといってすぐに出ていくという選択肢も無しだ。辺境伯家という看板は大き

く得られる恩恵もそれに比例する。たとえば家の中ではみそつかす扱いだとしても、外からすればそれなりに扱わなくてはならないはずだ。貴族という枠組みの中でもそのアドバンテージは大きい。

また市街に降りたとしてその生活に馴染めるかという問題もある。

転生当初は割と原始的な生活を予想していたが、ここに関しては良い意味裏切られた。なんと魔物から取れる魔石を動力として動くマジックアイテムが存在しているのだ。それを利用した様々な便利アイテムが貴族の暮らしを支えている。

そう、支えているのは貴族の暮らしだ。後はせいぜい一部の金持ちが利用しているくらいであり、庶民が使うにはどうしたって高価に過ぎる。

また貴族の屋敷で働く者には魔力持ちも多く、それを前提とした道具が多数あり、魔力持ちとそうでない者では力だけでなく生活環境でも大きな隔りがある。

ここら辺をふまえて考えると、確実に追い出されるであろう15歳まではなんとか家に寄生して知識と可能であれば人脈を得る。うまく伝手ができればそれを使って他の貴族家の騎士なり文官なりに就職、ダメなら冒険者となって巨大魔石で一攫千金でも狙おう。

そう冒険者だ。主に魔獣や魔物を狩りその素材や魔石を得、人族の版図を増やすために開拓を行う者たちの総称だ。物語でよくある何でも屋のような側面も持ち、冒険者ギ

ルドや冒険者ランクもあるらしい。正直前世で戦いには飽きているが、冒険者というのはロマンがある。悩みどころだ。

なお、冒険者には魔力無しも多い。昔に比べ戦闘技術の体系化や武具の改良が進み、下位の魔物であれば人間族でも倒せるレベルにはなってきた。戦いにおいて魔力持ちが有利なのは間違いないが、中には技術と戦術で魔力持ちを凌ぐほどの傑物もいるらしい。何事にも例外はあるものだ。

そんな将来の事を考えながら、時にマンサに料理を教わり、時に兄達をけたぐり回し、時に誰も使っていない様子の書庫に入りびたり、時に兄達を落とし穴にハメ、時にウォルダーに教えを請い、時に兄達をうんこをもって追い掛け回す。

そして気が付けば更に5年の月日がたち俺は10歳になっていた。

辺境領主に俺はなる!

さて、少し前に10歳を迎えウォルダーと二人で地味な誕生日を祝った。マンサは去年故郷の両親が体調を崩したということで退職してしまったのだ。

最後までこちらを心配して残ろうとするマンサに、パツパのへそくりからちよろまかした給金を多めに押し付けどうにか送り出した。心配してくれるのはありがたいがこは是非ご両親を優先してほしい。

その後は別邸でウォルダーと二人で暮らしているが、家事もろもろは自分でやるようになった。料理に関してはウォルダーの分まで作っている。

いやー坊ちやまの作る料理は不思議な物が多いですがうまいですなあ、と味は好評なようだ。お前は使用人の自覚があるのかという話だが、ウォルダー曰く料理は執事の業務範囲外らしい。

まあ食材の手配はしてくれるし普段世話になってるのでこれくらいはかまわない

のだが。料理自体前世からの趣味のようなものだしな。

この5年で別邸も様変わりした。外観はそのままだが、地下に食材等を保管できる冷暗所を作ったり、客室をひとつ潰して自分用の風呂を作ったり、内庭で家庭菜園を初めてみたりと趣味に合わせて改装……というか改造していた。魔法でやりたい放題である。

この世界、科学的な発展がまだ乏しく物理法則についても人類の認識が曖昧な状態のため、世界法則がゆるゆるなのだ。なので魔力があり明確なイメージと知識があれば割と好き勝手にできてしまう。

この世界では詠唱を行い決められた効果を発揮する魔法を基礎魔法と呼び、その他の魔法を特殊魔法と分類している。しかしこの基礎魔法と呼ばれている物、詠唱が決められている割に少しぐらいアレンジされても発動するかなりフアジーな物だ。

むしろ人によって詠唱全然違うのに同じような効果を発揮するレベル。

恐らくだが基礎魔法というのは多くの人がイメージしやすいように詠唱や動きを統一し、同じ結果を得られるようにするために考え出されたものであり、魔法の本質は特殊魔法と呼ばれている方なのだろう。

現状貴族の間ではまず魔力の大きさが重要視されており、魔法に関してはとりあえず発動するのであればそれほど気にしていない者が多い。

王都の魔法院と呼ばれる研究施設では日夜様々な研究がされているらしいが、当然そういつた知識や技術というのは秘匿され、研究者や資金を出している極一部の高位貴族の間でのみ流通しているのだろう。

自らの権威をより高め影響力を強めるためには当然の事だ。その一方で基礎魔法と呼ばれる一見それらしいものを広める事で、魔法とはそういう物だという認識を強め、一般での魔法の発展が進み過ぎないように抑制しているのではないだろうか。

貴族にとって重要なのは魔力であるという風潮が強く、多くの基礎魔法が使える事が称賛されている。平民にとっては多少の基礎魔法が使えるばすでに上等で、それ以上の研究を行おうとするには日々の暮らしに余裕は無いだろう。

その中でも研究を行いたいような変わり者は魔法院に囲い込みをしている。恐らく国の上層部の政策なのだろうが、まあ俺には関わり合いの無い事である。

ここ数年日課としているマラソンと身体作りのための運動を終え風呂に入る。世界は変われど風呂に入る気持ち良さは変わらない。この後は軽く昼食を取りいつも通り

読書に耽るとしよう。

本邸の書庫の蔵書は大したもののでかなりの量があった。中には異なる言語で書かれている物もあり、これらを集めた歴代当主の誰かの熱意を感じさせた。マジックアイテムのおかげで本はそこまで高価でないとはいえ、これだけの量があれば一財産と言えるだろう。

しかし現当主を始め今の一家はまるで興味も無いようで埃が積もっている有様だった。せめて掃除くらいさせろよ。

しかし本に対する興味の無さが幸運に働いた一面もあった。蔵書の中に一冊ひどく悍ましい気配を放つ本があったのだ。嫌な予感がしたので念のため結界を張りつつ調べてみると予想通り外なる神やコズミックホラーに関して書かれた本だったので秒で燃やした。

なんであるねん。本自体はさほど古い物には見えなかったので余程記述が詳しくかつたのだろう、魔導書一步手前レベルだ。隔絶結界を張っていたので向こう側に気付かれる事は無かったと思いたい。

眷属程度なら問題ないが気まぐれに化身なんて寄越されたなら追い払うのにも一苦労だ。そこらへんは専門家の無垢なる刃さんにお任せしておきたい。同じ性癖を持つ同士として応援している。

そんな訳で今では面白そうな本は自室に持ち帰りじっくりと読み進める事が出来る。
いる。

今読み進めている本の続きを呆けた頭で考えて居ると人の気配が近づいてくるのを感じる。まあこの別邸にはウォルダーしかいないが。

「坊ちやま、入浴中失礼します。急ぎお知らせしたい事がございます、少々お時間よろしいでしょうか」

どしたの? あんまり良い知らせではなさそうだけど

「良い知らせかどうかは少々難しい所ですが、先ほど早馬が参りまして。避暑に赴いておりました当主様一家が魔物に襲われ全員亡くなられたようです」

……ぱーどうん?!

「どうやら移動中にワイバーンの群れに襲われたらしく、護衛含めほぼ全滅。どうか逃げ延びた従者が知らせを寄越したようです。ほっほ、これは一大事ですね」

おい笑ってる場合じゃねーぞバーロー。いやまじでなんでどうなってるの? てかパッパ魔法使いでしょ? 護衛もいっぱいいたじゃん

「当主様は魔力量はそれなりでしたが魔法のお勉強はあまりお得意では無かったですからなあ。護衛達も領の手練れ達は前線の砦に送られておりますので、よそから来たお

べっかばかり上手いボンクラばかり。ワイバーン一匹ならまだしも、群れとなればさもありなん、と言ったところでしょう」

おハーブ生い茂りますわあ！

「そうですね、詳しい話は湯からお上がりになられてからに致しましょう。ハーブティーを用意しておきますゆえ」

違うそうじゃない

ウオルダーは本当にそのまま戻っていった。あいつまじでどうなってるんだ。まるで動揺してないし意味わからん……

何はともあれ面倒な事になるのは確実そうだ。漏れ出るため息を止められそうになり。俺は現実逃避のためにそれから30分ほど湯舟に浸かり、ようやく湯から上がるのだった。

話は少し前に遡る。比較的温暖な気候が長く続くこの地方だが、今年は例年に比べてかなり気温が高かった。そこで当主であるパツパは最近交友が深まったという近隣の領主に避暑に誘われたらしい。なんでも比較的高地にあるらしく涼しく過ごせるとか。

それなら是非にと家族でお邪魔させて頂く事になり、5日ほど前に護衛も引き連れて旅立っていった訳だ。ナチュラルに俺がハブられているのは気にしてはいけない。

そして目的地に着く少し前、山間の道を進んでいる途中でワイバーンの群れに遭遇し成すすべくなく壊滅。命からがら生き延びた従者が知らせを寄越したという顛末だ。

せめて息子のうち一人くらい生き残らないのかと思ったが、ワイバーンの的に子供の肉の方が柔らかくて好みらしく一番最初に啜えられてお持ち帰りされていったので生存は絶望視されているようだ。

「という訳でして、エディルナ家の生き残りは坊ちゃまお一人となってしまいました。これからは新当主としてこのヘルゲン領を差配して頂ければと存じます」

という訳でじゃねーよ。急転直下、青天霹靂、寝耳に水とはまさにこのことだよ。ていうかそんな簡単に新当主とかなれないでしょ。親戚とかいないの? いるでしょ。パッパの兄弟とか

「親戚はおりませんなあ。当主様……失礼前当主様のご兄弟は不幸な事故で皆亡くなられておりまして、現在エディルナ家の継承権を持つのはクリストファー坊ちゃまお一人となつてしまいました」

あつ、ふーん（察し）不幸な事故があつたんじゃね、仕方ないね

「貴族家当主の任命に関しては本来王の許しがなければいけません。基本的には当主とその継承者が王都へ赴き、継承の儀式を行うのですが、ここは辺境の地。王都までの距離も離れておりますので緊急時には知らせだけを先に届け、余裕が出来た時に王へと報告を行う事も許されております」

危険がいつばいの辺境地だからこそその例外が許されているのね、まさしく今の状況のような

面倒な事になったと思うと同時に、ある意味ありがたい事になったかもしれない。もともと気ままな生活を送るのが目標であり、少しばかり贅沢が出来ればなお良しと考えて居たのだ。

そういった意味ではこのまま当主の座が転がり込んでくるのであればそのまま目標達成と言えるのではないだろうか。

「ふむ、王城の方にはわたくしから連絡を送り手続きを行っておきますので、それでよろしいですね？」

正直貴族が何すればよいのか良くわからん。まさか自分になる事はないだろうとそ

れ関連の書物は後回しにしていたし。

けどあれだろ、魔物が攻め込んだ時に撃退したり適当に書類にサインしとけばいいんだろ？ パツパを少し観察してたこともあったけど仕事してるような所なんてまるで見た事ないしな。つまり実務自体は部下にほぼ任せておいて上司としてそれを承認するだけなんだろ？

それくらいなら俺にだって出来るだろう。よし決めた、よきに計らえ！

「かしこまりました、ではそのように」

ウオルダーは懇懇に腰を折り綺麗な礼をすると、本邸の方へ向かって行った。そういえば本邸の家令を筆頭に、執事やメイドも結構引き連れて行ったのでハウスキーパーも補充しなくてはならないのか。

まあ家来はウオルダーにやらせればいいし、人員の補充も全部任せちゃって大丈夫だろう。

この時の俺はたいして悩みもせずに気軽に構えていたのだった。すぐに地獄を見る事になるとも知らずに……

クリスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の当主を除かねばならぬと決意した。

まあもう死んでるんですけどねこのくそ野郎が！パツパお前この無能う！

家族が死に、急遽家督を継いでクリストファー・エルディナ・フォン・ヘルゲンと名乗るようになってから2か月。俺は領内の視察を終えて本邸に帰り絶望していた。

ヘルゲン辺境伯領はそれなりに広い。魔獣と魔物の住む領域、魔領に面しているため安全な土地は少ないが魔領を開拓できればその分を自分の領土に加えてよいとされている。開拓できればの話だが。

領内には二つの街と4つの村がある。ここ領主館のお膝元であるアルトの街、魔領に面するベルト砦から広がったベルトの街、麦を中心とした農作物を作る4つの名もなき村ABCDだ。それらを一通り見て回ったわけだがそれはもう酷い有様だった。

度重なる重税で街に活気はなく、糞尿によごれ汚い。砦では騎士や冒険者たちがどうか魔物を瀬戸際で食い止めているものの、日々負傷者が増え戦力はじりじりと低下していくばかり。

流れ者が多い冒険者と住人の間では争いが絶えず、防衛のために村から連れてこられた男たちも急に渡された槍に戸惑うばかりでまともな訓練も受けられない。

働き手である男たちを連れていかれた村では取れる作物の殆どを税として取られ、残った者たちがかろうじて食つなく事しかできない。

逆にどうやったらかんなくそみたいな状況になるの?と聞きたくなる。素人目にもわかるがこれはもう領として破綻寸前だ。むしろ破綻せずにぎりぎり体裁を保てている事が奇跡に思える。

もつと余裕のある内に領主に反旗を翻せなかつたのだらうかとも思うが、ほとんどが魔力無しで構成される平民にとって貴族とはそれだけ強大だったのだらう。

もつともこれらの原因のすべてが先代であるパツパだけのせいという訳でもないらしい。

もともとエディルナ家は法衣貴族だった初代が戦で功績を上げ、ヘルゲン領を拝領したことが始まりだった。最初にアルトの街を作り、次に魔領の抑えのためベルタ砦を構築。

やがて砦の周囲に人が集まり街を整形していった。初代は戦上手で砦をうまく使い魔領からの魔物の流入を抑え、領内を安定化させた。やがて後方が落ち着いてくると新しく村を開き少しずつ人口を増やしていった。

劇的な進歩はないものの、辺境の開拓はゆつくりと着実に進みこのままいけば豊かな領になるだろうと思われた。

しかし領を継いだ二代目が問題だった。二代目は放蕩家で色狂い、領の運営には無頓着という絵に描いたようなダメ領主だった。初代は兵士を育てるのは上手だったが、子供の教育は出来なかったのだ。

外部の教育者に頼ろうにも伝手がなく、他の貴族からはやつかみが酷く頼れる相手もない。せめてもと大量の書籍を集めてはみたものの、残念ながらそれが活かされる事は一度も無かった。

さて、子供が多かった二代目の後には当たり前のように家督争いが起きた。最終的に3代目であるパッパが他の兄弟達を追放したりころしたりして当主の座に座った訳だが、ただでさえ2代目の無駄遣いで財政を圧迫していた所にこの家督争いで出費はさらに加速！

ついでに巻き込まれた家付きの兵士たちもバタバタ死んで腕利き達も大勢死亡、わずかに生き残つてももう付き合っていられないと離散。エディルナ家は大打撃を被つたのだ。残当である。

こうして人と金を大きく失つたエディルナ家だが、3代目パッパは大逆転のための一手を放つ。そう、増税である。もう笑つてしまう程ありとあらゆるものに税金をかけ絞

れるものは全て搾り取ろうという勢いでだ。

ついでも出費が多かったベルタ砦の防衛費用もあれこれいちゃもんを付けて削減していった。こうしてエディルナ家単体で見ればその資産を回復したが、まだ成長途中だったヘルゲン領が耐えられるはずもなく、十数年もしないうちに破綻寸前にまで追い込まれているのだ。

いつそこの領一回ぶっこわした方がいいんじゃないですかねえ？

そんな話をウォルダーから聞いた訳だが、お前初代から仕えてるの？ いったい今何歳だよまじで何者なんだよ。ほっほっほじゃねーよ笑ってごまかそうとすんな。

ウォルダーの正体も気になるがとにかく今はそんな場合ではない。すべてを放り投げて知らんぷりを決め込みたいがすでに代替わりの知らせは王城に届いてしまっているだろう。

である以上貴族の責務として領の維持と発展をさせねばならず、万が一破綻して魔物に占領されようものなら罪人扱い間違いない。まあ本気で逃げようと思えば逃げられるが、仮にも10年この地で育ったのだ。

今まで俺が食べてきた食べ物や安寧とした時間は文字通り領民たちの血税である。

こうして内実を知ってしまった以上放り出すのは仁義に悖る。

月読様も良く言っていたいな、受けた恩は倍にして返せそして恨みは100倍返した、と。あの神はイケメンな見た目によらず陰險な所は結構好きだった。

それによく考えればこの状況はチャンスとも言える。ピンチはチャンス、つまり逆転の発想だ。そう逆に考えるんだ、領内がすでに壊れる寸前なら、別に壊れても構わないくらいの気持ちでやってもいいさ、と。

自重なんてすべて投げ捨ておぼろげなラノベ知識を動員してNAISEIごっこをしてもいいじゃん、と。俺TUEEEENAしながら領地復興させてハーレムしてもいいじゃんと！

おっしゃやるぞお前俺はやるぞ！ウォルダーお前もこき使ってやるから覚悟しろよ！

……え、それは家令の仕事に含まれてないからダメ？ いやいやいやいや、お前今のは「微力ながらお手伝いいたしますぞ」みたいな感じで協力してくれる所じゃないの？ 契約範囲外だからダメ？ お前ほんとそういう所だぞ。

じゃあいいや、行くぞロイド！！

「は、はいい?! ぼ、僕ですか?」

「そうだよこの屋敷にロイドってお前以外に居ないだろ

「いえ、そうですが。あの、なぜ僕なんでしょうか……う？」

「そんなのお前が一番下っ端だからに決まってるだろ。大丈夫、特別手当も出すからさ。はい決定！つべこべ言わずに行くぞ！」

「え、そんないきなり言われても困りますって?! あ、ちよつと領主様待つて引つ張らないで止めて酷い事しないでー！」

ロイドは前当主が亡くなる一月ほど前に屋敷に来た奉公人で執事見習いのようなものだ。仕事を教わり始める前に事件が起きそのまま役職が宙ぶらりんのままだったのだと知りあえずウオルダーに付けて手伝いをさせていた。

色々と始めるにあたって手伝いが必要だが、正直今の家にいる文官達はあまり使いたくなかった。どうせほとんが着服やら横領に手を染めているからだ。それらが一概に悪だと断じるつもりはないが俺の手足にしたくはない。

ここも一度手入れが必要だろう。そこを考えると何もそまっていないロイドは色々としようど良い。年齢も15歳と若く柔軟な発想もできて、少し見ていた範囲で物覚えも良い。俺の傍らで色々見せておけば後々成長の糧にもなるだろう。

未だにびーびーとわめくロイドを引きずりながら俺は部屋を飛び出した。俺たちの冒険はここからだ！

汚物は消毒だ!

あれから5年、15歳になった俺は本邸の執務室で上がってきた書類に印を押していた。

ヨシツ!これもヨシツ!なんだかわからんがたぶんヨシツ!

「いやわからないのに印押さないで下さいよ」

冗談だよ、冗談。報告内容も調査内容も適切でこれから行う対応策も具体的に書かれている。このまま進めてくれ

「ならいいんですけどね」

呆れたような目でこちらを見てくるのはここ5年ですっかり大人びたロイドだ。初めは頼りなく見えたものの、すぐにめきめきと頭角を現し今ではこの領主館の文官を取

りまとめる立場になった。

もともと能力が高そうな所に目を付けて引つ張り回していた訳だが、聞いてみると王都にあるという貴族向けの学校を優秀な成績で卒業していたらしい。

しかし実家がそれほど大きい訳でもなく、本人も領地を引き継がない3男だったこともあり他の高位貴族の子息に妬まれて王都周辺の好条件の場所には就職できず、なんの因果かこんな辺境領までくる事になってしまったそうだ。

まあその流れ着いた先で若くして大出世しているのだから幸運だったと思ってもらいたい。

というか皆優秀なおかげで最近俺印を押すだけしかしてないんだけど、もうこれロイドに渡すから押しておいてくれない？

「はいはい、馬鹿なこと言つてないで早く済ませてしまってください」

辛辣う！いやでもさ、部下は皆優秀だし領内も安定したしもう誰が領主になつても大丈夫だと思わない？ロイドも辺境伯になつたら超出世じゃん。Win—Winな関係じゃん？

「そんなに変わりたいならその辺のおっさんでも連れてきてやらせればいいじゃないですか。領主様が陰謀に嵌められたと勘違いした領民に殺されそうなんで僕はごめん

すよ」

うーむ、それはおっさんが可哀そうだから止めておくか

「僕は可哀そうじゃないんですかねえ」

そこはもう今更じゃないか

「そう言われるとやるせない気持ちになるので止めて頂けませんか?」

こんな軽口を交わしながら執務を行えるようになったのはここ最近になってからだ。少し前までは昼と夜と問わず文字通り領内を飛び回って様々な問題を解決して回っていた。

本来組織のトップが前線にでしゃばっていては現場の人間が迷惑するだけで良い事なんてないのだが、組織自体がまだ貧弱な上に解決すべき問題が多岐にわたり過ぎその問題の軽重もわからないような状態だったのだ。

可能であれば現場の人間を引き連れて解決方法を実践を交えながら詰め込み、無理そうなら領主権限で無理くり押し通す。正直後者の対応が圧倒的に多かったが、反発されようがなんだろうがやり通すしか無かった。

ヘルゲン領はすでに死に体で悠長に政策をこまねいている余裕はなく、死にそんな肉体に劇薬を流し込みどうか生き永らえさせるようなショック療法を行うしかなかつ

たのだ。

「というかそもそも領地経営の知識なんてちゃんと学んだ事の無い俺にまともな方策など取れるはずがない。そんな俺に出来たのは自分の持っている能力でこり押しして、結果は運に任せるしかないに決まっている。」

「そうしてまあ今こうしてどうにかなつてしまっているのだから我ながら大した豪運と言えるだろう。」

「いやーしかしこの5年間色々あったな。始めた当初は無理ゲー過ぎだろうと思ってたが、今では領地も安定して優秀な部下も増え将来も安泰だと思えるようになった。」「ええ、本当に。何度途中で逃げ出そうかと思つたことか。そういうば始まりは丁度5年前の今時期でしたね……どうぞお茶です」

「ん、ありがとう。良い香りだ」

書類を端に寄せロイドからお茶を受け取る。この茶葉も最近領内で生産しており、今は貿易ルートを勘案している。

「部屋を飛び出してすぐにやったのが大量の職員呼び出して首にすることでしたっけ。」

文官武官使用人間わず呼び出して問答無用で叩き出すから嘩然とさせられたのを覚えてますよ」

あー、それな。領地をいくら良くしたってそれを統括する所が腐ってたら意味ないと思つてたからな。中には国に納めないといけない税を着服してるのもいたんだ、むしろ物理的に首をはねなかつただけ温情だつたと思うがね

「そのお陰で風通しが良くなつたのは確かですけどね、直後は隙間風が酷過ぎて死ぬかと思ひました。ウォルダーさんは余り手伝つてくれませんでしたし」

あいつは謎の自分ルール持つてるからな。普段は家令の仕事の範囲外ですので、とか言つて逃げるくせに面白そうな話には普通に参加してくる

「あの人も結構自由ですよね……まあおかげでと言つて良いのか、残つた人員の絆は深まり能力も上がりましたが」

領内改革として一番に行つたのは人事だつた。事前に調べた不正関与していた者には大鉦を振るいばつさり解雇したのだ。追い出された方からも残された方からも非難轟々だつたがすべて無視した。多少迷つた末の判断だつたが、こういつた不正というのは一度手を染めると中々抜け出せものだ。

再教育を施すよりも新人を教育して不正を許さない環境を1から作り上げた方がマシだと考えた。幸い悪環境の中でも不正を行わずにいた人間もおり、そういった者が組織の中心に居ればそうそう腐りはしないだろうと。

そこで問題となったのが新たな人員である。領主館の防衛は自分があるので考えなくても良く、屋敷の維持も必要最低限に絞ればどうにかなる。武官とメイド等は後回しでよいとしても文官の確保は急務だ。

なにせこれから領地のあらゆる所をいじくり回そうというのだから処理すべき案件は山のように発生するのは目に見えている。そんな時に対応すべき役所がポトルネットクになって止まっていたのでは進む話も進まない。

領主として裁可するのは俺だがたとえ雑にでもまとめておいてくれたほうが効率も良い。

しかしここは辺境の地、まともな教育を受けられる者など本当に一握りで文字を読めれば上等、計算できる者などせいぜい商人くらいのものだ。どうにか伝手はないものかとウォルダーに相談してみれば、こちらなどいかががでしようと渡される数枚の書類。

何かと思いい読んで見ればそれは一見履歴書のようなものだった。簡単な人相書き、家族構成、特技や好み等かなり細かく書かれている。平民だったり魔力持ちだったり経歴や特徴は様々で、しかもどういふ訳かはずれもヘルゲン領の領民ではない。

これをどうやって調べたのかは知らないが、勧誘するのは難しいだろう。良く知らぬ人間にいきなりスカウトされて、しかも生まれた土地を離れて他の領の更には辺境地だ。そうそう領けるものではない。書かれている事が本当ならば是非欲しい人材だが、合意を得る事は難しいだろう。

ため息をついてウォルダーに書類を返そうとしたところで一つの共通項がある事に気付いた。どれも何かしら自分では解決できない悩み、弱みと言つてよいものがあるのだ。

例えば、貴族に生まれたが魔力無しで家を追い出された者。例えば、能力はあるのに下働きばかりで燻っている者。例えば、過去に貴族家で働いていたが親の看病のために実家に戻らなくてはいけなくなつた者。いずれも教育を受けながらそれを活かすことのできていない者たちばかりだ。

書類をこちらに渡したウォルダーは楽しそうにうつつすらと笑みを浮かべている。

ウォルダー。貴様もしやこの者達の弱みをついてこちらに引き込めというのはあるまいな。

……………

もしや弱みをついて勤務地がヘルゲン領であることを伏せたまま契約書にサ

インをさせて有無を言わさず転居させてなし崩しのうちに働かせようというのではあるまいな！よっしゃそれでいこうちよつと行つてくる!!

——ほっほっほっほ

こうして俺は資料を頼りに王国全土を飛び回つた。マツハ5くらいで。

ちよつとさあ、うち良い仕事あるんだけどやつてかない？男は度胸、まずはなんでもためしてみるもんさ。大丈夫大丈夫、怖いのは最初だけだから。少しだけ、先っぽだけでいいから！未経験でも大丈夫、先輩が優しく教えてくれるアットホームな職場です。君はこんな所で燻つていい人材じゃない！うちでその才能を活かそう！病気の母を置いていくわけにはいかない？じゃあ一緒に来てもらえば問題ない近くで品質の良い薬草も取れるから病気も改善するかもしれないね！はい、おつけー決まり早くここにサインしてホラホラホラホラ！はいサイン頂きましたじゃあ行くぞ。え、今からだよちゃんと契約書にも書いてあつただろう急かさされたから読んでない？知らないなあ（すつとぼけ）家財はまとめてこのマジックバッグに入れるんだよあくしろよ。

勧誘は実にスムーズに進んだ。俺の勧誘に心を動かされ、皆快く契約書にサインをし

てくれた。相手に親身になって話をすれば、こちらの誠実さは相手にはしっかりと伝わるものだと改めて気付くことができた。

なお契約書は魔法的な縛りがあるものでサインをすれば契約が履行されるまで逃れる事はできない。世の中にはこれを使って不当な契約を結ぼうとする悪人も居るのだとか。まったくもって度し難い話もあったものだ。

飛行魔法を使って彼らをピストン輸送したら住居の確保だ。一時的に領主館の空き部屋を与えてもいいが、それでは気詰まりしてしまうだろう。そこで領主館の近くの空き地に急遽職員寮を建設する事にした。

これなら出勤も徒歩3分、いっぱい仕事が出来てお得だね! 当然人力で建てていては間に合わないので土魔法でちよちよいと作ってしまおう。

某錬金術師の真似して手をたたき錬成! とばかりに地面を叩く。するとあつという間に見事な豆腐型建築の完成である。内装も凝ったものは無いが、彼らが今まで住んでいた所よりは上等だろう。背後で成行きを見て固まっていた面々に領主館から布団やらの備品を運び込むように指示する。

物問いたそうな目で見られるが無視無視、いちいち説明している暇はない。既存の文官に当面の作業指示を出し、俺は次の作業へ移った。

「あの職員寮がいきなり生えてきた時は度肝を抜かれましたね。いえ、その前に凄い速さで空飛んでた時点で驚いていましたが。クリスマス様に連れ回されるようになってから驚いてばかりで、最近はどうにもその辺の感覚がおかしくなっている自覚がありますよ」

俺も最初は目立たず静かに暮らせればそれで良いと思ってたんだけどね。運命さんが余りにも理不尽なことしてくるから、そっちがその気なら俺にも考えがあるぞ、と。これでも加減はしてるしあまりこの世界のルールを逸脱しないようには心がけてるんだけど、めんどくさくて力押しでどうにかなるものはない

「前世に異世界に心威法でしたっけ。おとぎ話の物語にしても突飛すぎて、なんて言えば良いのかわからないですね。おかげで今では領民達から神の遣いだの地上に降臨した神そのものなのと言われてますが」

まったく失礼な話だよな。あんなその時のノリと勢いで生きてるような連中と一緒にしないほしいわ

「クリスマス様同族嫌悪って言葉知ってますか？ それに滅多な事を言っただけじゃありません、教会の連中に聞かれたら大事ですよ」

異端審問がなんぼのもんじやい。仮に王国中の戦力がまとめて攻めてきても相手にならんわ。この世界はまだまだ選定期で種族を増やしてより高みを目指すための可能性を探っている段階だからな。もうちよい先鋭化が進んで階位が上がらないと戦いの土俵にも立てんよ

「そこからへんの話は僕には理解できませんが、クリス様がおかしな存在だというのはわかります」

ひどい、ひどくない? まあいいけどさ、実際理解しがたい存在である自覚はある

文官の補充に目処がつけいたら次は街のお手入れである。アルトの街もベルタの街も汚い、まーじーでー汚いのだ。他の都市がどうなっているのか知らないが、なんと街中が汚物だらけなのだ。

街中を視察したときにその悪臭に悶え、家の窓から汚物が捨てられているのを見た時は気が狂うかと思った。しかも清掃業者でもいるのかと思いきや雨が降って流されるまでそのままなのだそうだ。

当然上下水道が整備されているはずもなく、せいぜい端に溜まっていくだけ。そのくせそんな所の近くには住みたくないからと汚物溜まりの近くには人が寄り付かなくな

り、浮浪者などが集まってきてやがてスラムが出来ていく。衛生状態なんてもはや概念さえない。

食べ物に困っている人間も多く、栄養状態は悪い。どうにか健康を保っているうちはいいが、ひとたび体調を崩せば戻すのは困難だろう。そして感染力の強い病でも発生しようものならあつという間に蔓延して抵抗力の弱いものから死んでいく。

今はまだ表面化していないようだが、目の届かないスラムの奥ではすでに病は蔓延しており、何かのきっかけさえあればすぐに爆発するのではないかと思っている。確認していくつもりはないが。

しかしこの問題へ対処する術はすでにある。古事記にも書いてあった、汚物は消毒だ、と。

夜になり領民が自宅に戻る頃を見計らいロイドを引き連れて街に出る。ピーピーわめくロイドを無視して空中に飛び上がると、思念魔法で住人に呼びかける。

親愛なるアルトの街の諸君。夜分に失礼する、私は領主のクリストファー・エディルナだ。これより街の清掃のために火を放つ。しかしこれは人体にそれほど影響を及ぼさないで混乱して暴れたりしないように。まあすでに動けないとは思うがね。

思念魔法で声を届けると同時に身体の動きも縛る。格下相手には実に使い勝手の良い魔法だ。街全域に効果が行き渡っているのを確認すると、俺は足元に浄火を放った。

浄火、火にはもともと穢れを祓うという概念がある。元々の火の“燃える”という特性と“穢れを祓う”という概念を抽出した魔法だ。術の調整によって穢れの範囲を決める事も出来るので、今回は汚れと疫病の元、それを媒介するであろうネズミと害虫を範囲とした。

大雑把な指定でたまに惨事を巻き起こす事もあるがそこはご愛敬だ。

足元に落とした浄火の炎は見る間に燃え広がり、時間を置かずアルトの街を覆いつくす勢いとなった。勢いが弱いのは大きな商店の周りと領主館付近くらいなものだ。

はっはっは、予想通り大した炎上つぶりだ。どれだけ汚かったかよくわかるな。どうだロイド壮観だろう！中々見れるものではないぞ！

——はわわわわわっ、もうだめだ……おしまいだ……この世の終わりだあ……

眼下には大火に包まれる街並み、惨状と呼べるような状況でありながら街は静かだ。住人も動物もみな俺に縛られているのでどれだけパニックになろうとうめき声一つ漏

らすこともかなわない。

眺める事数分、全てを焼き尽くさんとするように広がっていた火の海は、しかしすべてが幻だったかのように立ち消えていた。だがそれがただの幻影だったのを否定するよう、街を覆っていた汚物も顔をしかめる悪臭も、全てが消えていた。

満足してあたりを見渡すと、もうひとつ気になる事があるのに気付いた。

うーむ、こうして見ると形が悪いな

——こ、今度は何をするつもりなんですか

いや、上から見ると街の形が歪に見えてな。ついでだ、ここもすこし手直しするか

アルトの街は領主館から砦のある北のほうに伸びる形で形成されているのだが、攻め入られた時の為になのか発展するに任せて作られたのか知らないが所どころで道が分断されたり幅が変化したりと効率が悪い。

これから領地改革をしていき、それを上手く軌道に乗せれば住民の人口も訪れる人も多くなるだろう。その時になってから改めて区画整理なんてしようとしても難儀するのは目に見えている。

ならば今やってしまったほうが後々のためになるはずだきつとそうだ思ったのだが

吉日やってしまおう。

外に出ていた住民を同じ高さまで浮かび上がらせる。たまたま近くにいた住民と目が合うが目ん玉飛び出るんじゃないかってくらい驚いてる。うける。

まずは大地に魔力を浸透させて下準備して。

えーと、最初に街を囲む防壁を動かして今後発展するだけのゆとりを確保。足りなくなつた部分は新しく構築して劣化してそうな所も補強、ついでに物見やぐらも四方に増やしておこう。中はまずメインストリート、大型馬車が二台ゆとりをもつてすれ違えるようにして、領主館前には広場を作っておくか、蚤の市とか開ける下地にしとこ。商業区はあつち居住区はこつち、工業区は向こう、スラムは……ほとんど廃屋ばっかだな。これは中身を一回取り出して、廃屋は取り潰して空きスペース作つとこう。んで居住区の端っこに豆腐ハウスをいっぱい作って、はいはいスラムの住民はみんなしまつちやおうねー。井戸は……お、水脈おふとーい！これながら各区画に複数設置できるな。おつし、こんなもんか。ロイドどうよ中々いけてない？

……………

気絶しとる。

うーむ、ちよつと刺激が強かつたかしらん。

とりあえず退避してもらつてた住民をメインストリートにおろしてやる。どうよ綺麗な石畳だぞ。見た目だけなら都会にも負けんやろ。ちよつと自宅がわからないかもしれないが、だいたいあつちのほうにあるから頑張つて探してくれ。

さて、親愛なる住民の諸君。お騒がせして悪かつたね、以上で街の清掃とちよつとした模様替えを終わりにしようと思う。これからだんだんと身体が戻り、数分の問題なく動けるようになるはずだ。すこしばかり周囲の状況が変わつているかもしれないが、くれぐれも冷静な行動を心がけてくれ。さて、すまないが諸君にお願い事があるんだ。私は、綺麗な物が好きでね。私の物は、美しく綺麗であつてほしいと思つている。私の街であるこのアルトの街も、その住民である諸君も綺麗であつてほしいと思う。具体的には、二度と糞尿にまみれた街など見たくは無いんだ。なので今後汚物は指定する集積地へあつめるようにしてほしい。指定場所は明日改めて告知するのではし待つていてくれ。それともし、もしも今後街中に汚物を投げ捨てるような輩がいたとしたら、私の、この街を、汚物をまき散らし穢すような不届きものが現れてしまつたらば！

私は悲しみのあまり今度は全てを焼き尽くしてしまふかもしれない。どうか、どう

か忘れないでいてほしい。我が、親愛なる、領民達よ。

領民達へのお願ひ(迫真)を終え、改めて街を見渡す。すでに魔法は解かれており、喋ることくらい可能なはずだが、街からはしわぶき一つ聞こえてこない。

どうやら俺の誠意を込めたお願ひは、住民に真摯に受け止めて貰えたようだ。いきなり病原菌がどうこう言っても理解できないだろうし、まずは最低限の清潔さを意識してもらつて衛生管理についてはおいおいやっていけばいいだろう。さて、つぎはベルトの街にいつくぞー!

おいロイドそろそろ目を覚ませ。お前にはこの後の告知の手配やらやつてもらわにやならんのだ、呑気に寝てる暇なんてないぞ。

辞めたくなくなりますよ領主うゝ

「いやー、あれはまさしく地獄絵図でしたね。その後には大地が一人で動き出した時は天変地異で世界が滅亡するのだと思って気絶してしまいました」

地獄絵図は大げさだろ、誰も死んで無いし、むしろ薄桃色の炎が穢れを祓っていく様は美しく幻想的だったろう

「そつすね。あれがほんの少しの炎だったら美しく感じられたんでしようけど。ありえない色をした炎が燃え盛る様はこの世の物とは思えない光景ではありました。あのあと住民の一部が火を見るたびに怯えだして対処するのが大変だったんですよ？」

んー、それは悪いとは思ってるけどね。でもあそこで対応後手に回ってたら住民の半分は死んでたと思うんだよ。だからまあイーブンって事で。

「たしかに病気で死ぬよりはマシなんでしようけどね。そういえば最近では領民も皆身綺麗になってきましたね。大量の湯を使う銭湯を立てるとか、貴族くらいしか使えない石

鯀を領民に使わせるとか、最初は気でも狂ったのかと思いました」

言い方あ！

「ですがこうして効果を実感できると素晴らしい判断だったと思います。近頃は他領に出かけるのに気が滅入りますよ」

ほんとそれな。領主として叙任してもらいに王都へ行つた時はきつかった。王都はまだまじだつたが、道中はほんと辛かった。何度体裁なんて無視して一人で飛んで行くかと思つたことか。しかし石鯀は作り方さえ分かつていればそれほど難しくなかつたからな。銭湯については立地が良かった、雨が多く水脈が太いから比較的水を贅沢に使えるし、開拓で森を開くから薪も取れる、魔物の防衛で得られる魔石の一部を使えばマジックアイテムの補助も使える。

今は補助的に使っているマジックアイテムだが、今後改良していけばそつちを主体にできるだろう。そうなればアルトやベルタだけでなく、今ある村にも、今後拓いていく所にも作れるはずだ。儲けるつもりもないから料金も安いしな。

「それは良い事ですな、是非改良に成功してほしいものです。しかし最初に安い障害奴隷を買い集めてきたときは何かと思いましたが、まさか彼らを石鯀を作る労働力にするとは。他の場所では厄介者扱いですし、結果的に人材流出の対策にもなる」

別にそこまで深い考えがあつた訳じゃないよ。普通に動ける者にはもつと難しい仕

事にあてたかったし、単純にコストの問題もあった。それに最初はダメ元でやらせてみただけだしな。ダメだったら汚物回収の仕事に回そうと思つてたくらいだ。

「そうなのですか？ 度重なる改良の末に今では貴族の間に出回つている物より品質が高くと聞きますが」

それもほとんどミリスのおかげだよ。俺がうる覚えの知識を色々垂れ流しただけで製品化と問題点の改善、改良までやつてくれた。彼女がいなければ今頃はせいぜい石鹼のような物、が出来てたくらいじゃないかね。

「ミリスさん、たしか最初の頃にクリス様に拉致されていらした方でしたね」

だから言い方！

「まぎれもない事実ですので。最初は文官にまじつて仕事をしていたと思うのですが、そういうばいところから見えなくなっていましたね。まさかそんな事になつていとは」

お前あんまり本当の事ばつか言つてると事実陳列罪で訴えるぞ。

まあ、彼女の適正と希望もあつてね。無理に他の仕事もさせるより専任させるべきだと判断したんで任せてみた。そしたらまああつという間に労働者の指揮を執つて完成させてくれたよ。俺なんかよりも余程人を使うのが上手い見える。その後もある程度裁量を与えて自由にさせてみたらどんどん効率化を進めていくし、最近俺から美容

品の知識を搾り取って化粧水やら乳液やら美容液やら、まあ色々と研究しているようだよ。げに恐ろしきは女の美にかける執念か、実に素晴らしいね。

「たしかに、女性が美しくあることは良い事です、クリス様のご意向にも沿う事です。ああ、そういうえば汚物回収といえは報告書が回ってきていましたよ。肥料をまいた畑の作物の高成長が観測できた、堆肥の作成に成功したと思われるので確認してほしいとの事です」

まじかよ、すげーな成功したんだ。なんでみんなあんなにふんわりした説明で出来るのか。

「こちらは2年ほど前から始めた試みでしたね」

そうそう、元々は貧民街の住人への仕事と軽犯罪者の罰則の一環として朝夕の汚物回収させてただけだし、当初は集積所に集めてまとめてから下流に流してたけど環境に悪いからな。そこで人糞も肥料に出来たの思い出してその作成を命じてたんだ。だがまあ俺の知識もうんこと土と生ごみと麦藁を混ぜて攪拌していい感じに発酵させると匂いなくなつて肥料になる、くらいのゆるい知識だったから色々試行錯誤してもらつてた訳だ。初めの頃は攪拌が足りずにガスが溜まつてうんこ爆発したり、水分が多すぎで腐つちやつたりと失敗しまくりだったからな。もう定期的に浄火するしかないかと思つてたが、肥料として使えるようになるならありがたい。確認は後で行くとして、従

事者への振る舞い酒の用意をしておいてくれ。今回は特別に受刑者にも一杯だけ出してもいい。それと今後他領に向けての輸出が出来るようになったらその売り上げの一部を賃金に上乘せしてやると伝えてやれ。

「はっ、かしこまりました。諸々手配しておきます」

アルトの街を火の海に変えたあと、そのままベルトの街へと飛び同じ事を行う。ベルトの街の方が小さいが、魔物目当てで冒険者が来ている分混乱は大きいかもしれない。まあガン無視するが。

とりあえず浄火を行った後に区画整備を行う。ここは商業よりも魔領での魔物の討伐や資材の獲得がメインになるはずだ。まずは砦の補修と城壁の強化を済ませ、冒険者ギルドやその関連の施設は砦の近くへと寄せておく。

これなら冒険者が問題を起こしても兵士が対処しやすくなるだろう。めいびー。

後は冒険者ギルドの改築だ。冒険者ギルドは特殊な成り立ちで国家間の縛りを受けないというよくわからない独立した組織なので本当は勝手に手を出してはいけないの

だが、どうにも金回りが悪いのかベルトの街のギルドはしょぼい。

魔領に面した最前線であり、危険は多いがその分獲物も多く運びこまれているはずだ。ギルドに対しては領主と言えど勝手に税金を引き上げる事は出来ないのでギルド内部の問題なのだろうけども。この際それはおいておこう。

問題なのはギルドの内装が地方のちっさいお役所の建物みたいに狭ことだ。受付のカウンターは一つしかないし、クエストボードは狭いから古い依頼が埋もれていくし、職員用のスペースは持ち込まれたアイテムやクエストの資料が散乱し混沌としている。

魔獣等の解体用スペースは裏庭にあるようだが、大型魔獣でも搬入されればそれだけで埋まってしまいそうだ。視察の時にドキドキしながら入ったときのこれじゃない感
は未だに忘れられない。

そう、冒険者ギルドといえバクエストカウンターは複数あってタイプの違う綺麗なお姉さんが受付してて壁一面にクエストの依頼が張り出されてて職員スペースは会社のオフィスのようにデスクが並んでいて様々な資料が納められて二階にはギルドマスタリーの仕事部屋がありそこで一見うだつの上がらないように見えるギルマスが敏腕秘書にお小言を言われながら仕事しててなぜかギルドに併設された酒場では昼間から酒飲んでる3流冒険者がいて喧嘩が始まると奥の訓練用のスペースで模擬戦が行われてその横にある素材の買い取りカウンターに新米冒険者がありえないほどでかい魔石を

持つてきてあれ僕また何かやっちゃいました？つて言つてなきやダメなんだよオラぁん?!

そんな俺の妄想を実現させるためなら少しばかりの労力など厭わない。今回は石作り豆腐ハウスではなく見た目も出来るだけ洒落た感じにして、近くの森から木をぶっこ抜いて木材に加工し内装にも拘つていく。

建築に意識を裂き過ぎて自由になった住民たちが勝手に組みあがつていく新冒険者ギルドを唾然としながら見つめている。そこ、あんまり近づくと危ないぞ。

そうして建築する事30分、街の住人全員来てるんじゃないかこれつてレベルで見守られる中、ぼくのかんがえたいさこのぼうけんしやぎると、は完成した。

おいこの中に冒険者ギルドマスターはいるか。お前か？お前だな。いいか、この建物をヘルゲン領の領主として冒険者ギルドへと寄贈する。そう寄贈だ、金をとる気は無い。というかそんな金ないのは分かつている。なので私は貴様にこの建物に相応しいだけの働きを期待する。わかつているな？わかつたな？では精々励め、私を失望させない程度にな

——領主様、お言葉ですが勝手に建てて勝手に押し付けてその上これに見合った働きをしろつて……正直に言つて領主館より立派ですよこの建物。流石に無茶振りじゃな

いのですか？ほら、ギルドマスターさん顔面蒼白ですよ

ロイドお前いきなり正論放り込んでくるの止めろよ。とうにかさつきまで気絶してたのに随分余裕があるな

——ええ、先ほど天国の祖父と話をしまして。見たもの、感じた事があるがままに受け入れる事こそが大事であると。例え妻が夫である私を縛り付けて乗馬鞭で叩くことに快感を覚える人だったとしても、まずはそれを受け入れる事で見えてくる物もあると仰っていました

言ってる事は良い事なのにその例えいる？新たな扉開いちやつてるじゃん

——ですので僕も領主様がどれだけ常識外れな事をして、どれだけ奇天烈な発想をお持ちでも、どれだけえげつない性癖を持っていたとしても、それを認めこの方はそういうお方なのだろうなと受け入れていけばいいのだと気付きました。

おい人がえげつない変態性癖持つてるの確定してるような言い方を止めろ。その優しいまなざしで見つめてくるのを止めろ

とりあえず街でやるべき事は終わった。後は砦にも用があるが、これは明日日が昇つてからの方がいいだろう。まずは今後の方針と予想される問題とその対策について文官達と認識をすり合わせておかなくてはいけない。

街もしばらくは混乱があるだろうから屋敷の武官を街の見回りに出すことも必要だろう。

ヘルゲン領の抜本的改革の為、賽はすでに投げられたのだ。勢い付けすぎて空中分解するか、叩きつけられた衝撃で砕け散るか、方策が裏目に出て自滅するか、あるいは奇跡的に持ち直すのか。まあ出来る限りの事はやってみようじゃないか。

明けて翌日。俺は軽く朝食を済ませるとベルタ砦に赴いた。

ロイドは置いてきた、この戦いについて来れそうもなかったからな……今頃区画変更後の事情把握や仔細調査のために駆けずり回っているだろう。

ベルタ砦は隣接する魔領から魔物の流入を防ぐたに建てられた、アルトの街にとつての盾のようなものだ。砦の構造段階で魔獣や魔物を引き寄せる効果が組み込まれており、近くの外敵の注目を一身に集めて後ろに敵を通さない、イケメンのメイン盾と言えよう。かつこいいタル。

もしここの守りが抜かれてしまえばそのままヘルゲン領全体が大きな危険に晒される、極めて重要な防衛拠点なのである。そしてその砦は今まさに崩壊の危機を迎えている。堅牢に作られた砦自体は問題なかった、昨夜魔法でさらなる強化も行ったので壁が崩される心配はない。

問題はそれを支える中身、砦の兵士達がボロボロなのだ。無能。パツパが砦に回すはずの防衛費用をけちって削減しまくったのが原因である。

剣や槍は消耗品だ、手入れや補修をしつかりしていてもそのうち壊れてしまう。戦いの中で破損しようものなら当然大事故に繋がる。予算がないから人を雇う事もできず、ばかりか給金を支払うのも困難で人は離れていくばかり。

惨状を訴えてようやく補充人員が来たと思えば戦いの経験もない農民がろくな装備もないまま送られてくるばかりで戦力の増加どころか足を引つ張られるようなものだ。

これまで砦が落ちずにいられたのは、地元出身の冒険者や兵士の頑張り、崇高な意思を持った一握りの騎士達の献身、そしてそれらを束ねる存在、グライド騎士長のカリスマがあつたからだろう。

グライド騎士長自身も相当の実力者であるが、特筆すべきはその指揮能力の高さだ。実力も志もばらばらな、ともすれば烏合の衆にしかならないような団体を一つにまとめ上げる手腕はそうそうマネできるものではない。

もしも国の中央に赴けば相応の立場とともに迎え入れられるような傑物だろう。

そんな彼も、肉体的にも精神的にも重なり続ける疲労のためか今では憔悴しきつた顔をしている。けして昨夜の騒ぎが原因ではない。ないつたらない。

ともあれここで彼に倒れて貰っては困る。領地を立て直すにはこのベルト砦から出

る魔石が絶対に必要なのだ。現状目立った特産品のないヘルゲン領で外貨を稼ぐための唯一の希望なのだから。

基本的に冒険者が手に入れた魔石はギルドへ売却されその一部が税として領に入ってくる。しかし砦の騎士や兵士が間引きしたり防衛戦で入手した魔石はそのまま領主館に流され、それを中央の商人等に売却。

その売却益を使つて砦の維持費を含む領内の様々な経費にしていた訳だが、パツパはその殆どを自分のほっけに入れてしまったのだ。本当に何を考えているのかまるで分らない。よくこれで壮絶な兄弟喧嘩を生き延びる事が出来たね君。

資料を見るとここ最近ベルト砦から送られて来る魔石は明らかに目減りしており、はじめは魔物を間引く余裕もないのかと思つていたが改めて現場を見ると違和感を抱く。

たしかに皆ポロポロだがその目はまだ死んでいない、正直戦場の野戦病院のごとく負傷者が溢れていてもおかしくないはずだが負傷はしても手当はきちんととされており、使つている武器もくたびれてはいるがまだしばらく保ちそうに見える。

報告されていた資料を見た限りではとうに破綻して置いて然るべき状態のはずだが、薬品や武具の予備がまだあつたのか、あるいは間引きして得た魔石をギルドに持つて行つて換金していた可能性もある。もし考えが当たつていれば立派な横領な訳だが……ここは見て見ぬふりをしよう。

やむを得ぬ事情ならば致し方なし！ダブルスタンダードの自覚はあるが、今ここで前線が崩壊されれば諸共終わりだ。領主館の奴らのように私腹を肥やしていた訳でもないのだし、事が終わってから再調査と必要な釘を刺しておけばいいだろう。

やあやあグライド殿元気かな？元気に見えるかつて？もちろん見えるとも。どうにかして生きあがいてベルトの街を守りぬいてみせるという気概に溢れているように見えるよ。さて、基本的には君に任せている砦だが、今日は少し口出しさせてもらおうと思つてね。どうもこの前人員を補充したにも関わらず調練が進んでいないようじゃないか。そんな余裕があるはずないって？いやいや、それをどうにかするのがグライド殿の仕事でしょう、真面目にやってもらわねば困るよ。

とはいえ砦にあまり余裕がないのも理解している。そこで3か月の調練で彼らを一端の兵士に鍛えてほしい、グライド殿が直々に指導してね。何、魔物の事は気にしなくて良い。こちらでどうにかしよう。新兵の武器や食料等も今手配させている。グライド殿は調練に専念してほしい。では成果を期待しているよ。

ちよつと嫌味な感じの貴族っぽさは出せていただろうか。俺の実力は昨夜のパフォーマンスで理解できたと思うが、何せ見た目が10歳のガキである。頼りがいも威

敵もあつたものではない。

もう少し時間に余裕があればグライド騎士長とは信頼関係を築く事も出来ると思うのだが、今は俺にも相手にもそんな余裕はない。せめて生意気なガキ領主になめられてたまるかと反骨精神を發揮してもらえれば儲けものだろう。

余計に反発されて大惨事になる可能性もあるが、前領主よりはマシな働きをすればそうそう爆発もしないはず。そういう意味で乗り越えるべきハードルがめっちゃ低いのは助かるが。

ともあれお仕事開始だ。まずは砦の兵士と騎士の中から体力自慢を数人借りる。あ、装備は最低限でいいよ、武器も剥ぎ取りナイフがあれば十分だから。あと大きい籠も。素材採取に行くのかつて？まあそんな感じ。魔石取り放題ツアーにご案内だ！

そんな訳で森の近場に荷馬車を置いてずんずん進んでいく。ほぼ丸腰のためかお付きの兵士たちはビビってる。まあ敵対勢力の領地にそんな状態で連れて来られれば怖いわな。

だが今日に関しては問題なし、大船に乗った気持ちでいてほしい。まずはお付きの兵士たちに強化魔法を施す。これで今日一日は普段の数倍の身体能力を得られる、魔力持ちにはそれ以上に効果を發揮するだろう。明日は反動で筋肉痛に悩まされると思うが

僕しーらない。

力の沸く高揚感のためかざわつく兵士達に改めて手順を説明する。俺が魔物や魔獣、大型の肉食獣等の危険生物をぶっ殺す。みんなはそれを解体し回収する。以上。至極シンプルな作戦だ。そうして近場の脅威を取り除き、砦付近の安全を確保するのだ。

後は微弱な結界を張れば冒険者が飢えない程度に砦が獲物を誘うだろう。仮に強力な魔物が結界に近づけばわかるので、それは個別に対応すれば良い。

単純に安全を確保するだけならば近隣の魔物を皆殺しにして、魔領の奥地にあるだろう魔力の吹き出る穴、龍穴を散らしてしまうのが早いのだが、それでは将来的に魔石が手に入らなくなってしまう。

継続的な収入のためにも魔物にはそれなりに繁栄してもらわないといけない。後余裕ができたなら美味しそうな魔物を調理してみたいし。

余談だが魔物を食べるのは余り一般的ではないらしい。食べると魂が汚れると宗教的に広く信じられており、忌避される傾向にある。しかし一部の部位は貴重な薬の材料になったり、そういった話を気にしない一部の冒険者は食べているようだ。

さて、広域探索魔法を発動しまずは周囲の反応を探る。脅威度の高い順にチェックし優先順位をつける。範囲魔法を使うと森ごと吹き飛ばしてしまうし、操気弾で吹き飛ばすにしても貴重な部位も一緒に吹き飛ばしてしまいそうだ。

遠距離攻撃は苦手で大雑把である。仕方ない、ここは近づいて首を落としていくのが確実だろう。それじゃ魔物殲滅RTAはあじまあるよ〜！のりこめ〜、

はい、かんそうしたかんそう。タイムは8時間10分！んー、いまいち！途中で兵士さん達がへばってしまっただけで何度も休憩を挟んだ事が大きなタイムロスに繋がりましたね。↑悔い改めて↑

なんにせよ、ちよつと時間はかかったが当初の目標は達成。しばらくは魔物の群れが襲撃してくるような事はないだろう。そして今回の狩りで大量の魔石と魔物素材を手出来た。

魔石は売却してお金にするとその一部を税として国に取られるが、魔石をそのまま税として納める事も可能なのでそちらの方がお得なのだ。視察の時に今年は麦の出来が良くないような事を聞いたので、これで多少は補填できるだろう。

近々納税の時期なので屋敷に戻ったら一度ウォルダーやロイドと確認を行わなくては。

若に戻るとグライドが驚愕の表情を貼り付け出迎えてくれた。まあ荷馬車いっぱいに積まれた魔物素材に、籠からあふれんばかりの魔石の山を見れば無理もないか。

とりあえずこっちの魔物素材の扱いは任せる、自分たちで加工するなり売却するなり好きにしている。こっちの魔石は納税用に貰っていくぞ。後は街の冒険者に森の状況

を知らせてやってくれ。詳しくは付いてきた兵士が説明してくれるだろう。

定期的に様子は見に来るがしつかりと訓練を行うように。では任せた。

屋敷に戻るとすぐにウォルダーとロイドを集め、ベルタ砦での顛末を伝える。と言っても近隣の魔物ころころしておいたから暫くは大丈夫だろうというざっくりな内容だが。

まあここは時間稼ぎさえ出来れば良いのだ、3か月後にうまく新兵が使い物になれば防衛力も安定し、魔石収入も向上していくはず。

元々ベルタ砦を任されていたグライドの一族は優秀でそのノウハウもある、どっかの誰かがアホな事しなければ問題なかった処か、少し投資してやればもっと儲けも出せていただろうに。

その後はそのまま二人を引き連れ倉庫へ向かう。砦で回収してきた魔石を保管するのと、元々保管されている備蓄を確認するためだ。長期保存のきく小麦や大豆は納税に使う他に倉庫へと保存しておき、寒冷期に食糧不足になった時や不作の年に解放し領民に施すのだ。

今年是不作なのが分かっているので収穫分と魔石はほぼ納税に回し、備蓄を解放して寒冷期を越す事になるだろう。早めに在庫量を確認して分配計画を作るように指示し

更にロイドによると、避暑にお邪魔するにしても手土産は必要だろうがうちには特産品ない、道中で買うには少しばかり手持ちの金に余裕がない、これはどうしたものかと悩んでる姿を見ていたそうだ。そうしてまあ倉庫の中の備蓄をすべて売つばらつたという事なのだろう。

貴族の行動としてそれはそう間違つた行動ではない。格を示すために護衛や使用人など大人数で動く事になるし、相手に持つていく手土産がしよばかつたら舐められる。貴族は何をするにしても金がかかるのだ。

そうして行く先々で金を使う事で平民が収入を得て経済が回つていく。備蓄に関しても普段は本当にただの備蓄で、納税分はその年の収穫から出せばいいのだから問題にならないはずなのだ、例年であれば。たまたま今年が凶作になつて首が回らないだけで。

それだつて納税は麦を中心とした穀物と現金、さらに一定額までは魔石で納める事も許可されている。故に金があればなんとかなつたのだ、それもパツパ達と一緒に消えて無くなりましたけどね！出かける時に館の現金もほとんど持つて出かけて行つた訳だが、それらは当然戻つてきていない。

魔物が持つていくような事は稀だが、タダでさえ目立つ貴族の一団が壊滅したのだ。警邏隊が到着する頃には目敏い賊共が粗方奪いつくしていった後だつたらう。

こうなれば家財を売るかとも考えるが、2代目たるジツジが無駄に集めたコレクションのうち価値のあるものはすでに手放した後のようだ。今あるのは見栄えはするが価値が低い物ばかり。

本を売るかとも思ったが、マジックアイテムで製販技術がそれなりに進んでいるため価値のある本は極一部。それも所謂コレクターと言われる者達の間での事で、残念ながらそういった伝手は無い。仮に商人の所に持ち込んだ所で買ったたかれるのが落ちだろう。

ならば借金するしかないかと思うが、果たして今の惨状をみて少額ならまだしも大量の金を出してくれる商人がいるだろうかいやいやない（反語）

そもそもヘルゲン領に貴族相手に金を貸せるような大店が有るかは怪しいところだ。領土が広くともここは歴史の浅い辺境、わかりやすい特産品でもあれば別だがそうそう美味しい話は無い。

そういった場所にやってくるのは一発を夢見てやってくるベンチャー商人がほとんどだ。すでに収入基盤の整っている大手はその地の開拓が十分軌道に乗ったと判断してから動く。当然先に入っていた者が有利なのは間違いないが、彼らはそんなリスクを犯す必要がないのだ。

エディルナ家付の御用商人もいるが、やはりその規模は決して大きな物とは言えな

い。複数の商人から無理やり絞り取る事も可能ではあるが、そうすれば彼らはこの地を捨ててとっとと逃げ去っていくだろう。

そうして他の商人達にその話が伝わり、いよいよまともな商人は寄り付かなくなるのは想像に難くない。失った信用を取り戻すには多くの時間を必要とするだろう。

ダメだ、中々良い案が浮かばない。

……………今日の仕事終わり！閉廷！以上！皆解散！お疲れ様！俺は風呂入って寝るから！

この後めちやくちやふて寝した。

性欲を持って余す

さて、朝である。一晚寝ながら考えたが正攻法で問題を解決するのはやはり難しいだろうと結論付ける。あつた事もない国王様に泣きながら土下座すれば減税なり分割なりにして貰えるかもしれないが、それで他の貴族になめられていらぬちよつかいを受けでも面倒だ。

この件についてはあまり力技で解決するのは気が進まないのだが、どうしたものか。それにしてもまずは実際の収穫量を把握せねば始まらない。たしか暫く前に農作管理官であるピエールが回収しに村を回っていたはずだ。村は4つとはいえ規模も大きくはなく、距離もそれほど離れていない。

順調に進んでいればそろそろ終わる頃だろうか。不作についても視察の時に軽く聞いただけで、その原因等は調査中だった。担当者と一緒に調べればわかる事もあるかもしれないし、戻るのを待つよりも現場に飛んだ方が速いだろう。

聞きなれない農作管理官という役職だが、ウォルターによると初代が設立したらしい。当時まだベルト砦ができたばかりの頃、領主といえど後方でふんぞり返っている事も出来ず前線で戦い詰めた初代。

当然新しい開拓村の様子なんて気にしている余裕はなく、門外漢故口出しできる知識もない。たいていの貴族は農作業なんて平民にやらせるだけで税さえ納めさせられれば気にも留めないが、初代は何か力になれないかと動いた。

まあ入植が進まなくては税収もままならないという切実さも当然あったのだろうが。そこで出来たのが農作管理官という訳だが、突然任命された方はとんだ迷惑である。

なにせ前例が無かったし仕事の内容もふわふわで担当者は途方に暮れたに違いない。しかし彼は諦めなかった。初代当主の、領地をより良い物にしたいという気持ちを抑えたかったのだ。

初め彼は農民に交じって土をいじり、麦をまき、育て、収穫した。そうして得た知識を新たな開拓村で広め、時に新しい発見をしては村同士で共有し安定させていった。

基本的に村同士の連携など、精々お互いの村長が行き来して情報交換する程度だ。その上村の外は危険も多く、行き来する頻度が少ないのは当然だろう。そこを管理官が間に入り、村同士のパイプ役を果たした。

武官を護衛役として連れる彼は村人に比べれば格段に危険が少ない。彼は定期的に村々を行き来し、情報を共有し、時に競争心を煽りながらその発展に努めた。

素晴らしい働きをした農作管理官だが、その割に役職としての人気は低かった。主な仕事は村同士の橋渡しし、重要な仕事ではあったが端から見ると農民の使い走りにされているようにしか見えなかったのだ。

領主館で働く彼らの多くは魔力持ちであり、実力相応にプライドも高く、彼以外にやりたがる者はいなかった。

その後初代当主が病没。二代目が台頭すると、ようやく安定してきていた領内はまた荒れ始めた。そして管理官であった彼も初代が亡くなって少し後に退職。一応形ばかりの引継ぎが行われ、農作管理官という役職は残ったものの、その役割を果たす者はいなくなつた。

そして件のピエールだが、なんと十数年前に自ら立候補して農作管理官の役職に就いたそう。そのモチベーションは高く、就任直後から精力的に働き、村人からの受けもよかつた。

その成果もすぐに出始め収穫量は少しずつ上がっていった。しかしここ数年だんだんと収穫量に陰りが見え始め、今年ついにがっくりと落ち込んだ。

ロイド曰く、見るからに焦燥しており本人もだいぶ気にしているようだったと言う。悪事に手を染める事もなく、責任感もある善人のようだ。さっさと合流して話を聞くとしよう。

村を巡回する順番は決まっていたため見つけるのは簡単だった。ちょうど最後の村での回収を終えたようで、出立の準備をしていたようだ。そのすぐそばに降り立ち一団を眺めるが、何も乗せていない荷馬車が目立つ。

荷を載せているのは全体の半分程か、どう計算しても納税分には足りないだろう。それにパツパが課した重税で村の取り分は収穫量の1割。ここにある分で9割というのなら、到底村に残された分で次の収穫まで食つなぐ事はできないだろう。

少しするとこちらに気付いたらしいピエールがすごい速さで走り寄ってくるとそのまま見事なジャンピング土下座をかましてきた。余りに見事なそのフォームに驚いていると、そのまま静かに謝罪と嘆願を述べ始めた。

なんでも農民たちは彼の指示に従い仕事をしただけであって、今回の凶作は農民たちの責任ではない。まともな対策を実施する事もできなかった自分の無能が招いた結果であり、責は自分にある。怒りはもつともだが農民達に怒りをぶつけず、どうか自分一人の首で納めてほしいとの事だ。

ちらちらとこちらを窺う農民達だが、ピエールに対する心配そうな気配が伺える。農

民達からすればピエールだつて重い税を課した領主側の人間であり、ともすれば恨まれていてもおかしくない立場であらうに。

それだけでそれを覆すだけの彼の尽力とその人柄の良さがわかるようだ。というか別に俺は怒つてないし誰かに責任を押し付けるような真似をする気もない。

そもそも気になるのはなぜ凶作になったのかだ。一連の様子を見るにピエールは真面目に仕事に取り組み、村人達は重要な働き手である男達を皆に取られながらも懸命に働いていた。

今年は何年よりも気温が高くなつているとはいえそこまで大きな影響が出る程とは思えないし、水源も潤沢にある。天災や蝗害があつた訳でもない。ピエールを立たせると色々と質疑を重ねていった。

立ち話も何だからと近くの村長宅を借りてピエールに話を聞いた。彼の今まで行つてきた施策を聞いてわかつたが、今回の凶作の原因は連作障害が顕在化したのだろうという事だ。

彼が農作管理官になつてから重要視したのは作業の効率化だつた。4つの村で作る作物を制限し、特定の種類のみを作るようにしたのだ。税として納めるのは麦がメインとなる。

2つの村に麦を中心に作らせ、残りに大豆や他の野菜を作らせた。そうして4つの村を一つのグループとして扱い、ピエールが収穫された作物を各村に割り振る事でバランスを取った。

問題は大小起きたものの、この試みは一応成功した。一つの事だけに集中する事でよりのその作業に熟練し、全体の収穫量は上がっていった。そもそも一年中麦が育つ物なのかと疑問に思ったが、育つタイミングの異なる別種の麦がいくつかあるらしい。

だがまあ当然ずつと作物を作り続けていけば土地は痩せていく。人手を取られて畑を広げる事も難しく、同じ作物を作り続けていたのでそれが育つために必要な栄養ばかり土からなくなっていく。

ここ数年でその影響が広がっていったところに、今年の気温上昇がとどめとなってしまったようだ。

軽く連作障害についての話をするとピエールは酷くショックを受けたようだ。良くれと思つてやったことが結果的に首を絞める事になってしまったのだから仕方ない。

しかし彼が行った内容が一概に悪かったわけではないのだ。一つの事柄に集中して專業すれば、その作業への慣れ、ノウハウの蓄積など様々な利点がある。実際にそれで途中までうまくいったのだ。

特に農作物を育てるには時間がかかり、何が成功して何が失敗したのかを知るのは難

しい。そうそうトライ&エラーなど出来ず、それこそ何十年と村で生きた者の経験則くらしいしか頼れるものがない。今回の失敗を活かし、次に繋いでいくしかない。

しかし次に繋げるためには今をどうにか乗り切らなくてはいけない。仮に村にある分も全て徴収しても納税分には足りそうになし、よしんば足りたとしても村人は全滅しそうだ。

そしてピエールも責任感で自刃しそうな勢いである。ここまできては仕方ない、気は進まないがあれをやるしかないだろう。

項垂れるピエールと村長を促し、次の開墾予定地に案内してもらう。予定地とはいえしばらく手も加えられておらず、石などもまだそのままの荒れ地のようなものではあるが。

麦を載せた荷馬車を連れてくるよう指示し、大地の状態を確かめる。土壌の状態は問題なし、むしろかなり恵まれた状態のようだ。無理な連作でも数年は豊作を維持していただけの事はある。

そのまま一定の範囲まで魔力を浸透させ、土魔法で一気に土をひっくり返して耕す。雑草も石も地中の岩もまとめて粉々にしておく。

次に持つてこさせた麦をまいていく。と言つても範囲が広すぎるので風を使って散らしていくのだが。本当は適度な間隔をあけてまくべきなのだが、今は人力でどうにか

する余裕はない。

隣ではせっかく収穫した麦をぶちまけられたのを見て村長はじめ村人が固まっていた。お前らいいかあ、見てろよ見てろよく。

まいた麦に土をかぶせ、麦へと促成魔法をかける。すると瞬く間に大地から芽が出てきて、葉が茂り、花が咲き、実をつけて穂が膨らんでいく。

少し前まで荒地だった場所が、わずかな時間で一面の麦畑となった。たわわに実つた穂は頭を垂れ、一目でその中身がぎつしりと詰まっている事を示している。

村人達は先ほどとは違う意味で固まっているし、村長やピエール等は神の奇跡だと眩きながら膝をつき、涙を流しながら祈りを捧げている。いやいや、神じゃないから、張本人ここに居るから。何もしてくれないおたくらの神様なんか祈らなくてもいいぞ。

さて、十分育つた所で魔法を解除。そして大地を調べてみるが、やはり生き生きとした作物と対照的にひび割れその養分の殆どを失っていた。

これがあまりこの方法を取りたくなかった理由である。促成魔法で無理やり成長を促された作物は、その魔力で強化された生命力に任せて大地からあらゆる養分を吸い取って成長する。

そのためその味や品質は良くなるが、短時間で無理やり養分を奪われた土地はほぼ死んだも同然になる。少なくとも数年は休ませないとまともに植物が育つことはないだ

ろう。

前世でもガキの頃、とある理由でこの魔法を使い土地をダメにしたことがある。その当時姉のように慕っていたウカミタ姉さまに懇々と諭され、二度とこのようなことはすまいと心に誓ったのだ。

普段から優しく甘やかしてくるばかりだったウカミタ姉さまが、怒るでもなくむしろ悲しそうに切々と語る様は、幼心に自分がどれだけいけない事をしてしまったのかと感じさせたものだった。館に帰ったら神棚を作ってお揚げを奉納して許しを請おう。

幼少期のトラウマを思い出して凹んだが、すぐに気持ちを切り替える。風魔法で麦を一気に刈り取ると、村人達に収穫を指示する。

とりあえずこれだけの量があれば荷馬車にあつた収穫分と合わせてどうにかなるはずだ。まずは急ぎ脱穀して状態を整えなければならない。魔法でやると全部吹き飛ばしてしまいそうなのでそこは村人に任せてしまおう。

といつても量が量だ、ここだけでは難しいだろう。空いたままの荷馬車に積んで他の村にも手伝わせよう。ついでに脱穀用の道具として千歯扱きもどきも作っておくか。知識が曖昧なんでそれっぽい物でしかないが、原案があればだれか改良するはずだ。

という訳でピエール、後の事は任せるぞ。脱穀の終わつた麦は全て領主館に運ばせるように。納税分を抜いて余つたものを村に再分配するから手伝わんだぞ、村人の数とか

把握出来てないからな。ひと段落したら今後の計画も立てたいから各村の資料をまとめておいてくれ。

何？自分を首にしないのかだと。ただでさえ人手が足りないのにそんな事するかつ、むしろ死ぬほど働いて貰わないと困る。うお、泣くな、継るな、崇めるな！ええい、とつとと働け！

「そういえばピエールさんからの嘆願書が届いていたと思いますが、あちらはどうなされていますか？」

あれな。農作地を広げるために村の拡張したいって書いてあったが、そのための人員がまだ足りないんだよな

「はい、領内の人口は増えてきておりますが、まだまだ不十分です。大幅な減税をしてからは入植希望者も増えてはいますが、その数も多いとは言えませんかね」

だよな。新しい農法が上手くいったから早く広げたいという気持ちはわかるんだが、今はまだ無理だ。もうちよい待てと伝えておいてくれ

「かしこまりました」

どうかその年の税を国から来た徴税官に納めた後。領内に課せられた税の一覽を作らせ必要な分を除き後は無くすことにした。そして国に納税するための分と部下に払う給金を賄える程度を残し、後は政策に使い領内に還元していく。

しかしその程度の対処でどうにか出来る状態ではない。ヘルゲン領のあちこちに開いた傷口をどうにか塞ぐため、とにかく大量の金が必要だった。

政務の時間を縫って魔領で魔物狩りをしたり、他領のダンジョンに潜りお宝を探したりとにかく金策に奔走したりもした。そうして得たお金で職人を雇い、様々な資材を輸入し、人を集め、そしてまた金策に励む。

だが金ばかりに気を取られていては意味がない。これはあくまで対処療法であり、俺がいなくなればすぐに破綻する。なので文官に交じって政策の立案、組み立て、実施を行ったり、領民からの嘆願に対しての対応策と判断基準を教える。

時に武官に交じって訓練を行い、対人、対魔物、集団戦の方法を叩きこみ、定期的に砦の防衛戦に参加させて実践を積ませた。場合によっては新人の商人を引き連れ他領に赴き販路を広げ、領内の活性化の一助とする。

とにかく人に教え、育て、それを別の誰かに伝えさせ、人材育成に注力した。ここに住む者たち自身の手で領を維持できなければ意味がないと考えたからだ。例えば村を

廃統合し、一度規模を縮小すればもう少し楽だったのかもしれないが、この時はそんなこと考えつきもしなかった。

そんな事をしていれば当然貴族の社交なんて気にしている余裕はない。パツパの書齋で見かけた文書のやり取りを見るに、そこまで懇意にしていた所が有るわけでもないようで、そこにあまり意義を見つけられなかったのでバツサリ切り捨てた。

他領の情報はウォルダーの謎の情報網で知ることが出来たためというのも大きい。おかげで今では誘いの手紙すら届かなくなつて久しい。べ、別にさみしくなんて思つてないんだからね！

けどまあこまごました問題は抱えつつ、それもおおよそは解決の目処がついてきた。しかしな、最近になって1つ大問題が浮上してきたんだ

「大問題、ですか。クリスマス様がそう仰られるのであれば、相当なのでしょうね。ですが心配いりませんよ、我々もいつまでもクリスマス様に頼りきりになっているつもりはありません。どうぞ、仰つてください」

俺の真剣な様子を感じ取ったのか、ロイドはそう言つて居住まいを正した。まったく、頼もしい限りだ。

ああ、ありがとう。それでその問題なんだがな……性欲を持って余す

「……………」

アツウイ！お前バツカ、無言でお茶浴びせる奴があるか！俺じゃなかったら火傷してたぞ

「クリス様だからに決まっているでしょう。はあ、真剣な話かと思えば急に何を言い出すんですか……」

僕領主なんだけど？きみの上司なんだけど？

「はい、良く存じております。私の自慢の主です」

もう許せるぞオイ！

めちやめちや呆れられているが俺としては大問題なのだ。中身の年齢は別として、体はぴっぴちの15歳。精通はとうに済ませ、これまでは忙しきから抑えていたもの、最近は暇も出来てきたのでふとした拍子になんだかムラムラしてくるのだ。

性欲の制御も出来るとはいえ、無理に押さえつけていればその反動も大きい。

「そもそも何故我慢なさっているんです？」

何故つて……何故だろうな。言われてみれば特に我慢する必要も無かったわ

「はあ……なら歓楽街の娼館にでも行つてくればよろしいかと。そもそも建てられたのご自分でしょように」

いや、あれはあくまで労働者のために誘致したものだからな。別に自分で使うつもりはなかった。それにせつかくの初エッチだしお店のお姉さんに優しく奪ってもらうのもいいけど、どうせなら自分の好みの子を見つけていたしたいなつて

「めんどくさい方ですねぇ」

うるせえよ

そういえばなんとなく我慢していたが、言われてみればその必要もなかった。前世と違つて別に誰かに許可を取る必要もなかったんだつた。ついでに言えば今は貴族の領主様だ、俺が誘えば嫌とは言えまい。

街なり村なりで可愛い子を見つけて無理やり致す悪徳領主プレイも今なら出来るのだ。みなぎつてきた。

まあやらないけどさ。俺は女の子を鳴かせるのは好きだが、泣かせる趣味はないのだ。いやしかし最初は嫌々泣いてる子を無理やり快樂堕ちさせるのもそれはそれでそるな……

「クリス様、顔が変態になってますよ。ただでさえ怖い顔なんですから、そんな表情してたら声かける前に逃げられますよ」

怖い顔って言うんじゃないよ。精悍と言え、精悍と

「まあ見ようによつては精悍と言えなくもないですけど、体格の厳つさも相まって圧迫感がすごいですからね」

それな。この前子供にガチ泣きされて悲しかったわ。まじびえん

そう、10歳の頃は年相応だったのだが、この5年ですくすく成長し今では15歳にして身長180を超え今なお伸びている。体も鍛えているためがっしりと筋肉が付き大人顔負けどころの話ではない。

まあ15歳なので大人ではあるのだが、パッパの遺伝で顔の堀が深いためかすでおっさんの風格を漂わせている。

これでまだ線が細ければ母親譲りの黒髪でオリエンタルな雰囲気と言えなくもなかったかもしれないが、現状どう見てもヤクザかそれに類する用心棒。お陰で取引の際に相手になめられないという利点はあるものの、日常生活では一部の腹心を除いてビビられまくっているのが現状だ。

と言う訳で俺は娼館のお姉さんにビビられながら接待みたいなおセックスしたいわけじゃないの。可愛い女の子とラブラブいちやらぶつくすしたいの

「らぶらぶ……まあ理由はどうあれそろそろエディルナ家の後継者問題のためにもクリス様には結婚をして頂こうと思つていた所ですからね。現状家の繋がりは無いに等しいので難しいですが、どうにか伝手が無いかなタタリアにも聞いてみましょう」

あー、後継者か。そういうそんな事も考えないといけなかつたな。ていうかナタリアって誰？ずいぶん親しうさうさだけど

「ええ、ナタリアは私の婚約者ですよ。近々結婚する予定ですので、クリス様には是非式にご出席して頂きたく」

まあってまあってまあって、いや式にはもちろん出させてもらうけどさ。婚約者って言った君？なにそれ初耳なんだけど

「そうでしたか？まあ特に重要な話という訳でもありませんでしたのでもしかしたら伝えていなかったかもしれませんがね。私ももう20歳を過ぎますし、そろそろ身を固めてもよい頃かと思ひまして」

ナタリア嬢は商家の娘さんで、ある取引の際にたまたま知り合いその才覚に一目ぼれ

したそうだ。そうしてロイドの方からアプローチし始め、相手の親もこれを快諾。しばらく婚約者として愛を育んでいたらしい。

言われてみればある時期から仕事を早く済ませて早くに上がるような場面が多々あった。ロイドも働き詰めで疲れているんだろうと気にもしていなかったというか、しつかりと休み入れているようで安心していたのだが、まさか女の所に通っていたとは……お前の事が好きだったんだよ！

何にせよめでたい、めでたいがなんだか裏切られたようなこの感じいったいどうしてくれようか。

そのあと後継者云々の話はうやむやとなり、その日の仕事を片付けるとその場はお開きとなった。

そうだ、奴隸商行こう

仕事を終え領主館を出る。時刻はまだ夕暮れ前のはずだが、空は厚い雲に覆われておりほの暗い。どうにも夜には雨が降りそうだ。

アルトの街に降りぶらぶらと練り歩く。部下を連れて視察する事もあるが、やはりありのままの様子を見るにはこうして一人で気配を消しながら歩いたほうが良くわかる。街の商業区ではどうか今日の分を売り切ろうと声を張り上げる商人と、それを相手に値切り交渉する住民達とで賑っている。その表情は明るく、活力を感じさせてくれる。汚物に濡れ明日をも知れぬ不安に俯いていた事などすでに遠い過去のようだ。

こうして街の様子を見てみると、自分の頑張りも無駄ではなかったのだなと感じられて誇らしい気持ちになる。という事は特になかった。

そもそも領主になる事を決めたのも、ヘルゲン領を立て直そうとしていたのも、悠々自適な日々を送るため、自分のために頑張った事だ。結果的に人々の暮らしが良くなっ

ただけであり、そこに俺の善意は存在していない。単純に俺の目的に彼らの利益が重なっただけなのだ。

領内改革の為にあちこち飛び回っていた時もかなり横柄な態度をしていた自覚はあるし、何なら街を混乱の渦に叩き込んだ犯人ですらある。今こそ住民たちは俺の事を褒め称えているが、仮に改革に失敗していればその態度は逆転していただろう。なので称賛されれば素直に受け取りはするが、別段それをごとさら強調するような気もなかった。住民の皆さんには心置きなくお金を使ってもらっては是非俺をやしなうてほしいものである。そのための安心して暮らせる場所は、ロイド達がどうかしてくれる。そのために寝る間を惜しんで組織作りに尽力したのだ、後はそうそうに楽隠居させてほしい。

商業区、工業区と人波を縫って歩き、歓楽街へとたどり着く。こちらはもう少し遅い時間からが本番だが、早めに仕事を切り上げたらしい者達や、ベルトから遊びに来たと思われる冒険者達がちらほら見える。元々スラムのあつた場所を潰した空きスペースに作ったのがこの歓楽街だ。初めの頃は酒場が数件ある程度だったが少しばかり知恵を貸し、今ではパブやキャバクラ、ソープに始まり高級娼館も立ち並ぶ一台区画へと成長した。特に性病の温床になりやすい娼館に関しては領主権限で細かい規定を課し、教会にも協力を請う事で行っても高い安全性と品質を確保した。値段は相応に高

くなるものの手が出せないという程ではなく、生きるのに必死だった頃よりも余裕が出来た事もあってかどこも安定して売り上げを伸ばしているようだ。

特に一軒しかない高級娼館では来店する客にも相応の格を求め、相応しくないと判断されればいくら金を持っていても追い返させた。こんな辺境領でそんな事をしていれば普通なら立ちいかなくなるのだが、これは完全に俺の趣味だ。店の運営に意見する代わりにかかなりの額をポケットマネーから出している。ゆつくり酒を飲みたい時にうるさい客に煩わされたくないからという理由だったのだが、稼ぎのある商人達の間で利用されはじめるとじわじわと人気を伸ばしていき、今では一流商人の社交場兼情報交換の場のようにして利用されるようになってきているようだ。ちなみに俺は一階で酒を飲むだけで、二階より上を客として使った事はない。一回ちよつとその気になって女の子を見たら、目が合っただけで屠殺される直前の家畜みたいな顔になるんだもの。しまいにや泣くぞこら。

領外からの利用客も増えているらしく耳聡い商人があちこちから集まり、当然それに伴い物流も増える。領内の街や村を行き来する分には関税も取っていないので、アルトの街以外にも回って商売していく事も多い。是非ガンガン儲けて税金を落としていってほしい。

トラブルが起きやすい場所だけに注意しながら歩いていると、一軒の真新しい建物が

見えた。区画的にどこも建ったばかりではあるのだが。そこはどうかやら奴隷商店のようだ。少し前に出店許可を出した覚えがある。奴隷を扱う店自体はすでにいくつかあるが、この店が一番大きな門構えをしている。恐らく他領ですでに商売をしてここに支店を出したのだろう。ついでに視察しようと考え足を向けた。

奴隷の売買自体は王国法で認められた商売である。その内容も案外まともな物で初めて調べた際は少し驚いた。だがしかし、それが正しく守られているかといえそうではない。実態としてはグレーどころかブラックと言つて良いだろう。

奴隷と言つてもいくつか種類がある。労働奴隷や犯罪奴隷、障害奴隷等だ。犯罪奴隷は中程度の犯罪を犯した際に刑罰の一種として課せられたりする。障害奴隷は奴隷の中でも体に不自由な箇所があると分類され比較的安価になる。そして一番一般的なのが労働奴隷だが、これが問題だった。元々は困窮したものが自らを売り、一定期間労働した後、自分を売った金額を受け取るという、経済弱者に対する一種のセーフティネットの役割を期待されていたようだ。王国内で増えていた浮浪者をどうにかするための対策として実施されたらしい。

その試み自体は悪くなかったように思うが、契約内容は両者相談の上で合意を持つて行うとされているのだ。そんな状態に陥るもので難しい話がわかる者は少なく不平等

な条件で契約がなされる事が頻発。元々あつた貧しい村での人身売買はやましい事ではなく、国王の許可を得たものであるとしてその数を一気に増やした。また雇用者は奴隸を飢えさせてはならないという決まりを逆手に取り、ほとんど働かずに食べ物だけを要求するものがあったり、同じ奴隸でも仕事の出来る者と出来ない者は当然いて、出来ない者と契約してしまった者はその処遇に頭を悩ませた。そうなればもう後はぐちゃぐちゃだ、一応法では奴隸に対し理由なき暴力を振るつてはならないとされているが、逆に言えば理由さえあればその限りではないのだ。そしてその理由の正当性を問われる事などまずない。王国中にいる奴隸全てを管理する事など出来はしないのだから。それは契約により奴隸が契約者に対して反抗出来ない事も拍車をかけた。見方によっては王国という強者が奴隸という弱者を虐げることには許可を出しているとも言える。そんな状態で人間が持つ嗜虐心を押し留める事の出来る理性を持つものは少数だった。

あるいは、この時点で王国がお触れを出し、法の撤廃なり遵守の徹底なりをしていれどもう少しまともになったのかも知れない。しかしこの法自体が王国に溢れる浮浪者を少なくするためにどうにかしろという王の達しを遂行するためのものであり、実際に国内の浮浪者はその殆どが奴隸となり数を減らした。成果が出ている以上その実態など些事であり、国の上層部がそれ以上何かをする事は無かった。元より国の中枢で利権を握る彼らは強大な魔力持ちだ、力の無い平民の事など興味など無く、国王の思い付

きに付き合つてやった程度にしか考えていない。法の原案を作つた役人達は真面目に取り組んでいたのかもしれないが、それを施行する側にやる気がない以上どうしようもなかつた。こうして奴隷というのは虐げられるものであるという歴史が積み重なり、今では農民以下の最下層民であるという認識が出来上がっている。

そんな背景はあるものの、ここヘルゲン領では別だ。王国法を順守させ、奴隷であろうと最低限の環境を整える事を条件としている。契約の際も役所への届け出をさせており、見回りの兵にも奴隷の状態には注意させた。当然奴隷商からの反発はあつたし、買手からも抗議を受けたがここを曲げるつもりはなかつた。

なにせ労働効率が悪すぎるのだ、あんなの働かせた所で無意味どころか迷惑になる。満足に食事もとつておらずやせた奴隷を怒鳴り散らして殴りつけて、無理やり働かせたとしてそれでどれだけの仕事が出来るといふのだ。肉体的にも精神的にも追い詰められた状態で働いていればミスも多くクオリティも低くなる、その上事故でもおこせば周りを巻き込みかねない。もし往來で奴隷がいたぶられている姿でも見えれば景観を損ねるし周りの人間も良い気はしない。

領の改革を初めて人手が足らない時に安く手に入る奴隷を買つた訳だが、どいつもこいつも酷いものだった。働かせるために買ったはずなのに資材を運ばせればすぐに息

切れするし、何をやるにも氣力がなくてとにかく暗い。一緒に働く方が氣が減入る。どんな理由で奴隷になったのかは知らないが、そんな状態で働かれても足手まといでしかなかった。そんな奴らをまともに働かせるため、人間にするための作業で更に時間を取られた時はマジ切れしそうになったものだ。

そんな事例を語ってやれば奴隷商も一応の理解を示してくれた。こちらの不定期な視察と指導を受け入れるなら税の一部優遇なども行っている所以他領と比べて赤字が出るという事もないはずだ。中にはそれでも従わない者もいたが、その時は仕方ない。何度言っても聞かない奴は店を更地にしてやっつて、財産没収の上領外退去処分だ。魔法により一瞬で更地にしてやるとインパクトがあり、他の者に対して見せしめにもなる。初めの頃に2、3軒潰してからは噂も広まったのか違反するものは出なくなった。

さて、この店はどうか。出店許可を取りにきた店主は人当たりの良い人物でそれなりに学のありそうな人物だった。たまたま手が空いていたから直接対応してやったのでよく覚えている。

門を潜り消していた氣配を戻す。すると扉の前に立っていたボーイが驚いた様子で駆け寄ってきた。立ち振る舞いを見るにそこそこ手練れのように、ボーイ兼用心棒と

いった所か。十分近付いてきた所で貴族身分を表すプレートを示し、視察に来た事を伝える。プレートが本物で有る事を確認すると、丁寧なもてなしで中へと通される。入口近くにある応接室に通されると、すぐに主人を呼んでくるのでここで待つようにと茶を出された。ボーイが気持ち速足で部屋を出て一分、店内を見回るべく俺は部屋を出た。抜き打ちで視察に来ているのだから店主にエスコートされながら見回るつもりがない。

さてどこから見回ろうかと再び入口のあるエントランスに出た時の事だった、奥の方からがなりたてるような声が聞こえてくる。位置的には店の裏口あたりからだろうか。妙な気配も一緒に感じるので少し見に行ってみようか。

当たり前のような顔で店内をうろついていると案内見とがめられる事もなく奥へとたどり着くと、裏庭に面しているらしき扉が乱暴に開けられたのはちようどだった。奴隷を引っ張るための縄を引く男が入ってくるがこちらを気にした様子はない。引かれている奴隷にいらだっているようできつきと歩けと強く縄を引いた。その力に耐えられなかったのだらう、引かれた奴隷は勢いよく床へと倒れこみ小さなうめき声を漏らした。

そこでようやく見えた奴隷はずいぶん小さい。子供の、骨格からして恐らく少女だ

ろうか。

体は薄汚れたぼろぼろの貫頭衣で覆われ見えないが、裾から出た手足は枯れ枝のように細いく、その上大小無数の傷跡が刻まれている。見ればその右足は歪に曲がっており、骨が折れた後に適切な手当でもされずに癒着してしまっただろう。これではまとも歩くこともままならないはずだ。ぼさぼさの頭髪から細長い耳が見えるのでエルフかホビットだろうか、片耳はちぎられたかのように不自然に短い。

酷い扱いを受ける事が多い奴隸だが、これはそうとう極めつけと言えるだろう。店がここまでの事をする事はない、従順になるように教育のために痛めつけるといった事はするだろうがそもそも商品だ。ここまでポロポロにしては買い手はつかないだろう。

気が付けば奴隸が少し顔を上げこちらを見ていた。目が合った、訳ではない。その紅い瞳は焦点を結んでおらずぼやけている。先ほど感じた妙な気配の元はこの奴隸だった。こいつも俺に同じような感覚を抱いているのかもしれない。奇妙な沈黙を保ち見詰めあったのは、数秒か数分か、気が付けば奴隸を引いていた男は居なくなっており店主である奴隸商が近くに來ていた。その表情には焦りと恐怖が浮かんでいるが、その行動は冷静なものだった。

申し開きをさせていただきたく、と語りだした店主の言葉を信じるならばこの奴隷はエルフとダークエルフの間に生まれた子供であり、本来なら生まれたいはずのハーフであるらしい。

エルフの忌子。曰くエルフでありながら魔力を持たぬもの。曰く、周囲に不幸を振りまくもの。曰く、死して大いなる災いを齎すもの。そう古くから伝えられている。実際にエルフの忌子が殺された際に街が一つ滅んだという記録もあるという。少女は元々エルフの里で暮らしていたらしいが、当然迫害され、やがて奴隷として売られる事になる。買い取った奴隷商は呪い等信じていなかったが、やがて小さな不幸が続けて起こると気味悪がり、安値で手放したそうだ。それから数年、忌子を買った神官が変死し処分される遺産の一つとしてこの奴隷が男の本店の方に持ち込まれた。本店でも買い取りは拒否したらしいが金は要らないからと無理やり押し付けられたそうだ。店主である男は支店出店の指揮のためアルトの街に来ており、その報告が来た時には奴隷も商品の一つとしてこちらに送られてしまった後。それが今こうしてたまたま俺が視察にきたタイミングで到着したらしい。まさしく、この男にとつて不幸な事に。

店主の言葉を聞き流しながら、倒れたままの奴隷を助け起こす。首元からちらりと見えた体には、傷跡だけでなく大きな火傷の後も伺えた。全身余すところなく傷だらけの

ようだが、首から上にかけてはほぼ見受けられない。しかしその分歪にちぎられた片耳が際立つようで、あえてそうしていたのかもしれない。風呂に入るのはもちろん、体を拭く事すら出来ていないのだろう、すえた匂いが鼻をつく。ダークエルフとの混血というのなら髪は銀色なのだろうが、今は埃と垢に汚れ艶を失いくすんでいる。汚いはずだ、本来なら忌避すべき相手だ。だが不思議とこの子に対してはそういった感情は浮かばず、気が付けばこの腕に抱きかかえていた。少女は特に驚いた風もなくぼうとこちらを見つめるばかり。

店主よ、そちらの言い分を聞き入れよう。もとより奴隸の扱いに関して指導しているのは領内のみ。領外から来たばかりだというのであれば致し方ない。しかしこの奴隸の状態を見るにここで療養させた所で改善する見込みは少ないと見える。よってこの奴隸は私が保護する物とする。これは代金だ

誤解が解けたことに安堵している男に金貨を一枚手渡す。本来このような少女のしかも障害奴隸であるなら大銀貨一枚がいいところだ、少々無理やり連れていったとて文句は言うまい。

何かを言いつのろうとする男を手で制し、そのまま裏口から外へ出る。従業員と思し

き数人がこちらを窺っているがそちらは無視だ。

少し飛ぶので喋らないように、と少女に注意をすれば、もとより黙りこくつたままだった少女は小さく頷いた。

さて、謎の衝動に任せて少女奴隷を買い取ってしまったが、ちゃんと世話することができるだろうか。帰ったらやはりテンプレ通りに風呂に入るべきか、食べ物を与えるべきかと考えながら俺は領主館へと飛び立った。

光と闇がそなわり最強に見える

アルトの街の上空を横切りながら少女の処遇について考える。このまま館に連れ帰ってはすぐにロイドに見つかって、今度は何を拾って来たんですか？ちゃんと元の場所に戻して来なさい。とでも言われるのがおちだ。おまえは俺のオカンか、いや実際に言われた覚えはないけど。

そうなると別邸に直接連れて行くのがベターだろう。活動の拠点は本館なのだが、寝起きは未だに別邸でしており実質一人暮らし状態だ。着替えや風呂を誰かに手伝われる等鳥肌が立つし、料理は別に苦にならない。掃除などは執務中にやってくれているよ。うだが、基本的に俺の意向に沿ってもらっている。少女の世話に関しても手伝ってほしい気持ちもあるが、まあどうしても手が回らなくなったらお願いするでしょう。

別邸へと帰るとそのままリビングへ向かう。この後どうするにせよ一度少女の状態を詳しく確認して置きたかった。これだけ酷い傷があつて中身は無事とは考えにくい。空を飛んでいた時も大した反応を示しておらず、すでに視覚がどの程度見えて居るのか

怪しい。

それにこれだけ激しい状況の変化にも関わらず、何の質問もしてこようとしない。耳は聞こえているようだが声が不自由だとすると聞き取りもできず面倒だ。ともあれ呼吸不全や発熱はないようなのですが、すぐに命に係わるような病はないと思うが、あまり樂觀視すべきではないだろう。

腕の中の少女をそつとソファアールへと横たえる。その感覚に少し驚いたのか、あつと吐息のような声が漏れるがなされるがままだ。改めて少女の全身を眺めるが、その汚れっぷりに先に手早く清めてしまおうと思いなおす。

少女に少し目を瞑っているように指示すると、手のひらに産んだ浄火を少女に落とす。薄桃色の炎は瞬く間に少女を覆いつくし、同じだけの速さで虚空に溶け去った。そうして炎の中から現れたのは、凄惨な傷跡を残す少女の裸体だった。どうやら身にとっていたポロもゴミ判定で燃えてしまったらしい。けしてワザではない。ないのだ。

そもそも自覚有るロリコンといえど、やせ細り見るに堪えない傷跡を全身に残す少女に興奮する訳が……やばいちよつとちんちんふつくらしてきた。裸の少女に首輪のみとか背徳感がありすぎて性欲持て余して溢れ出さんとしている状態では抗えるもので

はない。

— どうか気を静め近くのタオルケットで少女を包む。てるてる坊主状態で身動きできないかもしれないが許せ。

改めて少女に向き合い、その額に手を触れる。相手の体内に魔力を流し、その反応で状態を見るのだ。探索魔法の応用であり、人体構造の知識がある程度あれば肉体の不調やその原因を探る事ができる。他人の魔力が流れてくすぐったいのだろう、少女が身によじるが少しの間我慢してもらうしかない。

魔力を流し始めてすぐにわかったのだがこの少女、保有する潜在魔力量が貴族と比べてすら桁外れだ。いや、桁外れと言う言葉すら生ぬるい、埒外と言つてもいい。ともすれば小宇宙コスモモを開き、心威法の会得にすら届きうるかもしれない。俺が少女に感じていたナニカの正体はこれだったのだろう。そしてこれならば少女がこうして生きている事も納得できる。年端もいかぬような少女が、正しく拷問と言えるこの苛烈な責め苦を受ければとうにショック死していなければおかしい。この莫大な力の受け皿となるべくその肉体も通常種と比べて強靱に生まれたのだろう、それが果たして本人にとって幸運であったかは難しい所であるが。

潜在魔力とは意思持つもの全てが持つといわれている。だがそれは何処にあるのかはわかっていない。肉体の裏側にあるとも、心に潜むとも、魂に宿るとも、意思に芽生えるとも、それら全てにあるとも。魔力無しと呼ばれる者も、潜在魔力自体は保有しているのだ。ただそのくみ出し方がわからないだけで。翻つて魔力持ちというのは生まれながらに、あるいは何かをきっかけとしてその力を自分の身体へと顕在化させる事が出来ている。それは生まれにより、種族により、経験により、様々な要素が混じりあい決して平等なものではない。

そして仮に顕在化させる事が出来たとしても、潜在魔力の全てを扱えるという訳ではない。潜在魔力が多くとも殆ど顕在化させる事が出来なければ、潜在魔力が少なくとも十分に顕在化させる事が出来ている物と同じような魔力量に見える。そして潜在魔力というのは通常の方法で推しはかる事は出来ず、その才能を埋もれさせたまま朽ちる者がほとんどだ。真に自らの力を振るう事ができるのはほんの一握りしかない。

この少女も、莫大な潜在魔力を持ちながら全くと言って顕在化させる事が出来ていない。あるいは自ら無意識のうちに忌避しているのだろう。仮にこれだけの力を無自覚に使おうものなら、ほんの一端で当たり一面を吹き飛ばして余りある。強靱な肉体を持つとはいえ成長しきらぬうちに顕在化してしまえばそれだけで肉体が弾け飛びかねな

い。きっとそれを本能的に理解しているのだろう。

もしもかつていた忌子と呼ばれるハーフエルフが同じような存在であるならば、迷信のような伝承も頷ける。最初は自分で押さえつけていて魔法が使えず、肉体の成長につれそれが緩むも力を制御しきれず周りに被害をもたらし、殺されそうになる死の恐怖にさらされ力を暴走させて自爆、というのはいささか話ではある。しかし忌子として恐れられ忌避されているのはエルフとダークエルフのハーフのみであり、他種族のハーフは珍しいため奇異の目で見られるが殊更迫害を受けるわけではない。もしかすれば種族としてなにか秘密があるのかもしれないが……光と闇の力がそなわり最強に見える？

少女の力について考察しつつも検査は続けていく。予想通りと言うべきか、以上にと言うべきか、体の中身もずたぼろだった。臓器が軒並み弱まっているのは当然として、右足の骨折ばかりに目が行っていたが主要な骨と言う骨に折れたような跡が見られる。くつついてはいるが歪になつてしまっている所も多い。幸い頭の怪我がほとんどなかったせいか脳に異常はないようだが、神経系の動きがだいたい鈍いように感じられる。何かしらの毒でも使っていたのかもしれない。

そして少女の下腹部、おそらく子宮だと思うがその機能が完全に死んでいる。少女の

肉体のおかげで形は保っているが、そうでなければ腐り落ちていても不思議はない。加えて更にその下、少女のまたのあたりに違和感を感じる。

流す魔力が微弱なためか、流れを阻害されよくわからない。少し申し訳なさを感じつつも、これは診察のためだからと心の中で言い訳しつつ直接少女の股間へと手を伸ばす。傷つけることのないように優しく陰唇の奥、膣口の入口へと触れる。しかしそこに柔らかい肉の感触はなく、硬質でありながらザラリと質感が帰ってきた。細いが糸ではない、針金よりも細い、鋼糸の類か？触れた瞬間に一瞬はじかれるような反発を感じたので、念入りに聖別されたものようだ。

なんだ、これは？

「……………神父様が、万が一にも悪魔が子を孕まぬよう必要な事だと仰っていました」
俺が思わず漏らした呟きに、自分が質問されたと思ったのか少女が口を開いた。

その言葉を聞いた瞬間、自分の中に様々な感情が弾け意識が白熱するのを感じた。まだ子を産む準備もできていない少女の子宮を殺した上でそこまでするのかという怒り。周到にして絶対の意思を持った行いに対する賛同。自分が何をされたのかすら理解していないだろう少女への哀れみ。擦れているにも関わらず心を震わせるような響きを

放つ少女の声に対する喜び。そのどれもが自分の意思で、相反しながら矛盾しない感情の爆発だった。気付けばすでに指先に不快な感触を感じていない。どうやら無意識に塵も残さず消滅させていたらしい。股から手を引き少女を見つめる。

久しく感じていなかった、心からの情動を感じさせるこの少女。果たしてこの少女は自分の何なのだろうか。そうして初めて、あるいは改めてこの少女を強く欲しいと思う。

しかし、口から出たのは全く別の言葉だった。

お前、喋れたんだな

「はい、許可されていない時以外は喋るなど言われていました」

……そうか

なんといかもう、そうかとか言えなかった。先ほど診た少女の状態と相まって、壮絶な地獄を見てきたのだろうこの子に、俺はかける言葉を持たなかった。これももう（何言えばいいか）わかんねえな。

これからは、俺が君の主人となる。よって何をしても、喋っても構わない

「はい、わかりました。……よろしくお願いします、ご主人様」

相変わらず少女の表情には、悲壮感も諦めもなく、ただぼうとこちらを見つめるだけだ。しかし、そのご主人様という言葉の響きに若干の喜色が含まれていたように感じたのは、果たして俺の気のせいだろうか。その光を失った紅い瞳からは何も読み取ることはできなかった。

雨ノ音

ひとまず健康診断は終わりにする。診断結果としてはすでに手遅れ、救急車よりも葬式の手配をした方が速いレベルだ。常人ならば数回死んでもおかしくない。今こうして意識を持って会話出来ているのが不思議なほどで、これはひとえに少女の肉体の頑強さにもたらされている物だ。それを踏まえてもまあしばらく絶対安静にしていなければいけないのは間違いない。

少女の身体を直す方法は、ある。かつてダンジョンに潜った際に手に入れたエクストラポーションを使えば問題ないだろう。生きてさえ居れば瀕死の重傷からでも復活できるし、古くに無くした四肢欠損すら治ると言われている。解毒用の同ランクポーションもセットで持っているので内部の毒も回復できる。レアアイテムだからコレクションしようと思つて売らずににおいてよかった。

しかしこれをすぐに少女に使う訳にもいかない。ポーションの類はランクによつて効果量は違えど、内容は一緒だ。これらはあくまで本人の治癒力を高める物であり、深い傷を癒そうと思えばその分多くの体力を消耗する。四肢を生やすような細胞分裂を短時間で行おうというのだ、それに耐えうる体力がどれだけ必要なかは言わずもが

な。当然当人の体力だけで耐えうるものではなく、その殆どをポーシオンが保有する魔力が担ってはくれるのだが、それでも最低限の体力は必要になる。回復魔法もそれは同じで、自分を回復するならまだしも他人の回復をするには魔力同士の反発を抑える技術も重要になる。俺が力任せにやっても結果は同じだ、不慣れな分負担は余計増えるだろう。

よって致命傷を負ってすぐならなんとかなるが、衰弱しきった怪我人に使えばそのまま衰弱死するという事らしい。

そして件の少女である。まあ今すぐ使えば十中八九死ぬだろう。あるいは彼女の肉体ならばそれすら耐えられる可能性はあるが、現状そんな博打を打つほどの喫緊の事態ではない。容体が急変すれば考えるが、無駄に危険を冒す必要もない。

ならば、まずは体力付けるためにも飯を食うか

「体力……ですか」

そうだ。お前も自覚してるかもしれないが、かなり死にかけレベルだからな。暫くは飯食って寝て体を回復させる事を優先するぞ

「わかりました」

食べ物で何か苦手な物とかあるか？

「……………いえ、食べられるものであればなんでも大丈夫だと思えます」

ですよねえ！

知ってた。聞いてから思ったが、そんな好き嫌いできる環境にいたわけが無かったのだ。別段ことさらに優しくしてやるつもりはないが、あえて傷口をえぐるような真似をしたいわけでもない。少々いたたまれなくなつて俺は隣のキッチンへ逃げ込んだ。

さて何を作ろうか、などという事も無く。昨日多めに作り置きしていたシチューの鍋を温めなおせば十分だろう。最近入れ替えた最新式のキッチンコンロが付いており火をつけるのもワンタッチだ。なんなら魔力持ちなら魔石を使う必要すらない。

鍋を火にかけようとしたところで思い立ち、別に小さな鍋を用意する。しつかり煮込んであるとはいえ、このまま少女に食わせるわけにもいかないだろう。小鍋の上に目の細かいザルをかぶせ、そこにシチューを移していく。液体部分は鍋に落ち、ざるに残った野菜達をヘラで濾してペーストにしてしまう。肉は消化に悪いのでおあずけだ。

改めて温めなおして皿に盛る。ドロドロのシチューペースト、見た目は悪いが味はまあ普通のシチューだ。暫く病人食になるが文句は言うまい。

シチューの皿を持って戻りテーブルに並べと、ソファアから少女を抱き上げシチュー

の前の椅子に座らせた。テルテル装備を少し変更してやり腕を取り出してスプーンを渡そうとするが、果たしてこいつはスプーンが持てるだろうか。

とりあえず試しに握らせてみるが、案の定握力が足りずに落としてしまう。予想はしていたので床に落ちる前に拾いあげるが、一人で食べるのは困難のようだ。今までどうしていたのかと思つたが、手掴みか、あるいは直接犬食いか、あまり確認もとりにくいので聞くのは止めておこう。

少女の方を見れば表情はあまり変わっていないが、少しだけ申し訳なさそうにシユンとしているように見える。なんとなくだが。

よしんばスプーンが持てた所で、よく考えれば目もあまり見えていないのだったと思ひ出した。なんとも非効率で無駄な行いをしてしまった。

再度少女を抱き上げると、その椅子に腰かける。少女は膝の上に乗せ、腕と肩で固定してやる。これならそう負担もあるまい。抱きかかえられた事が分かつたのか、少女はおずおずとこちらに身を預け、少し力を抜いて寄りかかつてきた。良いポジションが決まったようで何よりである。

シチューを掬い、息を吹きかけさます。軽く唇に当て温度を見るが、まあ大丈夫だろう。

待たせたな。食べさせてやるから口開けておけ。大丈夫だと思いが熱かったらすぐに言えよ

「はい、ありがとうございます」主人様

そう言つて口を開けて待つさまは餌をねだるひな鳥のようだ。まあ正しく餌付けしてるのだしあながち間違いでもないが。

ゆつくりとその口内にスプーンを差し入れシチューを流していく。少女はちろりと舌が覗くその小さな口に含むと、少しずつ嚥下していった。

味はどうだ？まあ普通のシチューだから特別おいしい訳じゃないが

「……すみません」主人様、あまり味覚が感じられないためどのような味だったかはわかりませんでした」

そうか、味覚もだめなのか

視覚はだめ、少女の反応の鈍さを見るに触覚も鈍っているだろう。そうして味覚もダメとなれば嗅覚も怪しい。ここまで来ると逆に聴覚と声がまともに動いている事に違和感を覚えるレベルだ。

ため息をつきたくなる気持ちを抑え口を噤むと、代わりに少女が言葉を紡いだ。

「はい、ですが胸に落ちる感覚が心地よくて、こんなに暖かい食事は初めて食べました。だから、とても美味しく感じられます」

暖かい食事（物理）が初めてつてお前、マジか…そこまでか……いやいい、それ以上は何も言うな。今はとにかく食べ、おかわりもいいぞ。

その後はお互いに喋る事もなく食事を続ける。余程感動したのか少女の瞳からは涙が流れ、鼻をずびずびさせている。おいちよつと待て落ち着け、これからこんな食事いつでも出してやるから泣き止め、脱水症状で死ぬぞ?!

涙と鼻水をぬぐってやりながらこまめに水も飲ませる。なんで飯食わせるだけでこんなにハラハラしなくちやいかんのだ。

ゆつくりとした食事だったが皿のシチューが半分ほどになった所で少女が小さくケプツとのどを鳴らした。体の小ささに加えまともな食事もなければ胃も縮小しているのだろう、食事の量は慣らしながら少しずつ増やしていけばいい。

満腹になったか？

「満腹、なのでしょいか。よくわかりませんがとても満たされたような気持ちです」

あつ（察し）はい。それは大変何よりでございます。こいつちよいちよい闇を挟んでくるな……

残してももつたいないので残りのシチューを食べていると、少女は目を瞑りおもむろに胸の前で腕を組んだ。

「神よ、日々の糧と恵を与えて頂けた事、感謝いたします」

ええ（困惑）お前それマジで言ってる？

「何かおかしかつたでしようか？ 神父様からはいやしき身で食べ物を恵んでいただいているのだから必ず言うようにと教わったのですが」

その神父がいう神には会った事ないけど、どうせ碌な奴じゃないから言わなくていいぞ。感謝の気持ちを捧げるならウカミタ姉さまにしておけ

「ウカミタ様、ですか？ ご主人様がそういうのであればわかりました。ウカミタ様、糧と恵に感謝いたします……」

神棚ちゃんと作ったから届くだろ、知らんけど。

さて食事が終われば次はお風呂イベントだ！と、いきたい所だったかと思いとどまる。湯につかるというのは案外体力を消費するものだ、安易に放り込む訳にはいかない。それに温暖な気候とはいえ夜は気温も下がる、万が一風邪などひこうものなら即、生死判定で2D6振らされる事になるだろう。スベランカーでももう少しマシだぞお前。

そんな訳で歯磨きタイムだ。口を開けさせてお手製の歯ブラシを突っ込む。初めて
の感覚に動揺している気配はあるが暴れる様子はない。

上下表裏奥の方まで磨き残しのないように、しかし力をこめないように優しく丁寧に。他人の歯を磨くのは初めてだがめっちゃめっちゃめんどくさいなこれ。でも行き場なく所在無げに右往左往する小さなベロを見ているのは楽しいし少し興奮する。この乳歯とかちよつとエッチ過ぎない？元々ロリコンの自覚はあつたが今ならより高みへと至れるような気がする。

双方にとって危険な歯磨きが終わり、寝室に移動する。寝るにはまだ早い時間であるが、こいつにはとにかく休息が必要だろう。ベッドにその体を横たえ布団をかけてやる。そういえば少女とかこいつとか言っていたが、まだ自己紹介もしてなかった。

だが待てよ、これよくない流れだ。安易に名前を聞けば、名前はありませんとか言わ

れてショック受けるパターンだわ。ぼく知ってる。

かといって聞かない訳にもいかないが、どうにか暗くならない感じでいかないと俺の体力がなくなってしまう。よし、

……そういえば自己紹介もまだだったな。俺の名前はクリストファー・エディルナだ。まあ呼び方はご主人様で構わない。むしろそう呼ぶように。お前の名前はなんだ？いや、もしも無いなら構わない。平民の中には名前がない者もいると聞くしなんならいつばいいいるらしいぞ俺も有る意味名前なんてあつてなようなものと言えなくもない事もないしだからお前だけが名前が無い訳ではないのでもし万が一無かったとしても気を落とすような事はないいな？わかったな？よつしやさあこい！

「あ、いえ名前ならありますよ」

んもうなんだよくビビらせんなよ。いや別にビビッてなかったけどね？余裕の構えだったけどね？鼻歌まじりで待ってたけどね？んでんで、なんて名前なのよ。

「はい、イミコやアクマと呼ばれる事が多かったので、それが名前なのだと思います」

Foooooooooooooooo!!!→(そんなのが名前のはず)ないです。
叫びださなかった自分を褒めてあげたい気分だ。お前わざとやってるんじゃないやねえだ
ろうな。あんまなめたマネしてると俺が泣くぞ？恥も外聞もなくギャン泣きしてやる
ぞ？お前にもいい年したおっさんが泣き喚く地獄のようないたたまれなさを味合わせ
てやろうか!!

そんな風に内心でのたうち回りながら表面はどうかとりつくろう。中身は別とし
て体はびちびちの若者だからな、泣き叫んだりなんてしない。

少女よ、残念ながらそれは名前ではないんだ

「そうなのですか……では名前は持っていないようです」

若干しょんぼりしてるように見えるが、そんなの残念がる必要ないからねきみ？

「では、ご主人様。もしよろしければ名前を下さいませんか？」

はいキタコレ、そうなりますよね

テンプレ展開ではあるのだが、正直あまり歓迎していなかった。どうにも俺はネーミ

ングセンスに欠けるらしいのだ。前世で天照様が拾ってきた野良猫に名前を考えようという事になった際、考え抜いて出した案が全員から否定され、その後名前を付けるような場で意見を聞かれることは一度もなかった。見た目の特徴をよくとらえた渾身の出来栄えだと思つたんだがな、金玉ギラギラぎんぎん丸。

とはいえここで断れる場面ではない。自己中とか人の気持ちを考えないとか普段散々に言われるが、人の痛みがわからない人間ではないはずだと自分では信じている。ただちよつと人間というカテゴライズのストライクゾーンのアウトコースギリギリ目いっぱい、そこから拳三つ分くらいは外れてるので感情の機微に疎い自覚はあるが。

よし、こういうのは悩み過ぎるからいかんだ。気楽に行こう。
俺は姿勢を正し、心もちわくわくしているように見える少女へと向き直った。

お前の名前だが、雨音というのはどうだ

「アマネ、ですか？」

そうだ、俺の故郷の文字で雨の音と書いて雨音と読む

気が付けば厚い雲の出ていた空はいつの間にか雨となり、シトシトと部屋の窓を濡ら

していた。この国では聞きなれない名前であるし、何か暗そうだから嫌だと言われるかと思つたが、案外気に入つたのかまるでかみしめるように幾度も呟いている。

「アマネ、あまね、雨ね、雨音……はい、雨音は今日から雨音です。ありがとうございます、ご主人様」

ああ、気に入つたのならよかつた

気に入つてくれたのは嬉しいけど一人称も名前なのきみ？いや好きにしたらいいけどさ。

ベッドに横たわる少女の手を軽く握つてやりながら、窓の外に降る雨を眺める。偶然の思い付きではあつたが、思えば昔から雨は好きだつた。時に優しく、激しく降りしきる雨の音に耳を澄ませながら静かに本のページをめくる幸福。たまたま見た何かに影響されて「雨の中、傘を差さずに踊る人間がいてもいい」とか決め顔で言う神様に連れ出され、一緒に雨に濡れながら下手なダンスを踊つた事もあつた。

少しばかり過去に思いをはせていると、気が付けば傍らの少女——雨音は静かに寝息を立てていた。

辛いばかりの人生を送ってきたこの少女が、どうかこの雨の音に包まれて、少しでも幸せな夢を見れる事を祈って。そっと、その頭を優しく撫でた。

俺の寿命がストレスでマツハ

おっはー！

起きろー、起きろ雨音ー。まだ夜だけど起きろー。起きたな？よく眠れたかな？眠れてないよな。まだ3時間しか経ってないからな。だが起きろ。そして飯を食え。お前にはこれからしばらく3時間毎に飯を食ってもらう。拒否権は無い。

寝ぼけたまま頭をふらふらさせている雨音にまくしたて身を起させる。ベッドに乗ると雨音の後ろに座り、その膝の上に雨音をのせ背をこちらに預けさせた。雨音のその焦点の合わない目はさらに微睡んでおり、何がおこっているのかよくわかっていないだろう。口が半開きになっているのをいいことに、そこにシチューペーストを少しずつ流し込んでいく。半分寝ているようだが、生理学的反応によってか口の中の物はとりあえず飲み込んでいるようだ。白くてドロドロしたものを半ば意識のない少女に無理やり飲ませる変態いるらしいつすよ、俺なんすけどね。んーエッチ！

アホな事を考えつつも手元はつつがなく動き、持つてきたシチューペーストは見事になくなった。とりあえず同じくらいの量にしておいたが無理した様子は無い、問題はないだろう。雨音を再度ベッドに横にして少し頭をなでていると、すぐに寝息が聞こえて

きた。まあ肉体は休養を求めていいはずなのでしばらくはこんな感じかもしれない。

別に嫌がらせでこんな事をしている訳ではない、とにかく雨音に栄養を摂取させるためだ。人間の赤ん坊と一緒に、赤ん坊は成長のため、雨音は傷を癒すためだが多くのエネルギーを必要としている。しかし一度に摂取できる量が少ないので、その分数を増やすしかない。しかし赤ん坊は空腹になれば泣いて知らせるが、雨音は空腹であることが常態化しすぎて脳が危険であると判断出来ていない可能性すらある。なので少々無理やりにも食べさせるしかないのだ。雨音お前……赤ん坊にも負けるとか恥ずかしくないの？

眠る雨音のお腹に手を添えて気功を流す。人間の持つ魔力、オドと根源は同じ物だがより生命エネルギーに近いそれは相手に拒否反応を起こさせる事無く流す事ができる。大きな回復効果は期待できないが、体調を整えたり気持ち落ち着けたり、身体能力を補助したりと便利な面も多い。今回は内臓系を中心に覆い、消化を助ける目的だ。ペースト状でほぼ液体のようなものだとしても、食べ物を消化するには多少の負担がかかる。流星にそれでどうこうなるとは考えにくい、やらないよりは良くなるだろう。

それから数度、同じ事を繰り返す。食事はとりあえず簡単に作れるミルクで煮た麦かゆや果物をすり下ろした物も用意した。味覚がほぼ無いとはいえ若干は感じるようで、果物を与えた時は甘味に反応したのか若干嬉しそうにしたように思う。寝ぼけてたので夢の中で美味しく感じられる物でも食べていたのかもしれないが。そうして食事の時以外は手を握ってやりながらお腹に気功を流す。暇なので本でも読みたいのだが、握った手を離して少しすると何かを探すように手を彷徨わせるのだ。しばらく観察しているのだんだんと表情が苦しうになり、手を握ってやると穏やかになる。そんな事を数回繰り返してどうにも握ってないとダメそうだと諦めた。仕方がないので瞑想して時間を潰す。

気が付けば雨は止んでおり、窓の外に広がる空は少しずつその明るさを増している。まだ早朝と呼ぶにも早い時間だが、本邸ではそろそろ人が動き始める頃だ。誰かに頼んで子供用の服でも手配してもらおう、いつまでも裸のままではロリコンには目の毒だやめろオ（建前） ナイスウ（本音）

ベッドを離れようと立ち上がるが手を引かれる感触に立ち止まる。起きたのかと雨音の方を見てみるがまだぐっすりと寝ている様子。どうやら手だけがっしりと掴まれているようだ。そんな様子に小さく笑いながらその手をはが……はが、れない。なんだ

お前握力くそ雑魚の癖になんでこんな強く握ってんの？必死か？!

別段強い力という訳ではない、しかし力を入れて？がそうとすると雨音の手を怪我させてしまいそうでそれも中々できずに対応に困る。どうにか傷つけないように手を引き抜き、今度は苦笑いを浮かべる。まくれてしまっていた布団をかけなおして俺は寢室を後にした。

本邸ではやはり、すでに使用人達が働き始めているようだ。あちこちでその気配を感じる事ができる。本邸は同時に領主館を兼任しており、他領からの来客、街や村からの嘆願や依頼等に対応する役割を担っている。住居スペースは離れているが、建物自体はつながっていてその維持管理も使用人の仕事に含まれる。

現在は外からの客などが来ることはまず無いため人員は少ないまま運用しているが、領地経営も軌道に乗り始めた今この後も発展していくためには他領とのやり取りも必要になってくるだろう。対応のためにもそろそろ本格的に人員の補充と教育を指示していかなくてはなるまい。ついでに貴族外交も気は進まないが再開していかなくてはならないだろう。実務は出来る奴に投げればいいが、貴族同士のやり取りはどうしたって必要になってくる。ああ考えただけでめんどくさい。やつぱりそこらへんのおっさん捕まえて来て変わってもらおうかな……

せんの無い事を考えながらも本邸に足を踏み入れ、とりあえず誰か呼ぼうと声を上げようとした時だった。すぐ右手の壁からぬるりとウォルダーが抜け出てくる。

「おかえりなさいませ、ぼっちゃま」

ぬお、ウォルダーお前周りに人が居ないからつて壁とかすり抜けてぬるつと出てくるのやめろよ。居るのわかってても絵面がインパクトありすぎてビビるわ

「ほっほこの老骨、近頃はぼっちゃまを驚かすのだけが生きがいですな」

これはアドバイスなんだけどもうちよつとマシな生き甲斐見つけた方がいいと思うよ？

昔から謎の多い存在だったウォルダーだったが、一度問い詰めてみた所実は魔族の一人だったらしい。

人族のなかでも特に強い種族である魔族は、その能力の高さに反比例して繁殖能力に乏しい。もしくは能力が高いが故に個体数を増やす必要がなかったのかもしれないが、比較的良く見かける他の種族に比べ、見かける事は本当に稀だ。

そんな魔族であるウォルダーがなぜ家令などやっているのかといえれば、どうやら昔初

代領主に敗れその配下として下る事になったらしい。そもそも初代が辺境とはいえどかい土地を任せられ、辺境伯なんて物に叙任されたのはこのウォルダー討伐の功績を認められてのものだ。

当時暇だったウォルダーは近くで拡大していた人間族のコミュニティ、つまり王国に色々ちよつかいをかけていたらしい。それに対処するために様々な貴族が挑みかかり、ようやく倒す事に成功したのが初代様だった。初代様は打倒したウォルダーになんてこんな事をしたのかと問い、その暇だったからという理由を聞いてならば私に仕えよと臣従させたらしい。初代様ちよつと器がばがばすぎんよー。

ウォルダーもそれに面白がって、ならばその一族、つまりエディルナ家が滅びるまで暇つぶしに観察してやろうという事で契約するに至った。先代であるパツパを見て、これは早々に滅びそうだけど最後に面白いものが見られそうだと思っていたら、俺がどうか立て直してしまったのを見て内心面白がっていたそうだ。歴代当主には折を見てその正体を明かしていたらしく、パツパがウォルダーを遠ざけていたのもそこらへんが理由なんだろうか。

ウォルダーはいつもの胡散臭い笑みを張り付けたまま手にした荷物を俺に渡してきた。

「子供用の服と肌着を幾つか見繕っておきましたので、ご利用ください」
色々と言いたい事はあるが礼は言っておこう、ありがとう

「ほっほ、なんのこれしき。坊ちやまに仕える者として当然の事ですぞ」

人を覗き魔の親玉みたいに言うの止めてくれない？

まだ何も伝えていないのにこの手回しの良さ、大方昨日の街でのやり取りを覗いていたのだろう。

どうもこの魔族、趣味の一環として王国各地に使い魔——正確には本人の能力の一部らしいが——を放っており、それによって様々な情報を入手している。主に誰かの弱みになる事に偏っているように感じられるが。

当然アルトの街にも放たれており、奴隷商の近くにも居たようだ。今更の事であるしその情報網に助けられる事も多いので責める気にもならない。最近は何の手勢の隠密集団 ONIWA BAN も順調に育ってきており、多方面から情報を手に入れその確度を上げている。やはり忍者はロマン。情報を制する者は世界を制す、いつか世界を裏で牛耳るフィクサーごっこをしたのでこちらも組織の拡充を進めていきたい。閑話休題。

ともあれ人を使う手間が省けたのはありがたい。ついでにロイドへの伝言やこの後の指示もいくつか出しておこう。しばらくは雨音にかかりきりになるだろうし、重要度

の高いもの以外は適宜処理してもらえればありがたい。

「かしこまりました。とある商家から年端もいかぬ少女を金を出して無理やり連れ帰り別邸にていかががわしい事を行って忙しので顔を出せないと、家の者たちには確かに伝えておきましょう」

すみませんその悪意しか感じられない言い方やめて頂けませんかねえ！

「おや、いかががわしい事はなさらないので？」

ハハハオマエハナニライツテルンダ

いや、するけどさ。そのうちするけどさいかががわしい事。でもまだしてないからセーフ、セーフじゃない？だめ？そっかあ……

とりあえず表面上はごまかして逃げるようにその場を後にする。ウォルダールの奴本当に言いふらしたりしないだろうな、冗談めかした口調ではあったがあいつなら本当にやりかねない怖さがある。すっかり釘を刺さなかった事を少し悔やむ。もし使用人たちにこのことがバレたら……いや、あんまり問題ないなこれ。使用人たちにはビビられててまともに会話できるのも少数だし、元から低い好感度が下がった所で今更だ。そもそも見た目が厳ついとはいえ年頃でしかも貴族の俺が、ちよつと街で女をひっかけてき

たとして何の問題があるだろうか。それが金で買った奴隷ならばなおさらだ。ちよつと幼いだけで。いまいちこの世界の倫理観を把握できていないが、そう酷い醜聞になる事ではないはずだ。ならないよね。

雨音を衝動的に連れ帰ってしまった時はたいして気にしていなかったが、落ち着いて考えられるようになるると今の状況はとても美味しい状況と言える。前世では特殊な立場だった事もあり、色々和我慢する事が多かった。そんなロリコンの手元に自由にできる少女が転がり込んできたのだ、これはもういつそ据え膳と言つても過言ではないのではなからうか。下半身からほとぼしるリビドーに悶える日々ともさよならできるかもしれない。

とはいえそれもこれもまずは雨音が回復してからだ。まさか助けようとした少女と無理やり行為に及ぼうとして死なせてしまったなんて事になれば笑い話にもならない。(僕はロリコンだけどネクロフィリアとかそういう性癖は) ないです。

だがこれ雨音の立場からすると、地獄のような状況から抜け出す事が出来たと思つたら顔の怖い偉丈夫に手籠めにされてしまう訳で、地獄に比べれば煉獄のほうがマシだよねつて状況になるだけではないだろうか。そんな事心配するならそもそも手を出すなという話であるのだが、すでに俺は雨音の事を気に入ってしまった。どうにも昔から自

分は執着心が強いようで、一度自分の物だと認識するとそれを手放す事に強い拒否感を覚える。気に入ったものであれば尚更その傾向は顕著になる。大して興味のないものならばいよいよ捨てられるんだけどね。

別邸に帰り着き一息つく。そろそろ時間なので飯の準備でもしようかと思つた所で、寢室のほうからボスンと鈍い音が聞こえた。寝返りを打つた雨音がベッドから落ちたんだらうか。床にはふかふかの絨毯があるし、念のため周りにクツシヨンを敷き詰めておいたのでケガするような事はないと思うのだが。まあ万が一があつても困るので先に様子を見に行くとしよう。

気持ち速足で寢室に向かい扉を開けると、雨音は足をぶるぶる震わせながら立ち上がった所だった。音で気付いたのかこちらに歩き出そうとし、足元のクツシヨンに躓いて顔面ダイブしそうになるのを慌てて支える。おいおいバイタリテイに溢れるのはいいが無茶すんなよ、今のお前はワンミスが命取りであるのを忘れるな。

ついでにそのまま抱きかかえると首元にヒシとしがみ付いてきた。声をかけてみるが反応する余裕もないようで、まるで迷子になった幼子がようやく親を見つけ離すまいとするような必死さを感じさせる。恐らく目が覚めた時に周囲にいなかったので不安だったとかそういう感じだろう。でも君いくらなんでも会って1日経ってない奴に警

戒心無き過ぎじゃない？都合が良すぎておじさん逆に心配になってくるよ。

もう少し落ち着くまで待つてやりたい気持ちもあるが、今の雨音はすつぽんぽんである。さつさと服を着せてしまおう。残念ながら今は理性と性欲のチキンレースを楽しんでいる場合ではない。

おはよう、雨音

「……はい、おはようございますご主人様」

挨拶をしてやれば少し落ち着いたのか返事が返ってくる。そうして一瞬気を緩めた所で一気にその体を引き離す。ふふ、抵抗などさせぬわ。

ベッドに座らせると足から子供用おぼんちゅ——パンツやショーツではない、おぼんちゅだ——を履かせ、上は肌触りの良いシルクの肌着を着せる。その上から着脱のしやすいよう病院に入院する際に着る検査衣のようなものを羽織らせ腰ひもで結んでやる。若干サイズが大きいようだが問題ないだろう。ざっと全体を確認すると改めて抱き上げてやる。

急に引きはがされたのが不満だったのかなんとなく非難めいた視線を感じる。表情の変化に乏しい奴だと思っていたのだが、案外感情の起伏は大きい方なのかもしれないな

い。今までの境遇がそれを押さえつけていたというのはいかにもありそうだ。まあそこらへんも含めてリハビリしていけばいい。再び首元に抱き着いたのを確認し、ずり落ちないように支える。とはいえあまりにも軽すぎて片手で余裕なのだが。今度は剥がされまいとしがみ付く雨音をそのままに部屋を出た。

やはりというべきか、食事を作るからと言つても離れようとしないうちに雨音に手をやきつづどうにか片手で用意した。軽く食事を済ませると、雨音に魔力を流し検査を行う。たった一晚ではあるが栄養をしっかりと摂取したおかげか昨日よりも多少状態は良くなっているようだ。雨音自身の肉体の影響も大きいのだろうが、これなら危険な状態はすぐに脱するだろう。

夜に食べさせてやっていた事は覚えているか聞いてみれば、やはり殆ど覚えておらず夢だと思っていたようだ。まあ食べられさえすれば良いのだし構わないのだが、一応どうしてそうするのもかも伝えておく。胃の大きさも戻すために食事一回毎にスプーン一杯程度ずつ増やしているのだが、こちらも順調だ。食べ過ぎて戻してしまう可能性も考えていたが、気功で胃の動きを補助してやっても良かったのかもしれない。

食事を終えて一息ついていると、雨音はすぐにウトウトしました。しばらくはこうして食事と睡眠を繰り返す事になるだろう、変に緊張して眠れないというような事がなく

て一安心した。

そんな日々を3日ほど過ごした。雨音の回復力は予想をはるかに超えて高く、すでに流動食だけでなく固形物も少しずつ食べられるようになっていく。こうなれば摂取できるエネルギー量も増えるので更に回復力は増していくだろう。当初はポーションの使用に耐えられるようになるまで2ヶ月程度はかかるだろうと見ていたのだが、この様子ならもっと早くても大丈夫かもしれない。

回復に伴い少しずつリハビリも行う。と言っても急に運動するわけではない。凝り固まった筋や筋肉をマッサージで解するのがメインだ。それでもそれなりにエネルギーを消費するので本当にゆっくりとだが。

だんだんと一日の睡眠時間も短くなり、起きている時間が増えると俺は雨音にこれまでの話を聞くことにした。心情的にはしんどいのがわかってるので聞きたくないのだが、これから一緒に暮らそうというのだからそれなりに相手の事を知る必要はあるだろうと考えたのだ。

とは言えあまり話したい内容でもないだろうから無理にとは言わないが、と断りを入

れたのだが、雨音は特に悩む素振りもなくいえ構いませんと話し始めた。あ、そっすか、はい聞きます。

彼女が生まれたのは山林にある、とあるエルフの集落だったそうだ。主にエルフとダークエルフが集まっており、他種族はたまに外からくる者を見かける程度だったらしい。

エルフとダークエルフは見た目が対照的なため呼び名を区別されているが、種族としてはそこに差異はほぼない。エルフはほんの少し魔力の扱いに長け、ダークエルフはほんの少し肉体的に優れる程度で、そこに優劣はない。

多少排他的であつたりしきたりにうるさかつたりするが、何かを求めて争うような事はない平和な所だったようだ。当然双方に隔意などなく、エルフとダークエルフの夫婦など珍しくもなかった。ハーフェルフの忌子に関する言い伝えも知ってはいたが、長寿である彼らでさえ見た事はなく、しきたりを重んじる長老たちであつてさえただのおと

ぎ話であると考えていたほどだ。そう、雨音が生まれるまでは。

集落でも若い夫婦であった二人。妻であったエルフは初産でもあり多くの人の助けを受けながら出産に挑んだ。そして、陣痛が始まりいよいよ出産が始まろうとしたとき、その赤子は母親の胎を裂いて生れ出た。その赤子はエルフの白い肌を持ちながら、ダークエルフの銀色の産毛と紅い瞳を持った、生まれるはずのないハーフエルフだった。伝承の忌子であるハーフエルフの産声が響く中、母親は息を引き取った。

これは俺の予想だが、恐らく雨音が魔力を無意識に封じている原因がこの出産だろう。出産は母子ともに大きな負担をかける。広がるとはいえ狭い産道を通るのだ、意識の曖昧な赤子といえど痛みを感じるだろう。そして初めて感じる痛みに驚き魔力を放出しそうになるが、防衛本能でそれを留める。しかしそのほんの一瞬漏れ出ただけの魔力に、母親は耐える事が出来なかったのではないだろうか。

当然集落は荒れた。すぐに赤子を殺すべきだという者もいれば、伝承が本当だとすれば殺せば更なる災いが訪れるからダメだと言う者もいた。しかし双方ともに排斥の意思は同じだった。しかしこれに一人だけ反対の意思を持つ物もいた。夫であり父親であるダークエルフだ。彼は妻であるエルフを凄惨に殺した相手であると知りながら、そ

れでも私の子供であるとかばったのだ。そうして彼は一人で赤子を育てはじめた。

しかしその数年後、彼は狩りの途中に事故に会い、家の中で独り待つ子供を残しこの世を去った。

この時雨音はまだ物心つくかどうかという頃だったらしく、父親の事もあまり覚えていないようだ。ただたまに、何かを我慢するようにじつと彼女を見つめている姿だけがやけに印象に残っているという。

早々に両親を亡くした雨音は、その後集落で育てられる事になった。内容を聞く限りでは、それは育てるといふよりも飼うと言ったほうが適切であるような話であったが。

集落のエルフ達が雨音を放逐しなかったのは、忌子を殺すというのがどの範囲かわかりかねたためだろうか。直接的な事だけなのか、間接的にでも関われば呪われるのではないか、そんな考えがあったのだろう。他には雨音が弱い存在だった事も関係しそうだ。肉体的に頑強であるとはいえず、雨音はエルフの集落のなかで唯一魔力を持たない存在であった。忌子だ悪魔だと恐れつつも、明確に自分たちよりも劣る存在。何をしても許される存在として価値があったのかもしれない。

そうして同じ子供たちからはいじめられ、周りの大人たちからは蔑まれながら数年、転機が訪れた。

集落に怪しげな男が現れた。その男は人買いだつた。寂れた村落を周つて口減らしをした者がいれば話を持ち掛ける。対象は主に子供であり、奴隷契約を交わして本来その本人が受け取るべき報酬を親に渡す。王国において特別珍しくもない存在。

本来ならば男はすぐに集落から蹴りだされていただろう。エルフは寿命が長い代わり子供は少なく、その子供を売ろうなどという者はまずいない。男もそれを承知しており、集落によつたのはたまたま近くを通つたからだつた。

エルフの奴隷は高く売れるがそれは希少なためだ。人の都市に住むエルフは強者であり、自らを売つて奴隷になるような者はいない。無理やり攫おうとして返り討ちにあうなんてのは酒場での定番のネタだ。男もあわよくばとは思つていたが、話を持ち掛けても一蹴されるのが落ちだろうと考へていた。それでもわざわざ立ち寄つたのは、万が一があつた時のリターンがそれだけ大きかつたからだ。

果たして、男は思わぬ幸運を得る事になる。集落にいた忌子と呼ばれるハーフエルフを安く買うことが出来たのだ。男もエルフの忌子の言い伝えを聞いたことはあつたが、そんなものを信じてはいなかつた。人とのハーフでは価値が下がるが、エルフ同士のハーフであるならばむしろ好事家に高く売れそうだと小躍りした。

こうして売り払われる事になった雨音だが、集落のエルフ達は更に追い打ちをかけた。エルフの種族的な象徴とも言える耳をちぎり、安易に治らないよう傷を焼いたのだ。誇りやアイデンティティといったものを理解できていない雨音だが、この時は酷いシヨックと強い喪失感を味わったという。今よりも更に幼い時期だ、単純に片耳を失ったというだけでもその衝撃は計り知れない。

こうして売られた雨音だが、男の元にいる時間は短かった。高値に吊り上げようと考えていた男だったが、雨音を買ってからいくつもの小さな不幸が重なった。普段なら少し運が悪かったですませるようなそれも、エルフの忌子を買った男には何かの祟りであるように感じられた。やがてある街の往来で馬車に轢かれそうになると、このままでは呪い殺されるのではと考え始め、殆ど利益の出ないような値段で雨音を手放した。

新しく雨音を買ったのは神父だった。だがそれは、聖職者として奴隷に落ちた少女を救うため、なんて理由ではなかった。神父は雨音を教会の地下室に連れていくと、そこに監禁した。手かせと足かせを付けられ動くこともままならない。そして神父は雨音を悪魔と呼び、様々な責め苦を行った。

神父はただ嗜虐心を満たすために拷問を行った訳ではないようだった。毎日、それこ

そ勤勉にと言えるほど雨音を罵倒し、責め続けた。それと同時に神父は雨音に言葉を教え、聖書を読み聞かせた。言葉を知らぬ者は獣と同じであり、獣のままでは神に救われる事は出来ぬと言われたそうだ。

雨音が境遇の割に言葉遣いがやけに上手いのはこれが原因だろう。少しでも間違えれば躰と称して責め苦は更に酷くなり、必死で覚える事になったという。

雨音には理解できなかつたが、神父にとって雨音は悪魔であり、生まれた時から大きな穢れを持つ悪魔は死んでもその穢れを保持したまま生まれ変わりまた悪魔となってしまう。それを正し、悪魔ではなく人として生まれ変わるため、生きている内にあらゆる責め苦を負って罪を贖い穢れを禊ぐ必要があるのだと言われていたそうだ。正しく狂人の言だ。

だが神父にとってはそれは何よりも正しい真実であり、彼の前に忌子が現れたのはその魂を救済せよとの神の思し召し、使命であると感じたのだろう。雨音の子宮が特に酷い状態だったのも、万が一手元から逃がしてしまった場合を考えての事か。あるいは、悪魔の子など産まれる者が居ないようにという彼なりの慈悲ですらあったのかもしれない。

こうして毎日酷い責め苦を味わい、時に魔法で強制的に回復され、地獄の日々は続いた。

しかし、ある日を境に急に神父が現れなくなると、少しして別の誰かに連れ出された。その後はよくわからぬまま連れ回されて、最終的にここにたどり着いたようだ。

喋りつかれたのだろう、今はまた腕の中で静かに寝息を立てる雨音をそつと撫でる。話が、重い。身構えていたにも関わらずこの衝撃、こやつ浸透勁の使い手か……？

何が一番きついつて、その壮絶な内容を実に淡々となんの感情も乗せることなく喋るのだ。悲しみも、苦しみも感じさせず、ただありのままの事実を話すだけ。そんな情緒が育っていないという事もあるだろうし、俯瞰的に見ることで精神を守ろうとする防衛本能もあつたに違いない。今こうして正気を保っているのは奇跡以外の何物でもない。

俺はこの少女に何ができるのか、何をすべきなのか。様々な思いや考えが浮かんで消える。

自分がこの少女を幸せにする、などと傲慢な事は言えない。人に押し付けられた幸せ

など意味はなく、件の神父ですらある意味では悪魔という枷から解き放ち少女を幸せにしようという行いと言える。

ならばこそ、何か特別な行いをする必要はない。この先の日常の中で、少女が自らの幸せを見つけるのを見守ろう。降り注ぐ痛みや恐怖から守る傘であろう。いつの日かそんな昔の事は忘れたと誰かと笑えるような未来を作ろう。

彼女のご主人様として、その程度の権利はあるはずだと、誰にともなく呟いた。

閑話 腕の中で

窓の外で、雨粒が躍る。

私にとって雨の日は特別で、多くの大事な思いである。

初めてご主人様に出会えた日。

初めて温かな食事を知った日。

初めてなんの不安もなく眠る事が出来た日。

初めてご主人様に贈り物を、私の名前を頂いた日。

ここには本当にたくさんの思い出あるけれど、この魂に焼き付いたような思いはきつ

と、死の今際に立つても忘れる事はないだろう。

ご主人様を買われてからの生活は全てが幸せで満たされているようだった。
美味しい食べ物がたくさんある事を知った。

可愛いお洋服を着せて貰った。

屋敷のメイドさん達と楽しくお喋りした。

ロイドさんにお仕事を教えてもらった。

ウオルダーさんと一緒に色んな悪戯をした。

ミスさんにお化粧を教えてもらったり、ピエールさんとお野菜を育てたり、グライ
ドさんに剣の筋が良いと褒められたり。

本当に、本当に幸せで、大切な日々。

でも、それでも――

部屋を出て階下に降りる。そこではご主人様がソファで居眠りをしていた。本が
傍らに置いてあるから、途中で眠くなっちゃったのかな。

傍に寄り、その寝顔を眺める。少し癖の強い黒髪に、彫りの深い顔立ち。起きているときはいつも難しそうな顔で眉間にしわを寄せているけど、その寝顔は安らかだ。皆は顔が怖いというけれど、その黒い瞳に湛える光はとてもやさし気で安心できると思う。もしかするとこれが惚れた弱みというものなのかもしれない。

そのまま顔を寄せ、額に、頬に、唇に、そつとふれるだけの口づけをする。その感触がくすぐったかったのか、少しむずがる様子が可愛らしい。いつもされてばかりだから、こうして自分からするのは少し気分が良い。

膝の上に座り、その胸に頬を寄せる。できれば恋人のように隣で肩に寄せたいのだけれど、身長差はいかんともしがたい。身長は伸びてはいるが微々たるもので、堂々とご主人様の横に立てる日は果たして来るのだろうか。

重みで私に気付いたのか、ご主人様が微睡みながら目を開き視線が交わる。しかしそれも一瞬で、またすぐに眠りに戻ってしまった。でもそれは私を無視したのではなく、無言のまま私の身体に腕を回し抱き寄せてくれる。その様子が、まるで無条件で私の全てを受け入れてくれるようで、ただただ私は無限とも思える幸福感に包まれる。その感情のあまりの大きさに胸が詰まり、涙がこみ上げ、下腹部に熱が集まり、だがその全てを覆いつくすような安堵を覚える。

嗚呼、もしかかなうならば、このまま時が止まってしまえばいいのに——このまま、世界の全てが壊れても、ただご主人様と二人で居られるのなら、きっと私は幸せだから。

更に数日がたった。雨音の回復は順調で食事は多少消化に良いものが多くなるよう気を使っているが、ほぼ普通の物を食べさせている。食事はまだ少ないが、体相応には食べている。味覚が鈍いので食事も特別おいしく感じられてはいないのだろうが仕方ない、今は食感が面白い物を好んでいるように見える。

肉体的にもだいぶマシになり、艶を失っていた髪は少しずつ本来の銀の輝きを取り戻し、骨と皮ばかりだった身体もうつつすらと肉がついてきている。このまま順調にいけばもうあと一週間もすればポーシヨンの使用にも耐えられる程度になるだろう。

逆に俺は少し疲れていた。雨音が来てから寝ずに看病していたから、ではない。今更その程度で肉体機能が低下する事はない。では何が原因かといえれば雨音に乞われて昔の話をしていたためだ。雨音が起きている時間はおもにお喋りして過ごすのだが、経験の乏しい雨音が語れる事は少なく、主に俺が語る事になる。そうして語るうちに今世の事だけでなく前世の事も語っていたのだが、改めて自分の過去を振り返るというのは中々堪えるものだ。別段悲しみに満ちた壮絶な過去という訳でもないが、それなりに波

乱万丈な人生ではあつた。思い出せば楽しい事も多いのだが、それに類する程度には苦しい思い出もある。しかし雨音の過去を先に聞いてしまつてゐる以上俺が話さないというのもフェアではない。果たして雨音が理解できたかは定かではないが、自らの人生を語つて聞かせるのは予想以上に精神的負担を感じるものだった。

しばらくそんな風に過ごしていたが、そろそろ執務もこなさなければならなくなつた。殆どの仕事はロイドを始め部下に任せてしまつてゐるが、その確認や重要事項の裁可はしなければならぬ。ここ最近の街の発展は著しく、そちらからの陳情も回つてきているだろう。早めに処理しなければ後が詰まつて開発が遅れるばかりだ。

だがしかし、それに待つたをかける人物が居た。雨音である。

「行つてはダメですご主人様。ご主人様は言いました、私の好きにしてよいし、好きに話してもよいと。だから行つちやだめです、私と一緒にいてください」

確かに言つたな。だがそれを全て聞き入れるとは言つていない！

「……そんなつ！」

いや、そんなに驚く事に逆に俺が驚いてるが。そもそも俺がご主人様なんだから奴隷であるお前にその行動を制限する権利はない

「でもご主人様はこの前言つてました。じんるいはみなびよーどーであり、そこに上も

下もない、みなびよーどーにむかちなんだって」

俺そんなこと言った?!

言ったかもしれん。どうにも話をしながらどんな意味なのか聞かれてあちこち話が飛びまくるのでまるで関係ない話に発展する事もしばしばあった。その時は流れで色々喋っていたので、何の話をして何の話をしていないかなど詳しく覚えていない。

そうして会話を重ねていく中で雨音はどんどん新しい知識を覚えていく。まあまだ単語の詳しい意味は把握できていないせいもおかしな内容になる事が多いが、なんとなく言いたい事はわかる。早めに文字を教えて本を読ませてやりたいところだ。

その後も本人にとっては丁々発止のやり取りを重ね、結局俺が折れる事になった。最終的には骨も砕けよと言わんばかりに抱き着いて離れなくなったのもうそのまま連れていく事にしたのだ。こいつ見かけによらずパワー系である。

片腕に雨音を乗せたまま別邸を出て本邸へ向かう。すでに日も高く上っており、すれ違う使用人達は一様にぎよつとした表情を見せた後に挨拶をしてくる。まあ気持ちはわかるよ。気にせず職務に励んでくれ。

久しぶりに外に出たためか、雨音は珍しそうにきよろきよろとあたりを見ている。ど

の程度見えているのかはわからないが、おおよその輪郭程度は捉えられるのだろうか。出てくる際に静かにしている事という約束を守っているらしく、ここ最近は常であった質問は飛んでこない。こういう所は聞き訳が良いのになんで少しお留守番する事ができないのか、これがわからない。

執務室に付くとちようどロイドが書類をまとめている所だった。決済待ちの書類はうずたかく積まれ、やる前から気持ちいを萎えさせる。

「おはようございます、クリス様。ちようど良かった、そろそろお呼びしようか迷っていましたので」

おう、おはよう。まあそうだろうと思つてな。でも今来なきやよかったと後悔してる
ところだよ

「それでより面倒な目にあうのはご自分でしように。それで、そちらの少女が噂の？」

どんな噂かは怖いから聞かないが、まあ俺が買ってきた奴隷だ。名前は雨音という。

雨音、こいつはロイドだ、挨拶しておけ

「……ご主人様の奴隷で雨音と申します、よろしくお願いします」

「これはご丁寧にどうも、私はロイドです。主にクリス様の補佐をしております。よろ

しくお願いしますね」

雨音はおずおずと、ロイドは人好きのする笑顔を浮かべて挨拶を交わしていた。

ロイドは少し腰を曲げ、雨音に視線を合わせている。その声音からは奴隷を下に見るような色は無く、むしろ客を扱うような丁寧さだ。その声に雨音も少し安心したのか、肩の力が抜けたようだ。

「ですがお嬢様を連れていらつしやるとは驚きました。申し付けて下されば書類は別邸までお持ちいたしましたのに」

いや、それはしなくていい。館からの重要書類持ち出しを禁止した奴がそれを破らせてたんじゃ、ルールの意味なんてなくなるだろう。それとなんでお嬢呼びよ？普通に名前がいいぞ

「確かに、その通りですね。出過ぎた事を申しました。名前についてはそうですね、ではアマネさんとお呼びしましょう。アマネさんもそれでよろしいでしょうか」

「……はい、ロイドさん」

何を思っつかは知らないが、ロイドも雨音には気を配ってくれるようだ。世間の風潮

としては奴隷に敵しいのが一般的だ。領主である俺の奴隷である以上は明確に見下すような事はないと思つていたが、好意的にみられる事もないだろうと予想していた。しかし思い返せばここに来る途中で会つた使用人達も雨音を珍しい物を見る目ではあつたが、そこに悪感情は無かつたように思う。あるいはウオルダーの流したであろう噂とやらが関係していそうだが、あまり積極的に内容を聞きたいとも思えないのは、脳裏に笑うウオルダーがちらつくせいか。

その後の政務は滞りなく進んだ。書類の数は多かつたが殆どが印を押すだけで済むものばかりであり、ある程度判断が必要なものに関してもそれに関する資料が細かく添付されており、改めて何かを指示することなくそのまま裁可が可能だつた。数点改善指定箇所と内容を添えて許可を出していく。

その中でも雨音は静かだつた。見えないだろうに興味深そうに書類を眺めてみたり、じつとペンの動きを眺めてみたり、体に添えられている手にじやれついてみたり、ロイドの用意したホットミルクを飲んでみたり。暇だからと駄々をこねるような事もなく、今はおとなしく寝ている。この様子なら仕事を溜めないように雨音を連れて執務をこなしても問題ないかもしれない。数が少なければその分短時間で済む。

書類も残り数枚という所で、その嘆願書は出てきた。表題はレース開催の嘆願となつ

ているが、なんだろうか。

なあロイド、レース開催についての書類が混じってるけどこれはそっちで処理可能な奴だろう、なんでこっちに混じってるんだ？

「ああそれですね。それはレースにクリスマス様も出走してほしいと、うまむす——」

そーそーい!!それ以上はいけない。いいかロイド、前にも言ったが彼女達は馬人族だ。うまむす○めではない、間違えるな

「最初にクリスマス様が言い出したのではないですか。それに彼女達もそっちのほうが可愛いと言つてすでに自称していますよ、うま○すめ」

おいバカ止めろ、サ○ゲに知られたら消されるぞ。雨音は大声だしてスマンな、なんでもないから寝てていい

う○むすめ、もとい馬人族は獣人族の土族の一派だ。この世界で狩猟民族的な生活を送っている。当初その話を聞いた時はよくあるケンタウロスの想像していたのだが、実際に居たのは少女の身体に馬の耳と尻尾が申し訳程度に付いたまんま○まむすめだった。全力で突っ込みを入れてしまった俺は別に悪くない。

彼女たちは獸人族の中でも肉体的に優れていたが、種族的に女性しか生まれないという特徴を持っていた。当然子を残すためには番となるオスが必要な訳で、遊牧民でもある彼女たちは定期的に他種族の村などを襲い男を誘拐していった。彼女たちに強い血を求める、という本能が無いではなかったが、管理するには弱い相手の方が都合が良い。そうすると種族的に貧弱で繁殖力の高いオスムスコ、もとい人間族の男がお手軽でねらい目だった。

そしてある時うちの領内の村の一つが狙われた。その時たまたま視察のためにピエールとともに村を回っていたのは、彼女たちにとって不運だったろうか。略奪しに来た一団など普段なら問答無用で皆殺しコースなのだが、襲ってきた彼女達は見目麗しい。○まむすめなのである。心の中で一瞬葛藤したが、ヘルゲン領内ではまだ略奪してないからセーフ判定となり、そのまま全員を生け捕りにした。

ちょうど人手不足だった事もあり彼女達の持つ力は重宝した。その力の強さをおつて建築の手伝いをさせたり、酪農をやらせてみればどれもそつなくこなす。しかも見た目が良いから労働者に大人気で現場の士気もあがると良い事づくめだ。いや、彼女たちを連れてきて暫くはエディルナ家でその生活を面倒みてやっていたのだが、たった数十人で我が家のエンゲル係数を危険な領域にまで加速させたあのバカげた食事量だけは

いただけない。全員オグリかスペかというほど食うのだから困る。領の農業改革が成功していなければ内側から食いつくされていたかもしれない。

余談だが、この世界には普通の馬もいる。酪農で牛や山羊の他に労働力として馬も育てているのだが、意思の疎通もできるらしくとても重宝している。たまに馬に乗った馬人族や、仔馬を抱いて走る馬人族や、馬と馬人族の二頭立てで走る辻馬車が居たりとウマのゲシユタルトが崩壊しそうである。

一見そのまま街の暮らしに溶け込めるかと思った馬人族だが、一つ問題があった。彼女達はその可憐な見た目と裏腹に闘争本能が強いのだ。むやみやたらと暴力を振るう事はないのだが、沸点が低いのか喧嘩はザラで、逆に定期的に喧嘩しないと鬱憤がたまっていくらしく威圧感を振りまいてしまう。おそらくこれも彼女たちが狩猟民族として一か所に留まらなかった原因の一つだろう。せつかく上手くいきそうだったのにこれはたまらないと、街人達は領主である俺にどうにかならないか訴えてきた。連れてきた本人である俺もこれには頭を悩ませ、そうだレースしようと思いついた。

思いつけば後は早い、すぐに街のはずれにレース場を一つ建築した。コロシウム一丁上がりだ。芝もなければゲートもない、簡素なレース場と観客席だけだ。もっと人手があれば公共事業として斡旋できたのだが仕方ない、余裕ができれば内装整えるために仕

事を出せばいいだろう。ともあれ場は用意した、後は実際に彼女達を走らせてみてうまく熱を発散させる事ができるかどうかだ。

そして結果は言うまでもないだろう、彼女たちは走る事に、競走する事に熱中した。今までも草原を走り、速さを競う事はあったようだが、こうして人数を定め、レギュレーションを決め、その中で誰が一番かを競い合うという事は初めてだったようだ。しばらくは仕事も忘れて毎日走りまくり、流石に見かねて俺が蹴り飛ばして利用時間を決め、彼女たちの闘争本能はレースという舞台に集中した。そのかいあってか普段の生活はすこぶる落ち着いたものとなり、件の問題はとりあえずの解決を迎えた。

だが当然ここで終わらせるつもりはなかった。だって俺はウィニングライブ見たいし。

そこから俺は更に奔走した。街一番の楽団に頼み込み楽曲を作り、音響魔道具を使って設備を用意。馬人族には歌と踊りを教え込み、今後は観客を入れて勝者を称えるのだと言えば彼女たちはより熱心になった。また街にはお触れを出し、これをケイバと称してレースの順位を予想する公営賭博とする旨を発表した。

生活が安定し多少自由な金を持ち始めた平民たちが裏で集まって賭博をしているのを知っていたのだ。それをことさら強く取り締まるつもりも無かったが、それが広がり

切る前に公営賭博を広めて領に金を落とさせようと思ったのだ。それにあまり無茶なレートで身を崩す者が多く出ては困る。賭けの上限を指定することでそこら辺をある程度コントロールできるようにしたかった。そのうち裏町の首領みたいなのも出てくるのだろうが、あまり早くに力を付けられても面倒くさいからね。

そうして迎えた初の公共レース。朝から始まり全8レースを予定し、最終レースの後には馬人族による特別な踊りが見られるとして、コロシウムには街の住人全員押しかけているのではないかと思うほど人が集まった。ちよつとお前ら集まりすぎだろ、仕事はどうした。祭りの日に仕事なんてしてらんない？ いや別に祭りではないんだが……似たようなものか。

ともあれ予想以上の客入りに事前に準備していたスタッフも大混乱の中、馬人族達のレースは開催された。そして、その走りに、その戦いに、その輝きに、その歌に、その踊りに、押し寄せた観客全てが熱狂した。それは観客だけでなく、走っていた馬人族達にとつても同じだった。自分たちの走りにこんなにも多くの人たちが熱中し、声援を送り、一喜一憂する。そして何より、レースの後のウイニングライブ。各レースの勝者8名だけが立てるセンターサークル。そこで浴びる事のできる歓声は、彼女たちにとつて正しく麻薬であつただろう。そのレースの熱狂はレースが終わつてもしばらく覚める事は無かつた。

熱狂する馬人族や住民達と同じくして、領主館も熱に沸いていた。公営賭博、ぼろ儲けだったのだ。もちろん事前準備や勝者への賞金などでコストはかかったが、それらを含めても余裕の黒字だ。馬人族の食事代だつてペイできる。レース後のウイニングライプのチケットの販売もうちなので、正しく濡れ手に粟と言える。現状では領内の金が回っているだけだが、いずれ領外から人を呼び込む事ができれば外貨の獲得にもつながるだろう。馬人族様様である。

その後、街の運営に与える影響が大きいとしてレースの開催は1ヶ月に一度とし、定期的に開催する事にした。回数を重ねる毎に開催する側も慣れてきて、半年もすると月に一度の恒例行事として楽しまれるようになった。そして更に半年して、レースを開始してからちょうど1年。開催一周年を記念した特別レースを開催することにした。1年のレースの中で優秀な成績を収めた者だけが参加する事の出来るレース、タウラス杯を開催したのだ。なお大会の名前に他意はない。

そうしていつも以上に気合を入れる馬人族と、その熱に充てられた観客たちが見守る中、特別枠で出走していた俺が優勝した。10馬身差以上を付けての圧勝である。その後のウイニングライブでも完璧な振り付けでうま〇よい伝説を歌いきってやった。

チューした時に巻き起こった観客席からの熱い罵詈雑言とブーイングの嵐と周囲で踊る馬人族達の冷たい視線は今でも忘れる事はできない思い出だ。

その後も通常レースは定期開催していたし、年一回の記念レースも行っていた。当然俺は最初の一回しか出ていない。住民達に親んでもらおうとちよつとしたお茶目心で出てみたんだが、しばらくは街では何処を歩いても白い目で見られたものだ。

しかしなんでまた出走要請なんて出してくるんだ。また俺のうまびよ○伝説が見た
いのかね

「彼女達にも人間族に負けたままではいられないというプライドがあるのでしょう。クリス様を人間の範疇に含めているあたり、彼女達もまだまだ新参と言わざるを言えませ
んね」

彼女たちを使つて遠まわしにデイスってくるのやめない？まあなんにせよ却下だ、音速も突破できないようじゃまだ早いと伝えておいてくれ

「そういう所ですよ」

不許可のボックスに放り入れ残りの書類も片してしまう。後は特に大きな案件もなく、つつがなく政務は終了した。

美味しい料理は下準備が大事

雨音を買ってから3週間、ついにこの時がきた。いよいよポーションを利用して傷の治療を行う。

当初は正に骨と皮だけといったようなものだったが、今では痩せているがおかしいと言う程ではない程度にはなった。とはいえ本人の話から推察するに12歳前後と思われるのだが、その身長は120センチにギリギリ満たない程で年齢を考えれば酷く小柄と言わざるを得ない。エルフは長命種だが、20歳くらいまではほぼ人間種と同じ速度で成長する。成長期もほぼ同じようで、果たしてこれからどれだけ成長できるのか。

個人の趣向としては是非小さいままでいてほしいのだが、本人としては色々悩む事になりそうだ。

ともあれ悩むにしてもまずは傷を治してからだ。雨音をベッドに座らせ、十分な体力が付いたと判断したのでこれからポーションによる治療を行う旨を説明する。すると雨音は少し不思議そうに首をかしげた。

「私の身体は……治るのですか？」

そりや治るぞ。上級ポーシオン使えば問題なく治癒するはずだ。言つてなかつたっけ？

「はい、初めて聞きました」

まじか。そういえば改めてそこらへん説明した事なかったかもしれん。自分はそれ前提に動いてたから言つたつもりになっていたのか。スマン、でも今言つたからセーフ。

なんとなく呆れたようなまなざしを無視してポーシオンの入ったカップを口元に持つていく。そういえば通常ポーシオンと解毒ポーシオンってブレンドしても大丈夫なのだろうか。しちやつた後で気が付いたのだが、まあダメだったら最悪魔法でごり押ししよう。今ならなんとか耐えられるだろう。

雨音は少し神妙に息を吐いて目を瞑つたあと、カップに口を付けた。それを見て中身を零さないように傾けていく。元々のポーシオンの量が少なかった事もあり、一息で飲み干す。何かしらの味を感じたのか少し眉をしかめているが、吐き出すような事はなさそうだ。

お互いに無言のまま数秒が経ち、雨音が腹部を抑えた。

「あつ、はう……は、あつっ」

どうやら熱を感じているようで、見る間に額に汗が浮かび、短く息を吐く。すると突然光が雨音を包み込み、まばゆい光を放ち始めた。

え、これ大丈夫？つかエフェクト激しすぎないかこれめちやくちや眩しいんだが。そんな光る必要がある？

時間としては1分程度だろうか、だんだんと光が収束し、中から雨音が現れる。自らを抱くように座っている姿で、目に見える範囲に傷跡は無いように思える。歪に曲がってしまっていた足も、欠けていた片耳も綺麗に修復されている。とりあえず問題ないよ
うでホッと息を吐く。

雨音、大丈夫か？何かおかしな所は感じないか

「いしゅじん、さま……」

強く閉じていた瞼をゆつくりと開き視線が合う。今までのように焦点の合わないそ

れではなく、光に満ち輝く紅い瞳は、まるで一級品の紅玉のようだ。その余りの美しさに魂を捕らわれるかと思う程で、思わず息も忘れて見入ってしまう。治癒の熱に浮かされてか、その白い肌が上気して僅かに朱が差し、幼い顔立ちでありながら艶を感じさせる。正に、魔性ののと言つて良い美しさだ。

「ああ、見える。見えます、ご主人様が、はつきりと。それにずっと感じていた息苦しきも無くて、体も凄く軽くて、飛んで行けてしまいいそうで、ご主人様、ごしゅじんさま……」

色々な感情が一気に溢れ、感極まつてしまったのだろう。涙を流しながら飛び込んでくる雨音を、しっかりと抱きとめてやる。

泣きじやくる顔を胸にそつと押し付け、その頭を優しく撫でてやる。櫛を通すのも一苦勞だった髪も、今は光を反射して艶やかにその銀糸を輝かせている。腰まで伸びたそれに指を通して、まるで引つかかる事もなく水のように流れていく。撫でている手が気持ちよく感じるようで、きつと飽きる事もなくずっと撫で続けていることもできるだろうと感じさせる。

しばらくそうしているとようやく落ち着いたのだろう、少し恥ずかしそうにハニカミながら雨音が顔を上げた。その顔の涙と鼻水をハンカチで拭つてやりながら立ち上が

れるか聞いてみる。雨音は軽く頷くと俺の手を支えにゆっくりと立ち上がった。

まだ感覚に慣れていないようで、多少ふらつきはしたものの、俺が手を離してもバランスを崩すような事は無かった。手を取って握らせてみても今までに比べればずいぶんと力強く感じられる。これならばスプーンを持たせても落とすようなことはないだろう。

後は体の傷跡が消えているかの確認だ。服を脱ぐように言うと、雨音は躊躇なく服を脱ぎさった。その下着も含めて全てだ。そこに羞恥の色は無い。

これは今まで俺が雨音の身体を拭いてやってきたからだ。汚れを落とすだけならば初日のように浄火を使えばすぐだが、やはりしっかりと身体を拭うほうがきれいになったような爽快感はある。感覚の鈍っていた雨音にやる意味があるのかといえばないのだが、少女の身体をキレイにするなんて機会があつてやらないロリコンはいないのだ。できれば途中からは風呂にも入れたかったのだが、視力も弱く身体能力も著しく低い状態で湯に入れるのはリスクが高かったので諦めた。まあこれからいくらでも機会はあるだろう。

全てを脱ぎ去り裸になった雨音の身体は、ただため息が零れる程に美しかった。

歴史に名を遺す偉大な名工が焼き上げた陶磁器のように艶やかで滑らかな肌は、まるでそれ自体が光を放っているかのよう感じられる。

女性らしさはまだ感じる事はできないが、緩やかに曲線を描くシルエツトは優美であり、しかしどうしても感じられる線の細さがことさらその儚さを強調し少し力を入れれば容易く手折れてしまいそうな危うさがあつた。

本当にかすかに膨らんだ胸の先には薄い桜色の蕾が芽吹き、開花の時を待ちながら静かに眠っている。

身じろぎするたびに身体の表面を流れる銀の髪は、同量の金を積んだ所で手に入れる事は叶うまい。

幼いながらも元々整っていた顔立ちは、こうして全体像で捉える事で美しさを増し、その容貌がより引き立てられている。その紅玉の瞳に射貫かれて、果たして正気を保てるものがどれだけいようか。

まるで伝承に伝わる月の精霊のようだ。余りの美しさに人を惑わせ、狂気に誘う、それはあるいは悪魔とも呼べるものなのかもしれない。二人しかいない静かな室内に、唾をのみ込む音がやけに大きく聞こえた。

ふらりと近寄り、その体に指を伸ばす。喉に、肩に、胸に、腕に、背中に、腰に、腹

に、尻に、腿に、足に。さつきまでそこに存在していた傷跡をなぞるように、その肌
傷をつけないようそつと、優しく。

触れるか触れないかという距離で行われるそれに、雨音は何かを堪える様に口を閉ざ
す。それでも我慢しきれずに漏れる吐息に混じるのは、果たして何だろうか。悦びか、
戸惑いか、あるいは単にくすぐったさに笑いを堪えているだけか。もしかすれば雨音に
もわかつていないのかもしれないが。

名残惜しさを堪えて指を離し、雨音に服を着させる。その後軽く魔力を通して内側
にも異常が残っていない事を確認すると、俺は雨音をベッドに寝かしつけた。ポーシ
ョンが無事効力を発揮したという事は、当然体力も消耗しているはずだ。せつかく動け
るようになったのだからとベッドを出たがる雨音を宥めていけば、やはりすぐに瞼が落ち
てきてそのまま寝入ってしまった。それを見届けると、俺は足早に部屋を出た。

そのままキッチンへ向かい水を一杯呷る。

体の奥の熱が少しずつ霧散していくのを感じる。

危なかった、あのまま居れば彼女をベッドに押さえつけ、情欲の赴くままにその身を
貪っていたに違いない。

別段それに問題が有るわけではない。雨音にその知識があるとも思えないが、恐らく

受け入れてくれるだろう。仮に拒絶されたとしても、その意思を無視して事に及ぶことは容易い。いい加減この若い体の性欲を我慢するのも辛いので、さっさと解放してしまいたい気持ちはもちろんある。しかしだ、同時にこうも思う。せつかくここまで我慢したんだし、自分の考える最高のシチュエーションでエッチしてみたいと。

理想的な処女セックスとは何か。それはやはりいちやらぶ甘々っクスである。初めて感じる破瓜の痛みに耐えながらもだんだん痛く無くなってきた最後は絶頂しながら同時にフィニッシュ、これだ。

しかし常識的に考えるとこれは大分無理がある。破瓜の痛みに関してはまだ個人差も大きいらしく、人によっては血もほぼ出ない事もあるらしい。しかし膣で感じて絶頂というのは難しい。少なくともそれなりに自慰を重ねて快感を得る事に慣れて、絶頂という体験を重ねていけないといけない。基本的にはある程度のセックスの経験を重ねなくては膣絶頂なかいきというのは難しいのだ。道具を使って日常的に自慰を重ねていけばそのかぎりではないのだろうが、その場合処女膜は自慰で破れてしまっている。人体構造学と房中術を修める際に多少学んだが、これは中々難しい問題だ。

どうせなら処女膜は自分のチンコで破りたい、でも処女セックスで絶頂してほしい。これを達成するには処女膜を破らないようにしながら性感帯の開発を行い、十分に開発

した所でセックス突入という手順を踏む必要がある。

そしてここまで趣味に走るのなら全力でやりたい。せつかくこんなにまつさらな少女がいるのだ、合わせて無知ツクスもしたい。セックスとか絶頂とか全然知らないのに身体だけは素直に反応しちゃって気持ち良さの波に翻弄されている様を存分に愛でてやりたいと思うのが人情だろう。本人の知らないうちに性感帯の開発、つまり寝ている間に悪戯調教を行うのだ。

魔法とか使えばそんな事をする必要もないのだろうが、こんな事にまで効率を求めたくはない。出来るだけ魔法の使用はしない方向で行きたい。

何せ食材は極上なのだ、最高の状態で食べるためなら下拵えに手を抜いてはいけない。

決して楽な道ではないだろう、途中でやけになる事もあるかもしれない。しかし、理想の処女セックスをするために俺は頑張ろうと思う。

何事も準備が7割

さて、割と最低な決意をしたがそのまますぐに計画を実行とはいかなかった。

傷を治した後の経過観察が必要だったのと、色々と道具を揃える必要があったからだ。昼間は執務の傍ら雨音を改めて屋敷の人間と合わせて顔を覚えさせ、夜は雨音を寝かした後に道具の材料を入手し作成を行う。幸い必要な道具はそう複雑なものでもなかったので、本で得た知識だけでも割となんとかなった。

ちなみに傷も治った事もあり雨音を風呂に入れるようになったのだが、ここでは悪戯はしていない。可能な限り性知識のない状態でXデイを迎えたかったので、ついイキリ立ちそうになる息子をpushさえつけるのに苦労した。

そして夜、ついに道具も完成し、今日から寝ている間に悪戯調教ミッションを開始する。

基本的に寝るときは一緒にベッドで寝ているので潜入する必要はない。隣で横になる雨音がしつかりと眠りについたので見計らって体を起こし、その額に手を添えて眠り

が深くなる魔法をかける。魔法は使わないと言ったな、あれは嘘だ。でも快樂上昇系は使わないからセーフ。

腕にしがみつく手を剥がしてやり仰向けに寝かせると、頬を撫でてその唇にそつと口づけを落とす。最初はカサカサでひび割れていたそれも、いまではふるふるとした感触を返し、ただ唇を合わせているだけで快樂を得られる程だ。

しばらくその感触を楽しんだあと、そつと舌で唇を裂いて口内に侵入する。何の抵抗も受けることなく中へ入るとまずは歯の一つ一つを舐め上げていき、その後は少し舌を伸ばして雨音の舌を絡めとる。寝る前に行った歯磨きのためか若干感じるハーブの風味が心地よい。

最初はなされるがままだった舌だが、無意識なのか反射によつてかだんだんと自分から絡めてきた。その健気な反応に余計気を良くして、さらに激しく絡め、吸いあげ、唾を流し込んでそれを嚙下させる。

いつまでも続けていたくなるが、息苦しいのかだんだんと鼻息も荒くなつてきている。睡眠を深くしてあるとはいえ限度がある、ここらで止めておくべきだろう。

そう思い顔を上げてみれば、やはり苦しかったのだろう。酸欠を解消するために口を広げ大きく息を吸っている。しかしよく見ると口の中では小さな舌がちろちろと揺れており、まるで居なくなつてしまった何かを求めて彷徨っているように見えた。やがて

その短い舌が必死に伸ばされたのを見て、俺は我慢出来ず再度その口内を食った。

我に返ったのは一時間程した後だった。途中休憩を挟みながらずっとキスをしてきた。キスと言うかもう口を使ったセックスと言えるレベルだ。お互いに口元と言わず周りがべとべとになっていたのでいったん綺麗にしておく。

まだまだ序盤も序盤だというのにこの反応の良さ、こいつはとんでもない才能を秘めているかもしれない。

気を取り直して次に取り掛かる。傷が治ってから新調したパジャマのボタンをはずしていき前を開ける。そして肌着をめくり上げれば、そこには処女雪の雪原のような肌と、胸に座す薄い桜色の蕾が顔をだす。まだおっぱいと言うほどの膨らみはなく、二次性徴初期に見られる乳頭の膨らみが若干見える程度。

正しくロリコンを狂わせる円錐型の魅惑のちっぴいがそこにあった。

そつと手を触れれば相変わらず肌の下に感じられる肉の感触は薄いものの、たしかに女性としての柔らかさを感じられた。傷付ける事のないように少しずつ力を入れ揉んでみると、柔らかさの中にしこりのようなものが感じられる。これがある種のおっぱいの素とも言えるものであり、これから段々と胸が膨らみ大きくなっていくのだ。

極力痛みの無いようにやわやわと揉みながらその先へと指を滑らせていく。頂点に

ある桜色の突起には触れないように、その周りを遊ぶように撫でる。

しばらく続けていると段々乳首が固くなってきた。口を近づけて舌先でゆっくりと舐め上げ、先端を転がしてやる。乳首の先がしっかりと固くなったのを確認したら、唇で挟むように吸い付き、優しくしごきあげ、また舌先で舐っていく。時間をかけ、両方の胸を同じように何度も何度もゆっくりと弄ってやる。

成長途中の胸は酷く敏感で、少しでも乱暴に扱えばすぐに痛みになっってしまうし、初めは性感帯としても弱いので例えじれたく思っても慎重に愛撫をしてやらないといけない。だがその分感度も良いので慣れれば十分に快楽を得られるようになるだろう。どうやらすでに少しずつ何かを感じてはいるようで、身じろぎしたり少し鼻についたような声が漏れ聞こえる。

傷や火傷のあった肌が再生した事でまだ感度が上がったままなのかもしれないが、それにしてもまだ一度目でこれだ。この先が楽しみな反応である。

じっくりとちっばいを楽しんだあとにはついに本丸に責め入る。ズボンとおぼんちゆをスルスルと脱がせると、ぴったりと閉じた一本筋のおまんこが目飛び込んできた。当然ここもお風呂に入れるときに見てはいるのだが、こうして改めて間近で見るとその感動も一入ひとしおである。余りの神々しさに思わず拜んでしまいたくなりそうだ。

ここも胸と同じかそれ以上に敏感な部分である。いきなり乾いた指で触れば痛みを与えてしまうので、まずはペッティングで濡らしておこう。

両足を上げさせM字に開脚すると、その間に陣取る。そうして露わになる割れ目の全貌と、その少し下にある窄まりが見える。

まだ幼く色素沈着のしていない菊門は匂いも感じさせず、淡い桃色はいつそ美しくすらあった。そういえば身の回りの世話では当然トイレも連れて行っていたが、いずれも短時間で終わっており大の方をしているような心配がなかった。その時はたいして気にも留めていなかったのだが、もしかして全て吸収されて排便をしていない可能性もあるのだろうか。いっそ今すぐこの穴をほじくって確認してやりたい気持ちに駆られるが、どうかそれは思いとどまる。いずれはそちらの開発も行いたい、まずはおまんこが優先だ。

その割れ目に手をかけて優しく開き、そつと膣口に舌を這わせてやると、そこに自分の唾液ではない湿りけを感じた。どうやら先ほどまでのキスと胸への愛撫で若干ではあるが愛液を分泌するほどに感じてしまっていたらしい。自分の愛撫でしつかりと感じていくれていたのだと思えば、這わせる舌にも力が入るといふものだ。

とはいえそこはまだ俺の指一本入るかどうかも怪しい大きさなので届く範囲も知れている。まずは入口周辺をほぐす様に満遍なく舐めあげていき、ここをじっくりと広げ

ていかなければいけない。指どころではない太さのモノを突っ込もうというのだ、しっかり広がるように伸縮性を高めてやらなくては比喻でもなく物理的に裂けてしまう。

入口を抜けて中に入ってしまったえば伸縮性も高くなり楽なのだが、膣口は構造的な問題なのかどうしても狭くなってしまう。血のおかげで滑りがよくなっただけ！なんて趣味は持ち合わせてはいないので、これはとくに重点的に行わなければいけない。

しばらく舌で入口をほぐした所で今度は指に変える。ここで登場するのがこの日のために作った新アイテム、ねつとりスライムゼリー君である。まあ所謂ローションだ。唾液だけではすぐに乾いてしまうしぬめりけも少ない。ある程度こなれてすぐに愛液が出るようであればいいが、しばらくはローションの補助が必要だろうと思ったのだ。まあ今日の様子を見ていると案外すぐにいらなくなるかもしれないが。

たっぷりとローションを手にとると、しばらくもみ合わせて人肌に温める。その後それを割れ目全体に塗りこんでいき、指で膣口をほぐしていく。膣口を撫でるように、なぞるようにすこしずつ力を加えていき、決して痛みを感じさせないようすこしずつ慣らしていく。

さて、こうして膣口の拡張も重要なのだが、ここをいじっていても女性は中々快楽を得る事はできない。特にそれに慣れていないならなおさらだ。主に女性が感じる性感帯は膣の中頃から奥にかけてであり、現状指の届く範囲では中々刺激できない。そこで

外側にある性感帯、クリトリスを責めていく。

クリトリスは一番快楽を感じやすい性感帯とも言われ、女性のチンコなどと言われたりもする。実際刺激を受けると勃起して若干であるが肥大化するのだ。特に大きな特徴としてクリトリスの快楽は伝播するらしく、クリトリスと他の箇所を同時に刺激する事で肉体が勘違いを起こし、クリトリスでない場所の刺激でも快楽を感じやすくなるという。特に体の出来上がっていないうちは快楽を感じにくいので、これを使って調教を進める予定だ。

右手で膣口をほぐしながら左手でクリトリスを刺激していく。まずは刺激を与えすぎないように親指の腹で抑え、少しだけ圧迫感を与えながらゆっくり左右に動かしてやる。強くしたり早くしたりはせずに、ただじっくりとこねくり回していく。しっかりと快楽を感じているのか、雨音の呼吸が少しずつ荒くなり、先ほどのように身じろぎ始める。

その動きで強くなってしまわないように気を付けながら刺激を続けていると、微かだが右手の指先にローションとは違う水気を感じられた。しっかりと快楽を得られている証拠だろう。

しばらくその動きを続けていると、じれったくなつたのか急に腰が少し上がりクリトリスを潰してしまった。その刺激によってか一瞬身体を硬直させ、すぐに脱力した。ど

うやら軽く絶頂してしまったらしい。

初日からこれだけ感じられるようになるとは、嬉しい誤算だ。俺は少しだけ雨音を休憩させると、再度クリトリスへの刺激を開始した。

その後も何度か軽い絶頂を迎えると膣口の方もだいぶほぐれてきて、人差し指一本程度なら入るようになってきた。そこで予定より早いGスポットへの責めを開始してみよう。

Gスポットは膣口から指の第二関節分程奥の上側にある性感帯であり、ちようどクリトリスの裏側あたりにある。つまり膣の中からクリトリス性感を刺激する事の出来る場所だ。

あまり奥に入れ過ぎて処女膜を傷つけないように気を付けつつ、圧迫するように膣壁を撫で上げる。すると内側からの刺激によってかクリトリスが少し起き上がる。何度も膣壁を押し、撫で上げ、継続的に刺激しているとクリトリスが充血するように腫れていくのがわかる。

左手でクリトリスの左右の皮を押しさえて少し奥にやれば、クリトリスを覆っていた皮が剥けてその身を屹立たせた。まるで何かを待ちわびるかのように震えるそれを、顔を近づけてそつと舐め上げてやる。

反応は劇的だった。大きく腰を持ち上げると、その腹部がびくびくと痙攣しているのが見える。右手の指も膣に締め上げられ、中が蠢ているのがよく分かる。

どうやら何度も軽く絶頂しながらも発散しきれずむしろ蓄積されていたものが、今までにない大きな快樂によって深い絶頂をもたらしたようだ。その後も数回小さな痙攣をしたあとに、快樂の波が落ち着いたのか大きく脱力した。大きすぎる快樂に晒された体は全身に朱を射し、酸素を取り入れるためその胸を艶めかしく上下させる。

少しすると完全に力が抜けてしまったのだろう、右手に感じる生暖かさに目をやればおしっこを漏らしてしまったようだ。特におしっこに対して性的興奮は覚えないので出し切った所で浄火で綺麗にしておく。

こうして雨音のような美少女を絶頂させた事に満足した俺は、はりきって調教の続きに取り掛かるのであった。うん、満足したけどそれはそれ、重要なのはこっちだからね。雨音にはまだまだイキまくってもらおうと思う。

初日であったため余計に熱が入ってしまい、結局朝日が見える頃まで耽ってしまった。べとべとになってしまった雨音の身体を浄火で清め、その服も元に戻していく。果たして雨音はどんな夢を見ていただろうか。もしもエッチな夢を見ていたのなら聞いてみたいような、あえて様子を見て居たいような複雑な気持ちだ。それともエッチな事

がわかっているから疑問に思う事もないのだろうか。気にはなるが、それは事が終わってからでもいいだろう。

雨音の状態をもとに戻したあと、自分のパンツの中を覗く。まあ見る間でもなくわかってはいたが、ギンギンに勃起したチンコから射精したかのようにカウパーが滴りべとべとのねちよねちよである。

辛うじて射精することだけは耐えきった。悪戯している間オナニーは我慢する事にしたのだ。というか雨音が来てから一度もしてないので、すでに一月近くオナ禁している。正直めちやくちや辛いのだが、ここまできたらいつそ雨音の初めてに最高の射精をしてやろうと思ひ我慢している。アーイキソ

もうすでに我慢の限界を超えて爆発してしまいそうだが、雨音が予想を超えてはるか優秀だったのできつと後少しの辛抱だと自分に言い聞かせる。肉体操作の類は完全に制御できる自信があつたのだが、肉体の若さに釣られてかどうにも乱れが出ているようだ。そのうち鍛えなおさなくては。

雨音の身体に絶頂を覚えさせ始めてから4日がたった。経過はすこぶる順調である。

キスをすれば自ら舌を絡めてくるし、胸の感度もどんどん良くなって来ている。クリトリと一緒には胸を愛撫するようになってからは特に顕著であり、そのうち胸の刺激だけでも絶頂出来るようになるだろう。

おまんこの方も順調で、もう少しで指が2本入れられるようになりそうだ。

雨音の様子はといえば、朝は起きても全身が怠いようで朝食を摂ったあとは昼過ぎまで寝かせている。本人は何かの病気かと不安がっていたが、寝てる間に全く休めていないのだから当然だ。ポーションで一気に直したぶり返しが来ているだけだから心配は無いと適当に言いくるめておいた。

後はお風呂で身体を洗ってやる際に、胸や股を洗う時に艶めかしい声を出す様になった。どうやらまだくすぐったさの延長のように感じているらしいが、しっかりと調教の成果が出ているようで満足だ。夜寝る際にも俺の腕に抱き着きながらしきりに体をこすりつけて来ており、本人にその意識はないのだろうかオナニーをしているようだ。

その際は寝たふりをしているのだが、なんとなくいけない事だと感じているのか必死に声を押さえているのがとても可愛らしく、その後の調教につい熱を入れてしまう。いじらしい雨音が悪い。

そして今日から調教の最終段階、ポルチオ性感帯の開発に着手する。ポルチオとは子宮口にある性感帯であり、子宮口の前後にスポットが広がっている。クリトリスがもつ

とも感じやすい性感帯であるならば、ポルチオは最も深く快楽を感じられる性感帯と言われている。

頭が真っ白になったあとにフワフワと飛ぶような感覚になる、らしい。当然男にはない器官なのでそれを体験する事は出来ないが、幸せ物質がドバドバ分泌されてヤバイ多幸感を得られるようだ。

雨音との処女セックスではこの絶頂に導くのが目標である。

当然子宮口という事は膣の一番奥にあり、簡単に刺激することは出来ない。雨音の体格なら指でも余裕で届くが、そこまで入れてしまうと指で処女膜を破ってしまう。

そこで用意したのが、この秘密道具その2、スライムゼリー棒だ。まあこれも別に大した物ではない、細い棒の先にビー玉サイズのスライムゼリーをくっ付けただけだ。ついでに魔力で振動する。

処女膜という名前ではあるが、実際に膜が蓋をしている訳ではなく、人によって形状は様々だが大体は真ん中に穴の開いた被膜が覆っている感じだ。雨音もこれは一緒にあり、形が変形するスライムゼリーなら穴を傷つける事無く奥へ行くことが出来るので、それでポルチオの開発をしようという訳だ。

まずはいつも通りローションを使って準備、Gスポットやクリトリスへの刺激で性感を高めていく。ポルチオは特に刺激に敏感であり、人によっては突かれると大きな痛み

を感じる程だ。急にそんな刺激を与えるつもりはないが、何にせよ下準備は慎重に行う。

しっかりと愛撫し、中をほぐし、数度軽い絶頂へ導く。感度抜群の雨音は短時間で準備が整ってしまふ。あらためてまんこをぱっくりと開き、中を確認しながらスライムゼリー棒を挿入していく。

途中処女膜で軽い抵抗感を受けるも、すぽんとすんなり奥へと通る。そのままゆつくりと膣肉をかきわけていき、やがて行き止まりに当たる。流石に奥までは見えないので魔力を通して確認するが、どうやらしっかりとたどり着いたようだ。

その後はほんの少しだけ圧迫しながら雨音の様子を見て刺激を変えていく。同時にクリトリスや乳首への刺激も行いながら、棒を回転してみたり、振動させてみたり、もう少し強く圧迫してみたりと様々だ。途中軽い絶頂を挟みながらじつくりと開発を続ける。

流石に一日でどうこうできるものでもないかと長期戦の覚悟を決めた時、それは来た。

雨音はベッドのシーツを強くつかみ、胸から腰にかけて大きく弓なりに反らし、足をピンとつま先まで伸ばした。ともすれば苦しそうに聞こえる微かな嬌声は、しかし隠しようなない快楽をにじませている。

腹部の痙攣は外からでもわかるほどで、収縮と解放をゆっくりと繰り返している。その間も刺激は止めずにいると、Gスポットへの刺激にも同時に反応してか潮吹きすらしてみせた。

その後数分に渡り快楽によるものか身体が緊張と脱力を繰り返していたが、やがて落ち着いたように完全にその力を抜いた。今までにない大きな反応であり、恐らく今のが深イキとかポルチオイキと呼ばれる物だろう。まさか一回目の子宮調教でここまでいけるとは、雨音の素質に脱帽するばかりだ。

何にせよこれで準備はおおかた整った。まだこれをしっかりと覚え込ませるために数日は必要だろうが、悲願達成はもうすぐ目の前だ。すでに痛みすら覚える程いきり立つチンコを感じながら、俺は頬が吊り上がるのを押さええられなかった。

銀髪ロリエルフをペロペロする！

いよいよ雨音のポルチオ調教も終わり、ついに決行の時は来た。連日その痴態を見せつけられて俺のチンコはもう暴発寸前だ。暴れんなよ……暴れんなよ……

そんな調子なので昼間は勃起を抑えるために意識を裂きすぎて変なミスまでする始末で、ロイドに真剣に体調の心配をされてしまった程だ。申し訳ない気持ちもあるが素直にゲロつたらまたお茶を浴びせられる事間違いないので言わない。

とはいえこれはある意味渡りに船だ、少し体調が悪いという事にして休みを取ることにした。今まで頑張ってたんだし、ま、多少はね？

更に都合が良い事に雨音もこれを真に受けている。これはあれだ、ちよつとココが腫れちゃったんで治すのを手伝ってくれないかな（ボロン）のパターンが使える奴だ。無

知ツクスの導入としては鉄板だろう。当初は性教育の勉強から、じゃあ実際にやってみようか(ボロン)のパターンを想定していたのだがここは予定を変更して流れに乗るべきだろう。

今更ながら騙す事に若干の良心の呵責を感じるものの、この少女をついに手に入れる事ができるのだという興奮の前には実に些細な事だった。

そして夕刻、とりあえず軽く夕食を済ませておく。いつもならばたべた甘えてくる雨音も、俺の体調が悪いと思っただけで何かと気遣うようにしているが、特に何か出来るわけでもないでオロオロしてる。

しかし体に引付かれない事でその感触を味会わなくてすむので、ある意味では楽になってるのが笑える所だ。その肢体の柔らかさを味知ってしまったからというものの、何気なく抱き着かれる度に夜の記憶を思い出し精神力を削られていた。完全に自業自得ではあるのだが、その辛さも全ては今日この時のために。

夕食を終え普段ならリビングでくつろぐか、風呂に入ってしまうところだが、今日は早々に部屋に戻る。雨音も少し手伝ってほしいことがあると言って一緒に部屋へ連れ

込んだ。

「体調は大丈夫ですか、ご主人様……」

ああ、それほど重い物じゃないから大丈夫だ。ただこれを治すためには雨音に手伝わってもらわないといけないんだ、頼めるか？

!!!、はい、ご主人様。雨音に出来る事でしたら、なんでも」

ん？今なんでもするって言ったよね？

相変わらず表情は薄いものの、両手を握り身を乗り出して声を上げる様は気合十分といった様子だ。なんでそんなに気合が入っているのかは謎だが、それならば存分に手伝わってもらうとしよう。

よし、では最初に服を脱いでくれ、下着まで全部だ

「わかりました」

返事から行動まで全くタイムラグも無く、まさしくスポポポンといった具合に服を脱ぎ捨てる。その後気付いたように慌てて脱いだ服を畳むのは日々の教育の成果なの

だろうけど、お前もうちよつと躊躇いとか羞恥とかないのか……いやそれは今更とも言えるし、羞恥心とかはこれから育つていくのだろう。

だが少なくとも外でこんなような事が無いように気を付けよう。そもそも外で服を脱ぐような事態もそうそうないだろうが。

室内にある魔法の光に照らされたその体は、相変わらずため息が出るような美しさだ。最近を外に出で遊んだり、十分な食事の成果もあつてかだいぶ血色もよくなつてきたように思う。

当初あつた作り物めいた美術品のような気配は薄れたが、それは決して美しさを損なうものではなく、生き生きとした活力を得て少女の魅力を一層引き立てている。無機物めいた美しさではない、生物が持つ命が放つ美しさを感じられるようになった。その美しさに優劣はないのだろうが、俺個人としては今のほうが断然好みだ。

「？」

指示に従つて脱いだ後もボケつとしてしまつていたためか、雨音が不思議そうにこちらを覗いていた。毎日見ているはずなのに全く慣れないのだから困つたものだ。早く次に移らなければ。

ああ、すまん。ちよつと見惚れていただけだ。それじゃベッドに行こうか
「えつ、あ、はい。わかりました、ご主人様」

雨音をベッドに誘導しながら、自分も服を脱いでいく。上下を脱ぎ、パンツも一気に脱ぎ捨てる。今日の所は畳むのは無しだ、もうそんな余裕は残っていない。

雨音を追ってベッドに向かえば、少女の視線は俺の股間に釘付けだった。今まで何度も一緒に風呂には入っていたが、勃起した状態は見せて来なかった。大ききといい形といい、グロテスクとしか表現しようのないコレを見れば驚くのも無理はないだろう。

「ご主人様、その、おまたの奴、いつもと全然違う……凄く腫れてる、の？」

これはチンコと言ってな、腫れている状態を勃起と言う。この状態は辛いから治すために雨音に手伝ってほしいんだ。怖いかな？

「怖くはないです。おつききて、堅そう……かっこいい。勃起、チンコ痛いんですか？」
んん？あ、ああそうだな、今は痛いくらい勃起してしまっている

今チンコ見てかっこいいって言った？

一緒に生活する中でも少し感じていたが、どうも雨音の感性はズレてるような気がする。まあ今は知識が無くて判断材料が少ないせいかもしれないが。今後の教育に関してはまず一般常識について早急に教えていこう……

「えっと、痛い時は手を当ててあげると、楽になるんですよね。たしか、痛いの痛いの、飛んでいけー。これで、合ってますか？」

アホっぽい発言に気を取られていると、すぐ近くに来ていた雨音がそつとチンコに手を添えていた。いつか何処かで見ただのだろうか、おまじないまでしている。

まるで躊躇なく行われたそれは、酷く優し気だ。腫れて痛いところを無理に刺激しないように、微かに触れる程度に留めてさすっている。

ひんやりとした少女の指が触れるたび、電流のような快楽が股間から流れる。不意打ちで行われたそれに思わず爆発しそうになるが、どうにか必死で踏み留めた。

ぐっ、それヤバっ

「あ、ごめんなさい痛かったですか？えっと、えっと、ふー、ふー」
待つて待つて的確に亀頭責めするのは止めよう

ビクビクと震えるチンコと、思わず出てしまったうめき声に痛くしてしまったと思うのだろう。そして何を考えたのか亀頭に息を吹きかけ始めたので慌てて止める。

今は微かな刺激でさえ暴発のトリガーに成りかねないのに、敏感な亀頭を責められてはたまったものではない。危なく何も知らない少女に先にいかされる所だった。

すみませんそういうのはもうちよつと後でお願いします。

「ご主人様？痛いんじゃないかと、気持ち良いのですか？なんだか凄く、切なそうなお顔をしています。大丈夫です、よく分からないけど雨音にお任せ下さい。なんとなく、雨音にもわかるんです。こうしたら、勃起チンコさん治るんですよ。あ、なんだか先っぽから透明のが出てきました。すうー、はああ。なんでしょう、なんだかとっても良い匂いがしますね……ずっと嗅いでいたくなるような」

ちよつと待つて落ち着いて段々顔を近づけてくるんじゃないやありませんダメだつてそのままじゃアツー

情けなくちよつと腰を引きながら雨音の頭を遠ざける。

一旦落ち着かせて説明しようと思ったのだが、何を思ったのか雨音は両手でチンコを

握りしめてきた。決して強い力ではない、しかし何かに突き動かされるように雨音の手は止まらない。

その小さな両手では半分ほどしか包み込めなくても、優しく全体をさすってくる。その動きに俺は思わず――

ここで負ける訳にはいかんのじゃあい!

「ひゃ、ききゃあ?!」

力技で雨音をベッドにひっくり返す。どこか熱に浮かされたように惚けた表情をしていた雨音も、これには驚いたのか素に戻っている。

どうやらご主人様の言う事が聞けない悪い奴がいるようだなあ

「ご、ごめんなさいご主人様……怒ってます?」

オコツテナイヨ

「ぴえっ、ご主人様笑顔なのに怖いですっ」

誰が怖い顔だオラ。どうやら雨音には分からせが必要なようだな

「ひゃう、謝るのでゆるして……あつ、ちゅ、んんー」

雨音の上から覆いかぶさり無理やりその唇を奪った。

急な出来事に驚いて口を開いた所ですかさず中に侵入する。

中を責めるのも慣れたものだ、小さな歯にそつて舌を這わせ、歯茎の隅まで舐め上げていく。周囲を一通り回ったら軽く舌に触れてやった後に上あごのざらついた部分をじっくりと舐め上げる。口内の性感帯の一つであり、キスの時に雨音が一番好きな場所だ。口内から脳にかけてゾクリとするような刺激を受けて、雨音の身体が微かに震える。

それは緊張によつてのものではなく、快楽によつてのものだろう。俺の身体を抑える様に添えられた手は全く力が籠つておらず、その役目を一切果たそうとしていない。

舌先でちよこちよここと雨音の舌をつついてやれば、おずおずとしながらもマネしてこちらをつついてくる。やけに可愛いこの反応は意識の無い時には見られなかったもので、つい遊ぶように弄つてしまう。

だがそれもすぐに激しい動きに代わり、舌同士を絡め合わせていく。これは無意識に毎日やっていたせいとか、その動きにぎこちなさは感じられない。

雨音の口内で舌を絡め合わせ、その根元のもう一つの性感帯も刺激してやりながら、そのまま吸い上げて無理やりこちらの口内に引きずり込む。所在無げに彷徨う舌を絡

め、唇で挟み、しごき上げる。

「い、ひゅじん、ひやまあ……」

こぼすなよ

少し顔を離すと、もつともつとせがむ様に雨音が追ってくるが、それを緩く押し留める。

なんで? どうして? とでも言いたげな切なくも蕩けた表情で、呂律のまわらないまま雨音は情けない声を上げた。それに取り合わず俺は口内に唾液を溜めるとそれを雨音の口へと流し込む。

量は多くないものの、少女の小さな口にはそうもいかないようで、こぼれないようそれを嚙下していく。

相手に唾液を飲ませるなど意味の無い行為だ。別に快樂を得られるわけでもなく、生殖に必要な訳でもない。むしろ相手を貶めるような行為ですらあるそれは、しかしこれは自分の物だと強烈に主張しているようで、自分の中にある暗い欲望を確かに満たしてくれる。

上から口を封じたまま、幾度となく口内へ流し込む。先ほどの命令を真面目に聞いて

いるのか、雨音は零さぬよう何度も懸命に飲み込んでいく。やがて自らの中の欲望が満たされ顔を上げると、下から微かな声が届いた。

「もつと……」

ん？何か言ったか？

「もつと、下さい。ご主人様の、もつと下さい。雨音にもつと、ご主人様を感じさせて、下さい……」

お前は……！

これがどんな意味なのかもわかっていないくせに、ただそれでもとせがむ姿はなんていじらしいのだろうか。

三度覆いかぶさりその口内を蹂躪し、しかし今度は下にも手を伸ばしていく。左手で触れる胸はすでに乳首を立たせており、ささやかでありながら一生懸命にその存在を主張しているようだ。乳房への愛撫はそこそこに、その登頂へと指を伸ばし微かに触れるだけで小さく鼻を鳴らして身をよじる。

意識があるためふだんより興奮しているのか、多少痛みを感じそうなくらいの強さで摘まみ上げててもなお快樂の波に酔いしれている。

右手をまんこへと這わせれば、そこはすでに溢れ出た愛液でとろとろに濡れすぼっているのがわかる。事前にローションは準備していたが、これでは出番はなさそうだ。そのままゆつくりと割れ目を撫で上げ上下させながら、少しずつクリトリスへの刺激を増やしていく。

今の雨音はちつぱいとまんこへの刺激でどんどん快楽を送られながらも、口はキスでふさがれているため満足に息を吸い込めない状態だ。気持ち良さと酸欠でほとんど何も考えられないような状態のはず。

ここで膣口へと指を差し入れ、Gスポットとクリトリスを押しつぶすように圧迫してやる。普段なら痛みがまさるようなそれも、今ならその痛みすら快楽に感じられるだろう。

雨音は予想通り大きく腰を跳ね上げ、絶頂を迎えた。

勢いで舌を噛んでしまわぬように左手の指を口内に差し入れながら、右手はゆつくりとクリトリスへの刺激を続けて絶頂を持続させ、その快楽に呆けて身を震わせる様を眺める。

やはり美少女が快楽に悶える様は良いものだ。本来なら汚らわしくさえ感じさせるようなそれさえも美しく感じさせてくれる。それを手伝っているのが自分であるというのも、格別な優越感のようなものを抱くことが出来る。

今は手すら触れていないというのに、先ほどからチンコからカウパーの分泌が止まらない。果たしてこの痴態を自らのチンコで導けたのならどれだけの快感を得られるのか、きつと最高の射精を味わえるに違いないと改めて確信する。

雨音は意識がある状態での絶頂に混乱しているようだが、それによつて気絶するような様子はない。体は既に何度も深い絶頂を味わつており、今更一度や二度の絶頂で耐えられないというような事はないだろう。今日は俺が満足するまで付き合つて貰わなくてはならないのだ、この程度でバテてもらつては困る。

それでも初めての感覚に戸惑っているのだろう、やや上体をふらつかせながらこちらに腕を伸ばしてくる。絶頂の感覚が怖かったのかと思つて体を支えてやれば、飛びつくように胸元へと抱き着いてきた。

どうした、怖かつたか？心配はいらない、その感覚は気持ち良い、深い快樂の感覚だ。怖がらなくてもいい

「いいえ、違うんです。違うんですご主人様。とても気持ち良かったのです、意識が真っ白になつてしまうような感覚で、確かに一瞬怖かつたけど、でもそれよりも大きな気持ち良さも感じられました」

しかしそう言う雨音に先ほどまでの快樂に呆けたような表情はなく、むしろ何かを堪えるように眉根を寄せている。

「でもダメなんです、気持ち良ければ気持ち良くなるほど、それ以上に、胸がきゅってなつて、苦しんです。苦しくて、悲しくて、切なくて……ううん、これは寂しい、寂しいんですご主人様。今だってこんなにいっぱいご主人様を感じているはずなのに、胸の奥が、お腹の奥が寂しいよう寂しいようつて、今にも泣きだしてしまひそうで……ごめんなさい、ごめんなさい、今はご主人様を助けてあげなくちやいけないのに、雨音の体がおかしくなつてしまつたんです」

ごめんなさいと、そう言つて身を寄せる雨音は、どうしても埋める事の出来ない隙間を無くすように必死にしがみ付いて来た。

セックスなんて知らないはずの少女が、その身に男を求める様は果たして雌としての本能なのだろうか。

本当は後数回は軽く絶頂させてからと思つていたのだが、これ以上待たせるのは逆に酷だろう。そもそも、俺自身がこれ以上我慢できる気がしない。ただそれでも、せめて

乱暴にはならないように、この少女を極力傷つける事のないように。

熱に浮かされた頭で、ただそれだけは明確に意識出来た。

大丈夫だ雨音。このチンコの腫れも、雨音のその寂しさも、一緒に治す方法がある。だから俺に任せてくれるな？

「はい、主人様……雨音を助けて下さい」

向かい合うように座り、雨音を膝の上に乗せる。体位としては体面座位だ。雨音の体重を支える程度なら楽勝だし、これなら多少自分で調整もできるだろう。

チンコの上に跨がせ、ゆっくりとその腰を落としていく。雨音のぴったりと閉じたスジマンは、今は自ら男を迎えるためか微かにその口を開けてみだらに涎をたらしている。改めてその愛液を切っ先に塗りたくり、その内へと突き入れた。

今日まで丹念にほぐした膣口だが、亀頭を咥え込むには本当にぎりぎり、事前に準備をしていなかったならまず無理だったろう。それだけの体格差がある。だがそれも今はしつかりと亀頭を飲み込み、その内へと包み込んでいた。

とりあえず難所であった膣口はクリアした、一番太い部分である亀頭さえ入れればあとは問題なく飲み込めるだろう。無論、全ては無理であるが。

そして後はこの儂い守りである処女膜を突き破るのみだ。そうして雨音に痛みと、その先にある快樂を刻み込む。

雨音、俺の背中に手をまわして抱き着いておくといい。これからお前の処女膜を破るが、それには痛みが伴うだろう。我慢できなければ背中に爪を立てても構わない。お前の痛みを、俺も受け取ろう

「はいっ、ご主人様」
いくぞ

答える雨音の声に余裕はない。当然だろう、初めての行為である上に明らかに自らの身体に不釣り合いである物を突き付けられているのだ。知識が無かろうが、これがどれだけ無茶な行いであるかはわかるだろう。

だが俺は止めるつもりはない。もとよりここで止めるようなら最初から手を出す事はなかった。

せめて痛みは一瞬ですむようと、雨音の身体を抱えなおし、一気に腰を突き入れた。背中に回されていた手が強く握りこまれ、しかし予想していた痛みは来なかった。

俺のチンコはどうか中ほどまで埋まりその狭い膣内を埋め尽くした。そのまま体

がずり落ちて奥を潰してしまわないよう、その体を強く抱きとめる。

それに安心したのか、破瓜の痛みにも身を強張らせていた雨音が力を抜くのがわかった。

別に我慢しなくてよかつたんだぞ、背中

「いいえご主人様、違ふんです。確かに痛かつたけど、そんなにも我慢できない程ではなかつたです。雨音は痛いのが慣れっこですから。でも、もしも我慢できないほど痛かつたとしても、ひっかく事はなかつたですよ」

雨音はそこで一度言葉を切ると、まっすぐにこちらを見つめてきた。確かに無理して痛みを耐えているような様子はなく、むしろより深くつながれた事への安心感、満足感のほうが強そうにさえ見える。

「だって、この痛みだつてご主人様が下さつたものですから。だからこの痛みは雨音だけのもので、それは例えご主人様でも分けてなんてあげません」

っ、お前は、どうしてそういちいち可愛い事を言うかね

せつかく負担をかけないようと大人しくしてやれば、まるで煽るかのようこちら
の理性をかき乱してくる。まったく、そんなに欲しいなら好きにだけくれてやろうじや
ないか。

抱きしめていた腕を片方は尻に回して体を支え、もう片方は手前に回してクリトリス
へ刺激を与える。未だ興奮したままの状態ならば多少強めに刺激してやつても問題な
いだろう。同時に腰を前後へ揺らし、ピストンではなくぐりぐりとポルチオへの刺激を
開始してやる。

急な刺激に驚いたのか、与えられる快楽に歓喜してか、その小さい膣をぎゅうぎゅう
とチンコを締め付けてくる。暫く調教で慣らしていたとはいえ処女の膣は固く、強すぎ
る締め付けでチンコで感じるのは快楽よりも痛みがまさるほどだ。

だがしかし、早くも快楽に甘い色を滲ませ始めたその声が、息遣いが、確かに腕のな
かにある少女の体温が、いやがおうにも精神の興奮を高め続ける。

「ごひゅじんしゃま、ごひゅじんひやま、さっきの、さっきのして、んー！んー！」
ほら、もつと上向いて舌出せ

「はあ、あつ、んちゅ、んう……これしゅきい」

どうやらさつきので余程お気に召したらしく、行為の名も知らないままに必死にこちらに唇を突き出してキスをせがんでくる。舌を出させてそれに応えてやれば、顔を蕩けさせながら吸い付いてきた。

上も下も両方同時に繋がり、お互いに相手を感じあう。その体の一番奥深くまで己を突き入れ、ようやくこの少女を、雨音を自分のものに出来たのだと実感し、安堵している己を感じる。

思えば、なぜ俺はこんなにも雨音に拘っているのだろうか。

切欠は初めに感じた違和感だったが、その正体も直ぐに知れた。

その悲惨な境遇に同情したのは確かだが、程度は違えど悲惨な過去を持つ者なんて前世にも今世にも幾人も見てきたはずだ。

ある程度体が回復してからはその面倒はメイドに任せる事だつて出来たのに、自分で世話をする事を選んだ。

セックスの相手だつて好きに選べるのに、趣味もあつたとはいえいちいち手間をかけて、自分が辛いのを我慢してまで慣れるのを待った。

ここまで相手を傷つけないようにする必要なんて、別になかつたはずだ。

まるで痛みを与えてしまつて嫌われるのを恐れたみたいに――

そこまで考えて、やつと自分の考えに気が付いた。それは感情と言うべきか、想いと言うべきか。何にせよ、まさか今更こんなものに自分が振り回されていたのかと思うと、もういつそ笑うしかないのではないか。

く、つくくく、ははっ、あほだな俺は

「んあ、どうかしたんですか、ご主人様？」

急に笑い出したのを不審におもつたのだろう、胸に寄りかかりながら雨音が顔を上げた。なんとなくその髪を撫でる。さらりと滑る感触が、高ぶつた神経を落ち着けるようで酷く心地よい。

ああ、急にすまんな。別にたいした事じゃないよ。ただ俺は雨音が好きだったという事に今更気付いただけだ。うん、好きだよ雨音、愛してる

「ふえ、ぴゃ、ダメっんううううううう」

耳元でなんとなく感情を吐露したら、急に雨音が嬌声を響かせ身を仰け反らせた。しかもだいぶ深く絶頂したようで、全身をビクビクとさせたまま中々戻ってこない。

だ、大丈夫か？ そんなに強い刺激を与えた覚えもないんだが。知らないうちに良い所に入ってしまったんだらうか。

しばらく動きを止めてやり待っていると、復活したらしい雨音ががばりと身を起こし猛然とこちらにキスを仕掛けてきた。同時に先ほどの絶頂で美味い事ほぐれたのか、締め付けるばかりだった膣がゆるゆると意思を持つかのように動き出し、チンコに強烈な快楽を与えてくる。

「ん、しゅきつ、ご主人さま、雨音もしゅき、ごしゅじんしゃまだいしゅきでつ、ちゅつ、んあ、ちゅき……」

ちよま、わかつてるから、知ってるから落ち着けつ、んつ、うおあ

急に壊れた機械のようにしゅきしゅき言いながら迫ってくる雨音を受け止める。もう絶対に離さないと言わんばかりにきつく首に腕を回してキスの雨を降らしつつ、腰も円を描くようなグラインドでこちらを搾り取りにきており、その腰使いは熟練の娼婦に

も劣るまい。これを完全に本能のみでやっているのだから恐ろしい。

急激な刺激に晒されて俺のチンコもはや限界だ、雨音の細い腰を掴むとピストン運動に切り替える。

はあ、はあ、雨音いくぞ！お前に全部出してやる！お前の全部、俺の物にしてやる！だからお前もいけ！

「ひゃい！ひゃい！、雨音は全部全部ご主人様のものですっ、イキますから、雨音の全部、受け取って下さいっ」

ぐう、あああ！

「あああつ、熱つ、んんんんんう」

もはや自分が何を叫んでいたのかもよく分からなかった。

ただ腰の先から灼熱のマグマのように熱い精子が出て行き、チンコから雨音の子宮に注ぎ込んでいく感覚だけを感じる。どくどくと、びゆくびゆくと、1ヶ月以上ため込んだ特濃精子をひたすら叩き込む。

意識が明滅するような快感に灼かれながら、腕の中で同じように絶頂に身を焦がす雨音を感じて深い満足感を覚える。半ば冗談のような立てた目標だったが、これは完璧に

達成したと言えるだろう。

一分近く続いたかに思うような射精を終えるが、雨音は未だに深く深く絶頂したままだ。未だに硬さを失わない剛直を、時折締め付けながら包み込んでいる。それは絶頂による膣の収縮と解放だというのは知っているのだが、まるでもつと欲しいとチンコに媚びせがんでいるようにすら感じる。

こちらは一発だけで終わる気は毛頭ないのでせいぜいその期待に応えてやろうと思う。そのまま抜かずに雨音を横たえたと、正常位でゆっくりとピストンを再開した。

幾度も押し寄せる快樂の波に目をきつく瞑り耐えていた雨音だが、この動きには驚いたのか驚愕の表情でこちらを見つめてきた。まさかこのまま続くとは思っていなかったのだろうか。

だがそのまさかだ。俺はいやらしい笑顔が浮かんでいる事を自覚しながら、そつと触れるだけの口づけを落とした。それを受けた雨音は何かを諦めたような、しかしどこまでも幸せそうな笑顔で俺の動きを受け入れた。

この後途中で休憩を挟みつつ昼も夜もなくまぐわいは続き、いい加減姿を見せない俺を訝しんだロイドに発見されるまで、三日三晩繋がりを続けたのだった。

閑話 これが私のご主人様

「おや、アマネさん。ちようど良い所に。クリスマス様を見ませんでしたか？」

「あ、ロイドさん。ご主人様なら先ほどちよつと散歩に行つてくると言つて外に行かれましたよ」

「おつと、入れ違いになつてしまいましたか。仕方ありませんね」

「何か御用事ですか？」

「ええ、来期の予算の相談を早めにと思つたのですが、まあ急ぎではありませんので明日にしましょう」

主人であるクリスマス様を探して屋敷を歩いていると、その偏愛している奴隷——余りに過保護な様は妾か愛人か——であるアマネさんが歩いてきた。

特注の小さなエプロンドレスを着てメイドに混じつて働く姿はとても愛らしく、今で

は屋敷で働く従者全員に妹のようにかわいがられている。業務中を除けばほぼ常にと
言つて良いほど一緒にいるのだが、その傍らにいつもの姿は見えない。

胸の前で辞書を抱えているのです。自由時間のようだが、珍しく別行動をしている
らしい。

一応と思つて声をかけてみれば、探し人は散歩に出かけたとのこと。すでにそれなりに
遅い時間なのだが、あの方は関係無しに急にふらりと見えなくなる事がある。探そう
にもあの方にとつて散歩の範囲は領全域に及ぶので通常の方法ではやるだけ無駄だ。

そもそも領主であるのに護衛も付けずにフラフラするのは止めてほしい。必要の有
無ではなく、体裁として必要なことなのだ。そのくせ奴隷であるアマネさんには常に影
を数人付けているのだから、全く過保護も極まっている。

さて、こうなつてはもう今日中に見つけるのは難しいだろう。やりかけの書類はすつ
ぱり諦め、明日改めて持つていくとしよう。

書類を持つて執務室に戻ろうとすると、後ろから服の裾を軽く引つ張られた。振り返
ればアマネさんの紅い瞳と目が合う。それをとても綺麗だと思つと同時に、余りにも澄
んだその瞳は底の見えない深い深い水面をのぞき込んでいるようで、言いようのない恐
怖も感じてしまう。もつともそんな事はおくびにも出さないが。

「どうしましたか？」

「えと、引っ張ってしまつてごめんなさい。もし時間があれば少しお話を聞かせてほしいの」

「お話、ですか」

「うん、ご主人様のお話、聞いてみたいの」

なるほど、たしかにその話をするのなら本人がいない今がちようど良いだろう。連れて来られてからほとんど一緒に過ごしているだろう少女だが、一緒にいるからこそ不思議に思う事も多いだろう。

あの方は聞けばなんでも答えてくれるが、余りにもそれが当たり前のように荒唐無稽な事をさも当たり前の様に話すので理解の追いつかない事も多い。特に経験の浅い少女にとっては主人が語る話と、最近触れる事の多くなつた一般人から聞く話との乖離に混乱することも多いに違いない。

しかもあれだけわかりやすく好意を寄せているのだ、好きな相手をもつとよく知りたいう気持ちもあるのかもしれない。まあどのような理由があるにせよ、特にそれを断るような理由もない。

「わかりました、いいですよ。それではお茶でも飲みながらお話ししましょうか」
「はいっ、ありがとうございます」

花咲くように笑う少女を連れ、近くの談話室へと向かった。

クリストファー・エディルナ・フォン・ヘルゲン。

私にとって彼がどういう存在であるかを語るのは、酷く難しい。雇用主である主人であり、仕事を教わった上司であり、気の置けない友であり、目を離すと何をしでかすかわからない弟のようであり……やはり私の知る言葉で言い表す事はできそうにない。

深く尊敬しているのに気やすく付き合う事ができる。とても畏れているのに、ともすれば友人といえど不敬になるような事も出来てしまう。矛盾しているような事ができてしまうのは、偏に彼の懐の深さが原因だろう。あるいは、無関心さと言い換えても良いのかもしれない。

高位貴族の魔力量すら比較にならない、人知を超えたと言えるような力を持つ彼は、しかし平民に対してすらとても寛容だ。ふらりと居なくなつたと思えば街の酒場で冒

険者と酒を飲み交わしていたり、高級娼館に遊びに来ていた商人と直接商談を始めてたなんて事もよくあった。

これが普通の貴族であればまず絶対にあり得ない事だ。少なくとも私の実家の家族たちがそうする姿はとてもしゃないが思い浮かべられない。高い魔力を持つ者ほど、魔力無しの平民の事など気にも留めなくなるし、少し目障りに思えば殺してしまうなんて事も少なくない。

ましてや酔った上での喧嘩で殴り掛かれたとなれば一族郎党皆殺しの憂き目にあつてもおかしくないのに、彼とくれば腰が入ってないなどと言つて格闘技の指導を始める始末。後日その殴り掛かった冒険者がランクを上げたというのは笑い話にしていいものか。

とにかく、彼は自分に対する事に関しては本当に寛容で、多少馬鹿にされたようなくらいでは簡単に聞き流す。その調子では他の貴族に舐められてしまうと苦言を呈しても、その程度で侮るような相手なら容易いものだと言うばかりだった。唯一ウォルダーさん相手には「それを口にしたら……戦争だろうがっ！」と言ひ争いをしている姿を見た事があるが、あれは一種のじゃれあいだろう。

怖そうな見た目に反して怒る事など稀な彼だが、自分自身以外の事となると一転して

苛烈な姿勢をとる。自らの領地、正確には自分の物だと認識したものでろうか。それに對して危害を加えてくる相手に對しては徹底して容赦がない。

領内が多少潤ってくるやと傭兵団や他領から流れてきた元農民達が、野盜まがいの行為を働いたと話があれば二日と立たずに殲滅していた。直接見た事はないが殊更残酷に殺して見せ、わざと生き残らせた数名に噂を流させて、一時はヘルゲン領には賊を殺して食べる鬼が住むとまで言われるようになったほどだ。

逆にそんな噂などわざと撒かれたまやかしだと嘯き、他所で名を響かせた悪党共を呼び寄せる事もあつたが、それすらも数度同じように処理してやれば一層噂は本当だと恐れられるようになった。どうやら自らの手勢を使ってまでその噂を流していたようで、最終的にはほとんどごろつきの類は寄り付かなくなり、安全性の高くなった街道には護衛を雇う金のない商人達の姿が多くなつた。

今では街道のそこかしこに旅の守り神として誰かが作つた鬼の像が見受けられ、商人たちがお供え物をしていく姿が見られる。果たしてどこまで考へて行つたのか知らないが、本人は「顔を隠すために被つたナマハゲの面が祀られてて草生える」と言つて笑つていた。今でこそ領内に馴染んでいるうまむす○達もとい馬人族だが、仮に彼女達が先に略奪を成功させていたならば今の姿を見る事は叶わなかつただろう。

そんな二面性を持つように見える彼だが、個人として付き合うにはそう難しくなかった。仕事に関しては厳しかったが、それ以外の面では身分差など感じさせないものであったし、雑に扱っても笑ってくれる気安さがあった。

突飛な行動や破天荒な思い付きに付き合わされるのは大変だが、それも普通にしていれば一生見る事も叶わないだろう光景を見られると思えば安いものだ。街を全て焼き尽くすような大火を放ち、そこにある汚物だけを焼き払って見せたり、大地を動かして街の情景を一変させたり、普通は建てるのに数か月はかかるであろう建物をものの数分で作ったり、もうちよつと近いほうが良いなど言つて川を近づけてみたり、大魔法どころか神の奇跡とでも言えるような事ばかりだった。

そのくせ本人はそんな事鼻にかけるような様子もなく、こちらを友人のように扱つてくる。遠慮しているのとつまらなそうな顔をするが、逆にあけすけな物言いには楽しそうに返してくる。

最初の頃はそれでも身分も実力も比べるべくもないほど高い彼に遠慮する事もあったが、彼の起こす騒動に巻き込まれ続ける内にだんだんと遠慮するような余裕も無くなつていき、そうこうしている内に今のような奇妙な関係が出来上がっていた。

そんな風に彼と接しているのは何も自分だけではない。今館の中のそれぞれの職で中心を担う古参と呼ばれている者たちだ。たかが5年程だというのに古参と呼ばれて

いるメンバーは、そういう嵐のような時期を共に過ごした仲であり、このヘルゲン領を立て直したという強い連帯感がある。

領を立て直していく中で、彼がいなければとつかかりもなく崩れていただろうが、きつと彼だけでもどこかで躓いていただろう。そう考えると、今こうして穏やかに話を出来ている事こそが本当の奇跡の様に思えてくる。それくらい激動の5年間だった。

「とまあざっくりとですが、私から見たクリスマス様というのはこのような感じでしょうか」「ご主人様は、なんていうか……昔からご主人様だったんですね」

「ええ、初めて会った時からあんな感じでしたよ。もともと、今の方がずっと楽しそうにしていますけどね」

「そうなんですか？」

「ええ、それはもう」

貴女に出会ってから、とは口にする事が出来なかった。それはなんとというか些細なプライドというか、率直に言えば嫉妬なのだろう。私は目の前の少女に対して嫉妬を抱

いている事を、自覚していた。もっともそれ以上に感謝しているのだが。

主人であるクリスマス様は、表情豊かな方だ。喜怒哀楽ははっきりとしているし、おどけたような言い回しも多い。それが素なのか作っているのかは判断がつかないが、その奥にはとても冷めた感情がある事を知っている。ふとした言葉の陰に、笑った表情の裏に、普通なら感じられる熱のようなものがない。

まるで世の中の全てが無価値な物であるかのように、もしも明日世界が滅びてもそれは残念だと言いで済ませてしまいたいような、そんな危うさを感じさせる。その原因はわからないが、付き合いの長い者ほどその陰に気付いていた。古参メンバーの中でも付き合い合いの濃かった私は、特に。

そしてそんな陰に気付きながらも何もすることの出来ない無力感にさいなまれていた。そうにかその感情を動かそうと大げさな事をすることもあったが、彼は表面的には驚き嘆くことはあっても、やはりその内面を揺らすことはなかった。

そう、この少女を連れてくるまでは。

初めウォルダーさんに話を聞いた時は半信半疑であったが、実際に少女を連れてきた

クリスマス様を見た時は本当に驚いた。少女を見るまなざしが、氣遣う仕草が、そこに込められた感情が、何もかもが違っていた。

私は表面を必至に取り繕って見せたものの、咄嗟にお嬢様と呼んでしまったのは主人を変えた少女に思わず感情を高ぶらせてしまったからだろうか。

仮にもしも今、世界が滅びそうになったならば、きつとクリスマス様はこの少女のためだけに世界を救ってみせるだろう。

どんな出合いが、切欠があつたのかはわからない。しかし自分たちが数年かかっても成しえなかつた事を、たつた数日で成し遂げてしまった少女に私を含め古参メンバーは大小あるが嫉妬してしまった。

そしてそれ以上に、主人をより良い方向へと変化させてくれた少女に感謝している。

もやもやとした嫉妬心も、実際にこの少女と過ごすうちに小さくなっているのがわかる。この少女に、アマネさんになら主人を任せても大丈夫だと思えるのだ。きつと私以外のメンバーも同じ気持ちだろう。少しだけ聞く事になったその辛い過去を知り、この子自身にも幸せになつてほしいという気持ちもある。

お茶を口にしてそんな内心の葛藤を隠していると、アマネさんが突然立ち上がった。

「ロイドさんごめんなさい、ご主人様が帰ってきたみたいなので雨音は帰ります。お話聞かせてくれてありがとうございます」

「いえ、構いませんよ。ではアマネさんお気をつけて」

私には全くわからないが、この少女には何か感じられるものがあるようだ。勢いよく頭を下げて礼を言うと言葉から駆け出そうとし、思い出したように早歩きに変えて部屋から出ていく。どうやら見えない所でもメイド長の教えを律儀に守っているらしい。本当にこういうところが可愛らしくてとてもじゃないが憎めない。

さて、昔話をしたらなんだかもっと語りたくなってきた。久しぶりにメンバーで集まって酒を飲むのも良いだろう。確か書斎にクリスマス様が隠していた秘蔵の酒があったはずだ。彼と少女の話をつまみに飲めば、きつと格別に美味いに違いない。

私はカップに残った僅かな茶を飲み干すと誰から声をかけようかと考えながら部屋を出た。

戦闘メイドは漢のロマン

早いもので雨音が来てから2ヶ月が経った。

一年を通して温かな気候の続くこの地方だが、この時期はそれなりに涼やかな風が吹く。

大きな収穫期を終えて国への税も問題なく収め終わると、領内はちよつとした収穫祭のようなもので賑う。元々は蔵にある備蓄食料を新しい物に入れ替えるため、古い物を領民へと振舞っていたものが祭りとして定着したものであるらしい。

色々あつて一時期は開催されなかつたが、ここ数年は領内の活気も増してきており以前よりも賑やかになつてきているようだ。

特に3年程前からは馬人族達の周年レースをこの時期に合わせて開催しているため、街の住人だけでなく村や領外からも人が訪れる様になつている。

特に商人たちは目敏いもので色々と外で仕込んだ物を持ち込んでここで売つては、帰

りに村を回つて余剰の農作物を安く仕入れて歸つてゐるようだ。

ピエールと共に行つた農業改革によりヘルゲン領の農作物の収穫量は右肩上がりだ。耕作地はそれほど増えていないが、より効率の良い栽培方法が取り入れられ、少ない人員でも成果を出せている。最近はようやく成功にこぎつけた堆肥の利用も広めており、今後は更に生産性が向上していくはずだ。

問題は人手不足であり、これはもつと時間がたたなければどうしようもない。ベルタ砦に向かわされていた男衆は返したものの、それはマイナスがプラマイゼロになつたに過ぎないのだ。とはいえずでに改善の兆しは見えている。

まず生活に余裕が生まれた事で出生率が上がった。やはり心に余裕が出来なければ必要とはいえず子供を作るのは難しい。税が軽くなり生活水準が目に見えて上がり、将来に希望が持てるようになった影響だろう。

そして食べ物が増えた事による栄養状態の改善と衛生環境の改善により子供の死亡率が大きく減少した。衛生面に関しては出来れば村にも大衆浴場を設置したかったが流石に無理があつたため、とりあえず井戸の数を増やして身綺麗にする事を徹底させた。

これにより免疫力を強くし、汚れを介した感染症を防ぐ事で小さなうちに亡くなるの

をだいぶ抑えられるようになった。3人生まれても成人するのは1人だなんて効率が悪すぎる、途中成長するまでにもコストはかかっているのだから全員スクスク成長してもらってしつかりとコスト回収してくれないと困る。

ついでに教会に金を出し、村に簡素ではあるがお堂も建てて回復魔法を使える神官も誘致した。

別に神官でなくても回復魔法は使えるが、教会が基礎魔法の呪文やらコツやらを秘匿しているらしく習得者は少ないようだ。確かに魔法はイメージが重要になるので人体構造をそれなりに理解していないと難しいのだろう。

後は魔法協会との利権争いも色々絡んでいるようだが。まあとにかく多少の怪我なら魔法で治せるし、出産の際にも保険になるので必要な出費だろう。

立て直しのための初期費用は大分かかってしまったが、今後10年20年先を見れば安いものだ。今は馬人族が酪農を始め、近いうちに牛や馬を労働力として役立てる事ができるようになる。

そうなればもともと土地の持つ力は強いので、魔領の脅威さえなんとかなれば数十年先には一大穀倉地帯にだってなれるだろう。そこまでやる気はないが。

さて、商人の移動が多くなると護衛としてついてくる冒険者の数も多くなる。丹念な

ごみ掃除のかがあつて野盜の類は少ないヘルゲン領だが、魔獣や魔物の住処である魔領に対する最前線でもある。

その中でも緩衝地帯と呼べるベルタ砦に近付けば当然魔物との遭遇も増えるため護衛の類は必要だ。

なので金のない商人はアルトの街から近場の村へ、金のある商人は護衛を雇つてベルタ砦へと流れる。前線である故魔物や森から取れる希少な素材が多く持ち込まれ、魔石の産出も多い。

一時期は砦崩壊の危機も噂されていたが、持ち直してからは盤石の姿勢を見せて街への被害はほとんど出ない程になっている。今までも身の危険を冒してでも来る商人はいたが、ある程度の安全が確保できるのなら当然その数は増え、今ではギルドへとひっきりなしに依頼が貼りだされているようだ。

そうなると大変なのが冒険者ギルドだ。何せ商人が増えれば依頼が増え、依頼が増えれば冒険者も増え、冒険者が増えれば素材の持ち込みも増える。元々前線であつた事から配置されていた職員はおおむね優秀だったが、急激に増加していくこれらの状況を捌ききれぬはずもない。

これに見事対応したのが一見気弱に見えたギルドマスター……ではなく、本部から来たという辣腕秘書だつた。この秘書さんは俺が冒険者ギルドを立て替えて凄い事に

なつたと聞いて、とりあえず確認のためにと本部から送られて来たそうなのだが、その後急速に進むベルタ砦の変化に対応するために気弱なギルマスの尻を蹴り上げながら対応していたところ今では影のギルドマスターだと周囲から完全に認識されている。

実際に領主として何度も話をしているが、その才覚は本物だ。基本的に対談は領主館で行うのだが、ギルマスが秘書を引き連れてくるというよりは秘書さんがギルマスを引き連れていると言ったような感じだ。

それでいいのかギルマスと思つたが本人はそこまで気にした風もなかった。出来る部下に仕事を任せ、私はその責任を取る。それがベストだと思つていますし、有能な部下を持って幸せですよ。と本人は言つていた。

その意見には大いに賛成するところなのだが、その内本当にギルマスの座を奪われても知らんぞ。

こうして急速に発展しつつあるベルタ砦だが、そろそろちゃんとした代官を置かないといけないだろう。今まではあくまで砦が主体であり街は付随程度のものだつたが、今では冒険者や商人を相手にした宿やらなんやらが一気に増えて来ている。

とりあえず何かあればグライドが対応してくれているが本職は騎士であり砦の防備が任務なのだ、あまり雑事に手を煩わせるわけにもいかない。まずは正式な代官として指名して、その部下として何人か文官を遣らう。

騎士爵の叙任申請もだしてやれば箔もついてやりやすくなるだろう。うまい事魔領の開拓まで成功させれば子爵や男爵だって夢ではない、是非頑張ってほしい。なんなら辺境伯交代してもいいぞ。

発展著しいベルタの街に対してアルトの街はといえば、大した特産品もないのに商人の多い街となっていた。品質のよい茶葉が取れる様になってきたがまだ少量を試して流している程度でまだまだ認知されるには遠い。最近では馬人族のレースが大人気ではあるのだが、それはあくまで見世物であり売り物ではない。

ベルタの街からは魔物素材が、周囲の村からは新鮮な野菜が持ち込まれて売られているがそれを仕入れるならそれぞれに直接仕入れに向かったほうが良い。

ではアルトの街で何をするかといえば、外で仕入れた物を売りに来ているのだ。領主館前に作った広場も今では休日になると沢山の露店で賑うようになっていた。特に祭りの時期になればそれなりに広く作った広場が埋まってしまふほどだ。

これは恐らく他領と違い、徴収するのは場所代だけで売れた物に対しては税金を取っていないからだろう。特に駆け出し商人にとっては売れた金額が全て自分の物になるというのは大きいはずだ。

まあそこで得たお金もまた領内で別の物を仕込んだり、酒場や娼館で使ったり、競馬

で使つたりとほとんど領地に還元されているのでこちらも無理に峯る必要はない。稼いだ金を気持ちよく使つて貰えればそれが一番である。またここで商売をしようと思つてもらえるだろうし、そう思つてもらえるようわざわざ街の商売に口出ししてまでクオリティに気を使つているのだから。

高級娼館の娘達に話を聞いてみればおおむね好評であるようで、中々太い客を掴んだ娘もいるようだ。その調子で自分の幸せをつかむついでに情報を掴んできてほしい。

現状特産品と呼べるほどではないが、街で作られる武具や工芸品も中々評判が良いらしい。これらは初期に拉致、もといヘッドハンティングしてきた色々問題があつて腕はあるのに芽のでなかつた職人達によるものだ。最近では弟子を取るひとも増えて来ており、工業区も中々の賑わいを見せている。

もともとが街から逃げてしまつた職人の補充と、将来的に弟子を育ててもらつて人材を増やそうと思ひ来てもらつた人たちなので、ほぼ想定通りに来ていると言える。

しかし予想以上に、ベルタ砦から回ってくる魔物素材を用いた武具や、思い付きで作らせてみた道具の売れ行きが良かったりしてようで、近い将来にはアルトブランドとして売り出していくことも可能かもしれない。

内政チートの鉄板だろうという思い付きで作らせてみたりパーシと、遊び方冊子付の

トランプも売り上げを伸ばしているようだ。この世界にもチェスのような盤上遊戯はあるが、なにせ駒は高いし知識も必要で庶民が手を出すには厳しい。トランプのような物もあるようだが、きちんと体裁を整えて美麗なイラストを入れた物は無かったようで、どちらも商人を中心に売れており比較的富裕層の手に渡っているようだ。

すぐに粗悪なコピー品は広がるだろうが、それで広く認知してもらえるようになればこちらも嬉しい。ある程度金を持った層なら品質の高い物や、『本物』を求めるものだ。今作らせている工房には特殊な刻印を入れさせているので、上手く流行ってくればこれもブランド商品としてそのうち大きな利益を生む様になるかもしれない。量産は中々出来ないだけに手間のかかる販促は他に任せて需要の上澄みだけを掬う事が出来ればなお美味しい。

部下に作らせている石鹸や美容品、堆肥に関しては今の所外向けの販売はしていない。量産体制も出来ていないので数の確保が難しいのだ。材料の確保と人手の確保、その上で一定の品質を保てるようある程度の教育を施さなければいけないし、しばらくは産業スパイも警戒する必要がある。将来的には量産して販売していきたいが、まずは外交での手土産に使う分が精々だろう。

ともかく暫くは労働力の確保とそれをスムーズに運用するための体制作りの準備が必要になる。幸い領全体での経営は軌道に乗っているので後は変に躓くことなく進む

事ができればそれなりの経済規模には発展していけると予想している。調子にのつて内政チートごっこをして急激に色々推し進めようとしても、必ずどこかでその歪がでてくる。今でさえ割と面倒なのに、必要も無くこれ以上抱える気にはなれない。

それにより、今はやらなくてはいけない事がある。

そう、メイド雨音の観察である。

書庫の掃除を任された雨音が掃除用具を抱えて室内をちよこちよこ動いている。身に纏うメイド服は雨音のサイズに合わせた特注品だ。

服飾関係の技術も魔道具の活躍によりそれなりに発達しているこの世界、簡単な既製品程度なら比較的安価なので平民にも手を出せる価格で売られているのだが、こういった制服のようなものや貴族のドレス等は別で、基本的にはオーダーメイドの品となる。

屋敷で働かせているメイド達は俺の趣味で一律メイド服を着せているので、作成を依頼している地元の服飾店に型紙はあるだろうが流石に子供向けの物はない。そこできくつかのパターンで新しく作ってもらっており、今はお仕事用の基本的なクラシカルタイプのメイド服を着ている。

エプロンやホワイトブリムはフリルを多めにあしらっており、見た目にも華やかな仕

上がりになっていく。

この仕様は他のメイドの服も一緒に、とても可愛らしいとおおむね好評を頂いている。ただ中には汚れる事前提の服なのに洗濯するのが大変だというもつともな意見も頂いており、そちらは黙殺している。だって可愛い方が見てて楽しいし。

雨音は時折ずり落ちそうになるホワイトブリムに苦戦しながらも、棚から書籍を取り出し、中を固く絞った雑巾でふき、書籍のホコリを落とす、棚が乾燥したら戻す、と慎重に作業を行っている。本人も最近字が読めるようになり、読書にも挑戦しているからか扱いても一層丁寧だ。

これは背後で仁王立ちしている俺も満足の、後方ご主人様面である。

棚の上部を掃除するためか踏み台を持ってきて作業に移る。棚の奥までふこうとすると中々届かないのか、踏み台でつま先立ちになってしまふ。台自体は天板もそれなりに広いのでそこまで危険ではないが、踏み台の上でつま先立ちの姿勢になれば当然スカートの中が見えそうになる訳で。

スカートの裾はそれなりに長く、普段はまず中が見えるような事にはならない。だが、今、この瞬間ならば、可能性は高い！

もうちよい、もうちよいで見えそ……

「何が見えそうだっていうのよこの変態が！」
ぎやあー！

前傾姿勢を通り越してほぼ腕立ての姿勢になっていた俺の頭に鞘に入った短剣が叩きつけられた。ついでに背中も踏みつけられている。割と俺に対して遠慮の無い人間の多いこの屋敷だが、ここまでやる奴は一人……いや、一人だけではないがそんなに多くない。まあこの声は彼女だろう。

何しやがるメイド長！いきなり人を踏みつけた上に頭を叩き割ろうとしやがって、今結構本気だったろ！

「何してるのかはこっちのセリフよ！鞘じゃなくて本体で叩くべきだったわ」

そう言って手に持った短剣をポンポンと玩んでいるのは我が屋敷のメイド長である。短剣での戦闘に加え暗器全般を使いこなせる上にその華やかな容姿も相まって、これはメイドになってもらうしかない！とスカウトした相手である。

しかもやらせてみたらメイド技能もあつという間に習得してしまい、その上その技術も高いものだからメイド長へと任命してやった。先輩メイドもいるにはいたのだが、い

ずれも街や村から出てきた奉公人ばかりであり、ぎりぎり最低限の教養しか持ち合わせていなかった。

それなり以上の経験を積んだメイド達はパツパ達と一緒にワイバーンにやられたり、その後のごたごたで屋敷を離れたりとまとめ役を出来るような人物が居なかった。人員の補充も後回しにしていたのもあり、これ幸いと彼女に任せてみたのだ。

今ではメイド達をピシバシ鍛える名実ともにメイド長として活躍してくれている。そのうち適性のある娘を見繕って戦闘メイド部隊を作るのがひそかな夢である。

ちよつと君ご主人様に対して殺意高すぎない？

「殺しても死なないような奴がよく言うわよ」

15歳、辺境伯です。体の丈夫さには自信あります

「体が丈夫なだけで刃が通らないようなら鎧なんていらなのよ。あんたの皮を剥いでなめしたら軽くて丈夫な防具になるんじゃないかしら？」

お前精神状態おかしいよ……やはり暗殺者とかやってると思考が荒んでくるのだから。こわいなーとづまりすところ

何を隠そうこのメイド長、元暗殺者である。領の経営がようやく立ち直り始めた頃の

こと、やけに他領から間者が送り込まれてきていた時期があり、その時メイド長を始め暗殺者の方も結構送り込まれてきたのだ。

何か探りたいことがあったのか、俺を殺すことでヘルゲン領を奪う算段でもついていたのか、今となっては理由はわからない。

だいたい仕掛けたトラップに引つかかって退場していったのだが、数名の腕利きは正解ルートを見つけ出し俺の自室に辿り着く者もいた。そういった実力者は小一時間エディルナ家のアピールポイントを伝え、エディルナ家に仕える事で更なるキャリアアップが見込める事を猛ブッシュ。

結果的にほとんどの相手を迎え入れる事に成功し、我が領の隠密部隊ONIWABA Nは大幅に強化された。

メイド長もそんな暗殺者の中の一人であり、その華やかな見た目と裏工作よりも直接戦闘向きの適正の高さを評価してメイドになってもらったという訳だ。

引き抜きの鍵はやはり充実した福利厚生と将来的な発展性の高さから現実的なベアスアツプランを提示出来たためだろうか。よその労働環境は知らないが、我が家ではしっかりと働きに見合った報酬を約束しているのだ（激務ではないとは言っていない）

そんなアホなやり取りを彼女としていれば、流石に気付いたのか雨音が近付いてきて

いた。

「ご主人様に、メイド長。どうかしましたか？ご主人様はそんなところに寝そべっているとお召し物が汚れてしまいますよ」

「ああ、雨音。仕事の邪魔をしましてしまって悪いわね。貴女に仕事を割り振ってから気づいたけれど、棚の上のほうは厳しいですよ。だから手伝おうかと思つて。因みにこの馬鹿は気配殺して貴女のパンツ覗こうとしていただけよ」

おいバカ止めろ、なんで言つちやうんだよ。というか気配消してたのによく気付いたな

「普段なら気付かなかつたでしょうけどね。さっきは不埒な気配が駄々洩れだったわよ」

ぐぬぬ、不覚をとつたか

「なーにがぐぬぬよ、あんたも少しは領主としての自覚有る行動をとってほしいわね」
「えっと、ご主人様は雨音のパンツが見たかったですか？」

雨音は未だに伏せたままの俺の顔の前にしゃがみ込むと、少しだけスカートをまくり上げてその中を見せて来た。

細いながらも柔らかな太ももの奥に輝く純白のシヨーツ、そして柔らかな恥丘を包み込んで曲線を描く魅惑のクロツチ部分。普段であれば見る事の叶わないスカート中、掃除で動いたからだろう、うつすらと汗を浮かべいつそう艶やかに見える桃源郷がそこにあった。ベネ！

「あつ、こらバカ。見せなくていいの！そういう事ははしたないからしちや駄目よ」
「でも雨音はご主人様になら見られても大丈夫ですよ？」

「大丈夫か大丈夫じゃないか、ではないの。やはり淑女教育を急ぐべきね……」

「そうだぞ雨音、こういうのはな見えそうで見えないのがたまに見えちゃうから燃えるんだ。普段見えないものがふとした拍子に見えてしまうチラリズムというものも必要なんだよ。もちろん積極的に見せてくれるのも嬉しいが、人はパンのみにて生くるに非ず、色々なシュチエーションが大事なんだ。パンツだけに

「なるほど、奥が深いのですね」

「あー！話をややこしくするんじゃないわよ！しかもこの子はなんか変に納得しちやつてるし。いいからあんたはさっさと執務に戻りな、さい！」

ひでぶっ

メイド長の見事なサッカーボールキックを食らい廊下に蹴りだされると、目の前で書庫の扉が勢いよく閉まった。仕方がない、ここはおとなしく引き下がるとしよう。雨音のパンツを見れたおかげでヤル気も出たので、さっさと仕事を終わらせてしまおう。

今夜はミニスカメイド服でご奉仕プレイに決まりだなと心に決め、俺は執務室へと向かった。

陽射しの中のアマネ

おーい、雨音。居るかー？

休憩時間を過ぎても現れない雨音を探し、俺は書庫を訪れた。

先日書庫掃除を任された後、メイド長の手伝いの申し出をできれば一人でやりたいと断ったそうだ。

もともとメイドと言っても役職についている訳でもなく、メイド服を着せているのも俺の趣味なので実質ただのお手伝いだ。メイド長も無理にどうこうする気もなく好きにやらせようと思っただけ、しばらくはそのまま書庫掃除を任される事になったらいい。

雨音には他にも色々教えている最中なのであまり時間も取れず、書庫全てを掃除し終えるには多少期間が必要になるだろう。

個人としてはそれなりの所蔵があるとはいえ、流石の書庫の広さはたかが知れている。雨音の姿はすぐに見つけられた。

部屋の一面、普段は本の状態保持のため厚いカーテンが閉められた大窓。その窓も今は換気のために開け放たれ、柔らかな日差しと風が注いでいる。

その窓の下、大きめの椅子に腰かけたまま雨音は静かに眠っていた。傍らの机には読みかけの本が置かれており、おおかた休憩時間に読み始めたが日差しの暖かさに誘われて眠ってしまったのだろう。

昨夜もベッドの上で激しい運動に励んだので無理もないか（意味深）雨音の体力を考えればもっと手加減するべきだとはわかっているのだが、本人もスイッチが入るとその辺無視して求めてくるので加減が難しい。

小さな子供が体力の限界まで遊んでしまい、突然糸の切れたように眠ってしまうのに似ているかもしれない。

何にせよそろそろ午後の鍛錬の時間だ。まだ体力作りのための走り込みがメインだが、基礎だからこそ毎日の継続が重要になる。少し可哀想だが起こしてしまおう。

さて、やはり眠り姫を起こすにはキスが鉄板か。まあ残念ながら俺のビジュアルは王子様には程遠いのだが、ほら美女と野獣とかあるし、多少はね。 1 1 4 5 1 4 1 9 1 9

！

傍らに跪き、そつと手を取る。白魚のような手、とてもいいのだろうか。ミリスが持つてきてはあれこれ使用していく美容品の効果によるものか、はたまた単純に年齢によるものか、最近は掃除や洗濯等で使用しているはずなのにその手には全く傷も見えない。

手のひらですらぶにぶにとした感触を返し、自分の硬質な手のひらと比べると本当に同じ部位なのかと疑問に思う程だ。

同じ女性にとつても眩しいものであるらしく、一度体術の訓練で投げ飛ばした時腕に青あざを作ってしまった、それを発見したメイド長を筆頭とした館の女性陣に俺がフルボッコにされたのも記憶に新しい。

暫くその感触を楽しみつつ、その手の甲に口づけを落とす。手に平よりも敏感に感じ取れる唇ですら、その肌にざらつき一つ感じる事はない。目を凝らしてみても産毛の一つも見当たらず、そういえば雨音の身体でムダ毛を見た記憶もない事に思い当たる。

エルフという種族がそういうものなのか、雨音が特殊なのかはわからないが、生物としての違いのような物を感じられる。それが神秘的に感じられ、それを穢すような感覚にまた興奮を覚えてしまうのだが。

手の甲に落とした唇から、そのまま腕のほうに少しだけ舐め上げてみる。普通ならくすぐったいと思うのだが、特に反応は見えない。仕方ないので上体を起こし頬に手を添

えると、今度は唇へとそれを落とした。

中に舌を入れるようなことはせず、唇を押し当て、少しだけ食んでみたりとたつぷり30秒ほど感触を楽しむ。流石に起きただろうと顔を上げて見れば、未だに眠りこけるお姫様がそこにいた。起きないんかい。

どうにも思つたより眠りが深いようだ。どうしたものかと数秒思案するが、すぐに良い考えを思いつく。

そうだ、悪戯しよう。

今回の悪戯は眠りを深くする魔法の使用も無しだ。途中で邪魔されても嫌なので書庫の鍵もしつかりとかけておく。ふふ、そうそうメイド長に邪魔などさせんよ。

まずは椅子の前に正座して正面から眺める。椅子に座る雨音はお行儀よく膝を合わせており、そのスカートの中が見えるようなことはない。

こういった所はあまり注意してこなかったもので、恐らくメイド長はじめ周囲の女性陣による淑女教育の賜物であろう。是非ともこの調子で立派なレディへと育てて欲しい。それでは、いただきます。

心のなかで手を合わせ、ゆつくりとスカートをまくっていく。だが全てまくってはい

けない、膝よりも少し上くらいで留めておく。下からお目見えしたのは白のニーハイに包まれたしなやかでほっそりとした足だ。

年齢に対してもまだ細いように感じるが、これでもだいたいぶ肉がついてきたものだ。個人的に太ももはムチつとしたほうが好きなので、訓練に關しても下半身の強化をメインにしている。

ゆくゆくはニーハイの口の部分にぶにつと肉が乗る感じに育ってほしい。いや、俺がそう育てると心に決めている。雨音育成計画最重要事項の一つだ。

ふくらはぎの方から手を這わせ、その肉付きを堪能していく。すべすべとしたニーハイに包まれたそれは、少女らしい瑞々しい弾力を返してくれる。もちろん柔らかさも十分に感じられるが、しっかりと筋肉のついてきている証拠だろう。

やはり体質によるものなのか、栄養の吸収効率が極端に良いようで、筋肉の付きや骨密度の強度など驚くほどの速さで成長している。

その割に身長が伸びないのは本人の資質によるもののだろうか。ここは是非小さいままでもいい。

やがて太ももの方にまで至ると、少しだけ強めに揉んでみる。こちらもふくらはぎと同じようにしっかりと筋肉の付いた感触が返ってくるが、よりいっそう肉の柔らかさを感じられた。

おもむろにその膝を左右に割ると、その間に顔を挟み込む。両側から顔を圧迫するようになると、ニーハイのつるつるした質感と、太もものむにむにした感触に挟まれ、まさしく至福の感覚を味合うことができた。

このニーハイ、ほとんどナイロンの合成繊維の質感なのだが、なんでも一部の虫型モンスターの吐き出す糸を使用したもので、モンスターシルクと呼ばれ市場に出回っているらしい。

繁殖に成功している所もあるそうで、こういった所が関係して服飾技術に関しては前世にそう劣らないレベルの物も作られているようだ。やはりモンスターは増える有効資源。

しばらくニーハイの感触を楽しんだ後は、ずずいと顔を前に進め生の太もものに挟まれる位置へと向かう。当然そこまでいけば雨音のおマンコに顔を埋めるような形になるが、当然躊躇う要素は一つもない。

むしろ積極的に鼻先を押し付け大きく息を吸い込んだ。んー、ナイススメル！

左右から頬を圧迫する太ももは、やはり薄く汗に濡れていたのかしっとりとした感触を伝えてくる。そのせいか、より肌が吸い付いてくるようでその感触が病みつきになってしまっそうだ。

当然同じように汗で蒸れた秘部は普段よりも濃密な匂いを内包し、布越しでありなが

ら、いや布越しであるからこそなのか、雄の本能を刺激する香りを伝えてくる。二度三度、大きく深呼吸するように繰り返すたび、肺に、脳内に雨音の匂いが充満していくのを感じる。

陰部というのは排泄器官がある以上どうしてもいやな匂いというがあるはずなのだが、雨音に閉じてはそれがほとんど感じられない。ただひたすら純粹に、雨音の匂いだけに満たされていく。

流石にここまでしたら起きたかな？起きてない？そう。

一度顔を抜いて確認してみるが、その呼吸も特に乱れておらず起きてしまったような感じは見受けられない。ならば我はこの道を征くのみ。再びスカートの中へと潜入する。

程よい位置にポジションを定めると、今度はショーツ越しにマンコへと舌を這わせる。口の中に唾液をためて、それを塗りたくるように舐めまわしていくと、すぐに中にあるスジマンが浮かび上がってきた。

幾度となく俺のチンコを受け入れていながらその一本筋は広がることなく、そのくせ中はどうも柔らかくなりだんだんと深く飲み込めるようになってきている。

最初は半分も入らなかつたはずのチンコが、最近では7割近くまで入ってしまった。腹ポコ状態だ。

内臓が心配になるレベルなのだが、本人は気持ちよさそうに喘いでいるので気にしない事にした。

急に尻尾が生えてきて、実はエルフじゃなくてサキユバスだったんですと言われても驚かないぞ俺は。

筋全体を舐め上げながら、クリトリスへも鼻先を押し付け刺激していく。度重なる調教の成果か、入口付近だけでも十分に快楽を得られるようになっていく。雨音はすぐに俺の唾液以外の汁を溢れさせてきた。

にじみ出てくる愛液をなめとりながら、じつくりと愛撫を続ける。上から聞こえてくる寝息にも、むずがるような声音と、快楽による吐息が混ざってきている。

やがてクリトリスを軽く吸い上げた拍子に、雨音の身体が震え、太ももに強く頭を挟まれた。どうやら今の刺激で軽く絶頂してしまったようだ。

布越しだけの刺激で絶頂に導けた事に満足感を覚えつつ立ち上がる。雨音はすこしだけ息を荒くしているものの、いまだ目は覚ましていないようだ。当初は起こそうとしていたはずだが、こうして起こさずに悪戯に成功するとなんだかこれで良いような気がしてきた。

俺は雨音の服を元にもどし、下着の汚れも魔法で綺麗にすると、眠る雨音をそのままに書庫を後にするのだった。

おい、雨音。居るかー？（小声）

翌日、同じように休憩時間を過ぎても来ない雨音を探して書庫に入る。鍵かけヨシツ！

果たして雨音は、昨日と同じように窓際の椅子に腰かけ眠りについていた。うむ、計画通り。

あれから雨音が目を覚まして訓練を開始したのは1時間程経ってからの事だった。寝坊して遅れてしまったことを詫びながらしよんぼりする雨音に、先ほどまで悪戯していた事などおくびにも出さずにペナルティを課す。

普段の走り込みに加えて数キロの装備を持たせての持久走だ。ほんの数か月前にはスプーンを持つことすらできなかつたというのに、今では息を切らしながらも走り切ってしまうのだから大したものだ。

それも常人よりもはるかに高性能な体組織の成せる業だろう。基本的に貧弱な人間とは比べるべくもなく、恐らくは獣人族並の基礎能力の高さだ。

このペースで行けば近いうちに自分の魔力にも耐えられるようになるだろうし、魔力を解放できれば今と比較にならない程の身体能力に跳ね上がるだろう。

そんなこんなで夕刻まで肉体を苛め抜き、夜はベッドの上で更に責め続けた。そんなれば当然少し寝たくらいで体力を回復しきれはるはずもなく、こうしてまたお昼寝をしてしまうだろうという算段だったのだ。

つまりは今日も悪戯したかったという訳だ！

別にベッドの上でする日に不満なんて全く無いのだが、それはそれとして寝てる間に悪戯するのは楽しいよね。今日もじっくり楽しんでいきたいと思う。

まずはしっかりと寝ているのを確認するように、サラリとその銀系の髪を撫でていく。窓から注ぐ陽光を反射するする髪にはエンジェルリングが輝いており、まるで本物の天使を彷彿とさせるほどだ。

どれだけ指を通してままったく絡まる事はなく、水をすくよりも抵抗を感じさせる事はない。その手触りは特級の絹よりも上質で、どれだけ触っていても飽きを感じさせない程だ。

事実休みの日に本を読む雨音を膝に乗せ、その髪を撫でているだけで1日が終わった事がある。その話をすれば呆れられるやら羨ましがられるで反応は様々だったが、絶対誰でもそうなるだろうと確信している。まあ誰もにやらせるつもりはないが。

このままずっと撫でていたくなる気持ちをもぐつとこらえ、手を離す。そのまま肩に手を添えて、頭頂部に、額に、頬に、口づけを落としていく。そのまま鼻先にキスした後、今日は口にはいかず横に逸れる。

少しだけ横髪をかき上げると、そこからびよこんと飛び出す長い耳に吸い付いた。

エルフの耳は性感帯という風潮が一部界限では有名だが、この世界では残念ながら当てはまらないらしい。しかし感覚器官なので敏感ではあるらしく、意識のある時に触るととてもくすぐったがりすぐに逃げ出してしまふ。

それを追いかけるのも楽しいのだが、せっかくなので今日はじっくりと楽しませてもらおうと思う。

まずはその尖った葉先に唇を落とし、縁にそって這わせていく。根本まで来たら今度は舌を添わせ、再度葉先に向かって戻っていく。反対側の耳は手を添わせ、全体をやりわりと揉んでやる。やはりくすぐったいのか雨音が首を揺らす、当然逃がすはずもない。

耳の先に辿り着くと、今度はその先つぼのほうを口の中に含んでみる。感触は人種の

物とそれほど差は無く、軟骨のような触感が返ってくる。そのまま口内に含んでいき、舌で舐めてみたり、吸い付いてみたり、中で折り曲げて見たりと色々遊んでみる。

ついに耳を全て口内に含むと、舌を内部へと侵入させていく。

耳の構造の凸凹に沿って舌を這わせ、その穴の中へと進む。普段から外気に晒されており、口の中や腔の中のように湿り気を帯びた粘膜のような生物学的ないやらしさは感じさせないはずなのに酷く興奮している自分を自覚する。

舌の届く限りを丹念に舐め上げていると、まるで秘部に奉仕をしているような感覚になる。

このままでは耳を見ただけで勃起する変態になってしまいそうだ。

片耳を隅々まで舐めつくしてやると、ゆつくりと顔を離す。舌先から耳へと唾液の橋が出来てしまい、それがこの少女の耳を犯しつくした証拠のようで更に興奮を煽る。

そして間をおかずに反対の耳にむしゃぶりつき、同じように犯していく。やはり逃げようと頭を振るが、逃がさないように胸の中に軽く抱きとめる。

耳を食みながら、今度は胸への愛撫を始める。痛みのないように頭頂部はあまり刺激しないように、優しく揉んでいく。

エプロンの横から手を入れて揉んではいるのだが、メイド服の厚めの生地が邪魔されていまいち感触を楽しめない。多少膨らみ始めているとはいえ、まだまだ薄い事には変

わりない。

やはり服の上からでは満足のいく感触を得る事は難しそうだ。服もワンピースタイプであり、背中側が空くようになっていたので無理に中に手を入れる事は出来ない。

仕方がないので今回は諦めるしかないだろう。今度は前開きタイプの物も作らせようと固く決心する。

そうなる次は下だ。手探りでスカートの中に手を入れて、足の付け根の方を探っていく。すぐにたどり着いたパンティーのクロッチ部分は、すでに大量の愛液によりべちやべちやに濡れていた。

どうやら耳舐めでしつかりと感じてくれていたらしい。こうして少しずつ少女を花開かせていく事に、言いようのない征服感を感じさせられる。この愛らしい少女の淫らな一面を知っているのは自分だけだと、仄暗い独占欲を満たされる。

それは恋とか愛とかいう綺麗な感情とは程遠い、どちらかといえば執着心に近い感情ではあるのだが、自分が抱くものとしては妥当な感情であるだろう。雨音には悪いが、こんな奴に買われてしまった不運を恨んでほしい。

その濡れ具合からすでに前戯は不要と判断し、すぐにパンツの中に手を滑り込ませる。そのまま筋をなぞるように押し開き、膣口へと指を伸ばした。

その感触にか雨音が喉を晒して鼻を鳴らすが、未だに起きる様子はない。寝てるとい

うか、殆ど気絶している状態に近いのだろうか。そういえば今日起きてからずっとフラフラしていたなと思ひ起こす。

流星に昨日はやり過ぎたと反省するものの、そこで手を止める事はしない。

入口付近で指先へと丁寧な愛液を塗り付け、そのまま中へと押し入れていく。今では指一本くらいなら軽く飲み込めるようになったそこは、さして抵抗も感じさせずその内へ誘い込む。

そのくせ中に入れば周り中からやわやわと締め付けてきて、緩さなどは全く感じさせないのだからいやらしい。今も入っているのは指だというのに、奥へ奥へと誘うように収縮している。

その誘いを断ち切りながら、少し奥あたりで指を止めると上部をこすり上げてGスポットへの刺激を開始する。同時に外側からも親指を使つてクリトリスをやわく潰してやる。

すると調教によつてすっかり快楽を受け入れるのに慣れ切った少女の身体はすぐに絶頂へと導かれた。

雨音が先ほどよりも大きくおとがいをそらし嬌声を漏らす。足をピンと伸ばして小さく震えるように絶頂しており、昨日よりも深く絶頂してしまったらしい。

このまま耳舐めと一緒に絶頂を繰り返していけば、いずれは耳だけでいさせる事も可

能になるかもしれない。

少して絶頂が収まったのを確認すると、乱れた服を戻し色々と証拠隠滅をして部屋を出た。

——おい、雨音。居るかー？

心の中で呼びかけるが返事はない。ヨシッ！

今日も今日とて悪戯日和だ。陽射のなかで眠る雨音に静かに近づく。

そう、またなんだ。すまない。昨日やり過ぎたと反省したと言ったな？あれは嘘だ。あの後二日連続で寝過ごしてしまったと落ち込む雨音に同じようにペナルティを課し、夜もねちっこく責め抜いた。ついムラつとしてヤツた、今は満足している。

とはいえ流石に雨音に罪悪感を与えたままにするのも可哀想なので今日で最後にするつもりだ。たぶん、おそろく、めいびー。

雨音の頬に手を添え、俯いている顔を上げさせる。寝顔はどうも安らかとは言えず、何やら眉根を寄せているようにみえる。もしかしたら夢の中で誰かに悪戯されているのかもしれない。くそつ、誰だか知らないがぶつ飛ばしてやる！

だが残念ながら夢の中には入っていけないので現実世界で対抗する事にする。そのまま唇を奪い、口内へと舌を這わす。それに敏感に反応した雨音は自ら積極的に舌を絡めに来た。

どうも雨音はディープキスが好きなようで、起きている時にするとこちらの頭に手をまわしてまで吸い付いてきて離れない。特にスイッチが入ってしまったときは酷い物で、剥がそうとしても足まで使ってしがみ付き徹底抗戦の構えである。

喋ろうにも口を開けば口内を蹂躪されるので、もう諦めて満足するまで付き合うしかない。唾液の交換が特にお気に入りらしく、全てを吸いつくさんとする様子は獲物に張り付くタコのようなようだ。

その内こちらの精気を吸い出すようになるんじゃないかと恐々としている。

そんな訳で無意識でも口内への刺激には反射的に対応してしまうのだろう。流石に起きている時に比べれば緩やかだが、しっかりとこちらの舌使いにも応えてきている。

ゆるゆると揺れる舌を吸い上げ、根元を舐め回し、ほぞを撫で上げ、上あごを刺激していく。すっかりと口内の性感帯も開発され、もう少しでキスだけの絶頂も迎えられそうな勢いだ。

とはいえ今日はこちらは本来の目的ではない。程よくほぐれたあたりで舌を引き抜く。お互いの舌に架かる唾液のブリッジが陽光に反射して光るが、それも一瞬で途切れ

る。

急に相手の居なくなってしまうた雨音の舌が、寂しそうに中空を彷徨っているがここは我慢。メインディッシュの準備に取り掛かる。

そう、今日はこのまま本番まで行くつもりなのだ。

まずはスカートを大きくまくり上げ、足を割って中に入る。悪戯からの本番にあたつて一番の障害だったのがパンツの存在だ。腰を浮かせてもらう訳にもいかなないので脱がせるのに苦勞する。

最初はずらして挿入も考えたのだが、あれは入れてる時にパンツの存在が気になって集中できないし、ピストンしていると擦れて痛いのであまりやりたくはないのだ。

ではどうするのか、一晩考え俺はたった一つの冴えたやり方を思いついた。

そう、紐。パンだ。

当然普通のパンツに飾り紐が付いたものではなく、サイドで結んで履く？ やつである。これならば外すのも簡単だろう。

今日の着替えの下着をこっそりと入れ替えておいたので抜かりはない。というか履き方がわからなかった雨音に俺が履かせてやったので間違いない。自分で履かせて自分で脱がせるというのも中々乙なものではなからうか。

という訳で太ももの奥に見えるのはセンターに小さなリボンをあしらった可愛らし

いものだ。しかも秘部はしっかりと隠れるものの、鼠径部は見えちゃう超攻め攻めローライズである。後ろから見たら半分ケツが見えてるレベル。

そう長いキスではなかったはずだが、しっかりと感じていたようでスジにそって染みが出てくるのが確認できる。

サイドで結んでいる紐を解き、ゆっくりと前面を剥がしていく。少しスジに食い込んでいた部分に若干の抵抗を感じながら、その前面を剥がし終える。

毎夜のように見ているはずなのに、このパンツを脱がせる瞬間というのは童貞の頃と変わらぬ興奮を感じるのは何故なのだろうか。単純にこの行為が好きなのか、それとも雨音が相手だからなのか、今の所他の人間で試す気にはならないが。

現れた綺麗なスジマンをひとしきり愛でると、ゆっくりと舌先を押し入れていく。やはり感じるのは雨音の味ばかりで、汗のしょっぱさは感じるのに垢などの老廃物やおしっこ臭さのような物をほとんど感じない。

むしろ錯覚だとはわかつているのだが、その愛液などは甘さを感じさせるほどで、まさしく華からこぼれ落ちる蜜のようだ。

時折クリトリスへの刺激を混ぜながら溢れてくる愛蜜をすすっていると、すっかり準備ができたようで膣口が呼吸に合わせてぱくぱくと口を開閉させている。

それを見ればもう我慢はできない。自らも下を脱ぎ捨て、痛いほど張り詰めたチンコ

を取り出す。連日悪戯した夜にも精を放っているはずなのに、未だに本番において萎えた事など一度もない。

幾度この少女の身体を貪ろうとも、まるで尽きぬ精力に我が事ながら呆れかえる程だ。負担をかけていると理解していながら、それでもと求めてしまう情欲の炎に身を焼かれる。でもそれを際限なく受け入れてしまう雨音さんにも責任はあると思います。

そんなズブズブな関係に、悪くないと思つてしまつているのだから処置なしだ。もしも将来、この少女が自分の元から旅立つていく日が来るとしたら、果たして自分は笑顔で見送る事ができるだろうか。出来ないだろうな。きっと自分に縛り付けようとしてしまふに違いない。

しかし、それを良しとしない自分もいる。まあそんな事は未来の自分に任せ、今はこの時を存分に楽しもうと意識を変える。

雨音の膝裏に腕を回し、そのまま上に持ち上げていきまんぐりがえしの姿勢に近づける。日々の柔軟により柔らかかさの増した少女の身体は、それほど無理なくその姿勢を可能にする。

椅子のクッションに身を沈ませながら、すこしだけ体がずり落ちて腰を突き出すような姿勢になる。それがまるで早く入れて欲しいとせがんでいるように見えて、より逸物が滾っていくのを感じる。

どうにか片手でその体を固定すると、雨音のマンコに狙いを定めて腰を落としていく。反り返ったチンコを片手で矯正しながらあてがえば、ようやく待つていたものが来てくれたと言わんばかりにするりと亀頭を飲み込んでいった。

雨音の膣はそれだけで歓喜し、涙を流す様に愛液を滴らせ、より奥へと誘い込むように蠢いている。その最奥へと一気に突き入れたいという気持ちをおさえ、ことさらゆつくりと進めていく。

上体を起こしているため普段の正常位とはまた違った刺激があり、気を抜けばすぐにも達してしまいそうだ。しかしそれは雨音も同じようで、まだ大して動いてもいないのに呼吸を荒くしている。

やがて半分程が中に入ると、残り僅かな距離を一気に突き入れ、雨音の最奥、その子宮を突き上げた。

「つんひゆう、え？おお？なに、これ、ごひゅじんさま？なんでえ、おちんちんでえ……?!」

流星に今の衝撃で起きたのだろう。寝起きでまったく状況がわからないまま、チンコが入っている事だけはわかったらしい。目を白黒させたままこちらを見上げている。

しかし俺はそれには答えずに、無言でピストンを開始した。

「おつ、ほつ、ま、つてえ、なんでしえつくしゆ、あつ、らめ、おく、おくう……！」

意識は急激な快楽に混乱しながらも、体は関係無しにそれを受けて入れていく。

奥に突きこまれるたびに弱く絶頂を感じているらしく、すこしでも衝撃から逃げようと腰をひこうとしているが、椅子ごとその体を抱きかかえて一切の身動きを封じているのでそれも出来ない。

ただただなだれ込んでくる快楽の波に、押し流される事しかできはしない。

「あつ、あつ、だめつ、ごしゆじん、しゃまつ、これ深い、深すぎてつ、怖い、よつ。それに、うえが、ぞりぞりつて、あひつ、んくうううう」

体位のせいで反り返ったチンコの力りが普段よりも深く膣壁を削る。挿入の際にもGスポットを突き上げるように入っていくためか、雨音は絶頂と同時に激しく潮を吹いた。

その温かさを下腹部に感じながら、一層ピストンの速度を速めていく。上から釘打ち

ピストンで子宮へとチンコを叩きつけ、自らの射精感を高める。

膣内の動きも最初のゆるゆると奥へと誘う動きから、絶頂により男根を根元から絞り上げるような激しい動きへと変わっている。

まだ孕む事もできないくせに、早く早くと精子をせがむ様は子種を吸い取る淫魔のようだ。そんなに急かさなくても、溺れるほどぐれてやるといふのに。

雨音、そろそろいくぞ！もつと深くまで叩き落してやるからなっ

「ひゃい、しゅじんさま、きてえ、あまねにいつぱい、くださいー！」

最後に一際深く、その奥へと腰を叩きつける。そのままの勢いでぐりぐりと子宮を押しつぶし、子宮口へと鈴口をあてがい、精子を噴出する。

ドクドクと音が聞こえそうなほどに流し込まれるそれを、雨音の子宮口が零すまいと吸い付いてくる。しかし大量に吐き出された精子は少女の子宮には収まりきらず、すぐに中から逆流してしまう。

最後の衝撃か、射精の感覚を感じてか、雨音もまた深くボルチオ絶頂に達する。

高く響きそうになる嬌声を抑えるため、ほんの一かけらだけ残った理性を使ってその頭を抱き寄せて胸に押し付ける。

雨音もその意図を察してか、服を噛んで響きそうになる声を押し殺した。お互いに強烈な射精と絶頂を終え、ただ二人の荒い息遣いだけが部屋に響く。

少し落ち着いた所で身体を入れ替えてやり、俺が椅子に座ってその上に雨音を乗せる。中はまだ繋がったままで、体面座位に移行した形だ。お互いにこの姿勢だと体格差があつても比較的らくにキスが出来るので気に入っている。

俺のチンコはまだまだ硬さを失っておらず、雨音の紅い瞳にも怪しい光が浮かびどうやらスイッチが入ってしまったようだ。

そのまま言葉も無くどちらからともなく口づけを交わし、より深く、貪るようにまじわっていく。

結局そのまま抜かずに3発ほど中に注ぎ込み、その日の訓練は時間がないので無しとした。忙しかったからね、しようがないね。

夜もエッチはすることなく、そのまま眠る事にする。

指に絡みついてきた手を握り返すと、隣で雨音が幸せそうに微笑む。その表情を見ると、自分のなかに燻っていた情欲の炎が穏やかになつていくのを感じる。完全に鎮火した訳ではないけれど、それに焦がれる事もないだろう。

ただそれでも、間にある隙間に寂しさを感じて、つい自分の胸元へと抱き寄せてしま
う。雨音はそれに対して嬉しそうにもう片方の手でしがみ付いてくる。

腕の中にある熱に不思議な安心感を感じながら、俺はゆっくりと瞼を落とした。

黄金の鉄の塊

領主の仕事に決められた休日というものはない。やらねばならない事は多くあり、偶発的に発生する仕事もあるので休日を決めても結局その日に仕事をしなくてはならない事もある。

だが裁量も大きいので自由にできる時間というのも多い。領の立て直しに奔走していた数年前ならまだしも、今では実務の殆どを部下に任せその確認をする程度。

緊急事態に関しても激動の時期に様々経験しており、それを元にした対応マニュアルがあるのでそうそう慌てる事もない。正直直接裁可を下しているものに関しても、その殆どが手直しも必要ないのだ。

ロイドに家紋入りの印を放り投げてしまえばぶつちやけ俺は要らないくらいだ。それこそ領内でドラゴンの群れが暴れまわるような事にならない限りは。

つまり気分が乗らない時は執務を抜け出して街を遊び歩いてもいいし、個人的に頑張ったなと思ったら次の日は休んでも良いのだ。

これはもう目標だったスローライフ的生活と言えるレベルになっているのだが、色々自分で頑張った結果今では箱庭ゲーのような感覚で自分の領の成長を楽しむ事ができている。

あまり無茶な事をしているとその内王国内乱編とかが始まってしまいそうなのでやらないが、とりあえず少しちよつかいをかけられたぐらいで播らくことのない程度には盤石にしておきたい。

これから先穀物類の余剰生産物や魔領から取れる魔石や素材を輸出しはじめるようになれば、今そのジャンルのシェアを握っている領主に睨まれるのは確実だろう。現状外に頼れる筋が無い以上、しっかりと足元を固めてから進出していききたいところだ。

近いうちに私兵である兵士隊の拡充は進めておきたい所である。ベルタ砦から引き抜くわけにもいかないし、領内を見回る衛兵の数もまだ少ない。色々と手を回して募集はしているものの、やはり立地が悪いのか反響は芳しくない。

幸い前線に冒険者が増えて来ているのでスカウトするのもありか。粗暴な奴らが多いのは確かだが、中には光るものを持つ者もいる。上手く餌で吊り上げる事ができれば、躰は兵士の訓練に放り込めばどうにかなるはずだ。ちよつと性格が変わってしまう可能性は否めないが。

部屋のソファに座りながらつらつらとそんな事を考えていると、外から雨音が帰ってきた。今日は昼過ぎまでメイド長に付いて仕事を教わると言っていたが、どうやら終わったようだ。

ちなみに俺は今日は休みである。ここしばらく惰性で仕事をしていたので、一旦思考をリセットして今後必要になるものを洗い出ししておきたかったのだ。

兵士の補充の事も含め、後日ロイドやウォルダーと話をして実際の行動計画を作る事にしよう。仕事ではロイド達と、プライベートでは雨音と常に一緒だったので、一人で思考に耽るのも良い気分転換になった。

雨音と共に昼食を済ませ、さて午後は何をしようかと考えて居ると雨音にお話を聞かせてほしいとせがまれた。すっかり文字も読める様になった雨音は最近暇になればすっかり本の虫と化していたのだが、こうして俺に話をせがんでくることも間々ある。今日はどうやらそういう気分だったようだ。

しかし話と言っても誰かに聞かせて面白いエピソードなどそうそうない。俺は比較的波乱万丈な人生を歩んできた自覚はあるが、誰かに聞かせて面白い話となると流石に限られてくる。

今までにもせがまれる度に話をしてきたのでぶつちやけネタもないのだが、楽しそうにこちらの話を待つ雨音を見るとネタが無いからと断るのも極まりが悪い。

そこで今回は先人の知恵を借りるとしよう。

よし、では今日は日本昔話を聞かせてやろう

「昔話、ですか？歴史のお話でしょうか」

いや、これは俺の前世の故郷に伝わる、まあおとぎ話という奴だな

「おとぎ話！聞いたことがあります、まだ読んだことはないので楽しみです」

あー、そういえば書庫には小難しい本ばかりであんまり娯楽本はなかったからな

思い返してみれば書庫にあるのは学術書や実用書、怪しい自著伝が多く子供向けの本
と言うのは見た覚えがない。辞書を片手に文句も言わず読んでいたので気にしていな
かったが、その内児童向けの本も探してやろう。

この世界の本でそういった本はまだ読んだことがないので俺も少し興味がある。

とはいえ今はこちらが優先だ。話はメジャーなところで桃太郎でいいだろうか。
ぶつちやけ読んだのは遠い昔なので内容何てうる覚えもい所なのだが、大筋が合っ
ていれば細かい所はアドリブでいいだろう。

原本が無いので俺の話した桃太郎がこの世界のオリジナルなのだ（強弁）

ではいくぞ。昔々ある所にお爺さんとお婆さんがいました。ある日お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯へ行きました

「ご主人様、流石にお爺さんとお婆さん一人だけで山や川へ行くのは危険ではないでしょうか。事故や遭難の危険だけでなく、凶暴な動物や魔物の出現も予想できません。可能であれば護衛を雇うか、少なくとも複数人で行動し安全を確保すべきなのは」

もつともな指摘だな。だがこの世界に魔物は居な……いや鬼が居たな。まあ住んでる所は人のテリトリーでな、比較的そういつた危険は少なかつたんだ。それにこの二人は長年その場所で暮らしてきた住民だからな、変化等は事前に察知して危険には近寄らないように注意していたんだろう

「なるほど、そちらの世界での人間種は強靱だったのですね。ご主人様のような方が居たなら納得です」

こちらの世界の住民からすればもつともな疑問だろう。山や森、大きな川等は魔物のテリトリーだ。たいした準備もなく、ましてや老人一人で行くなんてただの身投げではないからな。

ちなみに俺みたいなのがいつぱい居たわけじゃないからな？

さて続きだ。川でお婆さんが洗濯をしていると、どうしたことでしょう川上からどんぶらこつこどんぶらこつこと一抱えほどありそうな大きな桃が流れてきました。驚いたお婆さんですが、これは大変だと喜んで桃を持って家へと帰りました

「ご主人様、流石に不自然に大きな桃を持ち帰るのは不用心が過ぎるのではないでしようか。それになぜ桃なのでしょう、リンゴやバナナではいけないのですか？」

確かにその通りだが、この世界では桃はとても特別な食べ物だったんだよ。味が良いのはもちろん、栄養も豊富で食べれば寿命が延びるなんて話もあるほどにな。仙桃なんて物もあって、神様や仙人が好んで食べていたなんて逸話もある。封神演義で太公望の好物だったから間違いない。それに雨音も好きだろ、桃

「はい・桃はとっても甘くて、美味しくて、凄くつよいです」

そんな桃のめっちゃ大きいのがあったら、怪しくてもテンション上がって持って帰ってしまうと思わないか

「言われてみれば確かに、私も興奮して持って帰ってしまうかもしれません……なるほど、桃なら仕方ないです。納得しました」

それは何よりだ。で続きだが。お婆さんはお爺さんが返ってくるのを待つと大きな桃を見せました。お爺さんもこれには驚きましたが、さっそく桃を割ってみることにしました。するとどうでしょう、なんと大きな桃の中から愛くるしい赤ん坊が出てきたの

です

「ご主人様、どうして赤ん坊は」

待て、待ちたまえ雨音くん。気になるのは仕方ないがこれではいつこうに話が進まない、切の良い所で時間を設けるので質疑はその時受け付ける

「あ、ごめんなさいです……」

急速に知識を付けてきている雨音だが、色々な事を知れば知るほど疑問も多くなってくるもので、最近は見ると事聞く事知りたがるので中々大変である。

可能な限りは答えているし、わからない事は一緒に調べてみたりしているが、流石に全てに答えてやることも出来ない。そのせいもあってとにかく本にかじりついているようだが、そのうち学者にでもなりそうな勢いである。

そんな調子で途中途中で説明を挟み、時に蘊蓄を披露し、時にでつち上げの嘘を語り、長々と語り続けよいよクライマックスシーンとなった。

激戦を潜り抜けた桃太郎は、ついに玉座で待つ鬼の王の元へとたどり着きました。

くつくつく、桃太郎よよくぞここまで来たと誉めてやろう。だがそれも結局は無駄な努力よ。この鬼王キブツジ様の前に人間など余りに無力！矮小にして脆弱、精々が鬱陶しい虫けらにすぎん！配下の鬼たちですら我が持つ力に比べれば圧倒的に劣るというのに、それを相手にすら貴様はすでに満身創痕の上に武器も失っている。その上頼みの綱であった貴様の仲間、雉、犬、猿……後は蟹と狐と狸と兎と亀と鶴と鼠と雀と、ええい動物園でも開くつもりか！とにかく貴様の仲間たちもすでに居らぬ！まさかそれで勝てる気ではあるまいな。ん？どうしたやけに静かではないか。もしやここまで来て力の差に気付き怖じ気づいたのではあるまいな。ここまで我を煩わせたのだ、そんな興ざめな事はしてくれなよ。

鬼の王がゆつくりと近付いているのを感じながら、桃太郎は静かに息を整え返しました。

本当につよいやつは強さを口で説明したりはしないからな口で説明するくらいならおれは牙をむくだろうなおれパンチングマシンで100とか普通に出すし

ふん、吠えよるわ！もうよい、さっさと死ぬがよい！

鬼の王はその凄まじい身体能力を發揮し、桃太郎との距離を一瞬で縮めてしまします。しかし、桃太郎は自分でも不思議な程に落ち着いており、恐るべき速度で迫る鬼の王の姿が酷くゆっくりとしたものにさえ感じていました。その意識はつきりと鬼の王をとらえていながら、静かな湖面のように感じられる心の中へと向かっていました。

——感謝するぜ、お前と出会えたこれまでの全てに！

その動きは余りに流麗であり、動きはいつそゆっくりにすら見えました。しかしその実、鬼の王を上回る速度で型をなします。

両手の人差し指から小指までを半円に曲げ、親指は外側へと逸らせながら胸の前で指を合わせる。その後、ただのなんの捻りもない、しかし一切の無駄のない正拳突きを放つ。その拳は音を置き去りにして、あるいは光にさえ届かんとする速度で、鬼の王の心臓を打ち抜きました。

——つな、馬鹿、な。こんなことがあつて……

地獄へと先に逝け、敵とはいえ俺も些か殺し過ぎた。カカツとバックステップですぐに追いつくからよ

心臓を中心に胴体に大穴を開けられた鬼の王は崩れ落ち、桃太郎は満身創痕のままそのまま立ち尽くします。

しばし後、鬼の配下達が玉座に駆け付けると、そこには半ば塵と化し崩れていく鬼の王と、天へと拳を突き上げたまま事切れた桃太郎の亡骸がありました。

こうして王を始め四天王等のトップを失った鬼たちは統率を失い、散発的な戦いは続くものの人類は大きな脅威を退ける事に成功したのでした。桃太郎やその仲間達はいぞ帰ってくることはありませんでしたが、人々は彼らを大いに讃え、人類圏の各地で平和を祝う祭りが執り行われました。

彼らは恐怖を耐え忍び、ようやく訪れた平和をかみしめて喜ぶのでした。それが一時の事であるのも知らず。この時すでに、新たな脅威の種は芽吹いていた。それが一時めでたしめでたし

と、これで桃太郎は終わりだな。すっかり長くなってしまったが面白かったか？

「はい、素晴らしいお話でした。特に四天王との闘いにおいて、反目しあっていた猿と

蟹、狸と兎が悪態をつきながらも共闘する場面では胸が熱くなりました。それに流石にもう出ないだろうと思っていた時に出てきた6人目の四天王にはとても驚かされました。あと、桃太郎のグラットンソードが砕かれた時などもう駄目だと思いましたが、まさかお爺さんから教わっていた武術の理をあんな時に閃くなんて——」

よほど気に入ってくれたのだろう、それとそれとあれこれ感想を言ってくれる様子は興奮気味でとても楽しそうだ。正直だいぶ初めの方で脱線し、アドリブにアドリブを重ね、おぼろげに覚えている昔話や読んだ漫画の内容が混ざり合いながら語り続け、自分でも何の話をしていたかわからなくなっていたのだが。

最終的にどうにか纏められたのでよしとしよう。

余談であるがこのでつち上げ昔話、気に入りすぎた雨音が屋敷で他の人間に話回り、興味をもったものが多かったので仕方なく語り聞かせる事になる。

その際普通に話すのも芸が無いので挿絵を描いて紙芝居風にしてやり、真・桃太郎列伝く鬼が島死闘編くとして語ってやった所大好評を博す。娯楽の少ない世界であるので、物珍しいものには皆目が無いらしかった。

無意味に続きを匂わせる閉め方をしてしまったせいで続きを考えるはめになり、この

後々地獄極楽驚天動地編々や々裏武道会偉人最強列伝編々、々逆襲のキブツジ編々、々
反逆の金太郎編々等々、思いつくままに語り聞かせ、どうせここまでやったのだからと
本として出してみた所これが大流行。王国の一大ムーブメントとなり劇団により舞台
化までされる事になり、まさかそこまで大事になるとは思わず大いに困惑した。

流石にパクリとかオマージュとか、胸を張って自分の作品と言える物ではな
い。これでロイヤリティ（一応制度はあつたらしい）を貰う気にもならず、更なるパク
り防止のために登録はするものの利用料はほぼ無くし、その分本の値段を抑える事にし
た。

すると流行している上に安価ときて、普段なら本など買わない層まで買い始める。都
市部では識字率はそれなりに高いので言うに及ばず、小さな村々ですら読み聞かせの教
材として利用し、将来的に王国全域に広く深く親しまれ、それこそ元となった物語のよ
うに知れ渡る結果となった。まさかこのような結果になるとは、リハクではないが完全
に予想外だった。

さて雨音、本日からは基礎訓練に加えて戦闘訓練を実施していく！

「はい、ご主人様！」

うむ、今後訓練中に関しては師匠と呼ぶように！

「はい、お師匠様！」

訓練場の一角、運動着を来て綺麗な敬礼をする雨音を前に俺は訓練の次段階に入った事を説明していく。

この訓練元々は身体能力回復のための運動程度の気持ちでいたのだが、雨音のその特殊な体質のせいか回復どころか驚異的な速度でその身体能力は上昇していった。

そうなれば将来的に他者よりも圧倒的な能力を制御するためにも、その出生から高い確率でトラブルに巻き込まれるであろう事からも訓練の本格化は必要だったと言える。

しかもこれが本人はもちろん、途中から一緒に訓練していた兵士達を年端もいかぬ少女に負ける訳にはいかぬとそのやる気を煽る結果となり、私兵隊全体の実力向上につながったのは思わぬ幸運だった。

最初の頃は100mも走れば息を切らしていたのが、みるみるうちにその距離を伸ばし、今では重たい装備を担いだ状態で20km以上を走ってなお余裕を見せているのだから大したものだ。

それでいて見た目はそこいらの少女と変わらぬ体格なのだから、周りで一緒に訓練している者からすれば詐欺のようである。

もつともその素直な性格と愛らしい見た目から嫌われるような事はないようだが。

普通なら気味悪がりそうなものだがと少し悩んだのだが、それを見ていたロイドに「クリス様が一際手塩にかけて育てているのを見ていますから、きつと同類なんだろうと思われるのでしよう」と言われ納得した。

それはそれとして兵士共の訓練を3倍に増やしてやったが。お前らも死ぬ気でやれば俺みたいになれるからよ！手伝ってやんよ！

とにかくすでに身体能力だけでいえば平均的な兵士を上回る程になっている。そろそろ次のステップに進み基本的な戦闘技能を身に着けるべきだろう。

という訳で早速訓練、とはいかずまずは座学である。

雨音自身、恐らく自分の能力の高さをよく分かっていないだろう。近くで比べられる相手は領主館に雇われる程の一流の兵士達であり、身体能力的にはほぼ互角であるものの技術という面では遠く及ばない。

そもそも一流兵士並の身体能力があることがおかしいのだが、同年代の遊び相手もないので比較対象が居ないのだ。強いていえばメイドの中に年齢の近い者はいるが、一

緒にお茶をすることはあつても走り回るような事はない。

まずはそこら辺の説明をしていく。素の身体能力だけならば人間族でいえば上位、肉体的に強靱とは言えないエルフ族の中でもそうだろう。

肉体的に優れた獣人族と比較してもそうそう劣るものではない。今後魔力を解放し、身体強化されるようになれば魔力を使える獣人族すらも凌駕する事ができるはずだ。

そこで雨音が不思議そうな顔をしていたが、そういえば本人に魔力の説明はしていなかったのでついでに教えておく。今魔力が無いのは無意識に封印しているからであり、今後の訓練によって解放する予定であること。

その魔力量は尋常ではない高さである事。解放後も十分と判断できる魔力操作ができるようになるまでは魔力放出できないよう制限をかける事等。これは不慮の事故を防ぐためにも必要な措置だ。

ちよつとした暴走で街が滅びかねない以上、まずは制御のしやすい身体強化関係で経験を積ませる事にした。

そして訓練はまず魔力解放の前に基礎を固めていく。

解放後は体に満ちる魔力の作用で強化魔法を使わずともそれなりに基礎能力があがる。それならば解放後の能力に合わせて訓練した方が身体能力の差に惑わずに済むのではという話なのだが、雨音の場合はその暴力的なまでの魔力量と素の能力の高さもあ

り、解放しただけで基礎能力が上がりすぎてしまう可能性が高いのだ。それこそ、一流と呼べる兵士達をスペックだけで押しきれてしまう程に。

仮に戦う相手が人種だけならそれでもいいかもしれないが、この世にはまさしく化物たるモンスターがいる。

なのでまずは素の能力だけで兵士達と共に鍛え、同格から格上相手での戦いの経験を積んで欲しい。技術は長命種である以上後付けでどうとでもなるが、自分が強ければ強い程格上との戦いというのは経験出来ないものだ。

命を懸けた戦いになってしまったとして、格上との戦闘経験の有無がその勝敗を分けるかもしれない。そう考えればもつとも成長に与するであろう今、その経験を積みさせてやりたい。

最後に、ここまで言っておいてなんだが最終的に近接戦闘能力は必要なくなるだろう事も伝えておく。

そもそも雨音の体格を考えれば格闘戦における適正は低いと言わざるを得ない。如何に基本スペックが高くとも、恐らくそれほど伸びないであろう身長によるリーチの不足と、同じく圧倒的な体重の軽さ。

これはモンスター相手でなくとも不利となる要素だ。もちろん装備や技量で補える事ではあるのだが、ならそのリソースを他に回した方が効率は良い。

そもそもが類稀な魔力量を持っているのだ、戦闘能力だけをみれば魔法技術を磨いたほうが圧倒的に強くなる。体格における不利など関係ないし、元々魔法の得意なエルフ族であるのでその才能も期待できるだろう。

ならばなぜ近接戦闘を学ばせようというのかと言えば、やはり対応力を持っていて欲しいからというのが大きい。

強力な魔法使いであれ近接戦闘はやはり不得手な者が多く、いざ接近された時に切る札があるかないかというのは大事だ。

魔法も極まればそれすらどうにかするだろうが、その高みへ至るのにどれだけ時間がかかるかはわからない。

ならば最低限でも近接戦闘能力を持っておいたほうが安心だろうという考えに至った訳だ。

そういった考えを出来るだけかみ砕いて説明する。当人にとつてもある程度先の展望が分かっていただけの方が目標も持ちやすいだろう。

また本人が最初から魔法型に進みたいというのならそれでも良いと思っっている。一応雨音の事を俺なりに考えた末のプランであるが、本人のヤル気があるに越したことはないしな。

そもそも戦闘技能なんて要らないと言われてしまうと困るのだが、そこはこちらの意思を酌んでくれたらしく、予定通り近接戦闘から学んでいくという答えを得られた。

よし、これから雨音育成計画が本格始動だ。素質は極上、性格は従順、育成に置いてこれ程の好条件はそうあるまい。どこまで伸びるかはわからないが、いずれ高みを目指し始めた時のために、その礎となるよう鍛えていこう。

友情トレーニング発生！

本格的な戦闘訓練の開始にともない、まずは装備を整える事にする。とはいえ本格的な物ではなく、兵士の訓練用装備を雨音の体躯に調整したものだ。

とりあえず皮鎧をベースに一部を鉄製にして防御力を増しておく。基本は要所を守るのみで、関節などは動きを阻害しないように最低限だ。一通り合わせてみるが、サイズ調整してあるはずなのに着られている感はんばない。

そもそも見た目線の細い美少女が武骨な装備を纏っているというのはどうにも違和感が拭えない。本人のどこかポケツとした表情も余計に拍車をかけている。そのうち着慣れてくれば違うのだろうか。

本人は割と気に入ったようで腕を広げて見せてきて感想を聞きたいような感じだが、曖昧にほほ笑む事でごまかし残りの装備も渡していく。

まずは盾、大きさは控えめでバックラーより一回り大きい程度だが、しつかりとした鉄製で実際の大ききさよりも頼もしく見える。扱う本人の身体が小さいので、このサイズ

でも防御に支障はないだろう。

そして武器はメイスにした。片手剣と迷ったのだが、比較的扱いが容易であり整備も楽だ。本腰を入れて剣術を教えるつもりもないので、ならば体重の軽さを武器の質量で補える鈍器が良いだろうと思ったのだ。

今後魔力を解放し、身体強化も出来るようになればその膂力はオーガを子ども扱いできる程になるだろう。そんな馬鹿力でたいした技量も無しに剣を振るっては、その度に刃を潰してしまうのが落ちだろうし、そもそも武器が耐えられるかという問題もある。その点鈍器ならとにかく頑丈さだけを追求して作ればそうそう破損する事もないだろう。美少女脳筋戦士の誕生だ。

いつか身の丈を超える巨大武器を使わせたい。

装備はまず盾を利き腕で持たせる。取っ手を持つだけの方法と、取っ手に加え腕にベルトで固定する方法がとれるようになっていいる。どちらも利点はあるが基本は腕に固定する方針だ。

利き腕に武器を持つのではないのか、と雨音に聞かれるが今回指導する方針としてはまず防御ありきになる。なので盾の保持を重視するためこちらを利き腕に持たせるのだ。

これが同じ盾と剣を扱う戦い方だとして、盾はあくまで補助的に攻撃を捌く程度に使うのであれば剣を利き腕で持つべきだろう。その方が技の精密さや威力なども上がるはずで、効率よく敵を倒すことが出来る。

だが雨音に教えるのは、まず相手の攻撃を受ける、はじく、いなす等して態勢を崩し、その後攻撃を行うという方法だ。理想としては相手の攻撃の届かない場所から一方的に攻撃する事だが、近接武器を扱う以上それは難しい。

そして互いに接近してしまえばリーチに劣る雨音は先制攻撃を受ける事になる。なのでその攻撃を確実に捌くために盾とその保持が必要になる。

この時に利き腕でないほうで持っている、逆に盾を弾かれたり握力が弱まるのが速かったりと不利を被る可能性が高くなるのだ。また場合によっては盾で攻撃する場合もある、やはりその時に力が強い方が有利だ。モンハンも盾は右手で持つてるしね。

後は武器を持たせて腰だめに構えさせる。この時半身になって盾を持つ側を前に、盾は片口で構えさせる。腰は落として重心を低く、歩幅は肩幅より少し広く取り安定させる。まずはこの構えを基本として覚えさせ、後は相手の攻撃によって対応をひたすら反復練習だ。

盾を持っているとはいえ、余り正面から攻撃を受けてはいけない。そのまま受ければ

どうしたって衝撃でダメージを受けるし、体重の軽さ故吹き飛ばされて態勢を崩されてしまう。

可能な限り攻撃はいなすか、はじくかして相手の姿勢を崩させる。後は大振りの攻撃をしてきた場合はそのまま突進してシールドチャージを食らわせてやるのもいい。

懐に入る事ができれば身長の高さを利点に出来るし、相手を倒す事ができればそのままとどめも狙える。

どの角度で受ければ攻撃をいなせるのか、どういった攻撃なら弾きやすいのか、どの程度隙があれば体当たりしていけるのか、これを説明しながら何度もパターンを変えて練習する。

攻撃はまず基本的に相手の足を狙う。頭や首はまず届かないので、相手の機動力を削るのが優先だ。例え一撃で殺す事はできなくとも、移動できなくさせればその脅威度は圧倒的に下がる。

まずは足を砕いてから、その後確実に頭を潰せばいい。なので武器の扱い自体はそこまで練度を要さないのだが、上手く遠心力を使って武器の重さを使いつつ、その上で態勢を崩さないようにするというのはやはり難しい。

基本的には小振りの攻撃でダメージの蓄積をして、相手が大きく態勢を崩した時に大振りの一撃を見舞うのが定石になるだろうか。その時の掛け声が「ハイスラー！」なの

は某桃太郎の影響か……

基本の動きを覚えたら、後はひたすらその反復訓練だ。相手は俺だけでなく、兵士達の戦闘訓練にも参加させて様々なパターンを経験させる。特に1対1だけでなく、複数人で1人を、1人で複数人を相手にするパターン、集団対集団でのパターンは中々やりたくても訓練できるものではない。

積んできた経験が違うので中々勝てないようだが、それでもメキメキとその実力を上げていくのがわかる。

最初は訓練とはいえ少女に武器を向ける事を躊躇っていた兵士達だが、雨音の真剣な様子といくらやられてもへこたれない根性を見て甘い気持ちを捨てたようだ。

そもそもすぐに手を抜いてかかれるような相手ではなくなつたし、プライドもあつただろう。初めて雨音に負けた兵士は相当凹んでおり、その後猛烈な訓練をしていた。全体的に良い発破になつただろう。

できればモンスター相手の訓練もさせたかつたが、流石に兵士たちの見回りに付いていかせる訳にもいかない。とりあえずモンスター戦を想定した対処方を教え、それまでの動きから応用させる形で覚えさせた。ここら辺はまあ実戦で立ち回りを見つつ指導していく事にしよう。

そうして暫く訓練を続け型は十分と判断すれば、いよいよ雨音の魔力を起こす訓練に入る。

ではこれより、魔力解放訓練を行う!

「はい、お師匠様。よろしくお願ひします!」

とはいえこれはそれ程難しい事ではない、気持ちを楽しにして行うように

「わかりました、雨音頑張ります!」

やはり雨音も魔法に憧れはあったのか、本人もやる気十分といった様子だ。

まずは準備のため俺が地面に胡坐をかき、その上に雨音を同じように座らせた。

さて、潜在魔力を顕在化させるといふのは、実はさほど難しくない。そこにあるといふのを自覚してしまえばいいだけだ。だがこの世界では最初からあるのが分かっている顕在化した魔力ばかりを重視し、内に秘められた潜在魔力に気付かぬ者が多い。

この原因は恐らく魔法技術がまだまだ未発達な分野である事と、単純に潜在魔力がある事に気付いているものが少数だからだろう。王都の魔法院に所属している者なら

知っていいのだが、少なくとも世間一般的に知られてはいないようだ。

また潜在魔力を認識する事自体がそもそも難しいというのもある。身体の内にあるものではあるが、人体というのは一つの宇宙に等しい。その広大な宇宙の中に隠された魔力を探そうというのだから、簡単な事ではない。

この世界には無い天人合一思想を元に発達した魔法理論であるため、そこに行きつき実践出来るようになるにはまだ長い年月が必要だろう。宇宙と人体への深い理解と、世界と視座をともしする程の瞑想が必要になるからだ。

それらが更に深々度へ達すれば小宇宙コスモが開けるのだが、これには相応の階位も必要になるので果たしてそこまで達するのにどれだけの時間が必要になるか。

とはいえ今回はそれを認識することの出来る俺がいるので問題は無い。魔力を巡らせ、意識を導き、そこにある力を自覚させるだけだ。

右手には右手を、左手には左手を伸ばしその手を包む。力を抜いてこちらへと身体を預けさせ、目を瞑らせ意識を集中させる。これが全くの他人同士だと警戒心や緊張から干渉しにくかったりするのだが、雨音からそれらを殆ど感じる事はない。

むしろ全くのゼロだ。信頼しているとさえ聞こえは良いが、ここまでくると完全に自分の全てを預け切っているような状態であり、ほんの匙加減一つで肉体にも精神にも多大な影響を及ぼせてしまう。

それに対して喜ばばいいのか呆れればいいのか悩むところだが、まずは雑念を入れずにやる事を済ませてしまおうとしよう。

まず雨音の身体のすみずみまで魔力を巡らせていく。本来であれば他人の魔力との干渉による摩擦で痛みやかゆみ、場合によっては快樂等の反応があるのだが、完全にこちらを受け入れている事で全く抵抗がなく、そのためなんの反応もない。

それにより意識を肉体反応に割かれなないので、没入は思ったよりも簡単に済みそう
だ。

右手から魔力を入れ、全身を巡って左手から戻ってくる。普段自分の身体のみで行っている魔力循環を、雨音の身体を通しながら行う。雨音の持つ固有の波長を感じ、それに合わせて魔力を変化。

後は雨音の意識を抱き、その肉体の全てを、臓器や血管、細胞の一つまで巡っていく。そうして眠っていた魔力を呼び覚まし、共に循環していく。

最初は小さかったそれらも、少しずつ重なり、交わり、結び合わさり、やがて大きな光の濁流となりその体を駆け巡る。

実際の時間としては1時間程度のはずだが、精神的にはそれこそ宇宙の全てを旅したような感覚を得て覚醒する。胸の中に納まる少女の身体に変化は無いというのに、その発する存在感は全くの別物。まるで一つの惑星のように、全てを引き付ける重力を感じ

させるようだ。

少しして雨音も覚醒したのだろう、少し身じろぎした後には不思議そうに体を眺めている。

「これが、魔力ですか。なんだか自分の身体ではないようです……」

実際細胞レベルで活性化してるからな、まずはこのまま魔力循環の練習して力を掌握する所からだ。つと、先に封をしておくぞ

雨音の細い手首をつかみ、そのまま封印術式を組む。封印と言っても抑え込むものではなく、外部へ放出する動きをした時に内部に流れを変える物で、肉体強化や装備に魔力を纏わせる程度なら大丈夫なはずだ。

その後はしばらくそのままの態勢で魔力循環の練習を行った。流石エルフというベキか魔力の扱いはすぐに上手くなり、圧迫感を感じさせるほどだった魔力もすっかりと内に納められるようになったのは僥倖だ。

数日は力加減に悩むだろうと思っていたのだが、この様子なら案外早く慣れてしまいうそうだ。後は上昇した身体能力での動作訓練と、戦闘挙動と同時に魔力操作を行えるよう練習。それに加え強化魔法の慣熟訓練もこなしたら、いよいよ実戦デビューといこう

か。

ギルドにおけるテンプレ展開

雨音の魔力を解放してから数日、すっかり力加減にも慣れた様子の雨音を連れてアルトの冒険者ギルドへと向かっていた。そう、ベルタではなくアルトの街のだ。ちなみにまだ実戦デビューは出来ていない。

冒険者ギルドはある程度大きな街であればたいいの場所にあるもののだが、割と最近までここアルトにはなかった。これは単純な話で冒険者の需要が少なく、ギルドの支店を設置するメリットが薄かったためだ。

たまに依頼があつても半日ほど歩けば着いてしまうベルタの街にあつたので、そちらで事足りていたのだ。

そもそもこの世界における冒険者とは何か。

事の起こりは今よりもはるか昔、大きな国が出来る以前の小国乱立時代にまで遡る。今でこそある程度の版図を広げている人類種であるが、当時はまだ国といっても大きな士族の寄り合い程度の物だった。

彼らは自らの国の版図を広げるため、この世界の大部分を占める魔領へと果敢に挑んでいた。正確には挑むというよりも滅ぼされないように必死に抗っていたというのが正しいのかもしれないが。

この頑張りも未だに広大な土地を魔領に占有されながらも王国を始めいくつかの国家が崩壊せずに地盤を固めていることから見ても成功したと言える。

その開拓の先駆けとなり、魔領に跋扈する魔獣や魔物を討伐し、新たな資源を見つけ、人類に様々な恩恵をもたらしたのが冒険者と言われる者たちの前身であるとされている。

彼らは人類種に生まれるある種のイレギュラー的な存在であり、少数または単独で強大な魔物を討滅せしめた人類の英雄とも呼べる存在だ。

当然その数は少数であり、小国一つが抱えているには十全に活躍する事が出来ない。そう考えた英雄の一人が国という枠組みを超えてそうした英雄たちをサポートする組織を立ち上げた。それが今の冒険者ギルドである。

しかしいかに英雄が活躍し強大な魔物を討伐したとしても、そこを支配できるのは一時的なものだ。

力は劣っても別の魔物たちがすぐにその支配域を埋めてしまう。しかし英雄はより強力な魔物を狩るために一か所に留まり続ける事は出来ない。

そこで英雄が平定した地を実効支配するための後詰を送り込み、再び魔物が跋扈するのを防いだのだ。後にこの後詰も込みでいわゆる冒険者と呼ばれるようになっていった。

やがて国が大きくなり、合併を繰り返して、人類の勢力圏が安定してくる頃になると段々と冒険者という職もその形を変えていった。

もともと人類の生存権を広げるための存在であった冒険者は、それに憧れる人間も多かった。誰だつて子供心に英雄と呼ばれる存在に憧れるし、それに近付きたいと思うものだ。

しかし、現実是非常だ。一騎当千たる英雄と呼ばれる存在にはもちろん、その後詰になる事さえ簡単には叶わない。最前線で戦う彼らと肩を並べようというのなら、一流の腕前が無くてはならないのだ。

未熟な者がいれば単純にそいつが死ぬだけでは済まない、必ず周りにも被害が出るし最悪の場合せつかく確保した土地を放棄しなくてはならなくなる。

そういった事情もあり、人類が安定していくほど冒険者未満の者たちが増えてくるようになった。だがそんな彼らにも役割が与えられた。冒険者ギルドは彼らに最前線付近での雑用を任せていったのだ。

最前線で戦うには足りないとはいえ彼らも貴重な戦う力を持った戦力だ、前線を更に

安定させるための拠点作り、他から仕入れる食材や前線から産出する素材の護衛などやってほしい事はいくらでもある。

その中で腕を磨き、最前線へと躍り出て華々しい活躍を遂げた者もいた。そうして様々な変化を重ねつつ、今の冒険者ギルドの形へと落ち着いていったのだ。

では今の冒険者はどうなっているのかといえば、かつてとはだいぶかけ離れた形になつてきている。

昔の様に新たな領土を広げるために未開の地へ冒険へ赴く、なんて者はほぼいない。魔物を狩つて素材を売ることで生計を立てたり、間引きを行い安全圏の確保を手伝う事で報酬を得る、後はクエストという形で入る依頼をこなすことで対価を得ると言うのが一般的だ。

最近では市街の中で完結するような日雇い労働者のような側面も持つている。

冒険者を目指す者たちも手に職を持たない食い詰め者達が仕方なく、といった形であるものが多く、質の低下が問題視されている。

これに対し冒険者ギルドもランク制度というのを導入し、ランクが高くなつた者には様々な特典を受けられるよう便宜を図ったり、ある程度の補助政策も行っているようだ。

その内容は多岐にわたり、今でも高ランクの冒険者と言うのは憧れの的であるが、現

状の低ランク冒険者を見るに目的を達成できているかと言うと首をかしげざるを得ない。

まあ国家に縛られないなどという大きすぎる権限を持つ巨大組織だ、内部も一枚岩ではないだろうしそう簡単な事ではないのだろうが。

冒険者でおなじみのこのランクだが、この世界では金属の名前で分けられ、その名前の金属で出来たプレートを身分証として支給される。

ランクは下からカッパー、ブロンズ、シルバー、ゴールド、プラチナ、ミスリルとなる。

カッパーは駆け出し冒険者だ。まだ海の物とも山の物とも知れぬ有象無象であり、冒険者ギルドに登録はされるが身分の保証等はされない。

ブロンズは下級冒険者だ。カッパー級の依頼をこなし、きちんと納税していると昇格できる。これになるとギルドから身分保障も受けられ他の街に行った時等に通行税の割引を受けられたりするようになる。

シルバーになれば一人前とみなされる。ブロンズ級の依頼をこなし、ギルドから課せられる昇格試験を合格する必要がある。このランクになれば有能な人材であるとして通行税等は基本的に免除され、ギルドと提携している宿などで割引を受けられる。

ゴールドとなれば一流とされ、なれるのは冒険者の中でも上澄みだけだ。シルバーラ

ランクとして実績を積み、ギルドや国から発行される達成困難な依頼を複数こなす事で昇格できる。ここまできると出入国すらほぼ制限は受けず、貴族お抱えの私兵として重用されたりもする。平民からすればあこがれの的だろう。

プラチナランクは現在ギルド全体でも数えるほどしかない。銅からゴールドまではPT単位での昇格が許されるが、プラチナランクは個人での昇格となり、求められるのは戦闘能力のみという点も他とは異なる点だ。かつての英雄級の実力を持つた者のみが成る事ができ、もつばら危険区域にある貴重な素材の確保や魔領開拓における脅威の排除を行う。実力さえ認められれば銅からプラチナランクですら昇格できるが、ギルドや国から潤沢な支援を受けられる代わりに大きく自由を制限される事になる。その点を嫌って実力的にはプラチナに成れるが昇格しないという者もいるらしい。

最後のミスリルランクに関しては荣誉称号のようなものだ。ランク制度が導入されてから適用されたのは片手で数えられる程度であり、その規定も人類史に名を残す偉業を達成したものとされとても曖昧だ。わかりやすい所でいえば王都に襲来した大型のドラゴンを単独で討伐した冒険者がこれにあたる。まあ国家レベルの危機を救ったならもらえる可能性があるという事なのだろうが、そもそもそんなチャンスがそうあるはずもなく、現状最高位はゴールドと言っている。ランクはブロンズだ。

ちなみに俺もプレートを持っている。ランクはブロンズだ。冒険者として活動する

には十分だし、シルバー以上になると指名依頼の対象となったりして面倒なのだ。遂行可能な依頼であり、大した理由もなく何度も断ると資格を剥奪されることもある。

指名依頼なんてそうあるものではないのだが、たまに息抜きで冒険者ごっこをしたいたけなので面倒を抱える必要もないだろう。

大雑把な説明を雨音にしていれば目的の建物が見えてきた。まだ建築されたばかりなので真新しい建物だ。ベルタに建てた物に比べれば見劣りするが、中々に立派な外観だ。

急にギルドの支店が建ったのには理由がある。街の経済活性化により仕事が増え、日雇い労働者の需要が増えた事が一つ。ベルタははじめ領内の村へ行く商人が護衛を欲した事が一つ、そして一番は俺がギルドとの折衝でわざわざベルタまで行くのが面倒だったからだ。

最後に關しては貴族なんだから館に呼び寄せれば済む話ではあるが、俺が飛んだ方が圧倒的に早いので無駄な時間を使いたくない時はこちらから赴いていたのだ。自分の領内にかんしてはもう貴族の面子とか今更取り繕う気もないのでやりたい放題である。最初は小言を言っていたロイドも今では快く黙認してくれている。

今回ギルドへは雨音の冒険者登録をするのが目的だ。とりあえず先に登録だけして

において、後日ベルタで依頼を受けつつ実戦経験を積む予定だ。

アルト周辺は兵士隊の巡回である程度魔物や魔獣は駆逐されている。たまに魔力溜まりから魔物が発生することもあるが頻度は高くなく、それらを探し回るくらいならベルタまで足を延ばしてついでに冒険者ごっこもやろうと思いついた訳だ。

ギルドの両開きのドアを開け中へ入る。そこそこ広いエントランスの中心にクエストボードが立てられており、その周りを冒険者達がかこっている。

それほど人数は多くないが、数名それなりに熟練そうな手合いも見かける。アルトで満足のいく依頼があるとも思えないので、恐らくベルタに行く途中に立ち寄っただけだろう。なんとなしに観察しながら奥のカウンターへと向かう。

割と領内では突飛な事をする領主として有名だが、冒険者として活動する際は簡単に変装して冒険者クリスとして活動している。中には気付いている者もいるだろうが、今の所騒ぎになるような事にはなっていない。

受付カウンターのまであと少し、といった所で横にいたはずの雨音が居ない事に気付いた。探してみれば初めて来る場所で好奇心を抑えられなかったのだろう、あちこち興味深げに眺めて周っていた。

すると先ほどまでクエストボードを見ていた男たちが三人、雨音の方に近寄っていくではないか。その三人は入ってくる時に見かけた熟練者であり、胸元には銀のプレート

がぶら下がっている。

これはあれか、お前みたいなガキが来るにははえーんだよ的な展開か。俺の時は見た目の問題なのか全然絡まれないどころか目を逸らされていたのだが、やはり年端もいかぬ少女がこんな所にくればこういうテンプレ展開になるのか。

ぶつちやけ実力的にも今の雨音の方が強いのだが、魔力を抑え込んでいる雨音に威圧感のようなものはない。実力差に気付けなくてもしかたないだろう。助けに入るか迷ったが、雨音がどう対処するかも気になったので見守る事にする。

すると三人の中でも代表なのだろう、大きな面傷のあるスキンヘッドの男が声を上げた。

「おう嬢ちゃん、こんな所になんの用だ。ここは子供の遊び場じゃないんだ、用が無いんなら帰りな」

「いいえ、雨音は用があつて参りました。今日は冒険者登録をします」

「嬢ちゃんみたいながきんちよが冒険者登録だあ？しかもお前、奴隷だろう」

「はい、雨音はご主人様の奴隷です！」

男は雨音の首輪が奴隷用のものだと気付いたのだろう。怪訝そうな声を上げるが、な

ぜか雨音はそれに得意げに答えている。

たぶんあれは本人的には首輪を自慢気に見せびらかしているのだと思われる。雨音的にあの首輪は格好良いらしい。

雨音の首輪だが、もともと奴隷商で付けられていた物に関しては屋敷に連れ帰った後に破壊してあった。

隷属魔法のかけられたそれは付けているだけで多少だが負担もかかっていたからだ。その後も特に首輪など付けるつもりもなかったのだが、先日雨音と市場に遊びに行った時の事だ。せっかく来たのだからと何か好きな物を買ってやろうと話をしたところ、持ってきたのが今付けている首輪だった。しかも獣人族の奴隷に着けるようなゴツツイ奴だ。

当然反対した。

もつと髪飾りとかリボンとか腕輪とか、アクセサリーにしても可愛いのがいくらでもあるだろうと。100歩譲って首輪にしても、チョーカーみたいなものがあるだろうと。

しかし雨音は頑として譲らず、この格好良いのがいいのだと主張する。ついには「ご主人様は何でも雨音の好きな物を買ってくれるって言いました！」と涙目で言ってくる始末。

泣く子供と女の涙には勝てないと言うが、そのダブルパンチではどうしようもない。渋々買ってやるとその上付けるとまで言ってくる。全てを諦めて言う通りにしてやれば、本人はすこぶるご機嫌になったが周囲からは白い目で見られたものだ。

その後屋敷に帰ればメイド長はじめとした従者全員に汚物を見るような目で蔑まれ、しばらくの間俺だけお茶の代わりに白湯が出てくることとなった。あの、僕領主……いえなんでもないっす。

それを見て何を思ったのか、男は膝を折ると雨音に視線を合わせた。

「嬢ちゃん、悪い事は言わねえ。今すぐ役所に行つて保護してもらえ、何なら俺らが付き添つてもいいし、不安ならギルドの職員にかけあつてやる。もしこのまま冒険者登録なんてしちまつたら、お前そのご主人様とやらの肉盾にされて死んじまうぞ」

「ふえ、肉盾、ですか？ たしかに雨音は盾を使いますが」

「やつぱりな、いいか嬢ちゃんお前は良いように言いくるめられてるんだ。嬢ちゃんみたいなのがモンスターの攻撃受けられるはずがねえ、二日と持たず死んじまう。幸いこここの領主様は話のわかるお方だつて噂だ、役所に逃げ込めばしっかり対応してください」

「えっと、確かに領主様は素晴らしい方ですけど……」

あ、なんか変な方向に話が向かってるぞこれ。あのおっさんチンピラどころかめっちゃくちや常識人じゃねーか。というか傍から見たら確かにそうみられてもおかしくない訳で、俺ってばめっちゃめっちゃゲスな奴ポジションじゃない？

主人公に退治されてエルフ奴隷奪われるテンプレ悪役ポジションだコレ。

いやしかしこんな怖い顔のおっさんが主人公とか認めんぞ。せめてイケメンの少年連れて来いや。

何はともあれ誤解を解かねば、このままでは何もしてないのに悪評が広まってしま
う。

おっと、それ以上人の悪口を言うのは止めてもらおうか。どうやらうちの雨音が迷惑をかけたようだが、何も問題はないので君たちの気遣いは無用だよ

「ふん、お前がこいつのご主人様って奴か。ブロンズのくせに随分と身なりが良いようだが、どつかのボンボンか。ランク上げのためか知らねーが、わざわざこんなガキを盾にするしかないなんて程度が知れるぜ。どうせ奴隷を使うにしてもまともな戦闘奴隷を連れてくるんだな」

それこそ要らぬ世話という奴だよ。俺はこの子をただの奴隷として使い潰すようなつもりはない

「そうです、雨音はただの奴隷ではないのです。身も心もご主人様に捧げた所有物なのです！」

「ほう、口先は随分と上手いようだなあ……」

雨音くん、ややこしくなるからちよつと黙つてようね？

無視して雨音を連れて行こうにも厄介な事に男を挟んで反対側だ、ついでに他二人も位置を変えて雨音を庇うように動いている。大変面倒な事になった。

強引に事を澄ます事も可能だが、そうなれば心証は最悪だろう。そもそもこいつらも雨音を心配してくれての行動だし、立場が違えば正直感謝してやりたいくらいだ。

自分の事で精一杯の者ばかりの中で、こうして誰かのために行動できるというのは素晴らしい。可能な限り穏便に済ませたい。

どうやってこの状況を切り抜けようかと考えて居れば、司会の端でギルド職員が近付いてくるのが見えた。良かった、職員が仲裁してくれれば大事にならずに済むだろう。若干ほつとして職員が近付くのを待った。

「ちよつと貴方達、ギルド内での争いごとは禁止されています。事情を聴きますので少し奥に来ていただきましようか」

そう言つて職員さんは俺の肩に手を置いて、奥に付いてくるように無言で促した。
あれこれやっぱ俺が悪い流れになってます???

それから暫く、俺は男達とともにギルド職員へと事情説明を行い誤解を解く事となつた。と言つても雨音のギルド登録には職員も懐疑的であつたので、軽くではあるが組み手を行い十分な実力を見せることでそれを解消、そのまま無事登録となつた。

とはいえ本来は登録料さえ払えば誰でも登録自体は出来るはずなのだ。実際雨音くらしいの年の少年が冒険者をしている事も少なくない。

今回はある程度信頼のあるシルバークが関わつていた事と、ギルド側からしても死者を増やしたい訳ではないので明らかに無理のある盾役をやらせようとしているのを危惧しての事だろう。

こちら辺はあまり細部まで精査していると、他の仕事に支障をきたすので普段はやらないのだろうが、流石に目の前で見て見ぬふりはしたくなかつたと見える。組織としての良心が残っているようで良い事ではあるのだろう。

おっさん達も誤解が解けてからはしっかりと謝罪を受け取り、無事和解する事ができた。少し話してみればその心根の善良さは確かなようで、荒くれ者の多い冒険者の中でも慕われる、良い冒険者グループであるようだ。後で仕事ぶりを調査させ、良さそうならスカウトを送ってみてもいいだろう。

こうしてひと悶着ありつつも無事登録を終え、ついでに得る物もあつた有意義なギルド訪問であつた。

そうしてギルドからの帰り道、工業区の職人街にある一つの工房へとやってきた。出かけたついでに以前発注しておいた雨音の装備を受け取りに来たのだ。

ここも数年前に他所からスカウトしてきた職人の店であり、腕利きのドワーフがその業を振るっている。ドワーフといえれば腕はいいが頑固者で豪放磊落、強い酒に目が無く煩いおっさんのイメージが強い。

実際この世界のドワーフも殆どがそんな感じなのだが、ここの店主はドワーフとしては、いや普通の人と比較しても更に気弱な性格だつた。

職人と言えば競争社会だ、自分の腕を売り込むためにあえてデカイ態度を取らなければいけない事もある。だがまあどこにでもそういうのが苦手という奴はいるもので、この店主は自己主張が全くできていなかった。

そんな事なので腕は良いのに中々仕事は取れず、仕事が少ないから稼ぎは減り、稼ぎが無いから素材も段々悪くなり、いつそもう店を畳もうかという所に俺が現れたという訳だ。

実際その作品を見れば他のライバル店に負ける物ではなく、このままその腕を腐らせるのは惜しいと猛プッシュ。普段全然褒められる事もなかったのか二つ返事で付いてきてくれたという訳だ。ちよろい。

今では武器の販売だけでなく、近隣住民の金物の修理なども手掛けてくれている。気弱さからくるものであるが腰が低く人当たりも良く、偏屈者が多いと言われるドワーフとしてはその評判は上々だ。

今では苦手らしい販売と営業は雇った人間に任せ、弟子の育成と依頼品の作成に専念しているそうだ。適材適所と言えるだろう。

さて、そんな工房にしばらく前に発注していたのが雨音用の装備である。今までは訓練用の簡易的な物だったが、今回は最初から専用についた物だ。

とはいえ基本は変わらない、皮鎧をベースとした金属で補強した鎧と、盾とメイスである。ただその素材が高グレードなだけで。

まず鎧に使用する皮はワイバーンの皮を鞣したものだ。鎧に使えるほど損傷の少ない物は中々取れず高価だが、軽くて丈夫な上に耐火性能も高いと高位冒険者にも人気の

品だ。

補強する金属にはミスリルメッキを施しており、頑丈さだけでなく簡易の魔法抵抗にも優れる。

そして盾とメイスに関しては魔重金属という特殊な金属を使用している。これはそのままだと若干良質な鉄と同じくらいの強度なのだが、魔力を通す事で重量と硬度を増す事ができるという性質を持っている。

一見便利なのだが合金になると一気にその強度が低くなるため、微妙に使い勝手が悪い。しかし今回その性質が雨音にうつつつけだったので無理を言って取り寄せてもらったのだ。

特殊金属であり加工の難易度も高いのだが、完成品を見る限り店主は見事に仕事を果たしてくれたようだ。

すでに前金で半分渡してあったので、残りの支払いを済ませるついでに無理を言っただけ悪かったと言えば、店主は誇るでもなく自分はもちろん弟子の育成にも役に立ったのでむしろ感謝したいくらいだと笑って見せた。

その表情にかつての卑屈さは見えず、確かな自信に裏付けされているように感じられた。どうやらうちの領に引つ張ってきて、良い変化を与えられたようで何よりである。

一通り説明しながら雨音に装備させ、細かい調整をしてもらう。新装備の慣熟訓練は

必要だろうが、試し切り用の案山子を殴っている姿をみるに少し動けば慣れそうだ。

武器と盾に関してだが、重量の変わる装備のノウハウは無いので使いながら改善点を探っていくしかないだろう。単純に殴る時や受けるときに発動させる以外にも、様々な使い方ができるだろうから楽しみだ。

調整を終わらせて装備は館に届けるように手配し、俺たちは工房を後にした。

少々準備に手間取ったものの、これで万全整ったはずだ。後はロイドを言いくるめて、今度こそ雨音の冒険者デビューだ。

初めてのお使い

雨音の装備を整えて翌日、クエストを受けるためにベルタへとやってきた。

アルトでは市内での労働依頼ばかりであり、実戦を経験させたいこちらとしてはあまり用がない。たいした距離でもないのですがまだ連れてきたことの無かったベルタにした。

アルトに比べるとベルタは雑多な感じだ。冒険者や商人の数も多く、街の大きさの割に人が多いためそう感じるのだろう。

色々と優遇措置もとっているからか順調に領外から流れてきているようだ。ただこうして実際に見てみると予想よりも人が多く感じる、グライドとも相談して早めに街の拡張計画を進めたほうがいいかもしれない。

種族も人間族だけではなく、エルフやドワーフ、獣人など割とポピュラーな所は結構いるようだ。雨音も珍しそうに興味津々と言った様子で見まわしているが、今日は勝手に離れたりしないように手をつないでいる。

離れても場所はわかるので迷子にはならないが、また厄介事になっても困る。

人の流れに乗りながら暫く道を行けば、少し先にベルタの冒険者ギルドが見える。周

りの建物が貧相なのを別にしてもやはりでかい。

建物の大きさも内装も王都にあるギルドにだって劣らないだろう。しかし作った時はテンション上がっていて気にしてなかったが、改めて見ると完全に浮いている。

しかしまあ冒険者が増えている要因としてはやはりこの建物の立派さもあると思うので、これはこれで良しとするべきか。

少しだけ過去の行いを顧みつつドアを開ければ、すでに昼過ぎだというのにギルド内はそれなりに賑わっているようだ。ドアが開いたことに反応して視線が集まるが、それも一瞬。すぐに視線は切れる。

今日は私服ではなく装備一式着こんできているので悪目立ちすることもないだろう。両音も身長の高さは目立つものの、よくよく見なければ細身のドワーフか小人族に見えるだろう。革製とはいえ鎧を来て金属武器と盾を持ったエルフは普通居ないからな。

クエストボードに張り出された依頼を一通り眺めてみるが、流石にこの時間では美味しい依頼は無いようだ。

割の良い依頼はだいたい朝に張り出されてすぐに受注されてしまうので、この時間はだいたい旨味がなかったり危険度が高かったり、後は常時出ている採集クエストばかりだ。

今もクエストボード周りにはあまり人はおらず、すでに一仕事終わらせた冒険者たち

が集まって話をしたり酒を飲んでいたりといった感じた。

なににせよ今日受ける予定だったのは採取クレストなので特に問題はない。やはり初依頼といえば薬草採取、これだろう。

ついでにスライムかゴブリン、コボルトあたりを叩ければ十分だ。ここらへんは駆除対象になってるのでわざわざ依頼を受けなくても討伐部位を持つてくるだけで報奨金が入るようになってる。

もし依頼が出るとすれば村の近くに群れが出来てしまった時や、少人数では手に負えない程に群れの数が増えすぎてしまった時くらいだ。

まあ採集クレストも常時依頼なので持つてくるだけでいいのだが、そこはそれ。やはり初めてのクレストなのでしつかり手続きも経験したほうがいいだろう。

雨音に手順を説明してクレストカウンターへと向かう。申請や登録をやらせてみたが、どうやら問題なさそうだ。

カウンターのお姉さんに一瞬怪訝な顔をされたものの、すぐに保護者の存在に気付いたようで、その後はお使いをする子供を見るようなほえまじそうな視線になっていた。

まあ確かに初めてのお使いである事には間違いない、若干殺伐としているかもしれないが。

さて、薬草と一口に言っても様々な種類が有るわけだが、今回目標となるのは回復ポーションに使われる中では最もポピュラーな薬ヨモギと呼ばれる物だ。

名前の通りハーブであるヨモギとほぼ同一の物であり、何が違うかといえば魔力の有無である。

もともとヨモギには止血効果があるのだが、魔力を含んだ物はその薬効が高くなり、いくつかの素材を混ぜる事でポーションを作る事が出来る。

ポーションにもグレードがあり、薬ヨモギをメインの材料とした物はほぼ下級ポーションに分類されるが、他のポーション材料の薬草に比べれると格段に入手手段が容易であり、多少の傷ならば下級で十分カバーできるためその需要は多い。

回復魔法を使える人間の多くが教会に属しており、冒険者をやっている者は少数であるためポーションの常備は必須と言えるだろう。

そんな引く手数多な薬ヨモギだが、割とそこら辺に自生している。もともとハーブだからな、生命力も強いんだ。しかし普段の生活圏内で取れるようなのは含有魔力が少な

いでポーション作るにはかなりの数が必要になってしまう。

だが魔力濃度の高い場所、つまり森や魔領付近に生えてる物は含有魔力が多いのでそれを狙う事になるわけだな

「なるほど、では魔力を多く含んだ物を探取すれば良いのですね。基準は決まっているのでしょうか？」

もちろんある。ギルドでは計測器があつて持ち込んだ物はそれで計測するんだが、基準量に満たない物は弾かれて買い取り価格が下がる。逆に多ければ高品質品として高く買ってくれるようだが。

計測器を貸してもらえればいいんだが高価な物だからそれも出来ん、何度か採取してコツを掴むしかないだろうな

「何も考えずただ摘めば良いという訳ではないのですね」

ああ、しかもある程度魔力を感じる才能が必要だ、闇雲に摘んでも当たりが少なく大した稼ぎにはならないからな。一応魔力を感じられなくても見分ける手段はあるらしいが、そういった情報を調べるにも金がかかる。案外駆け出しの冒険者がやるには難しい依頼なのさ

「じんごーさいばい、というのは出来ないのですか？」

昔から色々試されてはいるようだが、魔力の濃い所は魔物が出るからな。建物や柵を

作っても魔物や盗人から守るための警備の費用が嵩んだり、実際に取れる量も一定じゃなかったりで赤字の方が多かったりと難しいらしい。

その内出来るようにはなるだろうが、すぐには無理なんじゃないかね

「だからこそ冒険者の手が必要なのです、勉強になります」

目標となる薬ヨモギの説明をしながら草原を歩く。すでにちらほら見かけるのだが、もう少し森に近い方が効率が良いのでスルー。しばし移動した先で群生地を見つけたのでそこで採取をする事にした。

まずは見本となる薬ヨモギを見せて特徴を説明した。一応事前に図鑑の絵で調べていたので問題はないだろう、ふんふん頷きながらさつそく採取へと向かって行った。

手に持った薬ヨモギを眺めてみる。一応魔力を基準値以上含んだ物はそうでない物に比べ葉が厚くなるらしいのだが、ぶつちや俺にはわからない。

しかし実際に魔力が感じられない人でも少し指先でこすっただけで判断できるといふのだから、職人というのはいるものなのだろう。大工の職人も1mm以下の厚さの違いを指で感じるといふし、熟練の業というやつか。

雨音の方に目をやれば地面に膝を着いて可愛いお尻をふりふりしながら採取に励んでいる。熱心なのはいい事だが、些か無防備にすぎる。後ろから近付いてその小振りな

お尻を少し足で押してやれば、簡単にバランスを崩しぺぎやつと地面へと突つ伏した。慌てて身を起こすと突然の暴挙に対してか、不満げに眉根を寄せてこちらをにらんで来る。まあ迫力なんてまるでないのだが。

「ご主人様、いきなり酷いです。真面目にお仕事しているのに悪戯するのは良くないと思います」

はは、悪い悪いつい足が滑ってしまったようだ。だがな雨音、ここはすでに魔物のテリトリーだ。あまり目の前の獲物に夢中になっていると、あつという間に自分が獲物になっちまうぞ。今もぼつちり囲まれてるしな

「ふえつ、すみません全然気づかなかったです……」

周囲は草原で見晴らしはいいが、草の背はかなり高い。こちらも風向きを気にしたり匂いを消したりという事もしていなかったので、向こうからすれば狩りやすい獲物に見える事だろう。こちらの死角を縫うように、今も距離を縮めてきている。

一応講義でも話はしたが、人間何かに集中している時というのは他の事に対して注意が散漫になるということだ。

特にモンスターの生息域では常に気を配らなくてはならない。だが四六時中気を張り続けているのも容易では無い、特に新人の内はまず無理だ。

だからこそギルドは基本的に最低2人、できれば3人以上のパーティーを組む事を推奨している。そうすれば1人が周囲を警戒している事で、残りのメンバーが比較的安全に作業をこなす事ができるからな。

採取クエストでさえ1人で受注しようとすれば止められるのはこういった事情があるからだな。余程レンジャー技能に優れているか、不意を付かれても返り討ちに出来るだけの実力が無ければ、ソロの冒険者なんて良い餌にしかならん。

「はい、冒険者さんは大変なのですな」

そういう事だ、そら、くるぞっ

まあ今の雨音であればこの程度、不意打ちを受けても返り討ちに出来るだろうが心構えは重要だ。

雨音が武器を手にして構えたのを見て気付かれているのを悟ったのだろう。草むらから身を起こして現れたのは狼が3体、いずれも体長はそれほど大きい物ではないので魔獣ではない、野生動物だろう。

魔獣や魔物が群を抜いて危険であるとはいえ、肉食動物の危険度が決して低い訳では

ない。大きな群れに襲われれば魔力持ちですら命を落とす事もあるのだ、貧弱な人間種が舐めて良い相手ではない。

狼は素早く駆け出すと2体は俺に、1体は雨音にと向かってきた。大型の個体に戦力を多く割り振る、妥当な判断だろう。

雨音も自分に向かつてくる狼に気付き、盾を構えて半身になる。その身体能力を考えれば万に一つも負ける事はないだろうが、初の実戦で上手く動けるか見ものだ。

狼の速度はそれなりに早い、体躯は標準的なサイズだがあのままの速度でぶつかればかなりの衝撃だろう。対し雨音は腰を落として受け止める構えだ。

練習では基本的に逸らすか弾くかするようにしていたが、初見の相手の攻撃を全て見極めるには経験が足りない。加えて練習は全て人間だったので動物の動きがどうくるのかというのを見るためでもあるのだろう。

下手に動いてミスするよりはマシだと判断しようだ。

走ってきた速度をそのままに、狼は雨音へと飛び掛かった。雨音の身長の高さから下手に速度を落としてフェイントを入れるよりも、そのまま重量で押し倒してしまつたほうが確実だと思つたのだろう。考えた、というよりは野生の本能での判断だろうが。

まあその考えは間違いいではない、少女の背丈を考えれば大した膂力などあるようには見えないし、一度引きずり倒してしまえば喉元に食らいつくのは容易であろう。

もちろんそれは普通であれば、という注釈が付くが。

あいにくうちの雨音は普通ではない。ただでさえ高い身体能力は暴力的な魔力によつて更に出力を上げ、強化魔法を使わずとも大の男を上回る力を持つ。

ついでに重量の増える特殊な盾もあるとくれば、狼の飛び掛かりを受けても揺るぎもない。盾を使い飛び掛かる狼を空中で受け止めると、そのまま地面へと叩きつけた。

流石にその衝撃に狼はすぐには動けず、その身に降りかかるメイスによる一撃を避ける事は出来なかった。

「ハイスラー！です」

若干気の抜ける掛け声とともに振り下ろされたメイスは、容易く狼の頭蓋を砕き一撃で仕留めてみせた。というかその掛け声実戦でも使うのね……

「ふう、やりました、ご主人様！」

ああ、しつかり見てたぞ。初めての实战にしては上出来だ、よくやったな
「はい、ありがとうございます。ですがその……ご主人様は大丈夫ですか？」

ん？何がだ？

「いえ、雨音の見間違いでなければ腕と足に狼さんが噛みついているのですが」

あ、雨音の戦闘に集中してて忘れてた。これでは人の事を注意出来ないな。

見れば右腕と左足に狼が噛みついてガブガブしてる。噛みついて離さないその頑張りを買うが、無駄な事に気付いてほしい。

……これはあれだ、雨音用にとっておいたんだ。うん。次いくぞ！

「は、はいですー」

とりあえず適当にごまかして噛みついてる狼を引っぺがし、そのままぼいっと雨音の方に投げてやる。

流石野生動物というべきか、狼は空中で体制を整えると見事に着地してすこし困惑するようにこちらを警戒している。しかしすぐに気を取り直すと、見た目的にまだ組みやすいそうだと判断したのか2匹とも雨音へと向かっていった。

1匹はそのまま正面から、もう1匹は横手に回って2方向から同時にかかるつもりのようなのだ。そういえば先ほど俺に向かってきた時もほぼ同時に襲い掛かってきていたので、かなり連携が上手いのだろう。

これに雨音はどう対処するかと見てみれば、盾を肩口に構えると鋭く踏み込み、正面から襲い掛かってくる狼へとシールドチャージをかました。雨音自身の体重は軽いので、その踏み込み速度はかなりの物だ。

その上インパクトの瞬間に盾に魔力を流し重量を増加させていた。ただでさえ高速で動く雨音の体重＋装備重量があつた所に更に増加だ、その衝撃は絶大だろう。

事実飛び掛かろうとしていた狼はそのまま後ろへとかなりの距離吹き飛ばされていく。頭に当たっていたのでそのまま骨が砕けているか、少なくとも脳震盪でしばらくは動けまい。

雨音は吹き飛ばした先も確認せず、その反動を利用して後ろへと飛び退つた。そこへ横から迫っていた狼が飛び掛かったものの、素早く後ろへと引いたのには反応できず空振りとなる。

着地したあとに雨音の後を追おうとするが、そのまえに再度雨音が距離を詰めるほうが速かった。狼の着地の硬直と、その後の移動の際に四肢に力を溜めるタイミングを見計らい、見事な着地狩りをしてみせたのだ。

メイスは無理に標的の小さな頭を狙わず、その胸を打ち据えた。そして当然その一撃も並の威力ではない、そのまま背骨を砕き完全に行動不能に追い込んだ。

雨音は万が一の反撃を警戒してか横たわる狼の背中側から接近し、しっかりと2匹に

とどめを刺した。

一連の戦闘を見てもしつかりと相手を見て動いていたし、格下相手でも警戒を忘れないのもポイント高い。俺？俺はいいんだ。

生き物を殺す事に関して躊躇するかとも思ったが、特に問題ないようだ。食育ということでは鶏や豚を絞める時に一緒にやったおかげだろうか。

いや、あの時も「お肉楽しみですね！」って言ってたし元からかもわからん。まあこんなご時世なので下手に抵抗覚えるよりは良いだろう。

仕留めた狼だが、これらは野生動物なので当然魔石はない。損傷は少ないのでうまく毛皮をはぎ取ればそこそこの値段で売れそうだが、当然剥ぎ取りスキルなど持っていない。

なのでこのまま持って帰ってギルドに丸投げしてしまおう。手間賃は差し引かれるが専門の職員が解体してくれるのだ。

そこで出番となるのがこの魔法の鞆である。そう、あの定番アイテムだ。これもダンジョン攻略中に見つけたレアアイテムなのだが、残念ながらよくあるチート級の性能とはいかなかった。

口はある程度広がるが限界はあるので大きさに制限はあり、容量も無限ではなく小さな倉庫くらい。

重さは軽減されるがゼロにはならず、中の時間が止まっていたりはしない。取り出しはある程度自由に行えるのだが、中が仕切られている訳でもないので入れたもの同士が干渉しあう事もしばしばある。

魔物の討伐部位と弁当を一緒に入れておいたら、弁当が血まみれになっていたりといった具合だ。

あればとてつもなく便利なのは確かなのだが、思ってたのと違うというか、かゆい所に手が届かないというか、残念な感は否めない。

とはいえ狼3匹程度なら余裕で入るし、事前に中身は抜いておいたので干渉を気にする必要もない。帰りに忘れて腐らせないようにすることだけ気を付ければいいだろう

(一敗)

雨音が鞆へと収納しているのを眺めながら忘れないように意識しておく。あ、雨音さん待って葉草と一緒に入れちゃ駄目だって！ 獣臭くなるうえに色んな体液でぐちゃぐちゃになっちゃうからあ！

尚間に合わなかった模様。

お前ハイスラでボコるわ・・・

その後は交互に周囲の警戒をしつつ薬草採取を行った。群生地には魔力量が基準値を超えられそうな物が多く、思ったよりも楽に必要な数は集まった。

しかし予定よりも早いぶ早く集まったのでまだまだ日も高い、ここは少し予定を変更して高品質の薬草を探して報酬アップを狙ってみるか。雨音にも予定の変更を伝え、近くの森へと向かう。

森は魔物の領域だ、生息する敵も手ごわくなるが浅い場所では強くてもオーク程度、先ほどの戦いを見るに問題はないだろう。原因はまだわかって居ないが森には魔力が溜まりやすく、その分魔物の発生も早い。

しかし同時に植生に与える影響も多いという事であり、深部の魔力の濃い場所や稀に発生する魔力溜まりと呼ばれるようなスポット周辺には貴重な薬草が生えやすい。

そこまで奥に行くつもりはないが、森の中であれば薬ヨモギ程度であれば高品質の物も割とある。高品質の物は中級ポーションの作成にも使われるようになり、見た目もよ

り厚みが増し、色も鮮やかになるので判別もしやすくなる。

森を探索できるような腕前になれば、運よく見つける事ができたなら良い小遣い稼ぎになる。だがそれに味を占めて余り足元ばかり気にする様になってしまうと事故の原因になるのだが。

先ほどは雨音に偉そうにレクチャーしていたが、実際の所俺にレンジャー系の能力は無い。今まで経験してきた戦いはガチンコバトルばかりだったので、地形を有利に使って獲物を仕留めるなんてかつこいいことは出来ないのだ。

一応気配を消す事はできるがこれは身体操作の応用だし、気配を探るなんてのは探知魔法頼り。色々と戦闘技能は習得しているものの、基本はレベルを上げて物理で殴る戦法ばかりだった訳だ。

なので森の中で教えられる事など迷子にならないように目印を残しながら歩こうとか、割と美味しく食べられる野草だとか、色の派手なキノコは美味しいけど毒な物が多いから食べるときは覚悟を決めてから食べるとか、そんな些細な事だ。

ちなみに薬ヨモギで作ったヨモギ団子は風味が強いのに雑味が少なく美味しい。回復効果は特にない。

周囲を探知しながらなので魔物の場所は把握しているが、雨音には教えず先を歩かせている。

知識が無いなりにわかる気を配るべきポイントを教えながら進んでいるが、流石にそう上手くはいかず何度かゴブリンの小集団と遭遇戦闘が起こった。しかしそれも大した障害にはならず、鎧袖一触といった様子だ。

ゴ布林は討伐証拠部位となる耳と、心臓部にある魔石を剥ぎ取り残りの死体はひとまとめにして放置だ。後は野生の獣やスライムが処理してくれる。

幾度か戦闘をこなしながら探索を進めていると、少し開けた場所に出た。運良く薬ヨモギが自生しており、しかもちよつとした魔力溜まりになっているらしく高品質そうなものもいくつか見える。

これ幸いと雨音に採取を任せ、俺は周囲の警戒を行う。とはいえ付近に敵対反応はないので問題はない、と思っていた時だった。

索敵していた範囲に勢いよく入ってくる集団がある。反応から察するに数名の冒険者がモンスターに追われているようだ。

反応をみるにモンスターの反応は森の浅瀬で見るとはだいぶ強い、欲張って奥までいつて大物を釣ってしまったか、運悪くイレギュラーに遭遇してしまったのか。

どちらにせよ反応はこちらへと向かってきているので準備しておくべきだろう。

雨音に状況を伝え態勢を整わせると、森の向こうから走ってくる冒険者達が見えてきた。傷も負っているようで必死の形相だが、ここまで来るのに追いつかれる事もないだ

ろう。

先頭を走る男がこちらに気付き一瞬安堵したような表情になりかけるが、すぐに顔をしかめる。こちらが二人しかいない上に片方は小さくいかにも頼りなく見える、強力なモンスター相手に共闘するには無理があると思ったのだろう。だがすぐに気を持ち直したように大声を張り上げた。

「おい！あんたらすぐに逃げろ！俺たちはオーガに追われてる！別方向へ逃げれば大丈夫なはずだっ」

どうやらこちらを心配してくれているようだ。てつきりこのまま擦り付けられるかと思っていたので驚きである。先日のスキンヘッドの冒険者といい、案外まともな奴も多いのかもしれない。

気遣い感謝するが心配は無用！後ろの奴は俺たちが相手をするのでそのまま駆け抜けろ

「しかしっ」

いいから行け！

「……感謝する！すぐに応援を呼んでくる、死ぬなよ」

こちらの自信のある態度と装備の質を見てすぐには死なないだろうと判断したのだろう、リーダーと思わしき男の指示で全員駆け抜けて行った。ちらりと見えたプレートは銀、その装備も身のこなしも悪い物ではなかったので実力をはき違えて深入りしたという訳でもなさそうだ。

しかし逆にあれだけの一団が強敵とはいえオーガに後れを取るというのも不自然だ、何かあると思ったほうがいいだろう。

冒険者達が広場を駆け抜けて少し、問題のオーガが現れた。その背は高く見上げる程で4 m程はあるだろうか、肌は赤黒く染まり全身を鎧う筋肉は正に鋼のごとき強靱さを秘めていると一目でわかる。

通常オーガは体長3 m程で肌も赤銅色であるはずだが、こいつは変異種等の特殊個体だろうか。角持ちではないので魔法を使うオーガメイジという訳ではないのだろう、しかし単純な身体能力ではこちらの方が強そうだ。

オーガといえばモンスターの中でも比較的上位に位置する存在だ。単純にデカい上
にその筋肉は鋼鉄の剣でも簡単には切れない程硬く、当然その体軀から繰り出される攻

撃は強烈で生半可な装備では受ける事もできない。

その上群れの中にオークメイジ等の上位種が生まれると統率の取れた動きもしてくるので、単体であつてもシルバークランク冒険者数人、群れの討伐となれば複数PTが協力してどうにか倒せるかといった所だ。

上位種がいればゴールドランクが必要になるだろう。しかしその生息地は山岳部や洞窟を主としており、こういった森の中で遭遇することは稀だし、その上それが変異種となればかなりの運の悪さだ。

しかもこいつ一匹ということも考えにくいので、どこかに群れがある可能性も高い。思わぬ厄ネタが飛び込んできたかもしれない。

そのオーガといえは先ほどまで追っていたのとは別の個体がいる事に気付いたようだが、とくに逡巡することもなくこちらに襲い掛かってきた。

大して知力が無いからなのか、逃げる相手を追うよりも楽そうだと思つたからなのかは定かではないが。

んー、殺る気満点って感じだな。よし行け雨音、格の違いを思い知らせてやれ！

「ひよえ、雨音一人でですか？流石にあんなにでつかいのは無理ですよ」

いやいや、デカいだけだつて。頑張れ頑張れできるだけ絶対出来る頑張れもつとやれるつて！やれる気持ちの問題だ頑張れ頑張れそこだ！そこで諦めんな絶対に頑張れ積極的にポジティブに頑張る頑張る！北京だつて頑張つてるんだから！

「ええ、北京さんで誰ですか……でもわかりました、雨音頑張ります！」

俺の熱い気持ちを込めた応援に奮起して雨音が前へと踏みだす。ちよつと腰が引けているが、まあ自分の約3倍の大きさのモンスターで殺気立って迫つてくればビビるのも仕方ないか。

まあそのうちもつとデカイ相手と戦うのだし、まずはこれくらいから慣れていつてもらおう。目指すはドラゴンスレイヤーだ。

オーガも前に出てきた雨音を標的としたようで、手に持ったこん棒を無造作に振り下ろす。ただの木であるはずのそれも、オーガが持つ魔力をこめられたそれは鉄槌の如き強度を持ち、簡単に壊れるような事はない。

驚異的な勢力かから振り下ろされるこん棒はその速度もまた驚異的だ、常人が受ければ潰れたトマトのようになるのは確実。

しかし雨音もまたエルフの中に生まれた変異種であり、常人などという範疇はとうに逸脱している。

真正面からそのこん棒を迎え撃ち、その盾でもって受けとめる。

大質量の金属同士がぶつかり合ったような衝撃音が響きわたり、雨音が若干たたたらを踏んだ。

やはり仮に膂力が同じとしても、その質量差は如何ともし難い。魔重金属でカバーできる範囲にも限界がある。

その後は雨音の防戦が続く。オーガは荒れ狂う嵐のようにこん棒を振り回し、その能力をいかんなく発揮して雨音を責め立てている。

その一撃たるや掠っただけで木をなぎ倒し、地に当たれば地面を抉り石が礫となって飛んできて安易な反撃を許さない。

そんな暴力の荒しの中を、しかし雨音は一步も引くことなく受け続ける。

その膂力、その速度は確かに驚異的であるがどこまでも単調だ。兵士たちの訓練に追加して様々な攻撃を受けて来た雨音にとって、ただ力と速さが凄いだけの攻撃など脅威とはなりえない。

最初は余りにも大きな体格差に攻めあぐねていたが、段々攻撃に慣れてくるとその殆どをいなし、逸らし始め反撃をオーガの足に入れていく。

しかしその攻撃も全力の一撃という訳にはいかず、狼を容易く屠った一撃もその固い皮膚と鋼の筋肉に阻まれ有功打とはならない。

今の所拮抗しているが、仮にオーガの一撃が防御を抜けて入るような事があれば戦闘不能までとはいかないまでも大きく不利を被るのは確実。

持久戦は些か不利である雨音はどこかで勝負に出る必要があるそうだと。

暫くするとオーガは自身よりも遥かに小さい雨音が中々倒れない事にイライラしていたのだろう、今までよりも更にも力を溜めての大振りの一撃を放った。

「力よー！」

それを雨音が狙っていたとも気付かず。

一瞬の溜めの隙をついて雨音が身体強化の魔法を施す。その直後に振り抜かれたオーガの一撃を盾で受け、それを力づくで大きくはじき返した。

突然の事態に肉体も思考も大きな隙を晒したオーガに、メイスによる追撃の一撃が叩き込まれる。

大きく踏み込んで左から振り抜かれたメイスが、オーガの右膝を打ち砕く。武器を弾かれて体勢を崩していたオーガにそれを耐えられるはずもなく、愕然としたような表情を浮かべながら崩れ落ちる。

「ハイスラー！です」

そしてそこへ間髪入れずに雨音の振り下ろしが頭へと叩き込まれ、頭蓋を叩き割った。しばらくぴくぴくと肉体が痙攣していたが、それもすぐに無くなり完全に息絶える。

しっかりとそれを確認した後、雨音は大きく息を吐き出し力を抜いた。強敵を倒したとはいえここはまだ危険地帯なのは変わらない、余り気を抜くのは感心できないが今日のところはとやかく言うまい。

「はふう、どうにか倒せました……ご主人様！雨音やりましたよー！」

うむ、ご苦労様。強化魔法を使うタイミングも悪くなかったな

「はい、あれを使うと細かい動きの調整が難しいので困ってしまいますね」

雨音の使った強化魔法だが、これは別段特殊なものではなくこの世界でも広く普及している魔法の一つだ。自身の肉体に魔法をかけて身体能力を強化するのだが、雨音はその莫大な魔力ゆえにその強化も通常より効果が大きい。

否、正確には大きくなってしまふ。仮に普通の人が魔法を使うのに魔力を1グラム単

位で操作するとして、雨音はそこで1キログラム単位でしか操作することが出来ず、結果的に魔法が強くなりすぎてしまうのだ。

現在行っている放出系魔法の封印もこのためだ、火の矢を放とうとしてレーザービームが出てしまったら事故なんてレベルでは済まない。

そういった事情もあり強化魔法は使えるものの、その力に振り回されてしまうので中々使いどころが難しい。免許取り立ての若葉マークのドライバーに時速500キロで爆走するダンプカーを運転させるようなものであり、直線を走らせるだけならまだしもカーブさせるのも厳しいだろう。

もしも今回強化魔法を使うタイミングが一番良かった場面を選ぶとすれば、出会いがしらに使用し相手に攻撃させずに一方的にこちらから殴りかかっていればベストだったろう。

というかだいたいこの場面でこれが一番のはずだ。初手最大威力で一撃必殺が一番賢いというのが脳筋族の真理、力こそパワーというものだ。

そういう意味では相手のオーガの行動は悪くなかった。だが数手で倒せなかった時点で他の策を考えるか、逃げるべきだった。絡め手を持たない以上地力で勝てる相手でない時点で無謀なのだ、逃げ切れるかどうかはまた別問題だが。

さて、問題のオーガの処理だがこれも討伐部位であるオーガの大牙と魔石をはぎ取

る。一応骨も素材に使えるのだが、そのままでは袋の口の大きき的に入らず解体するのも面倒なので放置するしかない。

変異種だけあって牙も魔石も通常種よりかなり大きいので高額で買いつつもらえらるだろう。

よし、それじゃそろそろ帰るとしよう。クエストの達成報告と、後は依頼を出さなくてはいけないようだ

「ご主人様が依頼ですか？」

ああ、もともとオーガは生息域を考えればここら辺に出るモンスターじゃないんだ。こいつがたまたまはぐれで迷い込んできただけならいいんだが、もしも群れが近くに移ってきているなら脅威になるからな。低級の冒険者が相手にするには無謀だし、中級以上でも不意に襲われれば危険だ。まずは調査依頼を出して実態を確認、もしも群れが居るようなら討伐依頼を出して砦の兵士と合わせて討伐させなきゃならん

「大変なのですね。ご主人様が倒しちゃ駄目なのですか？」

少し前までならそれでも良かったんだけどな、出来るからといって何でも一人でやってちやいかなのさ。それにこれは危険ではあるが、冒険者達にとつては稼ぎのチャンスでもある。居ると分かって準備をすれば倒せない相手じゃないからな、金や功名を上げ

るには良い機会になるんだよ

「色々考えているのですねえ、流石ご主人様です！」

まあ一応とはいえ領主だからな、多少は考えながら動くこともある。クライドがいれば問題ないだろうが、万が一手に負え無さそうなら俺が出ればいい

「その時は雨音もお供しますよ！」

ああ、頼りにしてるよ

その後は特に何も起きずに無事冒険者ギルドへとたどり着く。すると最初にオーガに襲われていたパーティがギルド職員とやり取りしているのを発見した。

聞き耳を立てると森で発見したオーガ変異種と、その足止めに残ってくれた冒険者がいるから早く討伐隊を組んでくれという話のようだ。

見ればまだ傷も治療出来ていないようなのに、助けを呼んでくると言う言葉通りに動いてくれていたようだ。これはとても嬉しいが、すでに倒してしまっているので討伐隊を組まれても困ってしまう。

後ろから声をかけると幽霊でも見たかのように驚かれ、オーガは無事に倒したと牙を見せれば更に驚かれた。

その後は頻りに感謝され、オーガを討伐した実力を褒められどうせならこの後酒盛り

にでもと誘われるが流石にこれは断る。

というか君らはさっさと治療師のところまで傷を治してきたほうがいいぞ。

俺の忠告を聞いてなのか急に傷の痛みを思い出したようで、冒険者パーティーはそのままギルドを後にして近くの治療院へと向かった。

その場に残った俺はギルド職員へと遭遇した後のやり取りを報告、討伐部位だけでは判断しにくければ死体を確認してほしいと戦闘を行った広場の場所を伝えた。

その後は雨音に薬草のクエスト報告を頼み、俺は顔見知りのギルド職員、つまり俺の正体を知っている職員を捕まえると秘書さんへの面会希望を伝えた。アポ無しとはいえ領主の火急の要件という事ですぐに面会は叶い、別室で話し合いをする事になった。

とりあえず今日あった出来事を伝え、近隣にオーガの群れが来ている可能性がある事を教える。その上で領主としてオーガの群れの調査依頼と、もしも本当に群れがあった場合の討伐依頼を出す。

報酬に関してはギルドの方で適正報酬を計算してもらいそれを後日報告してもらおう事と、討伐の際にはベルタ砦のグライドの指揮下に入る事になる事を説明。

個人主義の強い冒険者達だが、グライドの戦上手の話は有名であり余程の跳ね返りでもなければ従うだろう。そしてそんな跳ね返りの存在も含めて指揮するのがグライドだ、伊達に劣悪な環境かでベルタ砦を守り切っていない。

もしもグライド達の手に負えないようでも変な意地を張らず、上へと回す度量もあるので心配はないだろう。

どうやらギルドの方にも別口で森の異変が報告されていたようで、独自に調査隊を募るか検討していたそうだ。森はすでに魔領のため、実質的にはヘルゲン領ではないため領主が調査費用を出す必要はない。

ギルドが脅威度を先に調べ、その後に必要なであれば報告というのが通常の流れだという。言われてみれば確かに領土外ではあるのだが、そこでケチケチしてせつかく発展してきているベルタの街に被害を出すのも馬鹿らしい。

そこら辺は気にせず費用は要求してもらって迅速な解決を願う、というスタンスでいく事にした。

その後の顛末は特に特筆すべき事はない。調査の結果やはりオーガの群れが居る事を発見。その後討伐隊を作り、森の中に仕掛けた罠へと誘い込んで殲滅。

リーダー格のオーガメイジも居たようだが、見事にグライドが打ち取ったそう。こうして脅威は打倒され、素材や魔石が冒険者の懐を潤し、ギルドもヘルゲン領もその利潤にあやかると文句の無い結果となった。

しかし問題は何故オーガがこんな方にまで来たのかという事だ。たまたま群れが移動するルートであったという事ならいい。だがもしもより脅威度の高い何かに縄張り

争いに負けて来たとしたら、少々面倒な事になるだろう。

魔領での勢力図が変わるような変遷があったとすれば、隣接するヘルゲン領にも少なくない影響が出るだろう。せっかく領地経営が軌道に乗ったのだ、ここでおかしなケチがつかなければいいのだが。

銀髪ロリエルフにペロペロされる！

オーガ騒ぎが落ち着いてから数日、俺は雨音を背に馬に乗っていた。たまに行つてい
る抜き打ちでの監査の帰りだ。政務を抜け出しての息抜きとも言う。当然供回りは連
れず気楽なものだ。

どこに監査に行くかはその日の気分次第だ。村へと赴き田畑の様子や村人の様子を見
たり、砦へと赴き訓練に参加してみたり、商店を巡り違法な売買がされていないか見
回ったり、孤児院へと行つてガキどもと遊んでやりながら将来有望そうなのが居ないか
探つてみたり、割と思いつきで何処でも行く。

基本的にその場合は領主館から遣わされた役人という体で回っているが、特に変装し
ている訳でもないのだから分かる者は分かるだろう。

最初の頃はガツチガちな対応だったが、何度も通つている内にだいたいが仕事さぼつ
て遊びに来ている不良役人くらいの扱いになっている。

領民に親しまれる領主の鏡だな。だからこいつまた来たよ暇人だな、みたいな目で見

るのは止めたまえ、これも仕事だから！

今日のところは村に行つて農作物の育成具合や村長へと困りごとは無いかの聞き取りを行った。と言ってもそこで直接陳情されるような事はほぼ無い、いくら気安いとはいえ領主に直談判というのは普通はしない。

明文化されている訳ではないが、暗黙の了解のようなものがある。何かあれば役所を通して陳情するか、担当の役人であるピエールを通すのが筋というものだ。

ではなぜいちいち聞き取りなどしているのかといえば、少なくとも意見を聞くつもりはあるぞという姿勢を示しているのだ。

現状ピエールは上手くやっているからいいが、今後その役職に他の者が着いた時に同じように出来るとは限らない。

その時に問題が起きれば陳情しても握りつぶされる可能性もあるので、最後の手段として直談判する事も可能だと選択肢を示しておくのだ。

まあそう逼迫した事だけでなく、出来るだけ下からの情報を出しやすい下地を作る事も目的の一つだ。今後新たに村を作る時により効率的に入植できるよう、何が必要であるかを事前に知る事が出来れば成功率は大きく上がるだろう。

出来れば識字率をもう少し向上させて目安箱を設置し、幅広く要望を吸い出していき

たいと考えている。甘やかすつもりはないが、実用的な意見があれば採用するつもりもある。

今ある村で実験を行い有用性が実証できれば、これから増えていく入植地で実践導入する事も可能だろう。

今日見て回った範囲でいえば順調そのものだ、新しい農法も定着しており担当のピエールへの印象もすこぶる良い。農民達も汚れは少なく皆健康的で、お触れをしつかりと守っている事もすぐに分かる。

届け出の通り子供の数も増えていたので、後数年もすればもつと畑を広げていく事も可能だろう。とはいえ無秩序に拡張されても困るので、こちらもピエールに拡張計画を作らせて監督する必要がある。戻ったら早めに指示を出しておこう。

そういえば雨音は実際に村に行くのは初めてだったな

「はい、色々なお野菜が見れて楽しかったです。お屋敷でも育てていますがちよつとだけですからね」

まあ家庭菜園レベルだからそんなに色々育てる事はできないのは仕方ない

「でもピエールさんとメイド長に手伝ってもらって順調に育ってますよー」

ああ、収穫が楽しみなな。でもメイド長にはヤバイ薬物の元になる植物植えるのは止

めろと言っておいてくれ。違法じゃないからって好き勝手栽培してもいい物じゃないからなアレ

「そうなのですか?とつても綺麗な花が咲いてお薬の元にもなるって言うてましたが」
間違いではなけどな、薬つてのは使い方によっては毒にもなるのなんだよ

菜園の隣の花壇でトリカブト育てるのは止めて欲しい。他にも色々育ててるようだがどれも薬や毒になるようなのばかりだ。有効利用出来るのはわかるので無理に止めさせる気もないが、せめて目につかない場所でやってほしい。領主館の裏庭で育てるにはちよつと向かないと思うの。

「それにしてもびっくりしました、ご主人様の所に来るまでに何度か農村を見た事がありませんでしたが、そことは全然様子が違いましたね」

俺もそこまで多くの村を知っている訳じゃないが、色々と梃入れしてるからな。基本的に貴族領主なんて農民なんて興味も無いし、その差が大きいんだろ

「流石はご主人様ですね!」

んー、だがまあ一番働きの大きいのは間違いなくピエールだろうな。あいつがいなければここまでスムーズにはいかなかつたよ

「ピエールさんですか？確かに農業の知識が凄いです。雨音も色々教わりました。でもどれもご主人様に教わったって言ってましたよ？」

確かに基礎知識というか元となる知識を出したのは俺なんだがな、それを理解して実践レベルに落とし込んだのはピエールだし、何より俺の知識なんて本当にきつかけレベルだったしな……

こと農業に関して、ピエールは天才である。なんなら世紀のと付けても良いかもしれない。

五年前、どうにかその年の納税分はなったもののそれは一時凌ぎでしかなく、根本的な農作業の改革が必要だった。不作の原因となっていた連作を止め昔の方法に戻したり、俺が魔法で土を深くから耕して疲弊していた土地を回復させたりはしたもののそれで劇的に改善する訳ではない。

しかも村の人手は減っているのだ、そのままいつも通りやっただけでは例年並みにすらならないのは目に見えている。

そこでお約束の農業のチート知識を、と思ったが自分でやっていた訳でもないの詳しく覚えていく訳でもない。とりあえず臆気でも多少ヒントになればと思いピエール

に知識を与えようと思ったのだが、真のチートはここにいた。

えーと、確か輪作と言つて性質の違う植物を植える事でなんかこう……

——おお！違う作物、例えばイモや豆を途中で撒く事によつて土地の栄養というのを偏らせないようにする訳ですな！麦ではなくイモや豆を主食にすれば麦の消費を抑える事もできますし、大豆を多めに納める事も出来そうですな！

あと麦を撒く時に適切な間隔を空けるといいとか……

——なるほど！成長してからの日あたりも均一になりムラを無くし、風通しも良くする、その上雑草取りも効率良く出来るようになりそうですな！これはエディルナ植えと呼びましょう！

種籾をなんか塩水につけると

——比重が重い物、つまり良質な種籾を選別して植える事により同じ面積でもより多くの収穫量が見込めるようになるのですな！

品種改良とか

——くうううう、つまり今後収穫の際により量が多く、味の良い物を残していき、将来的に優良品種になるよう手を加えていくと!!

のーふおーく

——なんとお！ゆくゆくは畜産の事まで視野にいれていらっしやるだなんて!!
お前実は全部知ってただろ？

——んんんんんんつ、まさかとんでもございませぬ！クリスマス様のお言葉を聞いていましたら突如としてインスピレーションが湧いてきたのです、こうビビツと！

そんな馬鹿な

——おおつと、こうしてはおれません、早くこの考えをまとめて村へと伝えねば。まずは人員の再編も必要かもしれません。これから忙しくなりますぞ！このピエール、必ずやクリスマス様のお役に立つて見せますので見ていてください！

あ、うん。頑張つて……

こんな具合に喋つても居ない事を察して形にしてしまうのだ。その後も少し口出しする事はあつたが、殆どピエールの独壇場である。こちらとしては大助かりなので別に問題はないんだがね。

これは完全に憶測ではあるのだが、恐らくは近似世界線で農業の発展に関して大きな貢献をした人物なのだろう。たまに何かしらきつかけがあるとチャンネルが合つてしまい、本来知らない知識や映像が頭に流れてくるというのはあるらしい。

今回で言えば俺の話がそのきつかけになつてしまったのだろうか。

だがあの様子だとかなり近い世界だろうし、俺が何もしくとも近いうちに同じような事は思いついていた可能性は高いとも思う。

「なるほどな。ピエールさんがたまに太陽に向かって両手を広げていたのは何かを受け取っていた訳ですね！ てっきり雨音は光合成というのをしているのかと思ってしました」

あいつそんな事してるのか……本当に変な電波でも受信してるんじゃないだろうな

どうにもうちの家臣達はウォルダーを筆頭に有能だけど癖の強い奴が集まっているな。一見までもそうなのロイドも意外と好き勝手やる事があるし、メイド長はもうアレだし、ミリスも前に俺が作ったスライムローションを発展させた化粧品やらパックやら開発した時に変な叫びを上げてたし、グライドも隠れ刀剣マニアで休日はニヤニヤしながら手入れしてるし……

うーむ、まともなのは俺だけか

「……類が友を呼んだのですね（ボソ）」

ん？何か言ったか？

「いえ、ご主人様は立派な当主様ですので、きつと皆見習つて立派になろうとしているんだらうなと思つただけなのです」

そうだろうそうだろう、雨音はよくわかつてるな

「もちろんです、雨音はご主人様の一番の奴隸ですからね！」

それ自慢気に言う事か？それに二番も三番も居ないからな

「つまり雨音がなんばーわんでおんりーわんという事ですわね！」

最強か？

まあそもそも身分的にはとくに奴隸ではないのだが。最初に付けていた隷属の首輪を破壊した時点で行動に縛りはないし、奴隸商から受け取つている所有者証明書などの書類一式もすでに正式に破却されている。

つまり今の雨音はゴツイ首輪を付けただけのなんちやつて奴隸なのだが、本人はなぜかそれにアイデンティティーを見出しているようなので好きにさせている。俺も衆人観衆の中ご主人様プレイを出来て楽しんでるのである意味好都合でもある。

そのせいで余計に家臣たちに冷たい目を向けられているのはコラテラルダメージと割り切つている。ま、多少はね？

領主館に戻り一通り報告を済ませ、その後は別邸に戻る。今日は本邸の食堂で夕食を済ませたので、ささっと風呂に入る事にする。

普段から風呂には一緒に入るが、風呂でいたす事はあまりない。一度始めると長いので、基本的にはベッドにいつてからというのが決まりになりつつある。

たまに悪戯してしまう事はあるのだが。

そんな訳でお互いに身体を洗い合い湯船に浸かっているのだが、なぜか今日はやけに雨音から視線を感じる。主に股間に。

チラチラと視線を向けてくる表情を見ても別段発情しているという感じはしない。何か言いたい事があるけどきっかけを掴めない、そんな感じだ。

お互い沈黙のまま少し待っても何も言っていないので、こちらから水を向けてみれば少し恥ずかしそうにご奉仕したいのだと言い出した。

しかしなんでまた急にご奉仕だなんて言い出したんだ。俺は今でも満足しているぞ？

「そうやって頂けるのはありがたいですが、やっぱり雨音の方が気持ち良くして貰って

ばかりなのです。なのでメイド長にとっておきの技を教えて頂いてきました！これで絶対に骨抜きになると」

ええ……それ本当に大丈夫か？物理的に骨抜かれたりしない？

「大丈夫です！他のお姉さま達にも聞いてきましたので危険はありません」

それなら大丈夫だろうか。というかたまに危険な事を教えられてる自覚はあったんだな。メイド長え……

ご奉仕と言うと一般的に立場の上下で決まるものだが、ベッドの上では主に女性が男性に行う行為となる。もちろん逆の場合もあるが少数であろう。

まあ言ってしまうとご奉仕プレイという性行為の一環であるのだが、性器の挿入を伴わずに相手を気持ち良くしてあげる行為とでも言えば良いだろうか。俺も今まで雨音にメイド服を着せてのご奉仕プレイをさせた事があるが、手コキや騎乗位素股くらしい物であまり多くを求める事は無かった。

別に嫌いな訳ではないのだが、どちらかと言えば俺は可愛い女の子が快樂でトロトロのぐちよぐちよになってしまっている方が興奮するので特に積極的にさせようと思う事が無かったのだ。何なら俺がご奉仕していた側であったとも言える。

そして性知識なんてまるで無かった雨音はそれを疑いも無く受け入れていた訳だが、

快樂を一方的に享受しているように感じて申し訳なさを覚えたのだろうか。

どうやら最近メイド長をはじめとした屋敷の女性陣に相談し、ベッドで殿方を喜ばせる夜のメイド技能まで覚えてきてしまったらしい。全くあのメイド共め、今度特別ボーナスを出してやろう。

比重が高くないというだけでご奉仕してもらおう事は嬉しいし、ましてや自分のために自主的に覚えて来てくれたというのであればもうご主人様冥利に尽きるというものだ。その健気さだけで勃起してしまいそうなほどである。可愛い。

とりあえず雨音に言われるがままに浴槽から出ると縁へと腰かけ、その足の間へと雨音が入ってきた。

「失礼します。では今日はふえらちおというものをさせていただきますね」

ああ、よろしく頼むよ

「はい。おちんちんさんいつも雨音を気持ちよくしてくれてありがとうございます、今日は雨音が精一杯お返しさせてもらいますね」

雨音は俺のチンコに向かって挨拶すると躊躇なくキスを落とす。なんか俺のチンコに人格あるみたいな扱いやめてほしいんだが。いやちよつと興奮はするけどさ……

雨音は半勃起状態のチンコを軽くつかむと、右手で竿を抜き、左手で玉袋をやわやわと揉んで来る。そのまま亀頭に顔を近づけ先端をペロペロと舐め上げてくる。

どれも刺激は強くないが、たどたどしい手つきと舌使いのもどかしさに逆に快楽を感じてしまい股間に熱が集まってくるのを感じる。そうなれば後は早いもので、あつという間に勃起チンコの完成だ。

雨音は自分の手で起させる事が出来たの嬉しいようで、目を細めながら鈴口から裏筋、そのまま竿を通って根本へと舌を這わせる。その後はカプリと歯を立たせずにかじりつき、口内の唾液を塗りながら先っぽまで戻っていく。

裏面だけでなく、側面も上部も、何度も同じ動きを繰り返しながら満遍なくチンコを唾液濡れにしていた。

全体がテカテカとコーティングされる頃にはチンコも完全にフル勃起しており、その先からは早くも我慢汁が溢れてくる始末だ。

予想を超えて遥かに淫靡な動きと、ただ俺に気持ち良くなつて欲しいと感じられるような丁寧な奉仕に、俺は快楽に呻きを漏らさぬようにするだけで精一杯だ。

普段は自分が攻めるばかりだったので、逆に攻められると弱かったのかと逃避のよう
に考える。

「はあ、やっぱりご主人様のおちんちんさんかっこいいですね……いつも雨音の中をゴリゴリって擦って気持ち良くしてくれるカリさん、んちゅ。雨音の大事な所をグリグリしてくる意地悪な亀頭さんも、ちゅー。この割れ目からいつも雨音を火傷させちゃうくらい熱いのが出てくるんですねえ、今日もいっぱい出てきて貰えるようにペロペロしちゃいます」

そんな俺の心中を知ってか知らずか、雨音の奉仕は止まらない。わざとリップ音を響かせながらチンコに口づけし、刺激を与え続ける。

最初はぎこちなかったはずの手つきも、唾液と我慢汁で滑りがよくなったからか、今はもう緩急入り交ぜて竿全体を扱き上げている。

その小さな手では広い範囲をカバーできないが、だからこそ場所を変え動きを変えこちらを翻弄してくるようにさえ感じさせる。

小さな口をいっぱい広げると亀頭を口に含み、舌先で全体を刺激したり、鈴口やカリ裏を舐め上げて来たり、時には奥まで咥え込み口内全体を使って責め立ててくる。

しかし勃起したチンコはその口には大きいようでもたまたまに歯が当たってしまうのだが、その若干の痛みすらも快楽に感じてしまいうさだ。

その刺激に射精したくなるが、もつと長く、もつと強く刺激を感じていたいがために

強い射精感をギリギリで我慢する。

それに初めての口淫であつさりと射精してしまうのも恰好悪い気がするという、変なプライドがあるのも事実。ここは何とか耐え抜いて反撃に出たい。

「んっ、ぶはあ。やっぱりご主人様の大きいです。どうですかご主人様、雨音は気持ち良く出来てますか？眉間に皺が寄っています、気持ち良くなかったのでしょうか。それとも、気持ち良いのを我慢しているのです？ふふっ、我慢なんかしなくて良いんですよ、雨音でいっぱいいっぱい気持ち良くなってください。雨音のお口にいっぱいいっぱいお射精してください。雨音にいっぱいいっぱいご主人様の熱い滾りを、ぶつけてください……」

あー！困ります！お客様！あー！お客様お客様！困ります困りますっ！あー！

雨音は一旦口を離すもその責めは止まらない。紅玉の瞳を怪しく光らせ、下から此方を覗き込みながらも手は動かし続けている。左手は竿を扱きつつ、右手は龟头を包み込み、先端を的確に刺激してくる。一度手を離すと顔を近づけ、今度は頬擦りをはじめた。

さらさらでぶにぶにのほっぺが擦れ、龟头にそれを猫のように擦り付けてくる。グロテスクな逸物と美少女の対比が視覚的な暴力となつて襲い来るようだ。

今すぐこの美しい少女を自らの白濁で穢してしまいたい、欲望のままに貪りつくしてしまいたい。そんな衝動に駆られるが、どうにかそれも自制する。

じやれつくように戯れると、雨音は少し腰を上げて中腰になりチンコに覆いかぶさるような姿勢を取った。

「では、いきますね」

自分に言い聞かせるように一声かけると、大きく息を吸った。

口を開き舌を限界まで伸ばしたまま亀頭を咥え込み口内へと導いていく、そして先ほどまでは限界だった境界を越えて、雨音は一気に喉奥までチンコを飲み込んでいった。

苦しいだろうにその動きは止まらず、チンコのほぼ根本まで飲み込んでしまう。かなり無理をしているはずなのにこちらへの気遣いを忘れていないようで、歯が当たらないよう唇をまきこみながら行う事で俺は痛みを感じる事もない。

腰が抜けるような感覚、とはこの事だろうか。チンコ全体を包み込む感覚は熱く、普段腔内で感じる物とはまた別の感触がある。そして飲み込もうとする喉の動きと、吸いこもうとする吸引力により腰から先が全部持つていかれそうな快樂が襲ってくる。

それだけでもやばいのに、雨音はそのまま頭を前後させ始める。始めは浅く、しかし

段々と動きは早く大きくなっていく。その上喉を締めてチンコを圧迫してくるので射精させようという快樂はいっそ暴力的である。

そのあまりの刺激についてうめき声を漏らし、思わず腰を上げてしまう。

だが急な動きにも雨音は離れる事はなく、むしろその速度を上げている。じゅぽじゅぽと音を立てながら、必死な様子でチンコを奥へと迎え入れている。

すでに射精を抑える事は無理だろうが、このまま出しては気管に入ってしまう。流石にそれはまずいだらうと静止しようとしたとき、チンコを咥え込んでいる雨音と目があつてしまった。

苦しきからだらうその目じりからは涙がこぼれ落ち、鼻水と涎をたらしながらチンコを咥えるその顔に常の美しさは感じられない。だが何より目を引くのはその表情だ。

苦し気にゆがめられているはずの表情にはしかし、隠し切れない悦楽の色がにじみ出ている。涙を流すその瞳の奥には、どこまでも蕩けきった感情がはつきりと映っている。

そして俺には、そんなものを見せられてなお自重できる程の理性は残されていないかった。

う、おおおあ、あまねイクぞ!!

「んう、ん、ん、ん、っ」

雨音の小さな頭を掴み、腰を乱暴に打ち付ける。完全に自分の快樂のみを追求した動きに、それでも雨音は逃げようとはしない。逆により快樂を得られるようにと舌の動きが激しくなる。

もともと快樂は極限まで高められており、限界はすぐに訪れた。一際強く腰を打ち付けると、その喉奥に精液を流し込む。雨音の顔は下腹部に押し付けられる程であり、チンコの長さを考えれば喉奥どころか食道に直接射精しているかもしれない。

だが目の奥をチカチカと焼くような射精の快樂と、チンコ全てが包まれているような感覚に他の何もかもがどうでもよくなるようだ。

そんな中でもどうか雨音の様子を見れば、抱き着くように腰に腕が回されてしがみ付いてきており、射精の様子を感じてなのか恍惚の表情を浮かべている。

足元に妙な温かさを感じると、どうやら同時に粗相をしてしまったらしい。まさか今の行為で絶頂を感じて潮を吹いてしまったという事は……ないはずだ。

長い長い射精を終え、チンコを口から引き抜いていく。雨音もその動きには逆らわず、ようやくと言った様子で大きく息を吸った。多少ええういていたようだが、吐くほどではなかったようだ。

足に力が入らないのかペタンと座り込んでしまったが、特に無理をしている様子はない。そしてその表情は蕩けきったままであり、口元から垂れていた精液をもつたいないとでもいうように掬い、口へと運んでいる。

「んちゆ、変な味だけど、聞いてたほど不味くはないです。むしろ癖になっちゃいそうです。ね。ご主人様は気持ち良かったですか？……ご主人、さま？」

雨音の声に答えず、未だ萎える様子のないチンコをその眼前に突き出す。あれだけの事をされて、たかが一度の射精で満足する事などありえない。情欲はぐつぐつと煮えたいぎり、睾丸では更なる精液が生成されていくのを感じる。

雨音もその様子を感じたようで、何も言うことなく眼前のチンコへと舌を伸ばしてそこに残った精液を舐めとっていく。やがて全てを綺麗に舐め終わると、先つぽを口に含み尿道に残った精液さえ吸い取ってしまった。その瞳は次なる情事への期待で濡れている。

雨音、壁に手をついて尻を此方へ向けなさい

「は、はひっ」

意識して少し硬い言葉を使うと、雨音は少し緊張した様子でそれに従う。普段はだいたい甘々ラブラブセックスなのだが、今日は俺の好きなように激しめにいかせてもらおうとしよう。

言いつけ通り雨音は尻を向けると、何も言われずにその花卉を自ら開いて見せる。その特殊な体質のせいなのか、行為の後に一応かけている回復魔法のせいかはわからないが、未だにそこは処女の頃と同じように綺麗なままだ。

陰唇の奥に見える穴も、本当にここに俺のチンコが入るのかと毎度疑問に思うほどである。しかし事実そこが俺を迎え入れるのに十分な柔軟性を持っている事を知っているし、快楽を貪る事ができる程に淫らである事も知っている。

おい雨音、どういうことだ？まだ触ってもいないのにドロドロじゃないか

「えと、それは、エッチな気分になっちゃったからで……」

ほう、なんでエッチな気分になっちゃったんだ？

「その、おちんちんさんいじってたら……その……」

チンコがどうしたって？ハッキリ言え！

「ひう、ごめんなさい！おちんちんペロペロしてたら雨音もエッチな気分になっちゃい

ましたあ」

気分すつかりプチSMプレイだ。言葉攻めするのちよつと楽しい。雨音も怯えてるように見えて楽しんでるな、口元ちよつと笑ってるし、さつきから愛液の量が凄い事になってる。

突き出されたマンコを触ってやればそれだけで感じているようで足を震わせている。身体はすでに完全に出て上がっているようだ。

まったく、少し触っただけでこんなにくちよぐちよにさせて、どれだけ欲しがりなんだ？

「うう、ごめんなさいですう」

謝るくらいならこの溢れてる蜜を止めてみる！

「ひゃうっ」

言葉と共にケツをパシンと音高く叩いてやれば、それと同時に勢いよく愛液が飛び出した。これは相当である。

はあ、チンコをしゃぶっただけでこんなに濡らすとは、とんだ淫乱エルフだな
「違いますう、淫乱なんかじゃありませんよう」

どこがだ!こんなに愛液を溢れさせておいてよくそんな事が言えるな

「だつてえ、ご主人様だからあ、ご主人様のおちんちんさんだから、雨音も欲しいよう、欲しいようつてなつちやうんです……他の誰かなんて無理です、ご主人様だけなんです、だから淫乱なんかじゃないです……」

こいつつ

可愛い事言いやがつて!あーもう我慢ならん。こうなつたらこのご主人様棒で色々
とわからせてやらねばならないな。何をと聞かれても困るが、とにかく色々!激しめ
に!

「ご主人様?ひやつ、そんな急にい、んああ、らめつ」

雨音の腰を掴むとそのまま一気にチンコを突き入れる。溢れる程の愛液によつて抵抗はなく、そのまま一番奥まで到達する。日夜耕し続けたロリマンコは、急な挿入にも関わらず柔らかく迎え入れてくれる。

後ろからなので立ちバックとなるが、体格差的にこのまま動くのは難しい。そこでしっかりと腰を固定すると、中腰だった状態からそのまま立ち上がった。

「ひゃあーっ主人様、足が、届かないですよ。それにこれ、いつもより奥がえぐれて、ん、お、突いちや、あ、あ、あ！」

うるさいっ、お前は俺のモノなんだろうが！だったら大人しく俺専用のチンコ抜き口リオナホになってればいいんだよ！

我ながら最悪な言い草である。流石に自分でもこれはどうかと思う発言だったのだが、その効果は劇的だった。

俺のロリオナホ宣言の後、まさに大型オナホを扱うようにしごいてやると、その全身を震わせて容易く絶頂したのだ。

「おな、ほ？なりゆ、なりますう！ご主人、さま専用の、ロリオナ、ホ、なりゆ！だからもつと、もつと雨音を使つてくだしやいっ」

言われなくてもそうしてやるよ！おい、何ご主人様よりも先に絶頂してんだよ、オナホのくせによお！

「んひい、ダメなオナホでごめんしやいつ、もつと気持ち良くしますから、ご主人様もお！」

片手でホールドしたまま尻を叩いてやれば更なる絶頂を迎え、潮吹きすらしている。えつと、ちよつと大丈夫？一旦抜く？もつと激しくしていい？あ、ハイ。

流石に心配になったが大丈夫らしい。確かに絶頂アクメ顔でアへ顔ダブルピースしそうな感じなので気持ち良いのは間違いないようだが、ちよつとマゾっ気が強すぎて心配になる。とはいえこれだけよがってくれるのなら、こちらもやりがいがあるというものだ。

雨音の腕を後ろに回し、更に足を太ももから抱え上げて幼児をおしっこさせるような体制にする。これで膝裏に腕を回して抱きしめてやれば完全に身動きを封じ、自分では何もできないまさしくオナホ状態だ。

身体の柔らかさと軽さがあるから出来る事だが、これは完全に体が密着して中々良いかもしれない。

すぐ下にある雨音の耳を甘噛みし、そつと囁く。

今から好きに動かせてもらうぞ、雨音がどれだけイッても、無理だと言つても、俺が

満足するまで止めないからな

「しよんなあ、あまねこわれちゃいますよう……」

んー、そんな期待に満ちた目で言われても説得力無いんだよなあ。まあまるで抵抗する様子もないのでヨシッ！

その後はただひたすらに自分の快楽を得るためだけにピストンを繰り返す。ただ乱暴なだけのそれも、今の雨音は快楽にしか感じられないように甘い声で啼くだけだ。

しかも普段と違って雨音の体重も乗るので奥深くまで抉りこみ、ポルチオへと強い刺激を与えるのでイキ方も深いようだ。そのうえ自ら身体を動かすことが出来ないのだから快楽を逃がす事も出来ず、ひたすら俺の腕の中で嬌声と懇願を繰り返している。

だがその様子も俺の獣性を煽るだけであり、より深く、より強く腰を打ち付けさせる結果にしかない。

いつまでもこうしていたいところだが、俺もそろそろいきそうさ。小刻みに腰を動かしてその射精感を高めていく。

その動きから察したのか、雨音の膣もキュウキュウと締め付けを強くし、より奥へといざなうように律動する。

はあつ、イクぞ雨音っ!

「雨音も!あまねもイキますうっ!」

射精の量は一度目と変わらない程の量であり、小さな子宮を暴き、蹂躪していく。ドクドクと注ぎこまれる精子を逃さぬよう子宮口が鈴口に吸い付いてくるが、すぐにその内部を満たして逆流を始める。

しかし膣内にはぎちぎちに肉棒が詰まっており殆ど流れる事はなく、ぽっこりと子宮を膨らませるに留めた。

少し落ち着いてから俺は雨音からチンコを抜く……事無く再度ピストンを開始した。

「ごひゅじんしゃま?!さっきイキましたよねっ」

んー?まあ射精はしたが。言っただはだぞ、俺が満足するまで止めないってな

「しょんな……雨音ひんじやいましゅ……」

大丈夫大丈夫、いままでだって平気だったろ!回復魔法もかけてやるから心配するな
「しょんにゃあ、あんっ」

雨音の情けない声が嬌声に代わるのにさほど時間はかからず、その後じつくり満足す

るまでご奉仕を楽しませてもらうのだった。

なんて動いてるか分からないけど動いてるからヨシッ！

ダンジョン都市、そう呼ばれる街がある。

ダンジョンを中心として発展してきた都市であり、王国の中でも極めて特殊な都市だ。

ダンジョンとは、曰く、神の与えた試練である。曰く、神の恩寵である。曰く、悪魔が手招く地獄の門である。曰く、曰く……様々な説がささやかれる中、その真実を知る者はいない。しかし、どの説も一様にして上位存在を前提にしているものであるのは同じだ。

それも当然だろう、もしダンジョンの中に一步でも足を踏み入れた事があるならば、その存在を嫌でも意識せずにはいられない。何せそのゲートの先にはもう一つの世界が広がっているのだから。天には空があり、昼と夜があり、大地には草原が、林が、森が、動植物が存在する。しかし同時に天にも地にも果てがあり、確かにそこが箱庭であると認識させられる。

更には言えばダンジョンには意思があるとも言われている。

ダンジョン内には野生生物だけでなく、様々なモンスターが跋扈している。それはダ

ンジョンを調べようとする者——探索者達の前に立ちはだかりその行く手を阻もうとするが、それらを倒した時には何故か時折宝物が“ドロップ”するのだ、まるでそれが褒賞であるかのように。更に階層を進めばダンジョン内には宝箱が設置されており、その中には人類にとって有用な物が多く安置されている。しかも奥に進めば進むほどそのアイテムはより有用性を増し、人類が魔領を拓いていく手助けとなった。

そうなればその利益を独占しようという者も当然現れる。事実過去には何度も様々な国がこのダンジョン都市を支配し、自国のみでその利益を独占しようと考え、しかしダンジョンから氾濫したモンスターにより滅ぼされたという歴史がある。

ここまでくればダンジョンを作った何者かが人類をその奥へと誘っているように感じるというのも頷ける。

現在の王国が支配してからは、ダンジョン都市は王家の直轄地として扱われ、ダンジョンから産出する魔石は全て買い取りその内1割を徴収するという点以外はほぼ制限をされていない。そしてその体制になってからモンスターの氾濫は起こっておらず、現在に至るまでそれは維持されている。

ダンジョンとは何か、その意思は何を求めているのか。それすら定かでないままに、栄光と宝を求めて探索者は進む。果たしてその先に待つのは救いか、罰か。

と、いう事らしい。

「ダンジョンの意思にお宝ですか、ロマンですね」

そんなこんなで俺たちはダンジョン都市へと訪れていた。事前に調べていた通り通行税も徴収されることなく街の中へと入る事が出来た。

以前来た時は見つからないようにこっそりダンジョンに忍び込んだため、こうして市街を見るのは初めてになる。街の中を一言で表すなら混沌、だろうか。人々が活気に満ちているのは間違いないが、そこかしこで諍いも絶えずお世辞にも治安はよろしくないようだ。

王家の直轄地であるのにどういふ事かとも思うが、王家としても直接的な支配はしないうが積極的な統治もしないといったスタンスらしく、ダンジョンから産出する魔石に対する徴収以外はほとんどノータッチであるらしい。過去に起こった魔物の氾濫はダンジョンに入る人を大きく制限してしまったため、それがダンジョン意思に反したために起こったと考えられていて、実際に今の方法で問題が起こっていないので変更する気もないようだ。触らぬ神に祟りなしということだろう。

では取り締まる者がまるで居ないかといえどもなく、この都市特有のクランや

ファミリーと呼ばれる団体の大手のいくつかが協力して自治しているそうだ。目に余る者はこういった相手に捕らえられ、一応駐在している国の士官に引き渡されたり闇に葬られたりしているらしい。

特に犯罪者を取り締まる事を目的とした治安維持クランもあるらしく、住民達から大きな支持を受けているのだとか。

こうしたクランやファミリーというのはギルドとはまた別の組織であり、元々はダンジョンの探索を目的とした探索者同士の相互扶助組織を前身としている。

冒険者ギルドもまだ設立されたばかりの頃、ギルドはあくまで人類の領域を広めるために注力しておりダンジョンにまでその影響力を及ぼすことは出来なかった。

そういった関係で都市内のみという狭いコミュニティの中で発展していったのがクランという組織という訳だ。ちなみに組織としての立ち上げに特に決まりはなく、本人が名乗りを上げればそれで結成だ。そんな事なので市内には無数のクランが存在しているが、有象無象のクランを傘下に大量に抱える有名どころが舵取りすることで、どうにか都市のバランスを保っているらしい。

正直考えるだけで頭が痛くなりそうな状況なのだが、これで行うのか崩壊せずに都市が成り立っているのだから驚きだ。恐らくはクランだけでなく、国も色々と噛んでいるからどうにかなっているのだろうが、担当者には頭が下がる思いである。

なぜそんなダンジョン都市に来ているかといえ、ずばり何か良い感じのレアアイテムを探しに来たのだ。

色々となしている内に間近に迫ったロイドの結婚式に当たり、雨音も何か贈り物をしたと言いつ出した。色々と案を考えてみたものの、中々良い案が思い浮かばなかった時に思い出したのがダンジョンのドロップアイテムだ。

ダンジョンでは魔物を倒すとなぜか死体は残らずに魔石だけが出るのだが、たまにアイテムを落とすことがあるのだ。これらはドロップアイテムと呼ばれ、その魔物にちなんだ素材だったり、全く関係ないお宝だったりする。

他にもダンジョンの奥へ進むと宝箱があり、中には貴重な鉱石やマジックアイテム等が入っていたりと物によつては一財産築けるような物もあったりする。それも宝箱は定期的に置き換わるらしく、取りつくされて無くなるという事もない。

宝箱がある階層に辿り着くのも難しいのだが、一攫千金の夢を見てダンジョンに潜る探索者は後を絶たない。

今回はそんな宝箱から出る良い感じのレアアイテムをゲットしてプレゼントしよう、という考えの元街へと繰り出してきたという訳だ。

ちなみに俺はもう贈り物は済ませている。領主館のすぐ近くに一軒家をドドンと立

ててやった。意外と銭湯好きなロイドのためにめっちゃ広い浴槽も完備だ。ロイドは感動のあまり言葉も出ない様子だったので満足してくれたと思う。

さて、宝箱が出る様になるのは20層超えてからなので少し長丁場になるはずだ、気合いれていこうぞ！

「はい、頑張りますよ！」

「……はあ、これ本当に私も行かなきゃダメなやつ？」

どうした特別ゲストのメイド長、テンション低いぞ

「ちよつと、外でメイド長呼びは止めて。つーか朝方いきなり装備一式持たされて連れて来られてやる気なんて出る訳ないでしょ！」

「うう、ごめんなさいですアリサさん……」

「あつ、別に雨音を責めてる訳じゃないのよ」

おいおい、謝ってるんだから許してあげろよ？

「あんたが！元凶なんで！しょうが！」

止めて！ごめんなさい！ちくちくするからナイフで突くのは止めて！

突然の凶行に周りの通行人もぎよつとしているが、特に血が出てたりする訳ではない

のでただの痴話げんかと思われたようだ。しかし最近どうもメイド長のスキンシップが過激すぎる。暴力系ツンデレとか今時人気出ないゾ。いやすんませんなんでもないっす。

人を射殺せそうな眼光で睨んで来るメイド長、もといアリスだが、一際大きいため息をつくとうにか怒りを納めてくれたようだ。どうにも彼女は煽ると反応が面白いので調子に乗ってしまうのだが、本気で怒らせるのも本意ではないので自重しようと思

う。まあ思つててもついノリでいつてしまうのであまり意味は無いのだが。

アリスは切れ長で意志の強そうな瞳とくつきりとした顔立ちの正統派美人といった容貌だ。一見キツイ印象を与えるが笑顔は驚くほど柔らかで、そのギャップが堪らないと主に部下のメイド達から大変慕われている。

まあその笑顔を見せるのが本当に稀なので近しい者しか知らないのだが。

今日の衣装はいつものメイド服ではなく、かつての暗殺者スタイル、でもなく俺が以前プレゼントした軽量のコンバットスーツだ。各所に小型のポケットを多数配置し、暗器や使い捨て魔道具を無理なく保有出来るようにしている。スーツ自体が魔物素材で作られており、軽量でありながら防刃性に優れ刺突にも強い作りになっている。その上に黒色で艶消しのされたレザーアーマーを要所に付け、身軽に動けながらも全身鎧ばり

の防御力を持った軽戦士といった装いだ。

愛用の短剣は腰の剣帯に下げ、イライラを納めるようにその柄を撫でている。こちらで刺されなかった分まだ優しさが含まれていたのかもしれない。

「そもそも戦力としてはクリスが居るんだから必要ないでしょ、賑やかならミスでも連れてくればいいじゃない」

ミスなんて連れてきたら一生喋ってそうで探索にならんわ

「ミスさんとはつても賑やかですからねえ、ダンジョンに入ったらマジバイブスアがるんですけどw”ってすごく喜びそうです」

雨音、ミリスの真似は止めなさい……とにかくミスは無い。それにアリサには宝箱を開けるといふ大事な役割があるんだ

「宝箱、ね。期待されても別に本職って訳じゃないから罫の解除なんて出来るかわからないわよ?」

ダメなら仕方ないさ、少なくとも俺がやるよりはマシだろうし

「そもそもクリスは一回ダンジョン潜ってるんでしょ、その時はどうしてたのよ」

基本は漢探知だな

「聞くからに頭悪そうな方法ほいけど一応どんな方法か聞いてあげるわ……」

「ずばり罠があつても無視してそのまま開ける。罠はライフポイントで受ける物

「凄いですご主人様、そんな解除方法があつたなんて!」

「はああああ……予想以上に頭悪すぎて頭痛がするわね。それで死なないのなんてコイツくらいなものだから雨音はマネしちや駄目よ」

「漢探知馬鹿にすんなよ、昔から続く由緒正しき解除方法の一つだぞ」

「ただしTRPGに限る。常人がリアルでやるには少しばかりリスクの高い方法であるのは間違いない。」

「最初のうちはこれでも良かったのだが、途中から爆発するタイプの宝箱が頻発するようになり中身も一緒にダメになってしまうのだ。GM対応してるんじゃないぞ。案外ダンジョンには意思があるというのもあながちただの噂とも言切れないかもしれない。」

「そういえばクリスはダンジョンのどこまで潜つたのよ。たしか一番進んでるクランで50層くらいとは聞いたことがあるけど」

「今のトップ攻略クランが54層って話だったかな。前はとりあえず100層まで

いって見たが飯の時間になったんでそこで引き上げた。多少なりと探索しながらど
日帰りは厳しいわ

「ひやく……いや、なんかもう今更よね」

「はえー、ダンジョンってそんなに広いのですねえ」

んー、広いと言えば広いけど階層毎に次元をずらしてるみたいだから単純に広い空間
があるわけでもないんだがな

ダンジョンの構造については長年研究されているがあまり多くの事はわかっていな
い。

ダンジョンに入るポータルと呼ばれる入口をくぐるとダンジョン1層のどこかに転
送される。転送は基本的に個別に行われるが、手を繋いだり一本のロープを全員で持つ
ことでパーティーや団体で同じ場所に出る事も可能だ。

階層内は広くおおよそヘルゲン領と同じ程度はあるらしい。その中に進行ポータル
と退去ポータルが複数設置されており、探索者は階層の探索をしながらそれらのポータ
ルを探す事になる。

進行ポータルは次の階層に進むのみだが、退去ポータルはどこまで進んでいてもダン
ジョン入口に戻る事ができるため、探索の際は退去ポータルの位置を確認してから進行

ポータルを探するのが基本となる。

階層内は常に少しずつ変化しているらしく、時間を置いて入ると同じ階層の同じ場所でも地形が変わっているという事があるそうだ。だがポータルの位置が大きく変わる事はなく、階層毎のポータル位置を記した地図が人気商品の一つになっている。

定期的に地図の更新が必要になるため地図の作成を専門とするマップパーと呼ばれる職種も出来ているとか。

10の倍数階層には進行ポータル前にボスフィールドというものが設置されており、1PT毎に階層ボスと戦い勝利しなければ次の階層には進めないようになっていいる。だがボスを倒す事ができれば次回からボスを倒した次の階層へと入口から直接降りられるようになる。

現在の攻略最前線は54層である。低いように感じるかもしれないがダンジョンを踏破するには様々な能力を要求される、それらを全て兼ね備えたPTなど中々揃うものではない。入場人数の制限が有るわけではないが、人数が増えればその分必要な物資は増え進みは遅くなるし統率も取り難くなる。故に要求されるのは少数精鋭の部隊か、あるいは全ての障害を力づくでどうにか出来る圧倒的な戦闘能力だ。

かつては国を挙げての攻略も試みた事があったそうだが、人類としては貴重な人的コストを割くには少々割に合わない判断したようだ。同じだけのコストを割くなら魔

領の開拓に充てた方がリターンが大きいのだ。ダンジョンで有用なアイテムは手に入っても領土は手に入らない。ダンジョン内に街を作ろうとした事もあったそうだが、内部で長期間活動していると突然外に弾き出されてしまうという事態が起こりこの計画は頓挫する。

総じて国としてはダンジョンの価値は高く評価するものの積極的な攻略はせず、探索者に魔石を掘らせたまに出土する強力なアイテムを買い取るという姿勢に落ち着いた。今後人類が本格的にダンジョンの攻略に乗り出すにはまだしばらく時間がかかるだろう。もつともその前に魔物勢力に滅ぼされなければ、と注釈が付くが。

今回の目標であるレアアイテムの取得だが、ある程度価値のある物となると30層を過ぎてからドロップし始める。宝箱自体は20層過ぎてから出てくるのだが始めのうちには少し高品質なポーションや少量の貴金属くらいのものだ。

そこそこの値段で売れる物だがそこまで価値の高い物ではない。本当に極稀に浅い層でも不自然な程にレアなアイテムが出る事があるそうだが、もしこれをダンジョンの意思が用意しているのなら大したものだ。人類の射幸心の煽り方を良く心得ていると言っている。

そんなSSRを自分も引けるかもしれないと、こうして人が群がってくるのだから。

前世では定期的にガチャ爆死していたので探索者達の気持ちはよく分かる。もつともこちらではベットするのは金ではなく自分の命なので一度爆死したらおしまいの鬼畜難易度だが。

もつとも今回はそんなSSRを狙いたいという訳ではなく、そこそこ良い感じのレアが欲しいだけなのだ。雨音自身、自分が頑張つて手に入れた物を贈り物にしたい、くらの気持ちのようなので内容としては高品質なナイフとか価値のある昔の貨幣とかでいい。

それくらいならダンジョン都市の市場にはよく出回っているし、実際に前回ダンジョンに潜った際に拾っているので問題ないだろう。

探索に関しても30層までは平原がメインでマップの一部が森や砂地になっている程度で踏破困難な場所は少なく、出現するモンスター達も今の雨音やアリサの敵になるほど強い個体は極一部なので問題は無いだろう。

そんなちよつとした蘊蓄を語りながらダンジョンの入口へと向かう。街の中心にあるダンジョン周辺は探索者とそれを狙った商店とでその混沌さを更に深めている。

それほど広いとは言えない道は人で溢れ、ぶつからないように歩くのすら難しい。その上人の流れを作るのは鍛えられた探索者ばかりとあって、人波に吞まれれば抜け出る

のも困難だろう。

無用なアクシデントに見舞われるのも面倒なので雨音を腕に抱え、アリサを背に隠すように人波を割いて歩く。時折迷惑そうに舌打ちされるがこちらと目が合うとすぐに逸らされる。無駄にデカくなったガタイの良さと厳つい顔が役に立つ数少ない場面だ。

途中の outlet を冷やかしつつ少し歩けば、その特徴的な建物はすぐに見えてきた。

「あれがダンジョンの入口、ですか？」

「なんだか想像していたのとだいぶ違うわね……」

二人が困惑しながら漏らすのも無理はないだろう。そこにあつたのは縦長で謎の光沢を放つ金属製の建物なのだから。周囲の景観から浮きまくりな事この上ない。

この街の住人や長い人間はもう慣れてるようだが、俺たちと同じように来たばかりなのだろう探索者は珍しそうに、あるいは訝し気に見上げている。

建物の大きさとしてはそれほど大きなものではない。精々が3階建ての建物くらい大きさであり、どの街にもあるとは言われないが旅慣れた物ならば貴族の屋敷なり砦なり城なりこれより大きな建物は存在する。

しかしその全てが金属製であり、鉄や鋼などの見慣れた物とは異なる輝きを放つとな

れば話は別だ。少なくとも王国内にこれと同じ規模の金属製の建物など存在しないだろう。

その上だ、この建物は王国が出来る遙か昔、それこそ人類の版図が伸びる以前から存在していたはず。加えて数多の戦乱やモンスターの氾濫を経たにも関わらず、建物には一切の損壊、どころか傷の一つも見当たらないというのだから驚きだ。

言うまでもなく現在の人類に作れるような物ではなく、神が作った試練場だとか、前文明の遺産だとか様々な説が出ているもののどれも確証はない。その最深部に辿り着けばその謎も解けるのではないか、という考えの元ダンジョンに潜るロマン派と呼ばれる探索者もいるとかいらないとか。

いつまでも見上げていても仕方がないので建物へと向かう人波に乗って移動する。そのまま謎金属の自動扉を潜れば、そこは外観からは想像できない程に広がった空間だった。

「わあ、凄いですね!」

「本当に、凄いと言えないわねこれは。いったいどうなってるのかしら」

建物の内部空間をいじってるんだろうな。まあダンジョン内部のでたらめさを考えればこれくらいは出来て当然なんだろうけど

「どこを基準にした当然なのよ……はあ、今からでも帰りたくなってきたわ」

ぼやくアリサを宥めながら進み内部を見渡すが、以前来た時と特に変わりはないようだ。

中は区切られる事無く、一つの広大なフロアとなっており、数多の探索者を内包してなお余裕がある程だ。そしてフロアの中心には巨大な鳥居が鎮座しており、その境界に渦巻く闇は某国民的RPGの旅の扉を彷彿とさせる。

あれがダンジョンへと入る為の進入ポータルと呼ばれる物であり、今も次々と探索者達を飲み込みその内部たるダンジョンへと送り込んでいる。

時折入る前に境界の前で何やら手振りしているのは階層指定している探索者だろう。別の探索者が同時に侵入しても別個の目的階層に転送しているあたり、その技術力の高さが伺える。

少し離れたところには進入ポータルよりもやや小型の鳥居が数個並んでおり、こちらは境界から探索者を吐き出す退出ポータルとなっている。それを囲うように国の買い取り所が設置されており、ダンジョンで入手した魔石の徴収と買い取りを行っていた。

ダンジョンへ挑む探索者は多いが、入口となる進入ポータルが大きいため待ち時間は殆どない。探索者間でのトラブルを避けるためにパーティー単位で固まり、他のパーティーとは多少距離を開けてポータルへ入るのが一応マナーとされている。

何組かのパーティーが境界に飲み込まれていくのを見送れば、すぐに俺たちの番となった。

「ちよつ、本当にこれ大丈夫なんでしょうね? 故障して変な所に飛ばされたりしない?」「うわあ、近くで見ると更に不思議ですね。どういう構造なのかわくわくします!」

腕にヒシつと抱き着きながらも腰が引けているアリサと、首に抱き着きながら目を輝かせている雨音。対照的な二人に苦笑いを零し、普段は強気なアリサをからかってやりたい所だが後ろの邪魔になっても悪い。

腕を引いて抵抗しようとしていたアリサを小脇に抱き抱えると、文句を言われる前に俺は一気に境界へと飛び込んだ。